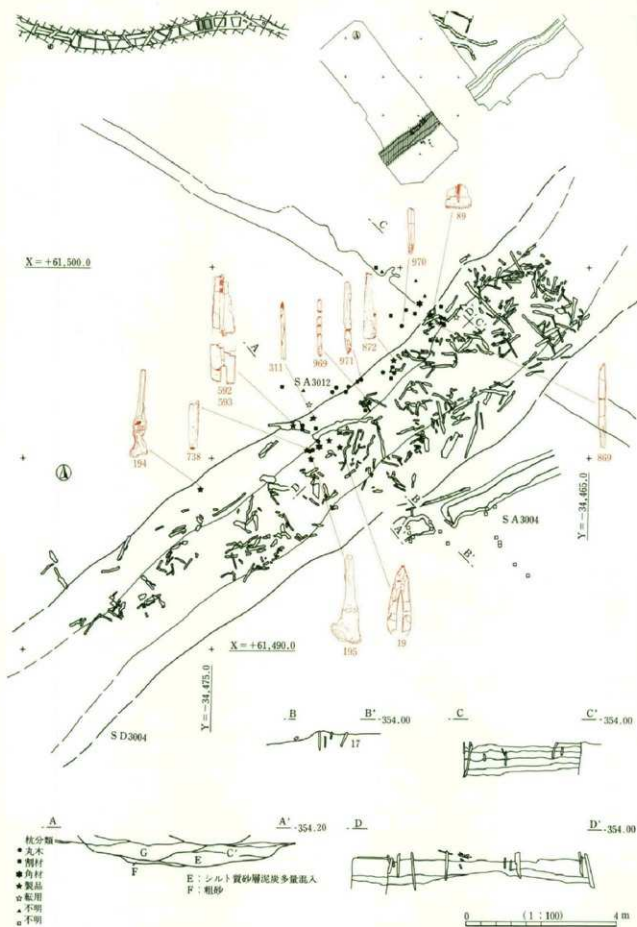


第135図 SD3004 I (⑬区) 平面・断面・出土主要遺物分布図

土器は弥生後期後半期の完存する壺(第189図6)のほか高杯、甕がある。また溝の北東水田面からはエブリが1点出土した。

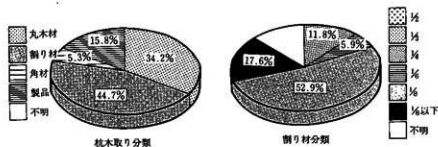
⑬区(第132～135・189図 P L 8・9・10・24・25・28・29)

埋土：弥生後期の埋土は砂質泥炭層であり、東方向に向かって細砂から粗砂となり泥炭層と砂層とが明瞭に分層された。規模・形状・構造：本調査区では幅4mとほぼ均一で北東方向に直線形状で走行する。弥生後期水田層(10層)からの深さは70cmで、断面形は底面が水平に近い皿状となる。複数の畦畔と接するが上層遺構によって削平され本址との関係を明確にすることはできなかった。SC3525とSC3526が直交する位置には遺物集中があり堰状の施設があったことが予想される。遺物出土状況：木製品は万遍なく下層から出土し、特に集中が認められたのは先の畦畔交差部のほかSC3521・3523の延長交差部であり、



第136図 S D 3004 (①-2区) 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図

溝内で滞水させる施設があった可能性がある。木製品は板材や割り材とともに多器種にわたり農具、武具、建築材があった。土器は弥生後期中葉から後半の土器が出土し、第189図5は本址下層から出土した破片とSC3523内出土の破片が接合した壺で同図7と共に、本址出土土器の中では後期前半まで遡る時期の資料である。



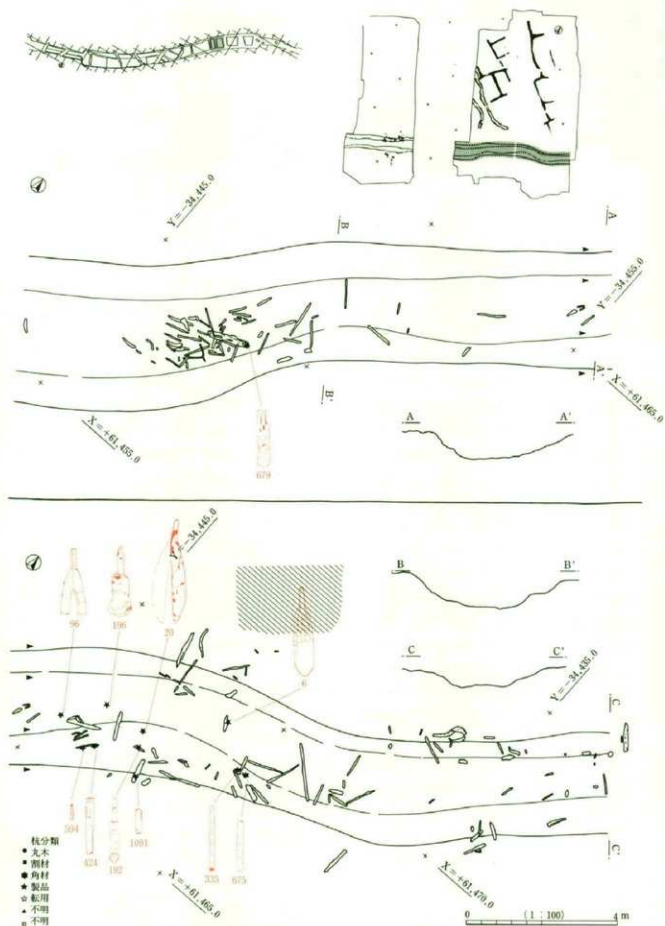
第137図 S.A.3012 (①-2区) 分類

①-1・2区 (第137-138・195図P L11・17・20・21・26・27)

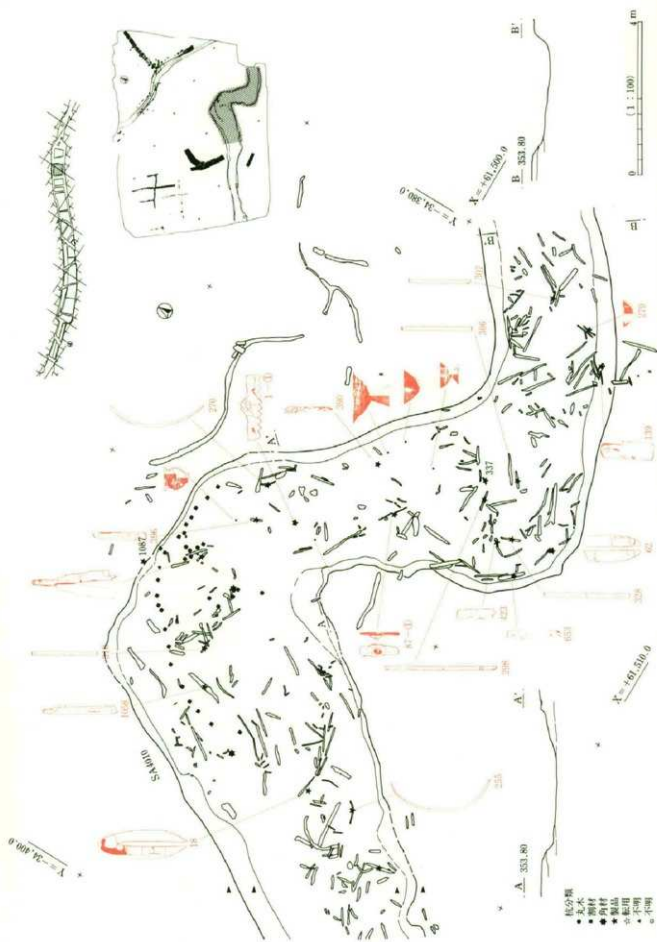
埋土：黒色泥炭を多量に混入したシルト質砂層 (E層) と最下層に面的に広がる黄褐色粗砂 (F層) が埋土となる。規模・形状・構造：幅は3.5mと均一で北東方向へ直線形状で走行する。①-2区の北西側に護岸杭列となるS.A.3012が約6mにわたって検出された。S.A.3012は同一溝内の古墳前期埋土中の複数の横木材下部から検出された杭列で、本址護岸に位置することから弥生時代に帰属させた。杭の用材は丸木材34.2%、割り材44.7%であり割り材の占める割合が高い。上部が削平されているが盛り土された土手であったものと考えられる。古墳時代後期もしくは奈良時代の溝S.D.3002、古墳前期の溝S.D.3003と交差するが該期下層には及んでいない。遺物出土状況：S.A.3012の周辺から木製農具が多数出土したほか建築部材などの木製品があった。また、F層から高杯・鉢などが出土した。S.D.3003出土とした第195図103-105は本址付近からの出土で、本址に帰属する可能性がある。

③区 (第139・140・179・180・191図P L11・24・25・28・29)

埋土：本調査区の埋土はいずれの層も泥炭質混じりであるがほぼ6層に分層された(第179・180図)。弥生後期の埋土は泥炭を多量に混入したシルト質砂層 (E層) と礫混じり粗砂 (F層) であった。③区同様に埋土から3時期に分層され、屈曲するクランク部で古墳前期の溝に大きく削平された地点以外は黄褐色砂層が明瞭に検出された。規模・形状・構造：調査区西側から北東方向へ走行し西寄り幅が2mと一旦狭くなり中央部に向かって次第に幅が広がる。最大幅6mとなる地点で90°南東方向へ屈曲し約11m走行する。溝幅が再び5mに広がった箇所では北東方向へ屈曲する。南東方向へ屈曲する溝内クランク部には北壁内側に沿って湾曲する杭列 (S.A.4010) とクランク部を直交する杭列があり、溝を堰き止めた形となる杭の配列である。この杭列の構築時期は弥生後期とされるが、古墳前期の埋土まで達している杭が数本あり古墳前期の杭列畦畔をS.A.4001と接することから古墳前期に補強され堰状遺構とされ、継続的に機能していたものと判断した。弥生後期水田面 (26-1層) からの深さは40-50cmで、西端と東端の底面標高差はほとんどない。遺物出土状況：溝内からは多数の農具、部材などの木製品が割り材や板材などと共に出土し、南東方向に走行するクランク部からはほぼ完存する高杯・鉢 (第191図34・35・38・40・43・51) などが出土した。木製農具は鎌柄の完形品以外は欠損するもので廃棄と考えられる。高杯が集中するクランク部は祭祀行為があったものと判断される。



第138図 S D3004 (Q-1区) 平面・断面・出土主要遺物分布図



第140図 S D 3004 (G3区) 平面・断面・出土主要遺物分布図

(5) 古墳時代前期から中期の遺構・遺物

ア 古墳時代前期から中期の土層と遺構検出の概要

古墳時代水田層も前項弥生時代水田層と同質の土壌で、泥炭質（炭化物粒子）が混在した灰色粘土層（基本層序V層）である。また水田層直上層も黒色泥炭層もしくは泥炭質のシルト・粘土層が堆積している。弥生後期水田層上に堆積した泥炭層の層厚は調査区によってばらつきが見られたが、本土層上の泥炭層は微高地縁辺から東の低地に向かって次第に層厚を増している。古墳前期水田はこの泥炭層を除去した灰色粘土層の平面精査によって遺構検出を行なった。泥炭層中からは古墳中期後半に帰属する土器が出土し、水田層内の各遺構からは古墳前期後半から中期前半に帰属する土器が収集された。また弥生後期に構築された溝SD3004とほぼ同位置から古墳前期の木製品や土器が多数出土した。本遺跡の水田は弥生後期と古墳前期後半ないしは中期前半に断絶が確認されたが、両者とも低地部では泥炭層の厚い堆積が見られた。以下に古墳水田層内から検出された遺構・遺物について調査区別に所見を述べる。

イ ㊦区（第141・199・200図）

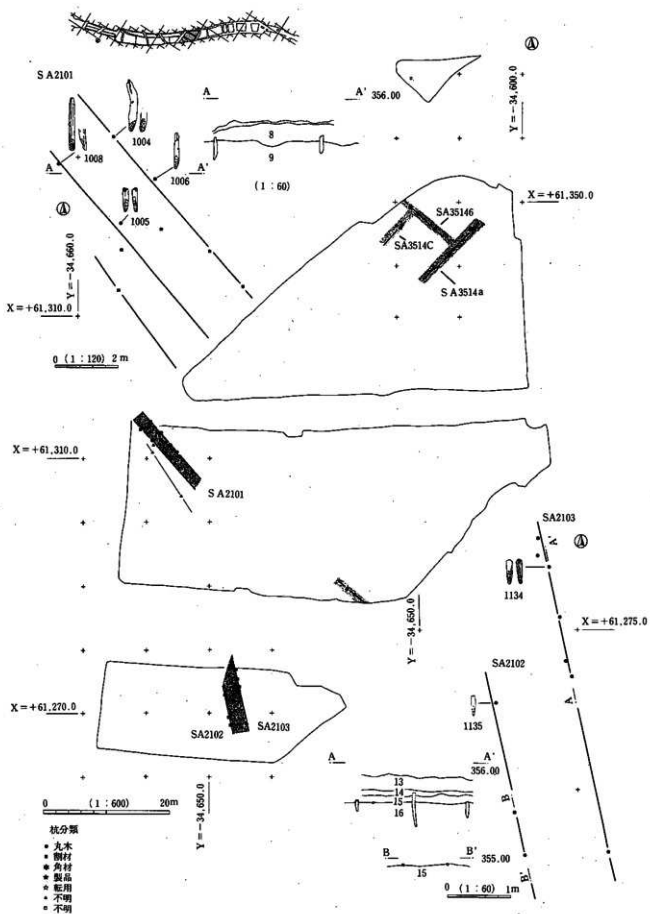
水田層：炭化物粒子が散在した灰色粘土層（14層）が水田層となり、本層下面には下層（15層）粘土のブロックを含んだ土層の乱れが確認された。直上層は灰黄褐色粘土層（13層）で、本調査区のみ泥炭質の土層が確認されなかった。水田検出状況：13層下部まで重機により数センチ単位のスライス掘削を繰り返したが、畦畔等の高まりを検出することはできず、14層上面で杭列が検出された以外下層からも遺構はなかった。遺物出土状況・時期：14層内から古墳前期の土器片が1片（第199図160）、11～13層内から鉢が2個体（第200図172・173）出土した。同調査区では平安耕作土・砂層内からも同時期の土器片が出土しているため微高地からの流入土器の可能性があるが、該期遺物の最下層出土となる14層を古墳前期とした。

SA2102・2103 ㊦区（第141・199図）

位置：調査区中央部に位置する。本址が微高地と低地の境界となり、北西方向に延長したライン上には㊦-1区のSA2101がある。検出土層：14層中位を最上面とする杭が数本出土し、周囲の15・16層中から列をなす位置に杭の先端部が確認された。規模・方向・構造：杭は列状に3本（SA2102）と7本（SA2103）の2列となり、両者の杭列間隔は約2.5mで約6mにわたって並列する。このことから2列で1条となる杭列と判断した。方向はN-13°Wである。14層下部には下層堆積層がブロック状に混入する乱れが観察され、この状況が杭列下まで及んでいることから本址に盛土があったかどうかは微妙である。杭の状況：杭は先端部のみを残すものであったが、遺存状況は良好であった。用材は直径8cmの丸木材を主体とし、先端加工は古墳祭祀域の溝（SD1016）内に打ち込まれた杭と同様の緻密な削りが長く残されていた。樹種も古墳祭祀域出土の杭と同様のクヌギ節を主体とするものであった。時期：出土遺物は同一土層内からの高杯破片（第199図160）のみであるが、層序の相対と杭の加工から古墳前期後半から中期前半とした。

ウ ㊦-1区（第141・200図）

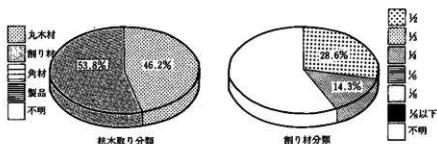
水田層：泥炭質の炭化物粒子が散在したオリーブ灰色粘土層（8層）が水田層となる。層厚は30cm前後で、上部に泥炭質の炭化物粒子を多量に混入した薄い帯状の堆積が認められた地点もあった。直上層は泥炭質の炭化物粒子を多量に含んだ暗褐色粘土層（7-2層）である。水田検出状況：8層上面から泥炭質の炭化物粒子の散在が途切れる層まで重機によるスライス掘削を行ったが、杭以外に検出された遺構はない。遺物出土状況：8層内からは古墳祭祀域出土土器と同時期の高杯脚部（第200図176・177）など古墳前期後半の土器が収集された。時期：本調査区では古墳前期後半の土器が本水田層から平安砂層（6層）までの層からも数点出土したが、該期土器出土の最下層が本水田層であることから古墳前期後半から中期前半とした。



第141図 ③・④区古墳時代遺構全体図 SA2102・2103・2101平面・断面

SA2101 ㊟-1区 (第141・142図)

位置：調査区北西隅と南東隅に位置する。本址北隅には同一方向に走行する上層擬似畦畔SC3005・Bがある。検出土層：8層上部の炭化物粒子混入のシルト質粘土が途切れた同層中位を上面とする杭が北西隅に10本、南東壁際に2本検出



第142図 SA2101 (㊟区)

された。規模・方向・構造：北西隅の杭は北西-南東方向に点し配列からN-40°WもしくはN-33°Wの方向に3~4条の杭列が想定される。南東方向に走行する杭と、㊟区のSA2102・2103からの連続した杭は未検出であるが同一の杭列とみなされる。杭上への盛り土については㊟区同様に明確な根拠はないが同一方向に杭が点在する状況から8層内に畦畔上の高まりがあった可能性は高い。杭の状況：用材は直径8cm前後と大形材を主体とするもので、丸木材46.2%、割り材53.8%とほぼ半分の比率であった。先端の加工はSA2102・2103と同様で古墳祭祀域の溝に用いられていた杭と同一の手法であり、樹種はクヌギ節であった。時期：本址付近からの遺物出土はないが、検出土層から古墳前期から中期前半とした。

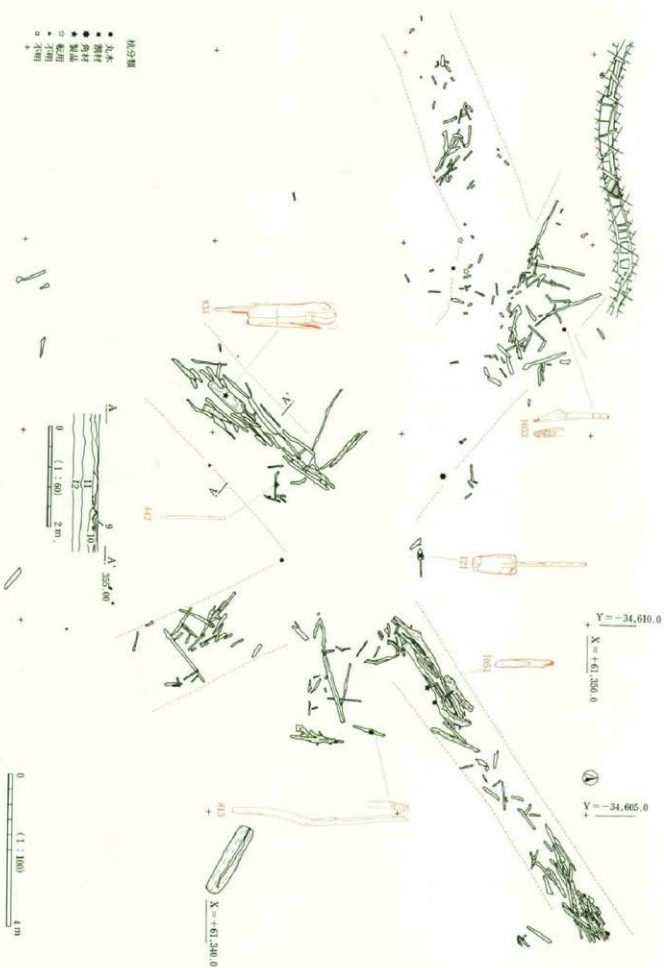
エ ㊟-2・3区 (第141・200図)

水田層：炭化物粒子と細砂を少量混入した黄灰色シルト質粘土層(10層)と上部に泥炭質の炭化物粒子を少量含んでいるか均一な暗灰色粘土層(11層)が水田層となる。層厚は40~50cmで10層は東側低地よりも西側に厚く堆積している。直上層は薄く堆積した泥炭質の炭化物層と細粒砂層が互層となり10層上部へ漸移している。水田検出状況：9層から重機によって平面掘削をおこない10層下部で杭列、11層上部で畦畔の高まり、溝を検出した。㊟-2区では調査面を弥生後期に絞っていたため水田面の状況は未確認となった。遺物出土状況：11層内から古墳祭祀域出土土器と同形態の小型丸底、器台(第200図174・175)など古墳前期後半の土器が収集され、杭列、溝からは木製品が数点出土した。時期：出土遺物から古墳前期後半から中期前半とした。

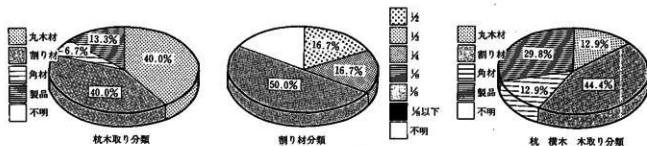
SA3514 ㊟-2区 (第143・144・198図P.L22)

位置：調査区北東隅に位置し、3方向の杭列からなる。3条からなる杭列の方向は、それぞれ古墳後期から奈良時代とした土層から検出した水田区画と同一である。検出土層：10層下部から多数の横木材が方向を同じくして重なり合った状況で出土し、横木材の下部と11層上部から数本の杭頭部が検出された。杭と横木材には構築時期に僅かな時間差があった可能性がある。規模・構造・方向：杭と横木材のまとまりから3方向の杭列となる。SA3514aは幅約1.5mの間に横木材が密に重なり合っている。方向はN-42°EでSA3514bとの接点で横木材が途切れ長さ約20mにわたっている。横木材の長軸は走行方向に向き、杭は横木下部から検出された。SA3514cはSA3514aから7m北西に並列して走行する。幅約2mに散在する横木材と点在する杭からなる。長さ11mにわたって検出されたが横木材の配置には規則性がない。SA3514bはSA3514aとSA3514cと交差する方向に散在する横木材と点在する杭として検出された。幅は約2mで、北西-南東方向に湾曲し約20mにわたっている。SA3514a以外の横木材は上層の耕作によるものか散乱して広がった状況であった。SA3514aは10・11層に微妙な高まりがあり盛り土があったものと判断され、横木材を主体とした畦畔とされる。杭の状況：頭部は欠損するものの先端部の残りは良好であった。用材は丸木材と割り材が各40%で同比率となり、先端部は鋭密な削りによって鋭角に加工され

- 区分種
- 瓦葺
 - 漆喰
 - 瓦葺
 - 瓦葺
 - 瓦葺
 - 不明
 - 不明



第143区 S.A.3514 平面・断面・出土主要遺物分布図

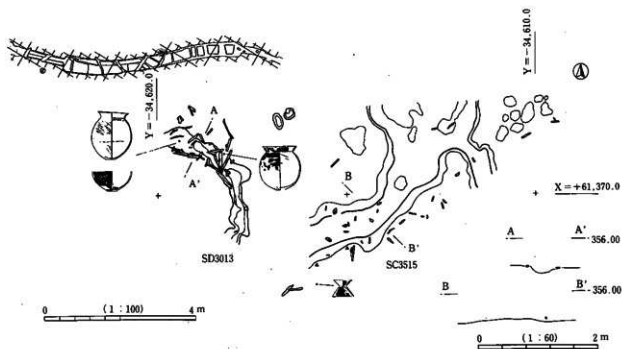


第144図 S A 3514 (⑫区)

ているものが主体を占める。樹種はクヌギ節とサワラであり、サワラは古墳祭祀域の溝 (S D 1016) 内から多数出土した建築部材である。遺物出土状況：多数出土した横木材の中には建築材が含まれおり、横木材に混じて古墳前期後半から中期前半の土器片 (第198図143~145) が少量収集された。また11層から一木動が出土した。時期：検出土層が10層で隣接区から検出された枕列に後続する構築時期となり古墳中期前半とされる。ただし水田区画としては同時に存続していたと判断した。

S C 3515 ⑫-3区 (第145・200図)

位置：調査区東側に位置する。検出土層：11層上部となる厚い泥炭質の炭化物粒子堆積層の平面精査によって上層に自然木を散在する高まりが検出された。規模・構造・方向：幅1mの高まりが北東-南西方向に約5m、幅70cmの高まりが北北西-南南東方向へ1.5mにわたって走行し、両者が調査区北側で交差し不整形の広い高まりとなる。水田面との比高差は5~8cmと微妙な高まりとなるが畦畔と判断した。幅1mの畦畔は隣接区のS A 3514 a・cの方向と同一である。遺物出土状況：畦畔上からは泥炭質シルト層 (10層) 内から木片が出土しているが本址埋没時の遺物とみられる。本址脇の11層内から器台 (第200図175) が出土している。時期：検出土層と出土土器から古墳前期後半した。



第145図 S D 3013、S C 3515 平面・断面・出土主要遺物分布図

SD3013 ㊸-3区(第145・200図)

位置：調査区西端に位置する。検出土層・埋土：11層上部の泥炭質の炭化物粒子の散在する面に黒色泥炭層を埋土とする溝が検出された。規模・方向：幅約40cmで深さは18cmと浅く、北西から南に蛇行形状で走行する。本址は11層上面の浅い窪みが流路となった状況である。遺物出土状況：北西隅から自然木と混じり合って完存する甕(第200図163・164)が出土した。時期：検出土層と出土土器から古墳前期後半とした。

オ ㊸・㊸区(第146・147・195・200図P L26・29)

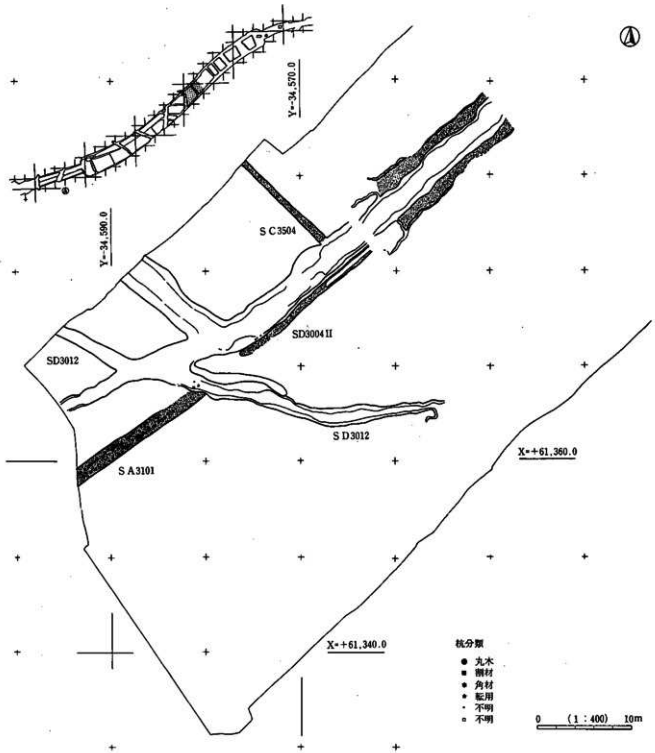
水田層：泥炭質の炭化物粒子をブロック状に混入した青灰褐色粘土層(8層)であり、上部は泥炭質から粘土質へ、下部は灰色粘土に泥炭を多量に含んだ層へと漸移している。本調査区内で検出されたSD3004の状況からは8層下部が古墳前期前半とされる。直上層は同質の粘土層と泥炭質の炭化物層の互層である(8層)が㊸区では8層との区分は不明瞭であり、泥炭質の炭化物層は㊸区寄りの東方向に向かって厚層を増し泥炭層として8層を被覆する。水田面の検出：8層及び8層上部の泥炭質粘土を重機で除去し平面精査を行なった。泥炭質粘土層を削った時点で泥炭を埋土とする溝が確認され、青灰褐色粘土の溝土手と畦畔の上面、杭の一部が検出された。検出面は8層上部の泥炭質の炭化物をほとんど混入しない層である。検出遺構は、㊸区で溝が2条、杭列畦畔1条、盛り土畦畔1条、㊸区で杭列畦畔2条、盛り土畦畔1条であった。畦畔はいずれも北西から南東に走行するもので、水田を大きく区画する大畦畔になると考えられる。小畦畔については判然とせず検出されなかった。遺物出土状況：土器は遺構内以外に泥炭層内から単独で屈曲鉢が3点(第195図100~102)出土し、水田層内からはSD3004周辺で甕が数点(第200図162・165~168・565)出土した。木製品は水田面直上からの鳥形木製品を始め、竪梯、農具、部材などが溝周辺及び溝内から出土した。時期：検出された各遺構は出土遺物から古墳時代前期後半~中期前半に帰属し一部古墳前期前半に遡る畦畔がある。本調査区の水田は中央微高地の古墳祭祀域の存続時期と共通する。

SD3012 ㊸区(第148・149・150・193・198図P L18・19・26)

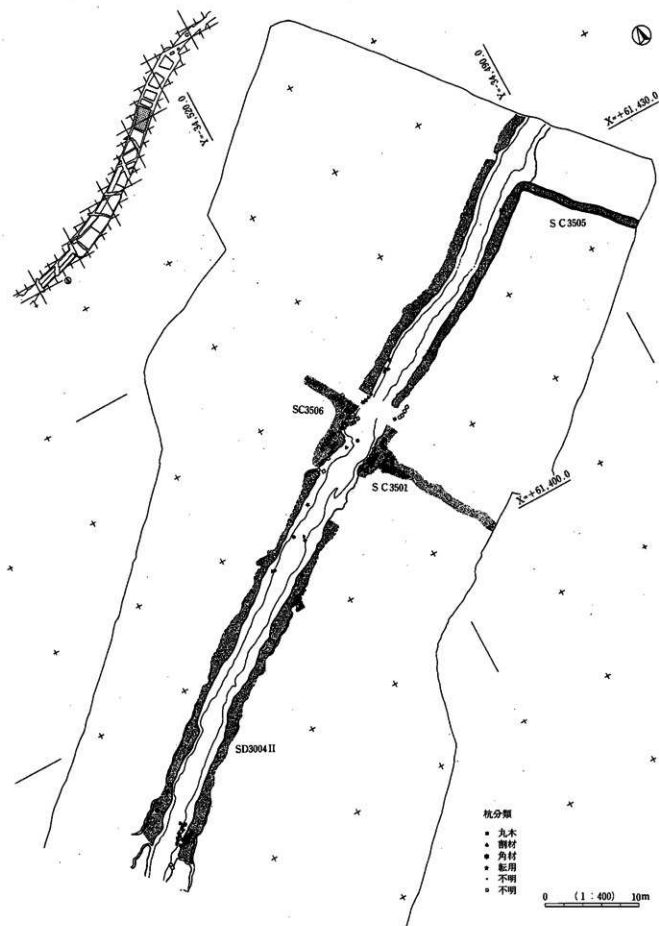
位置：調査区ほぼ中央に位置し、SD3004と交差しSA3101と接する。検出土層：本址及びSD3004の周辺は8層内の泥炭層の堆積が厚く、8層の起伏・凹凸上面に泥炭層が堆積した状況であった。泥炭層を除去した灰色粘土層面から本址の落ち込みが確認され多数の木製品が出土した。埋土：泥炭層を除去した埋土は2層に分層された。上層は黒褐色の泥炭質砂層で複数の木製品が出土した土層であり、下層は黄白色粘土ブロックと泥炭を多量に含んだ灰色粘土で下層水田層に近い土質である。規模・構造：溝幅は1~1.5mで、水田面からの深さは30~40cmである。N-70°WからN-82°Wの方向に湾曲形状で約44mにわたって走行するが、東端は泥炭層が希薄となり落ち込みが不明となる。SD3004と交差部から北東にかけて土手となる高まりが幅約1mで約10mにわたって検出された。水田面との比高差は10cmに満たない僅かなものである。遺物出土状況：SD3004IIとの交差部付近からは板材や割り材など木製品があり建築部材が多数含まれていた。またSD3004北西の水田面からは鳥形木製品が出土しているが、この鳥形から約5m離れた本址内に鳥竿となる棒状木製品が出土した。土器では上層から甕(第193図60)、下層から甕、鉢など(第198図137~140.526)が出土した。時期：検出土層と出土遺物から古墳前期中葉から後半とした。

SA3101 ㊸区(第148・151・198図P L9・22)

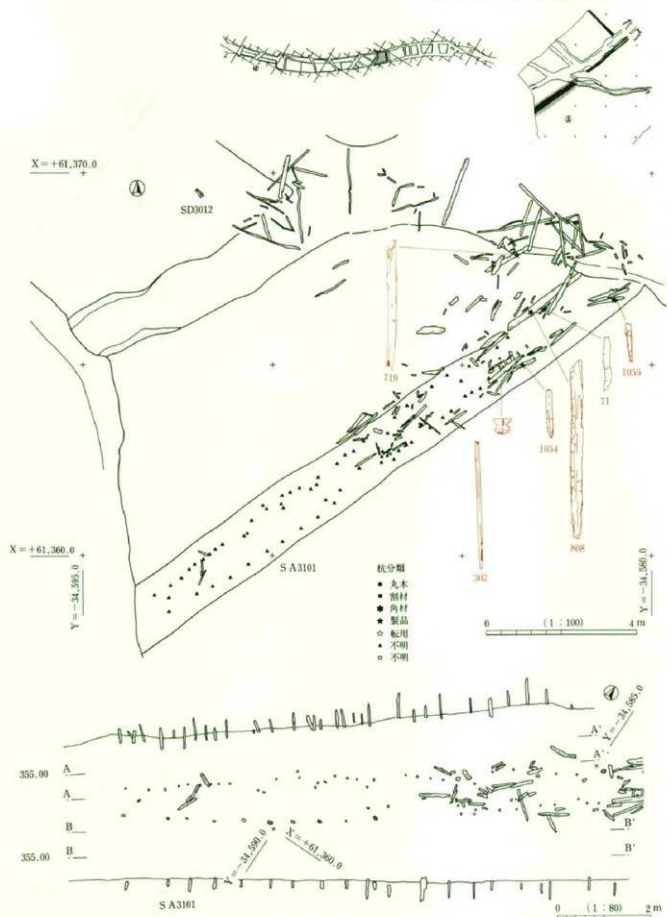
位置：調査区西端に位置し、隣接区である㊸-2区SA3514aと同一方向に走行し、同址北東延長上にあたる。検出土層：本址は横木材と杭列2条からなるが、検出層位に微妙な違いがある。横木材は8層下部までの重機によって掘削した泥炭層中から出土し、この横木材の精査によって8層上部の泥炭質炭化物混入土層面から北西側杭列、やや下面から南東側の杭列が検出された。規模・構造・方向：杭列は北西側と南東側に2列並び幅1.5mの間隔をもつ。横木材はほぼ2列の杭列間に長軸を走行方向にむけて位置して



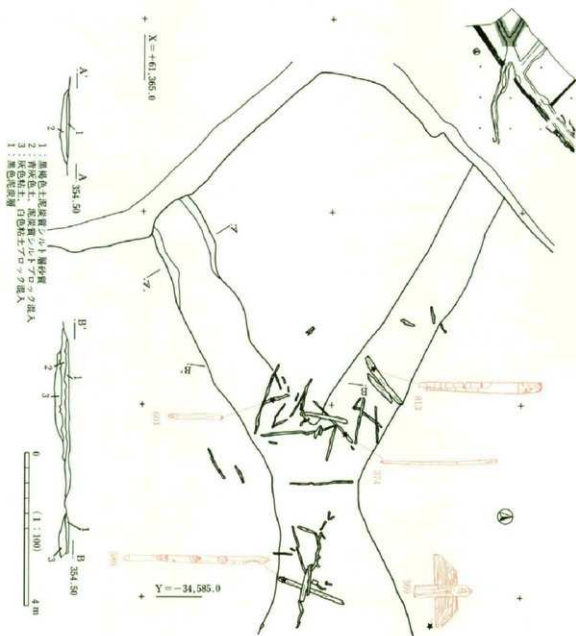
第146図 ③区古墳時代前期遺構全体図



第147図 ⑬区古墳時代前期遺構全体図

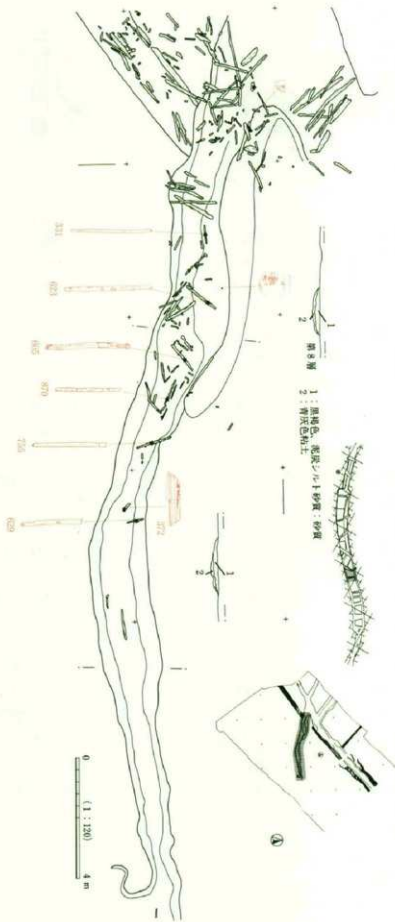


第148図 SD3012、SA3101 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図

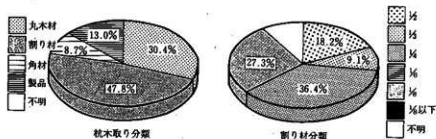


第149図 SD3012平面・断面・主要遺物分布図1

いる。横木材はSD3012寄りの東側に多く、大形板材が目についた。水田面との比高差は数センチであるが、杭列と横木材には盛り土があったものと思われ恒常的な大畦畔と判断した。杭の状況：南東杭列の杭は先端部のみの残りであったのに対し、北西杭列の杭は長く比較的残りの良いものであった。用材は割り材47.8%、丸木材30.4%で割り材の占める割合が高く、割り材は $\frac{1}{2}$ 割り材が多く用いられていた。樹種はクヌギ節、サワラ、クリの順が多かった。遺物出土状況：横木材中に建築部材のほか銀の一部があり、小型丸底土器が1点（第198図148）出土した。時期：検出土層と出土遺物から古墳前期後半から古墳中期前半とされるが、杭列の構築はやや遅る時期の可能性がある。



第150図 S.D.3012 平面・断面・主要出土遺物分布図2



第151図 SA3101 (㉔区)

SC3504 ㉔区 (第152図)

位置：調査区北西に位置し、SD3004と垂直に接する。検出土層：8'層下面の泥炭の平面精査によって灰色粘土が帯状に走行する畦畔を検出した。泥炭層堆積の厚いSD3004付近では数センチの高まりとして検出されたが、北西方向に向かうに従って泥炭層が薄く不明瞭となる。規模・構造・方向：幅約1mでSD3004からN-45°Wの北西に向かって約12mにわたって確認された。枕や横木材は芯材として用いられていない。遺物出土状況：畦畔内からの出土遺物はないが、本址北側脇の水田面から田下駄部材となる有頭状木製品が2点出土している。時期：検出土層から古墳前期後半とした。

SC3501 ㉔区 (第154・155・156図PL24)

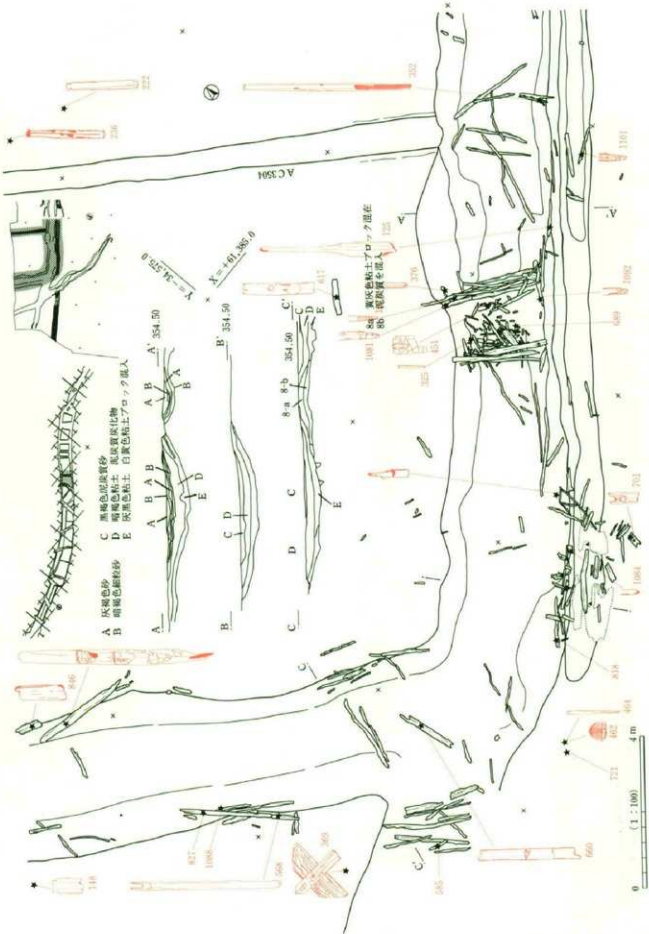
位置：調査区ほぼ中央部に位置し、SD3004の南側土手と接する。検出土層：8'層下面の平面精査で枕を伴った高まりが確認され、8層上部の枕取り上げ時に同層中位を検出面とする枕が列状に検出された。本址は8層内の2面水田にわたる畦畔とされるが、本調査区で下面水田は面的に確認できなかった。規模・構造・方向：本址西側でSD3004南側土手の高まりが判然とせず、本址との接点で枕を密集させた土手が検出された。SD3004枕密集地点からN-32°Wとなる南東方向に屈曲して畦畔となっている。幅は1.2mで枕を伴って約4m、盛り土だけで約10mの長さとなる。枕の状況：遺存状況は悪く先端部の加工形状が分かるものは僅かであった。用材は割り材41%、丸木材28.2%、転用材23.1%で、1/2割り材が主体を占める。用材の傾向はSD3004を挟んだ北側のSC3506と近似する。樹種はクヌギ節、モミ属が多い。時期：本址内及び周辺からの遺物出土はないが、検出状況から構築は古墳前期中葉に遡り、埋没時の古墳前期後半まで継続された畦畔となる。

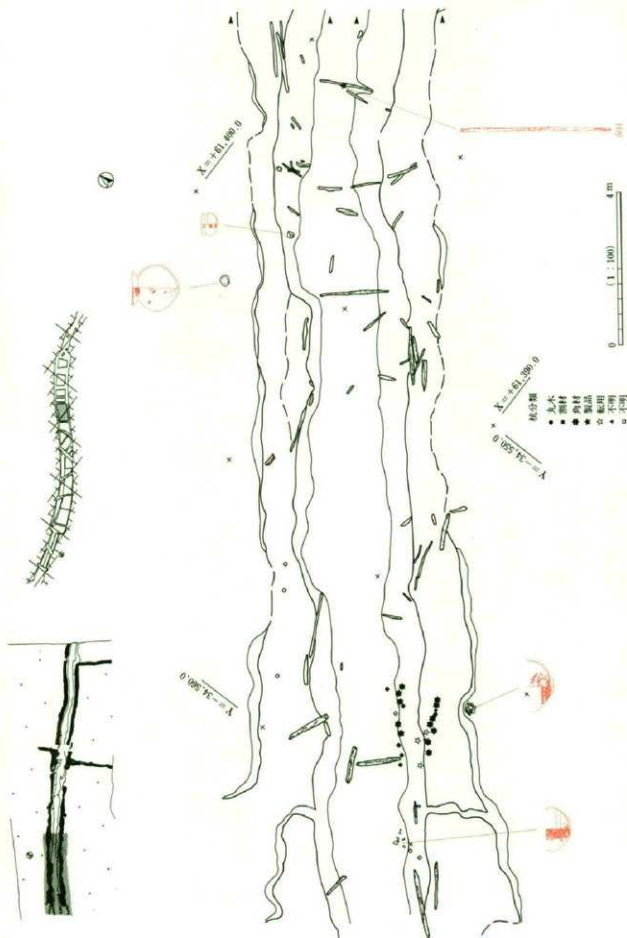
SC3506 ㉔区 (第155・156図)

位置：調査区ほぼ中央部に位置し、SD3004の北側土手と垂直方向に接する。検出土層：8'層下面の平面精査では畦畔としての高まりは検出されず、8層上部から枕頭が列状に検出された。枕はSD3004北側土手から密集した状況で本址まで連続した。規模・構造・方向：枕は間隔を密にして幅約1mに散在し、N-27°Wの方向に6mにわたって検出された。盛土は明確に確認されなかったが、SC3501と同規模の盛土畦畔になると思われる。枕の状況：遺存状況が悪く先端部の加工形状は不明である。用材は割り材37.1%、丸木材16.1%、角材・転用材が46.8%となり角材・転用材の占める割合が高い。遺物出土状況：枕列内からの遺物出土はないが、本址西の水田面から鳥形木製品が出土した。鳥形木製品は、8層灰色粘土に胴部と翼部がめり込む状況で重なり合っていた。鳥形出土地点南側のSD3004の土手が切れ、水田からの配水（排水）施設が想定されることから、本址とSD3004にかかわった遺物と認識した。時期：検出土層から古墳前期後半から中期前半とした。

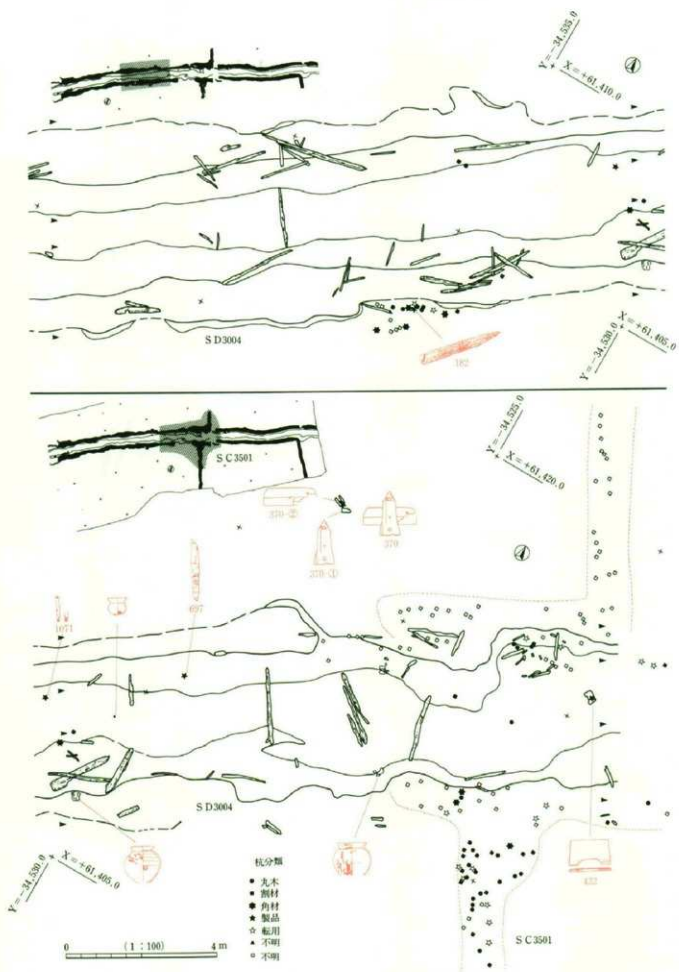
SC3505 ㉔区 (第157・198図PL23)

位置：調査区東端に位置し、SD3004の南側土手とほぼ垂直に接する。下層水田の枕列畦畔SC3525は



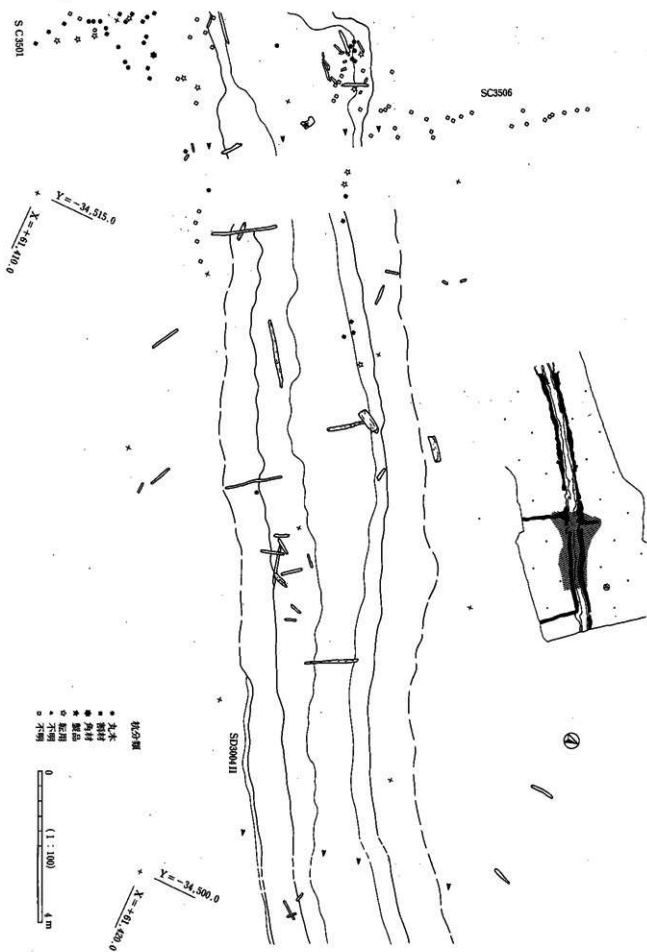


第153図 S D 3004 II (3区) 平面・出土主要遺物分布区

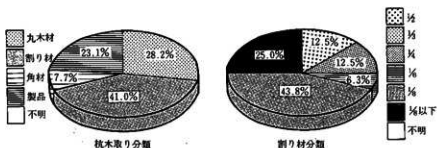


第154图 SD3004II、SC3501 平面·出土主要遺物分布图

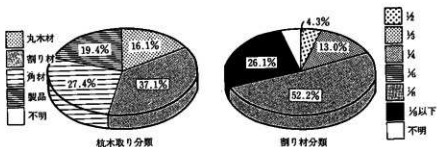
第4章 各時代の遺構と遺物



第156図 S.D.3004 II (Q区)、S.C.3501・3506平面



S C 3501 (㊸区)



S C 3506 (㊸区)

第155図 S C 3501・3506 (㊸区)

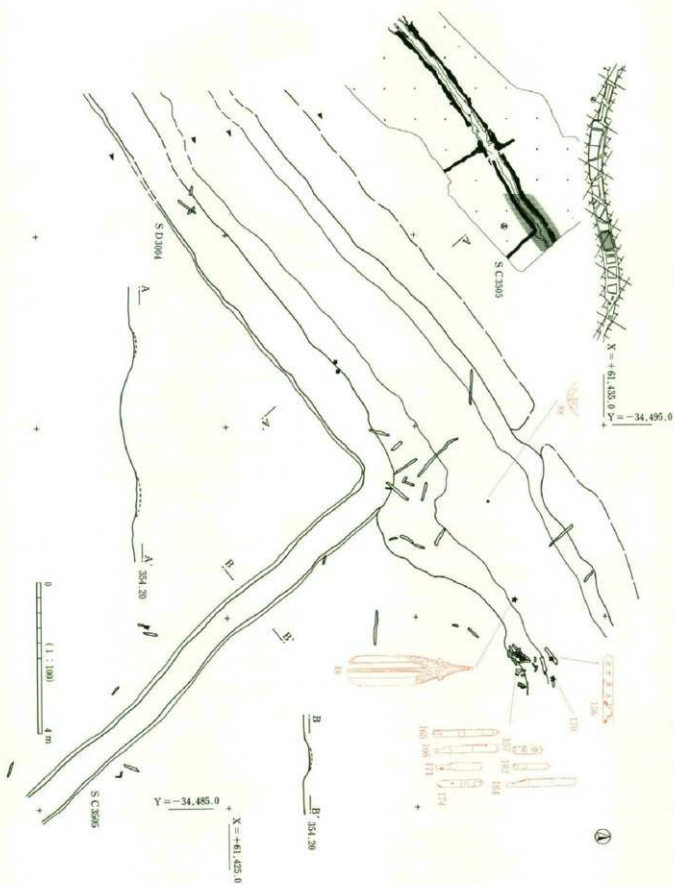
真下の位置にくる。検出土層：泥炭層と灰色シルト・粘土の互層（8層）下面の泥炭層の精査により灰色粘土の連続する高まりが検出された。本址はSD3004の南側土手から屈曲した高まりとして連続し、検出土層は溝土手と同一である。規模・構造・方向：幅は80cmで、南側土手からN-45°Wの南東方向に約14mにわたって走行する。水田面との比高差は約20cmで、同一水田面の畦畔のなかでは明瞭に検出された。SD3004は本址東側で土手が切れ南東方向にやや膨らむ平面形状となり、対岸の北西土手も切れる。このことから溝には取水口が設けられ、本址が配水にかかわる機能をもっていたことがわかる。本址には杭など芯材はなく盛り土だけの畦畔であるが、水田の大区画とされる。時期：畦畔内からは底部に孔のある甕（第198図149）が出土したが時期は不明である。検出土層から古墳前期後半から中期前半とした。

カ ㊸-1・2区（第158・181図）

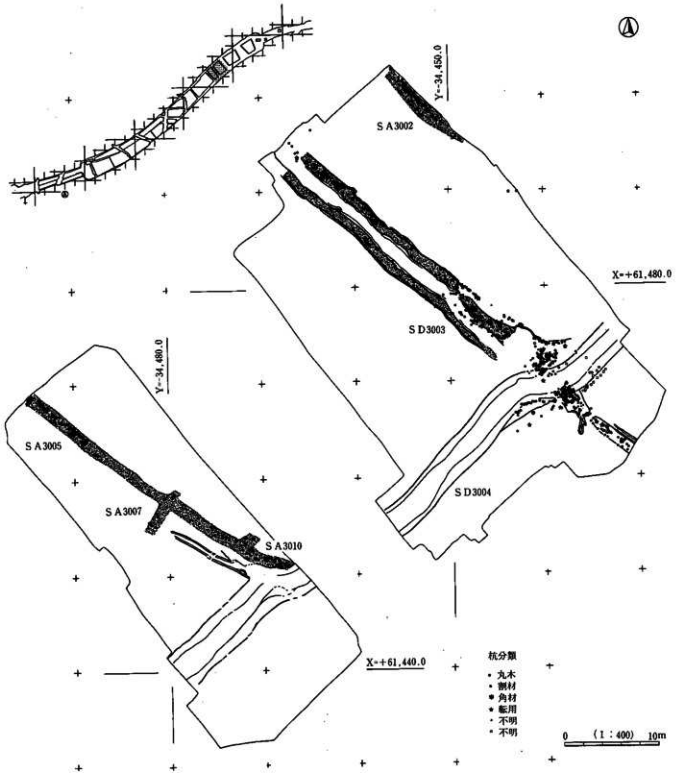
水田層：白色粘土ブロックと泥炭質の粘土が混在する灰色粘土層（14層）と薄い泥炭層を間層に挟んで白色礫を混在した灰色粘土層（15層）が該当する。地点によっては14層と15層の区別が曖昧となり灰色粘土層中に黄白色の粘土ブロックと泥炭質の炭化物が混在した土質となる。古墳水田層内には、2～3面の水田面があったものと予想されたが、個々の水田面識別は不明確であったが、SD3004の調査においては古墳水田層が2時期に区分された。直上層は平安水田層下層から連続する泥炭層と灰色シルト・粘土の互層（8～13層）で、層厚は約40cmである。この厚い泥炭層内には帯状に堆積した灰色粘土層があり水田層があった可能性がある。直下層は弥生後期水田面を被覆している厚い泥炭層である。水田検出状況：泥炭層内から複数の杭や横木材の出土があり、主としてそれらの状況を確認する調査を行なった。水田面の状況は明確にされなかったが水田の大区画となる杭列畦畔を4条検出した。遺物出土状況：遺構内から木製品が多数出土したほかSD3003周辺の泥炭層内から多種の木製品や土器片が収集された。

SA3005 ㊸-2区（第159・160図P L23）

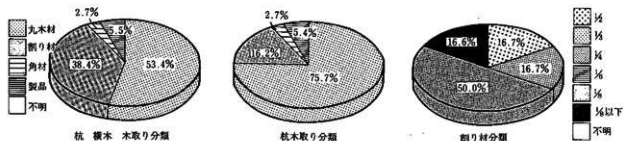
位置：調査区北西法面から中央部に位置する。古墳後期から奈良時代の溝SD3002と接し一部削平されている。検出土層：泥炭層と砂質の灰色シルト層の互層（12・13層）となる下部から灰色粘土と杭・横木



第157図 S D3004II、S C3505 平面・断面・出土主要遺物分布図



第158図 ①区古墳時代前期遺構全体図



第159図 SA3005 (㊸区)

が検出された。横木材下部の粘土は泥炭混じりで上層から漸移していたため高まりとして確認することはできなかった。規模・方向・構造：杭列は一部に横木材を伴って幅1mに杭が密な状況で約12mにわたって検出された。方向はN-50°Wでやや走行方向は異なるが南東にはSA3010があり、直交する形でSA3007がある。杭列上への盛り土は明確に確認されなかったが、水田を区画する盛り土の大畦畔と判断した。杭の状況：杭の遺存状況は良く、用材は丸木材が75.7%で、直径3～8cmの材が主体を占めていた。先端加工は周縁から単純で鋭角な削りを残す杭が多かった。時期：本址からの出土遺物はないが検出土層から古墳前期とした。

SA3007 ㊸-2区 (第160図)

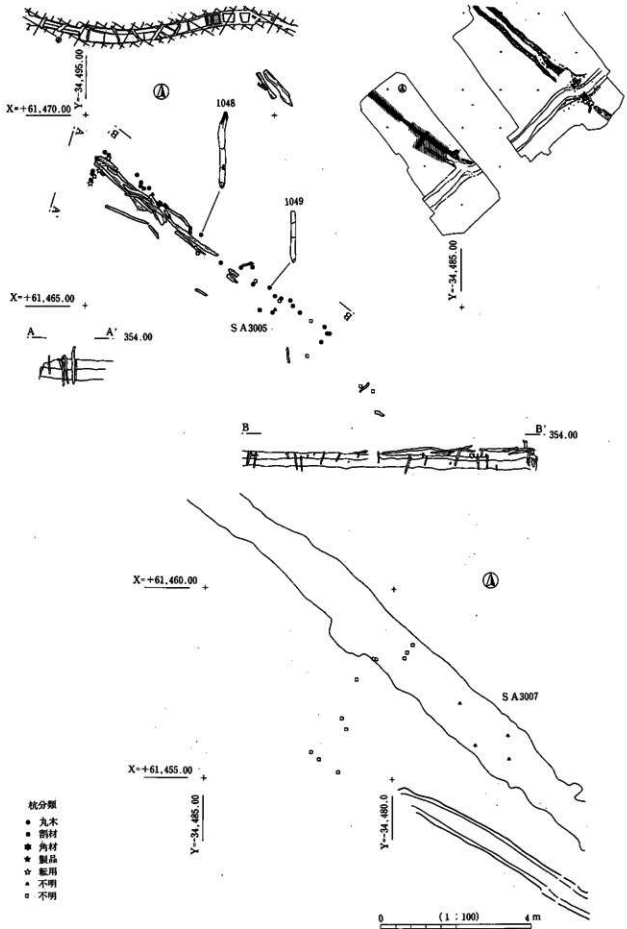
位置：調査区中央に位置し、SD3002によって杭列が壊されているが、SA3005とSA3010に直交する方向に走行する。検出土層：SD3002の調査の際に溝の底面から東西に走行する杭列が検出され、SD3002の壁面拡張によって灰色粘土(14層)上部を杭の頭とする杭列が確認された。規模・方向・構造：杭は11本で幅約1m、長さ5mにわたっている。方向はN-38°Eであるが、検出状況が悪く構造は不明である。杭の状況：杭の遺存状況は悪く先端部まで確認できる資料はない。時期：検出土層と杭列の配列状況から古墳前期後半とした。

SA3010 ㊸-2区 (第158・176図 PL23)

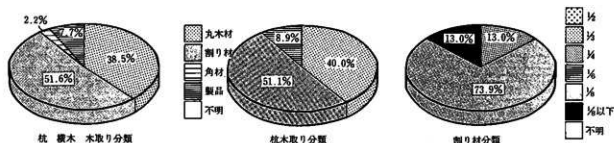
位置：調査区南東側に位置し、古墳後期から奈良時代に帰属するSD3002と重複し、上部を一部壊されている。検出土層：SD3002調査時に東壁の泥炭層(13層)下部を杭頭部とする杭列がSD3004沿いに検出された。規模・方向・構造：幅1m、長さ約11mにわたって杭が密に検出された。SD3004付近では一部横木材を伴っているが、横木材の方向は一定していない。杭上部が不明のため盛り土の有無は不明であるが規模から大畦畔と判断される。方向はN-58°Wであり、本址北西にはほぼ同一となる方向に走行するSA3005が位置し、同一の杭列畦畔であった可能性が高い。杭の状況：杭は多数出土したが先端部のみ残存するものが多く用材、先端加工の傾向を知る資料はない。時期：検出土層とSD3004との位置関係から古墳前期後半とした。

SA3002 ㊸-1区 (第161・162図 PL23)

位置：調査区北東隅に位置する。北西側は調査区外、南東側は工事用道路確保のため未調査となるが、調査区を南北に横断する大規模な杭列と予想される。検出土層：泥炭層と灰色シルト層の互層(13層)下部から杭・横木が検出された。横木材は灰色粘土上部にあり杭は泥炭層上にやや突出する。杭の検出層が泥炭混じりで上層から漸移していたため明確な粘土の高まりとして確認することはできなかったが、盛り土が想定される。規模・方向・形状：幅は1.2mで約20mにわたって検出された。杭と横木材が配列された箇所と大形横木材のみの箇所とがある。方向はN-48°Wで12m西側のSD3003と平行して走行する。杭の状況：用材は割り材が51.1%、丸木材が40%で、先端加工は古墳時代の特長である周縁からの鋭角



第160図 S A 3007 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図



第162図 SA3002 (①区)

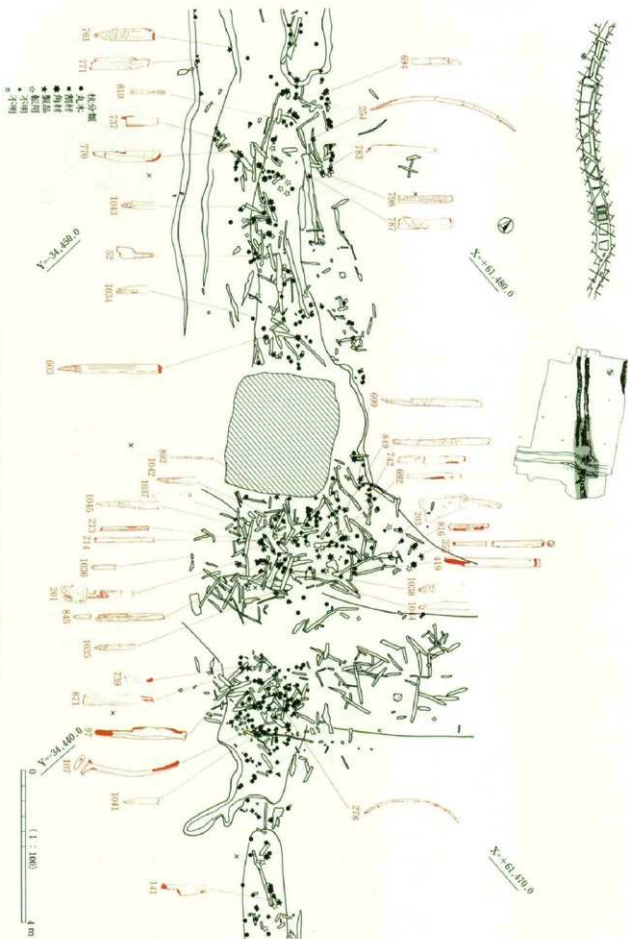
な削りとなるものと弥生時代の特長である単一方向からの単純で鋭角な削りを残すものがある。また炭化材が全体の15%を占めていた。樹種はクヌギ節とカヤが多く用いられていた。時期：検出土層と配列から古墳前期後半とした。

SD3003 ①-1区 (第163・164・165・195・196・200図 P L20・21・26・27・28)

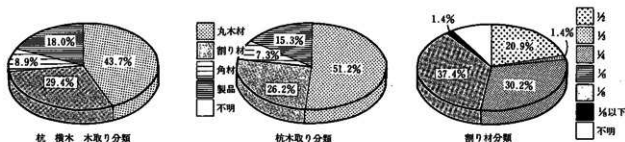
位置：調査区中央部に位置し、調査区北西法面から南東法面までにわたる大規模な遺構である。SD3004と交差し、交差部では多数の杭が検出され、木製品や土器などの密集地点とであった。検出土層：本址は泥炭層（13層）に被覆された遺構であり、泥炭層が本址の起伏をトレースした状況で堆積していた。溝としての落ち込みは古墳水田層である14層上面から確認されたが13層堆積時にも溝として機能していた可能性がある。埋土：上面には植物腐食片が少量混入したシルト質粘土が一部確認された地点もあるが、泥炭質のシルト層を埋土とし、中位以下には粗砂の混入が認められた。規模・方向・形状：溝幅は1.2~1.5mで、両側には幅1.2mの土手がある。土手上面は調査時に重機によって削り込んだ箇所もあるが水田面からは約30cm程の高まりとして確認され、上部からの深さは50cmであった。土手には大形板材を横木材とし、長さ1m以上の杭が数百本打ち込まれていた。方向はN-48°Wで調査区を横断する規模で約50mにわたって検出されたが、SD3004周辺の重複地点で本址の構造が不明となる。SD3004は本址との合流地点で北東方向にやや屈曲し攻撃面となる南側護岸には杭列が2重に打たれている。杭の状況：杭の遺存状況は極めて良く、用材は丸木材51.2%、削り材26.2%、転用材15.3%で丸木材の占める割合が高く、直径8cmを越える大形の丸木材と削り材が主体を占めていた。先端加工は周縁部から緻密で鋭角な削りを残す杭が多く、本遺跡の古墳時代の加工の特長が見られた。樹種はクヌギ節とコナラ節で約7割を占める。遺物出土状況：溝内からの遺物はまばらで、土手の芯材とSD3004の接点の杭列群に伴って複数の木製品や土器が出土した。北西隅の溝上側泥炭層中から刃物、雑具、建築部材があり、脇の土手からは壺（第200図161）が出土しているがこれらが本址に伴うかどうか微妙である。溝内下層からは古墳前期から中期の土器（第196図106~112）と弥生後期の土器（第195図103~105）などが出土し、この内105・108・110はSD3004に帰属する可能性がある。時期：出土遺物と検出土層から本址構築は古墳時代前期後半とされ、水田面は未確認であったが中期まで機能していた遺構と判断した。

SA3011 ①-2区 ((第182図))

位置：調査区南東寄りに位置し、SD3004（古墳中期）と接する。古墳後期から奈良時代に帰属するSD3002と重複し、杭の大半はSD3002によって上部を壊されている。検出土層：SD3002の溝底の埋土の砂礫層内から複数の杭が出土し、SD3004北土手にかけて連続していた。規模・構造・方向：幅1m、長さ9mにわたって杭が密に配されていた。方向はN-47°WでSD3004と直交する方向に走行する。上部構



第164图 S D3003 平面・断面・立面・出土主要遺物分布图



第165図 SD3003 (㊸区)

造は不明であるが、杭の配置から大規模な水田区画の畦畔であったものと判断される。杭の状況：遺存状況は良好で、用材は丸木材50%、割り材40%で丸木材と $\frac{1}{2}$ 割り材が主体を占めていた。先端加工は周縁から鋭角で緻密な削りを残していた。樹種はモミ属が多い。時期：本址はSD3002の溝底から列状に検出された杭列で、当初は溝に伴う下部遺構としていたが、杭の配列がSD3004の接点付近の杭列と連続すること、泥炭層内（8～13層）に杭が突出しすることから古墳前期後半から古墳中期の遺構とした。

キ ㊸区 (第166図 P L17)

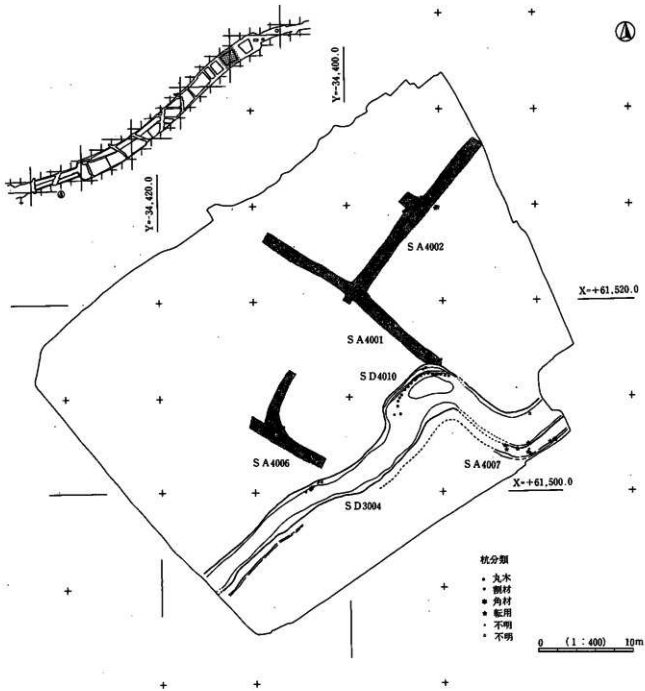
水田層：泥炭質の炭化物粒子が多量に混入した暗青灰色粘土層（19層）と凝灰岩の風化礫を混入した明黄褐色粘土層（20層）が該当する。直上層は堆積厚40cmの平安水田層下層から連続する泥炭層と灰色シルト・粘土の互層（12～18層）で、直下層は弥生後期水田面を被覆している厚い泥炭層である。水田検出状況：砂質の暗灰色泥炭層（17層）付近まで重機によって掘削を行ない18・19層面で精査を行なった。17層中から杭頭部が検出され、19層に帰属する杭列が3条検出された。遺物出土状況：各遺構に伴う遺物のほかに17～19層まで古墳時代前期の土器小破片が数点収集された。

SA4001 ㊸区 (第167・198図 P L23・24)

位置：調査区中央部に位置し、SA4002と接する。検出土層：泥炭層下部から横木材が検出され、横木材は青灰色粘土層（19層）に黄白色粘土ブロックを多量に混入した粘土層（18層）上にあった。この土層は弥生後期水田層直上まで及ぶ堆積層で杭列周辺に顕著にみられた。規模・構造・方向：杭列は2列で対になりほぼ80～90cmの幅で20mにわたって検出された。杭は規則的に配列され、部分的に大形の横木材を伴っていた。方向はN-52°Wで、SA4002との接点付近で一旦途切れ、SD3004クランク部付近に杭の集みがある。SA4002との接点ではSA4002を避ける状況で18層が堆積し、この層が連続することから本址構築の盛り土であると判断した。この状況から本址構築以前にSA4002が存在していたことがわかる。本址はSA4002とSA4006と共に水田を大区画する畦畔であり、SD3004の屈曲部の延長上に位置しすることから、配水（排水）の機能を兼ねていたものと判断される。杭の状況：遺存状況は良く、用材は丸木材71.4%、割り材21.4%と丸木材の占める割合が高く、SA4002の用材選択とは対照的となる。先端加工は周縁から単純で鋭角な削りが残る。樹種はクヌギ節とコナラ節が大半であった。遺物出土状況：横木材には建築部材が用いられた杭には農具の未製品が含まれていた。また横木材と共に古墳前期の窪口縁部（第198図146）が出土した。時期：検出土層から古墳前期後半から中期前半とされるが、SA4002の構築に後続する杭列畦畔である。

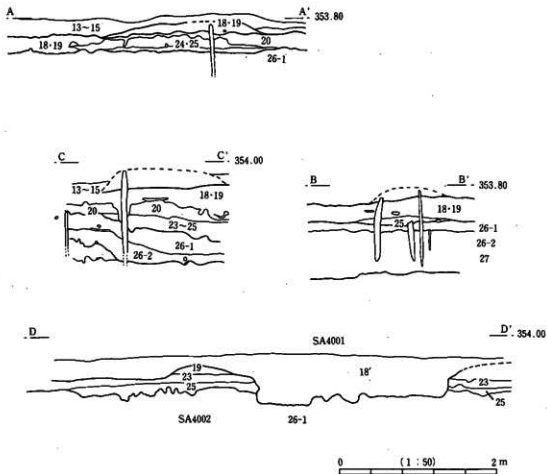
SA4002 ㊸区 (第168・169・170・197図 P L23・24)

位置：調査区北東側に位置し、弥生後期の杭列SA4003・4004・4005・4008と重複し同時期のSA4001



第166図 ⑬区古墳時代前期遺構全体図

と接する。検出土層：検出に際して泥炭層（13～15層）とともに畦畔上部を削ったが、19層を基調とする水田層からの高まりとして確認された。規模・構造・方向：杭は密に打たれているが杭幅80～150cmの2列を基本とし、杭間に横木材を芯材として用いた構造であった。横木材には大形丸木材のほか板材、樹皮が用いられていた。横木材下部には弥生水田層を被覆していた泥炭層が部分的に残った箇所もあり、法面の土層観察から本址を覆う盛り土があったことが確認された。方向はN-42°Eで約20mにわたっている。杭の状況：遺存状況は良好で、80cmを越える長さの杭が多数出土した。用材は割り材が61.5%、丸木材が27.1%で、 $\frac{1}{2}$ 割り材を素材とした杭が主体を占める。先端部の削りは単純で鋭角を残す杭と緻密で鈍角

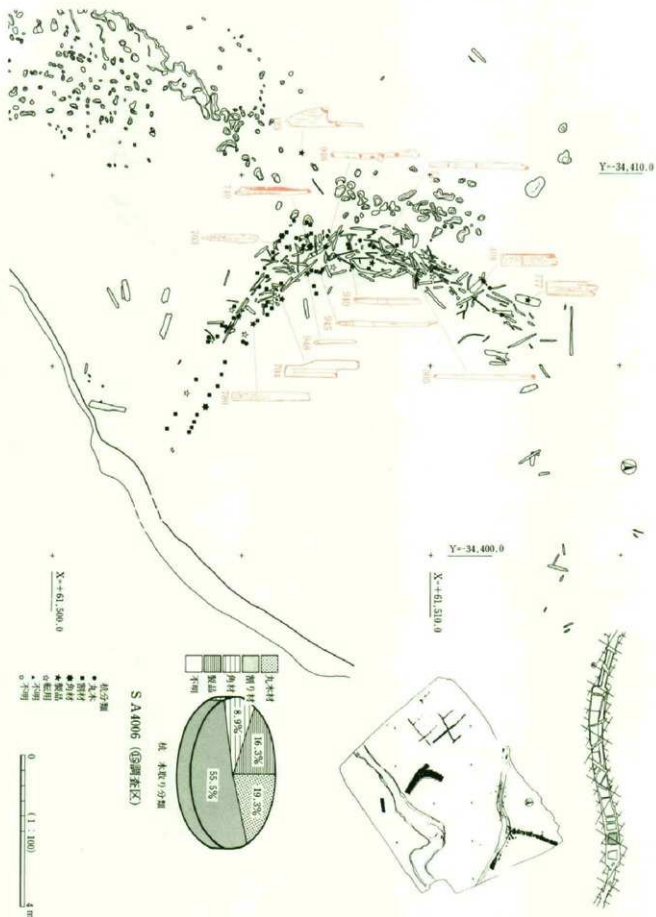


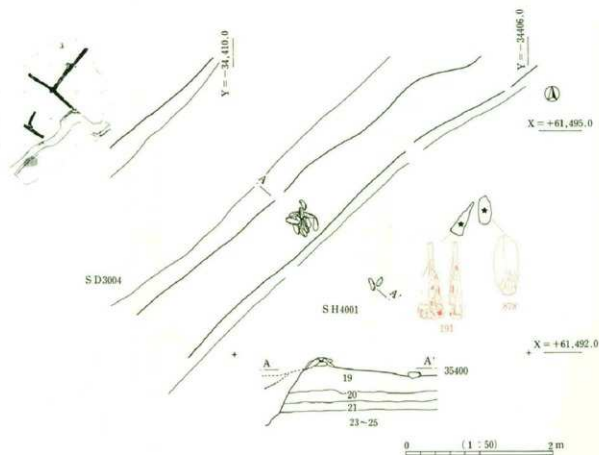
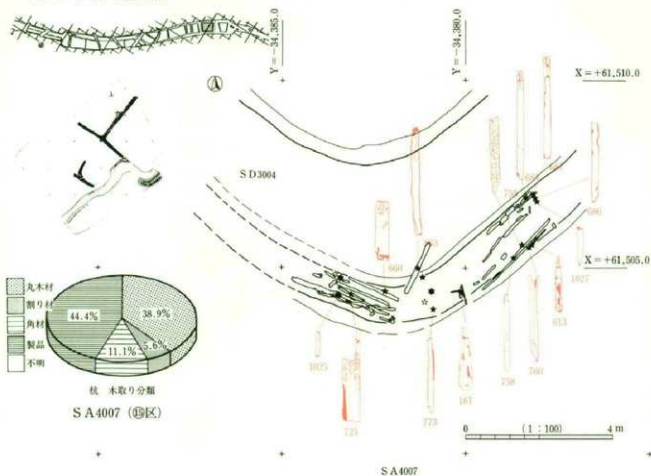
第169図 SA4002 断面

削りを残す杭が半々であり、杭の配列からは数度補強された可能性がある。樹種はコナラ節とエノキ属が多い。遺物出土状況：横木材の中には刳物、建築部材などの木製品があり建築材を杭として転用した状況も見られた。本址下部からは複数の弥生後期の土器片が出土したが、本址に直接かかわる土器は第197図129だけである。時期：検出土層から古墳前期とされるが構築はSA4001以前の遺構である。

SA4006 ㊦区 (第171・197図PL15)

位置：調査区中央部に位置しSD3004と接する。検出土層：SD3004寄りの複数の杭は泥炭層(13-15層)下部から頭部が検出されたが、屈曲する部分の横木材は弥生後期水田層(26-1層)を部分的に被覆していた砂層下部から出土した。規模・構造・方向：SD3004からN-58°Wの方向に約8mにわたって走行する杭列と途中から湾曲形状で北東方向に走行する横木材をともなった杭列からなる。前者の杭列は幅80cmで2列となり比較的密に杭が配されている。後者の杭列は幅80-120cmで杭はまばらで横木材を主体としている。前者の杭列が古墳前期、後者が弥生後期を主体とする杭列畦畔の構造となるが、部分的に両者が入り交じって検出された。遺物出土状況：下層から弥生後期の土器片が数点(第197図518-522)出土したほか横木材には複数の建築部材が含まれていた。時期：検出状況から弥生後期に構築され古墳前期に再度杭を配した遺構とされる。

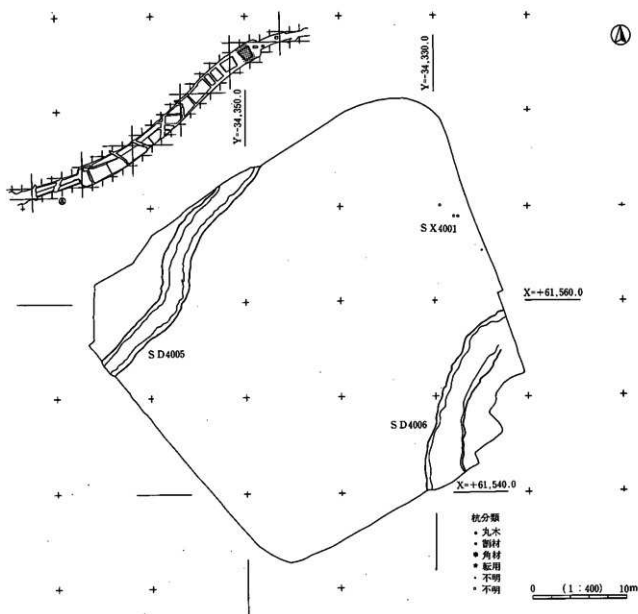




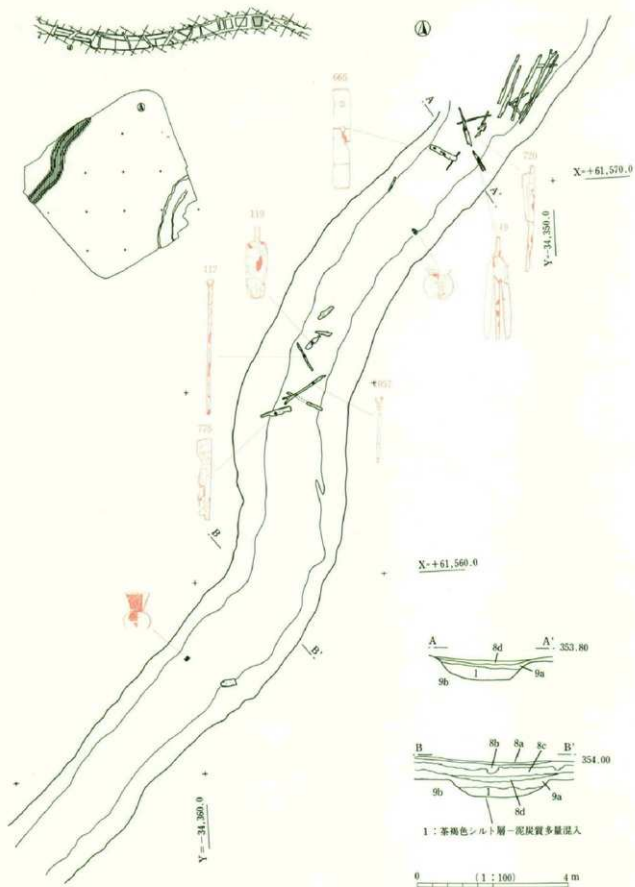
第172図 SA4007、SH4001平面・断面・出土主要遺物分布図 SA4007木取り分類

SH4001 ⑨区 (第172図P.L.27)

位置：調査区南側のSD3004の南土手上に位置する。検出土層：暗灰色泥炭層(17層)下面を除去後の平面精査によって19層上から棒状の礫群が重なって出土し、更に南東へ3mの地点に礫群があり、4m東には横槌と台板が並列して出土した。礫群及び横槌は19層に密着していた。規模：礫群は約70cmの範囲に12個が重



第173図 ⑨区古墳時代前期遺構全体図



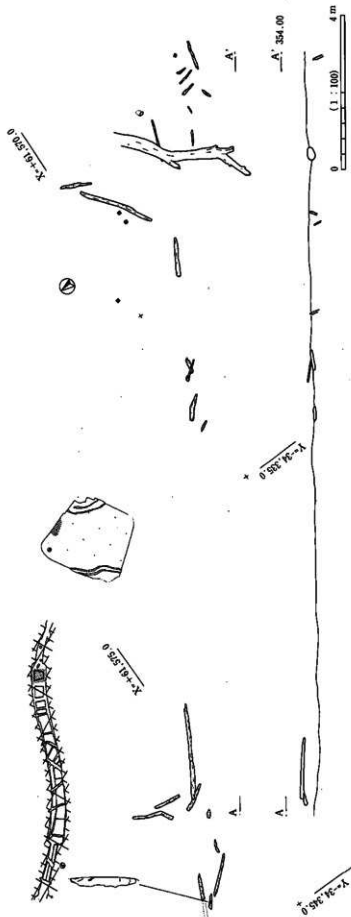
第174図 SD4005 平面・断面・出土主要遺物分布図

なり合い集積された状況であった。複数の礫の形状と重量が近似することから細物石の集石と判断した。時期：検出土層から古墳時代前期とされる。

ク ㊤区 (第173図 P L 29)

水田層：泥炭質の炭化物粒子が混入し、粘性の強い明灰色粘土層(9b層)である。直上層は泥炭質のシルト層を主体とし薄い泥炭層と互層になって40~50cmの堆積厚をもつ(8a~9a層)。水田検出状況：9a層まで重機によって掘削をし平面精査を行なったが、9b層面で畦畔状の高まりは確認できなかった。検出された遺構は杭数本と横木が散在するSX4001と溝SD4006であった。遺物出土状況：溝内からの遺物のほかは土師器片が数点出土したのみである。SD4005 ㊤区 (第174・198図 P L 21・25・26・27)

位置：調査区北西隅に位置する。検出土層：明灰色粘土層(9b層)上面で落ち込み、泥炭質の褐灰色シルト層(9a層)以上の土層がレンズ状に堆積している状況が確認された。埋土：溝の埋土は下層の砂を多量に混入した茶褐色シルト層で、上層は自然堆積層である。溝としての深みは9a層までの深さ20cm程度で存続していたことが確認された。規模・形状：幅は2.2~3mで9b層上面からの深さは約50cmである。北北東から南南西に緩く傾斜し、ほぼ中央部で蛇行する形状となる。断面形は底面が広い掃り鉢型である。遺物出土状況：下層からは複数の木製品と土器が出土した。木製品は北



第175図 SX4001 平面・立面

隅と中央蛇行部にまとまっており、農具と建築材があり、土器は壺と甕(第198図141・142)の大形破片が壁よりから出土した。時期:検出土層と出土遺物から古墳前期後半から中期前半とした。

SX4001 16区(第175図)

位置:調査区北東隅に位置し、下層にはSC4015がある。検出土層:黒灰色シルト層(8c層)から褐灰色シルト層(9a層)にかけて複数の横木材と3本の杭が北西-南東方向に出土した。規模・構造:杭3本は先端部は9b層上部まで達しているが短く相互の関連は不明である。横木材は散在しているが長軸がN-54°W方向に向く材が多く、N-56°Eに向く大形材が数点ある。横木材は大半が自然木であるが列状に出土していることから9a層上面の畦畔芯材の可能性もある。時期:周辺かの出土遺物はないが検出土層から9b層直後の古墳時代中期とされる。

ケ SD3004Ⅱ(SD3004) ⑬・⑭・⑮区(第152-157・176-180図PL11・17・18・19・24-29)

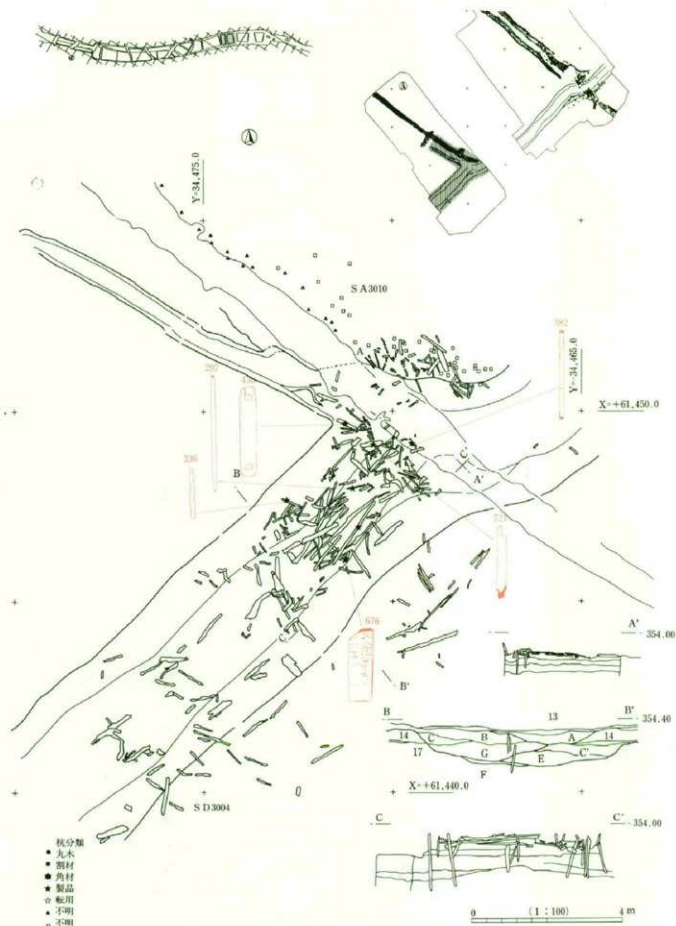
本址は弥生後期とほぼ同位置にあり東側低地を西から東へ約270mにわたって走行する溝址である。調査区によって検出状況が異なるが古墳中期の埋土は泥炭を多量に混入した灰色粘土層(A層)とそれを覆った泥炭層、古墳前期の埋土は砂質粘土層(B層)と灰色シルト質砂層が上層に、黄褐色砂層(D層)もしくは泥炭層(G層)が下層に堆積していた。溝幅は3.5-4m、深さは0.6-0.8mの規模で弥生後期に比べ幅が狭くなっている。形状は弥生後期同様⑬区と⑮区で大きく屈曲しているが、⑬区SA3010とSD3003の交点で緩く蛇行する。護岸には各調査区から杭・横木材などを用いた土手が検出され、⑭区の土手内からはほぼ完存する甕が数箇所出土した。溝内の出土遺物は弥生後期ほど多くないが、杭列畦畔との交差部接点には木製農具や武器がまとまってあり、⑬区溝内からは藕水の勾玉が出土した。また先にも述べたが、⑬・⑭区の本址周辺水田層からは鳥形木製品があった。以下に古墳前期の状況について各調査区別に見る。

⑬・⑭区(第152-157図PL18・19・24・28)

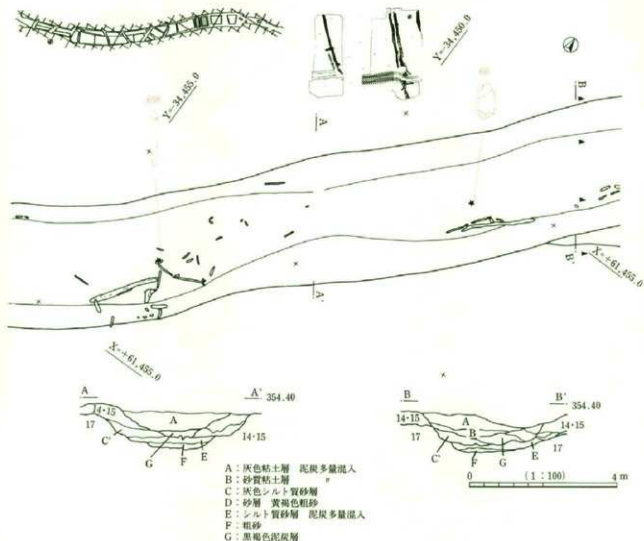
埋土:上層には灰色粘土層が薄く堆積(A層)し、その下層に暗褐色細砂層がある。本址の埋土はこれらの下層となる泥炭を多量に混入した暗褐色粘土層(D層)と白色粘土ブロックが混入した砂質シルト層である。規模・形状・構造:弥生後期の形状と同様に⑬区で北東に90°屈曲する形状となり南西護岸には横木材と葦状の編み物芯材とした土手が繁かされていた。この土手は両岸1m幅で⑭区東端まで連続し、水田面との比高差は10-20cmであった。SC3506・3501・3505の畦畔との接点では土手が途切れ杭列が検出された。これらは溝からの配水(排水)施設になると考えられる。SC3504南西からは溝を横断する大形横木が出土し、柵状の組まれていた。SD3012との流路接点にもやや規模は小さいが同様の横木材が出土した。これらは流水調整の施設と考えられる。遺物出土状況:溝内からの出土遺物は少なかったが土手内からは大形建築部材が芯材に用いられていた。SC3005南土手の途切れた箇所からは大形多又鋸と大足の部材まとまって出土した。またSD3012と接する土手の切れる地点で笠桶、管、ガラス小玉(第209図2)がまとまって出土した。

⑪-1・2区(第176-178・184・185図PL11・17・20・21・26・27)

埋土:泥炭を多量に混入した灰色粘土層(A層)によって古墳中期の溝を検出し、その下層から砂質粘土層(B層)と灰色シルト質砂層(C層)とする古墳前期の溝を検出した。本調査区では本址とSD3003、SA3010・3011が重複するため埋土と木製品出土垂直分布を照合して溝の概要をつかんだ(第181・182図)。規模・形状・構造:古墳中期の溝は幅2.2m、深さ30cmと小規模で均一幅のまま北西から南東方向へ走行する。⑪-2区では古墳水田面被覆層である13層に突出する杭列が検出された(SA3008)。古墳前期の溝は幅3.5m、深さ50cmでSA3010との接点とSD3003の交点で南に緩く屈曲する。SD3003は北西から南東に走行するが水が流入する攻撃面(南土手)には溝形状に沿って杭列が並んでいた。SD3003の溝底



第176図 SD3004 (①-2古墳前期-)・SA3010
平面・断面・立面・出土主要遺物分布図

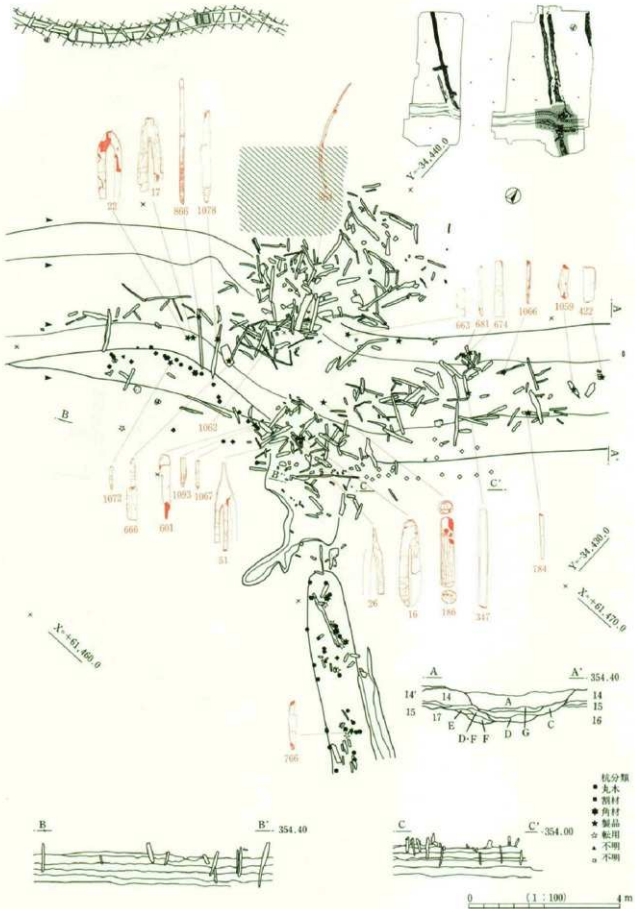


第177図 SD3004 (⑩-Ⅰ区古墳前期-) 平面・断面・出土主要遺物分布図

は本址の溝底標高に比べ約20cmほど高いことからSD3003の水が本址へ集水されたことが窺われる。遺物出土状況：SD3003の交点から多量の木製農具がまとめて出土した。出土地点の特定はできないが勾玉もこの周辺からの出土である。

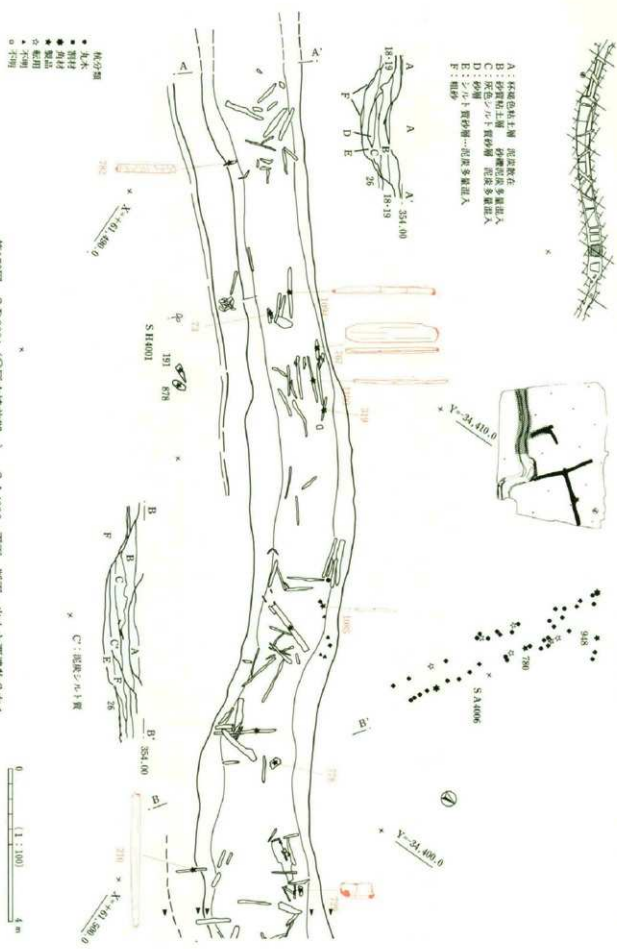
⑩区 (第172・179・180・186図P L 11・17・24・25・28)

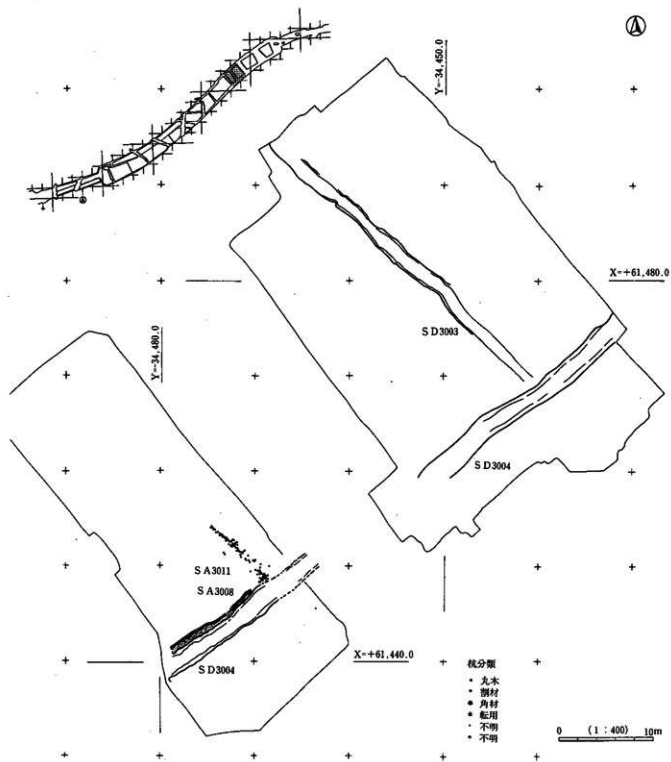
埋土：古墳前期後半までの埋土は泥炭を多量に混入した砂質粘土層(B層)とシルト(C層)、灰色砂(D層)であった。南東で屈曲するクランク部には砂層が厚く堆積し弥生後期の埋土を深く削り込んでいた。この地点出土の遺物の帰属時期が曖昧であったため土層と木製品出土垂直分布の照合(第183図)によって該期の状況を確認した。規模・形状・構造：幅3mとほぼ均一に北西から南東方向へ走行しSA4006との接点で緩く南西に蛇行する。溝内杭列SA4010に沿う形状で幅をまし南西に屈曲する。南西に屈曲した攻撃面には横木材と杭によって補強した土手が検出された(SA4007)。SA4007は杭頭部が木田層を被覆した泥炭層内から検出され古墳中期前半期の構築と見ることもできるが、横材が弥生後期の埋土上から出土しているため、2時期にわたる護岸施設とした。SA4007出土の杭は転用材が44.4%を占め、矢板状に加工されたものが主体であった。遺物出土状況：溝内からは大形建築部材が多数あり、クランク部からは直口壺が出土した。



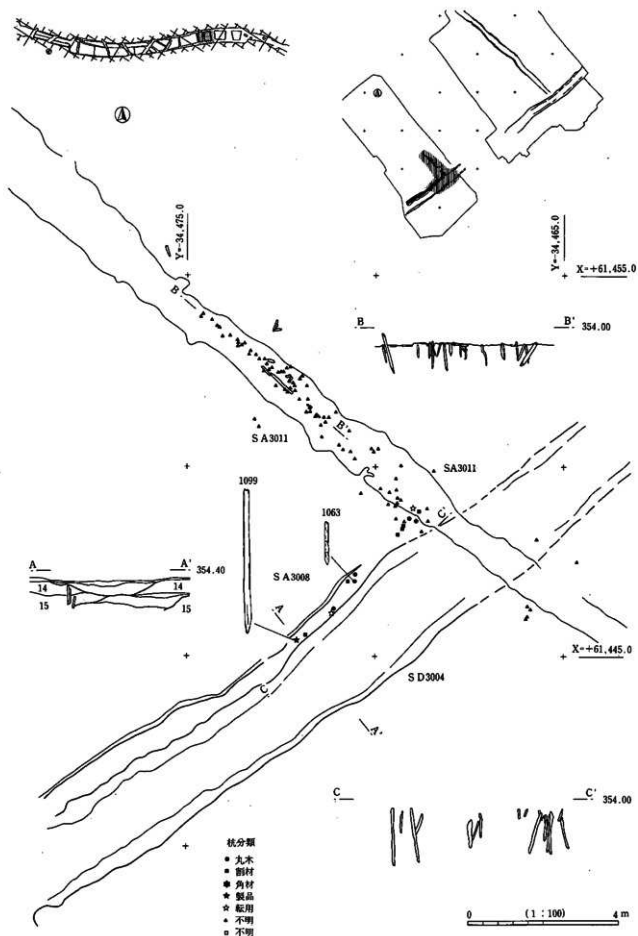
第178図 SD3004 (①-1区古墳前期-) 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図

第1792図 S D3004 (㊸区古墳前期-) SA4006 平面・断面・出土主要遺物分布1

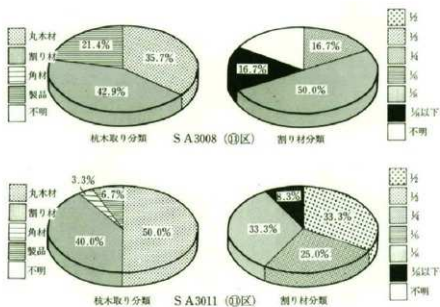




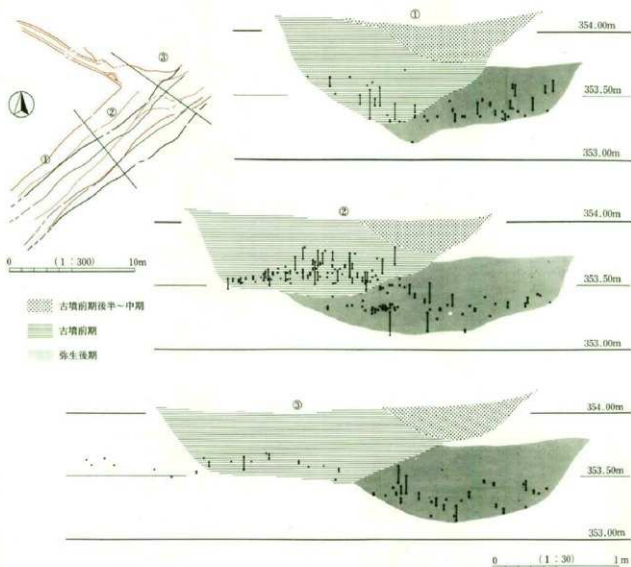
第181図 ①区古墳時代前期後半～中期遺構全体図



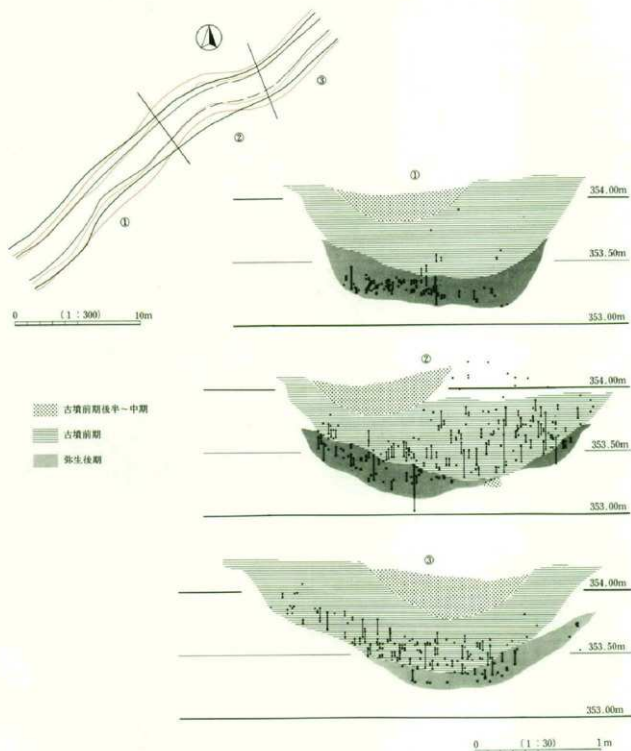
第182図 S D 3004 (①-2区古墳時代前期～) S A 3008・3011 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図



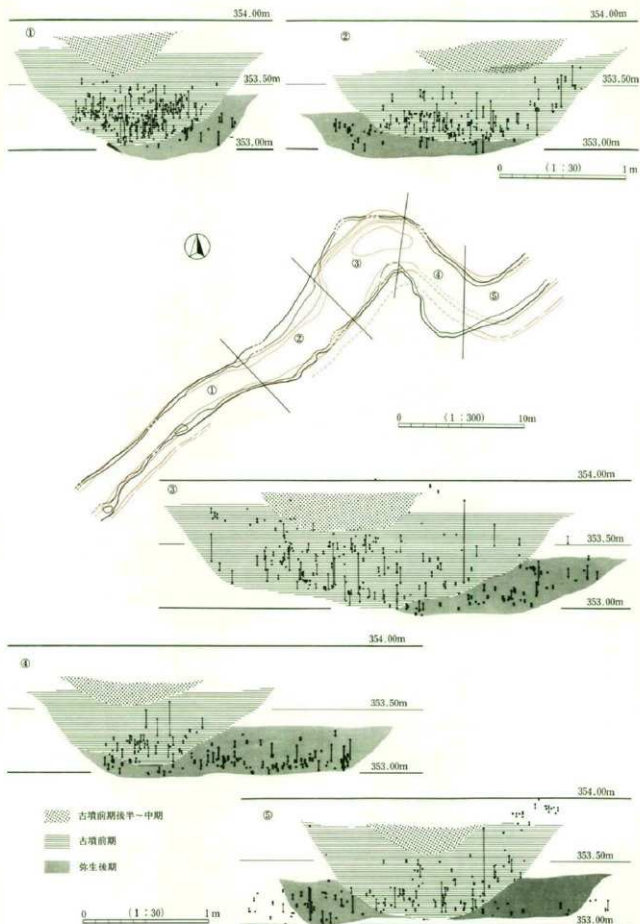
第183図 SA3008・3011



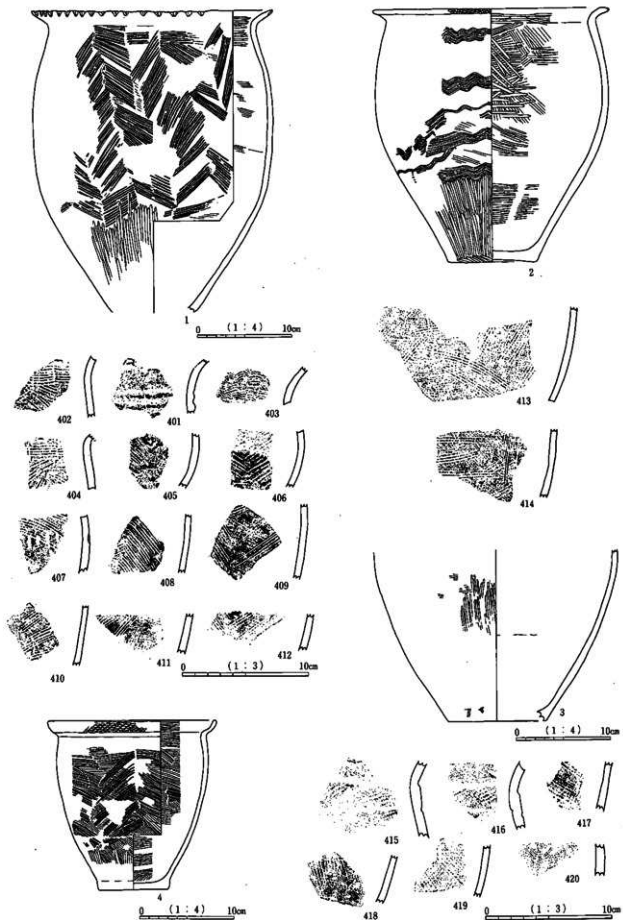
第184図 SD3004 (①-2区) 木製品出土垂直分布図



第185図 S D3004 (①-1区) 木製品出土垂直分布図

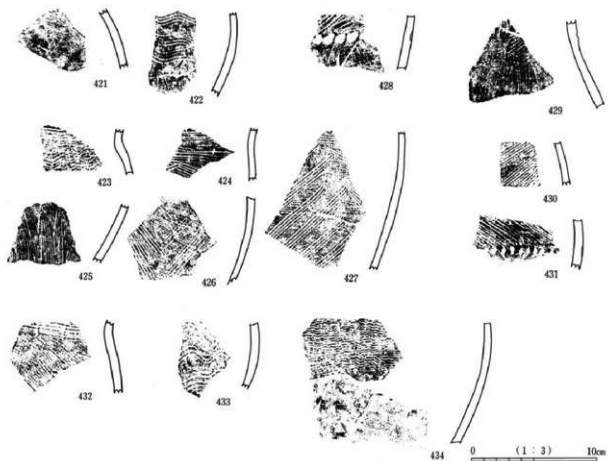


第186図 S D3004 (19区) 木製品出土垂直分布図



第187图 東側低地出土 弥生土器 1

SC3522・3523、SD4004 (2・413・414)、SA3530 I・II (3・415~420) SC4014 (4)
 SC3523下部 (401・403・408・409・411・412)、SC3524下部 (402・404~406)、SC3521 (407)



第188図 東側低地出土弥生土器 2

SA4004 (432)、SA4003 (423-427)、SA4001 (433)、SA3505 (434)、SC3521 (428-431)
SD3007 (421-422)



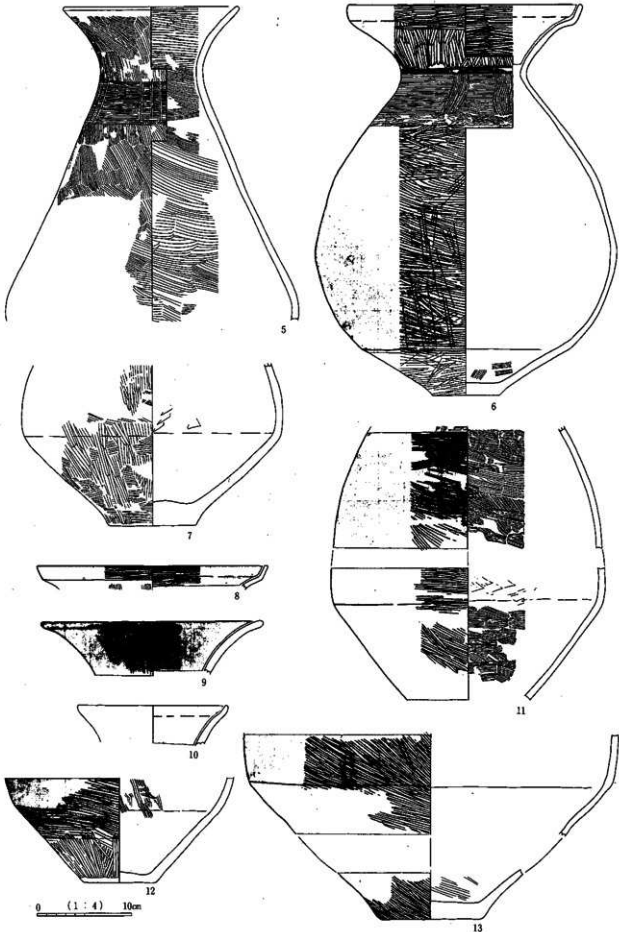
脚部内面に粘土蓋の貼り付け痕を
残す高杯 (鈴の高杯) (第71図75)



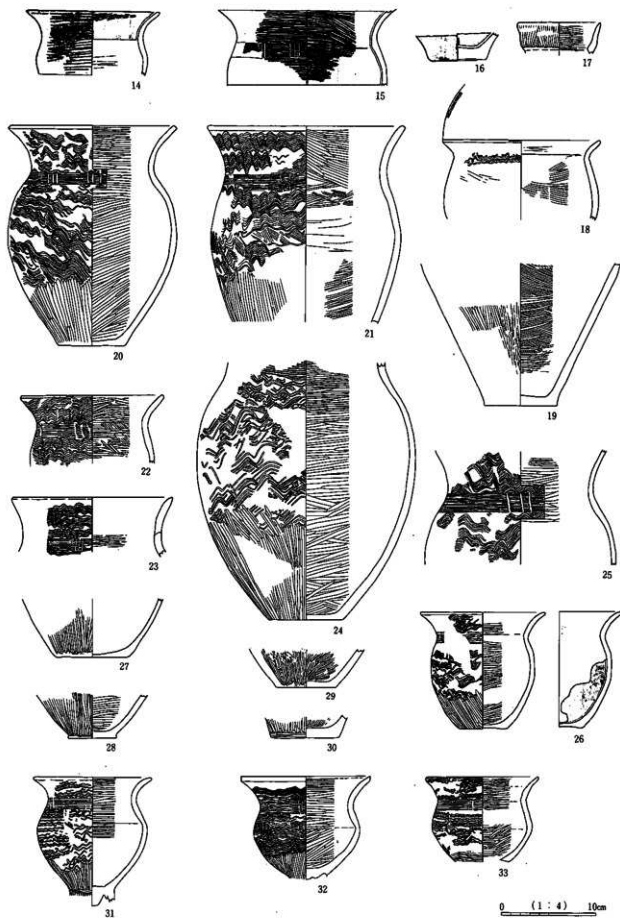
脚部内面をナデた高杯
(第191図46)



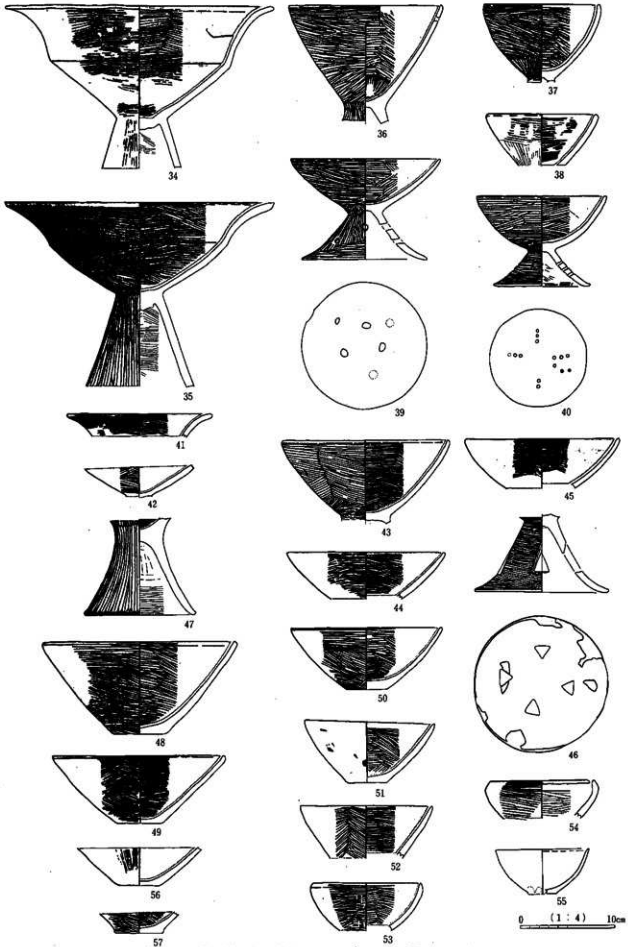
脚部内面からの穿孔と強く磨かれ
た痕を残す高杯 (第191図40)



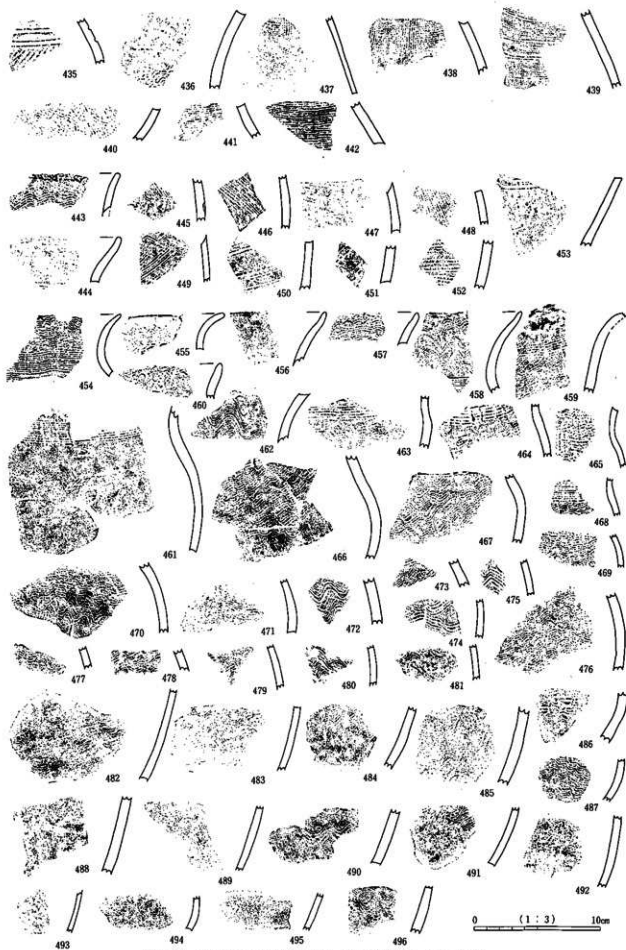
第189図 東側低地出土弥生土器3 SC3523 (5) SD3004下層 (5~13)



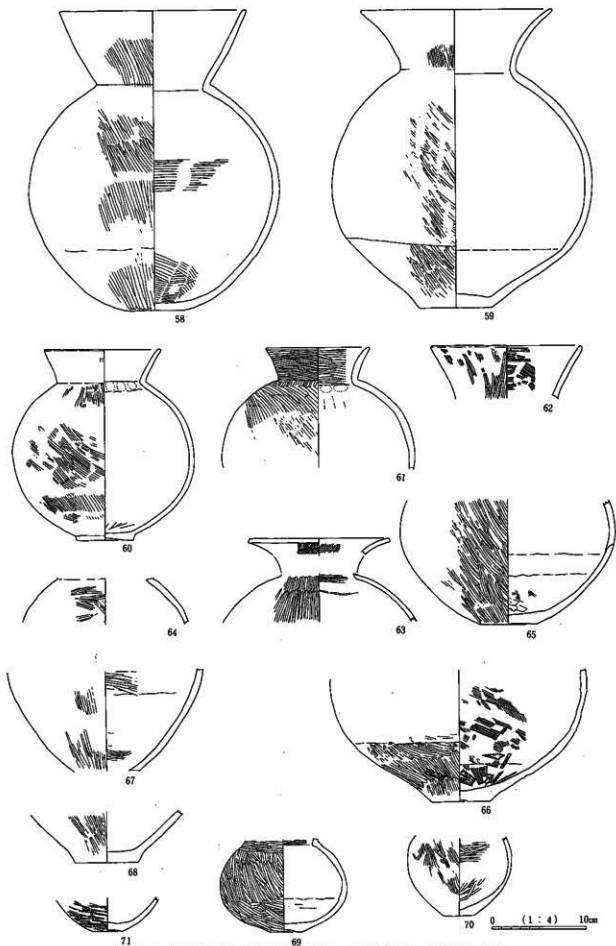
第190図 東側低地出土弥生土器 4 S D3004下層 (14~33)



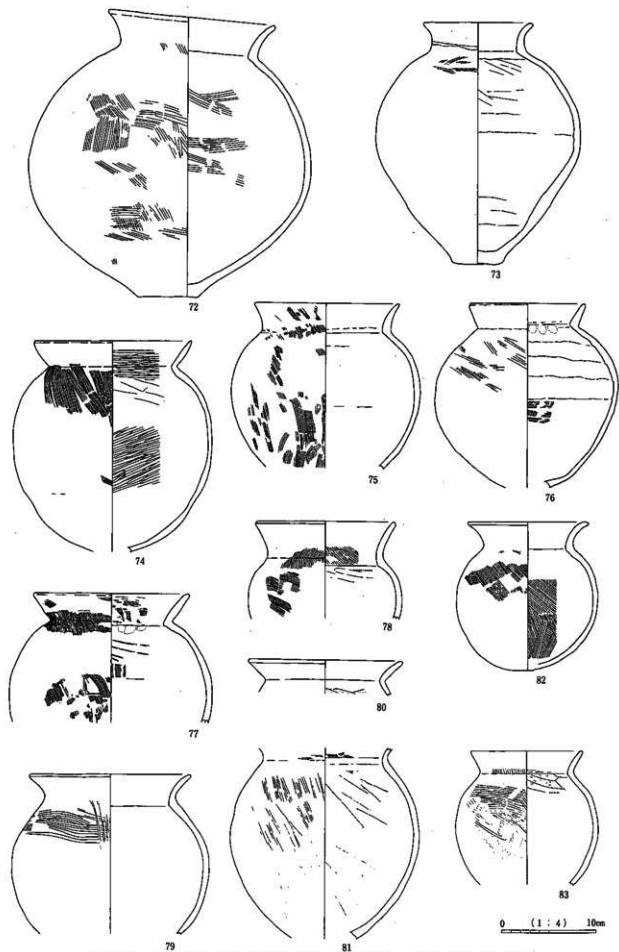
第191図 東側低地出土弥生土器 5 S D 3004下層 (34~57)



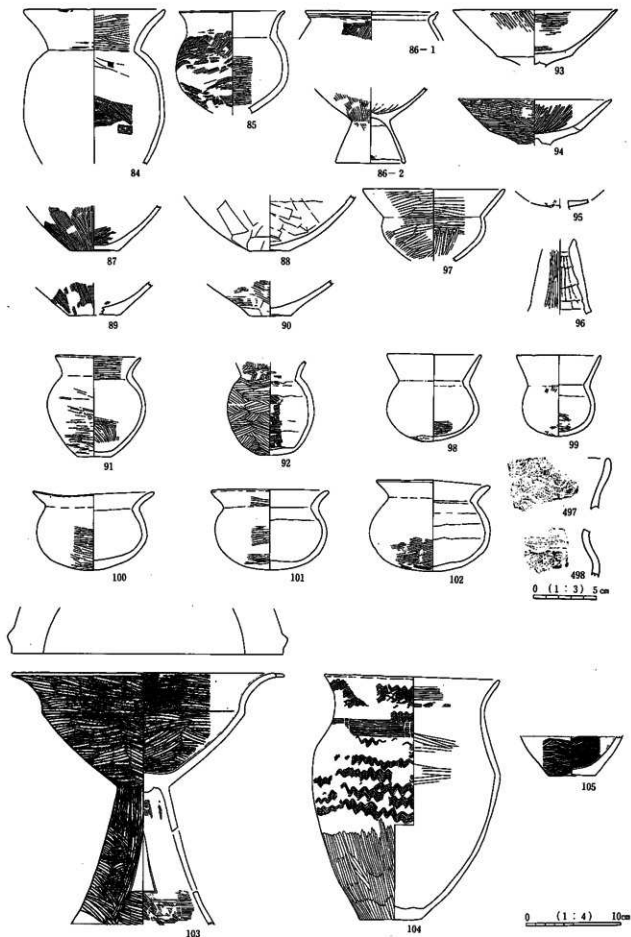
第192図 東側低地出土弥生土器 6 S D3004下層 (435-496)



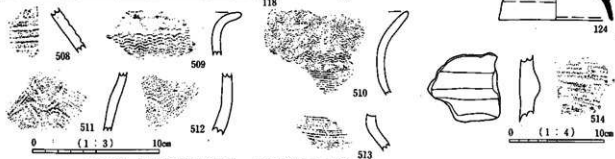
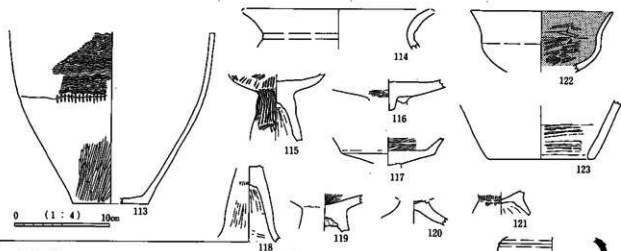
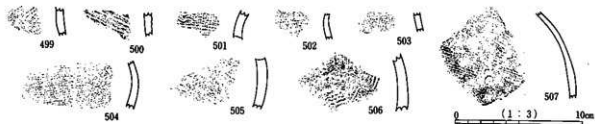
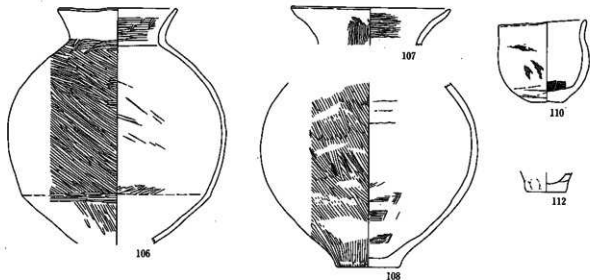
第193図 東側低地出土古墳時代の土器 1 SD3004中・上層 (58~71)



第194図 東側低地出土古墳時代の土器2 SD3004中・上層土手内 (72~83)



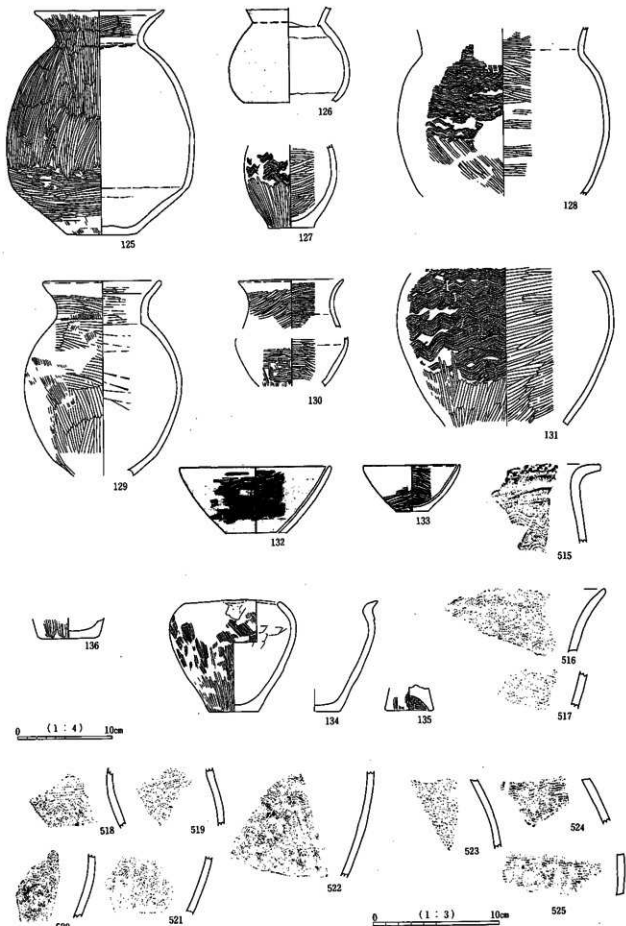
第195図 東側低地出土弥生・古墳時代の土器 1
 S D 3004中・上層 (84~99・497・498) ㊸・㊹区 8'層 (100~102)
 S D 3003・S D 3004交点下層 (103~105)



第196図 東側低地出土弥生・古墳時代の土器 2

SD3003下層 (106~112・499~507) SD3002最下層 (113・508~513)

SD3002砂・礫層 (114~124・514)

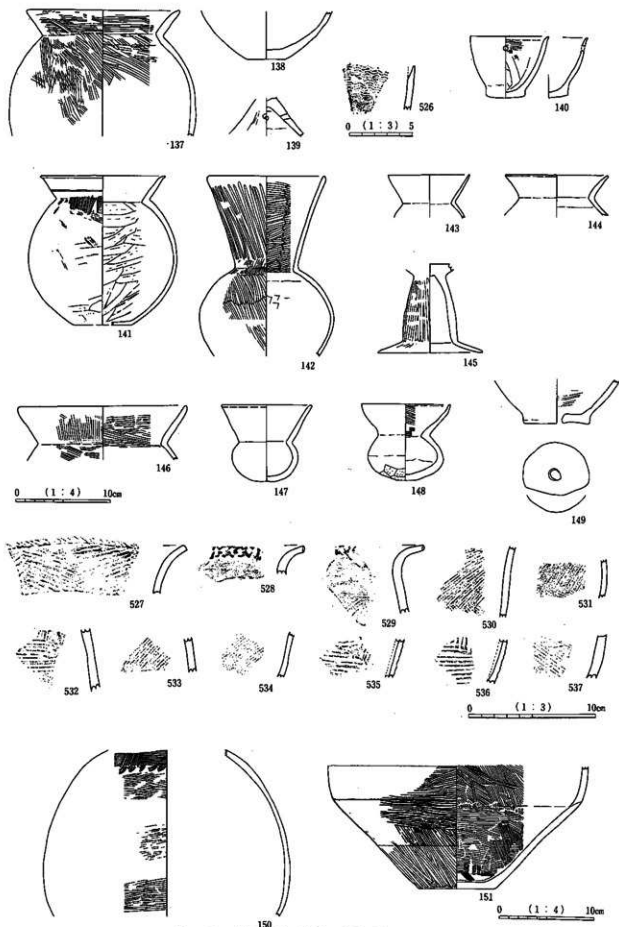


第197図 東側低地出土弥生・古墳時代の土器 3

SD4006 (125~128) SA4002 (129・132・133・515)

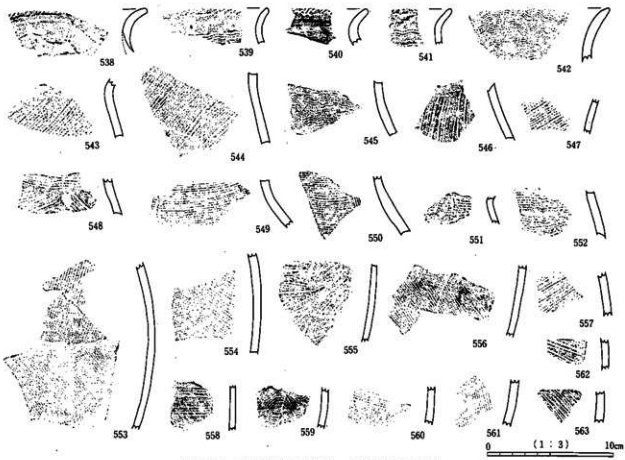
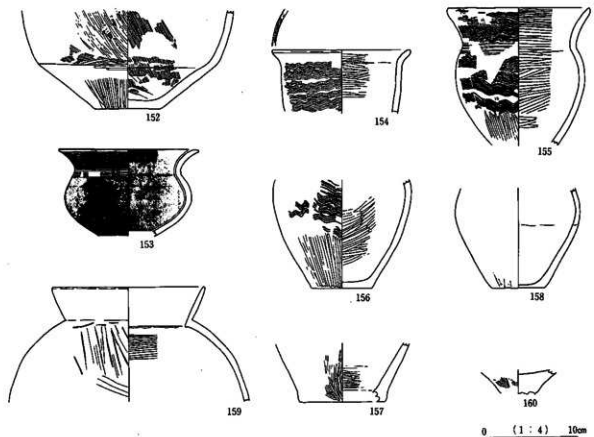
SA4008 (130・131) SA4011 (134・135・516・517)

SA3530 I (136) SA4006 (518~522) SD3502 (523~525)



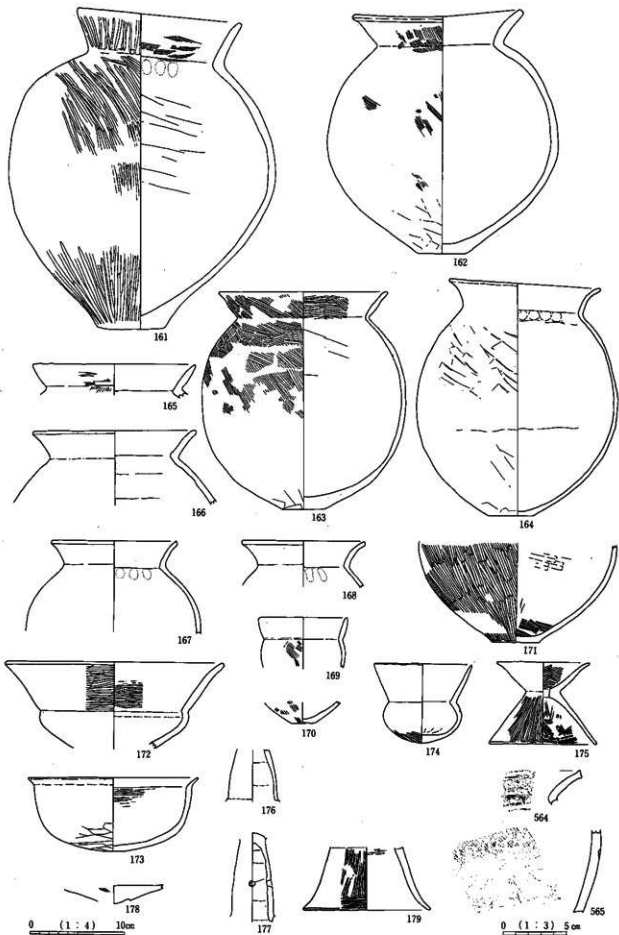
第198図 東側低地出土弥生・古墳時代の土器 4

SD3012 (137~140・526) SD4005 (141・142) SA3514 (143~145)
 SA4001 (146) SD3005 (147) SA3101 (148) SC3505 (149) ①区16層 (150・530・531・534)
 ⑬区26-1層 (151) ⑬・⑭区10層下部~11層 (527~529・532・533・537) SX4100 (535・536)



第199図 東側低地出土弥生・古墳時代の土器 5

- ㊦区26-1層 (152・549) ㊦区16層~17層 (153・155・156・159・542・547) ㊦区9 C~11層 (154・157・552・553)
- ㊦-2区13層 (158・548・558) ㊦区14層 (160) S X 4100 (538~541・544~546・554・556・560・561・563)
- ㊦・㊦区10層 (543・550・557・562) ㊦-1区10層 (551・555・559)



第200図 東圃低地出土弥生・古墳時代の土器 6

①区14・15層 (161・178) ②・③区9層 (162・165~168・565) ④-3区SD3013 (163・164・171)
 ⑤-3区11層水田 (169・170・174・175) ⑥区11~13層内 (172・173) ⑦-1区8層内 (176・177)
 SD4006 (179) ⑧区9C層 (564)

第20表 東低地出土弥生・古墳土器類表Ⅱ

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存色	色調	胎土	外面	内面	備考・出土遺構地点
1	甕	34.8			1/3	D E	㊸	ナデツケ磨製鉄文(5本)→ミガキ(底面)→ナデ(口縁部)→赤彩	ハケ→ナデツケ→ミガキ(口縁部)	内面底、外面胴部 ㊸ 多量の炭化スス付着 SC3523
2	甕	25.0	9.2	26.6	1/2	D	㊸	流状文→ミガキ(胴部下半)→ナデ(口縁部)鉄文(口縁部)	ナデツケ(胴部下半)→ハケ→ミガキ→ナデ(口縁部)	外面胴部中央、 内面胴部下半炭化 ㊸ S D 4004 S A 4002 S A 4007
3	甕		10.4		胴部下半2/3	D	㊸	ハケ→部分的にミガキ摩滅	摩滅	内面輪痕 ㊸ S A 3530 I
4	甕	17.8	7.2	17.8	完存	D	㊸	ハケ→ミガキ(縦位)→ナデ→磨製鉄文(4×2本)→高文(表上)(口縁部、口縁部)	ハケ→ミガキ(縦位)	炭化物付着 ㊸ S C 4014 (116層)
5	壺	18.8			1/2	C	㊸	ハケ→磨製鉄文(9×10本3段)→ナデ(口縁部)	ハケ→ミガキ(縦位)→ナデ(口縁部)	内面赤彩か? ㊸ ㊸ S D 3004下層 S C 3523
6	壺	25.1	7.2	41.7	ほぼ完存	A	㊸	磨製鉄文(10本4段)→T字文(10本)→高文(10本)→ミガキ(縦位、縦位)→磨製鉄文(10本)	ハケ→ミガキ(縦位口縁部)→赤彩(口縁部)摩滅	胴部18cmヘリ部(口縁部)に赤彩(口縁部)付着 T字文(10本)は、高文(10本)口縁部部による炭化と見られる ㊸ ㊸ S D 3004下層
7	壺		9.3		胴部下半	C	㊸	ハケ→ミガキ(縦位)ナデ(底面)	ナデツケ	黒斑 ㊸ S D 3004下層
8	壺	24.4			口縁部	A	㊸	ナデツケ→ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	㊸ S D 3004下層
9	壺	23.5			口縁部	A F	㊸	ミガキ(縦位)→ナデ→赤彩	ミガキ(縦位)→ナデ→赤彩	㊸ S D 3004下層
10	壺	19.0			口縁部	A	㊸	赤彩? 摩滅	赤彩 摩滅	㊸ S D 3004
11	壺				胴部	E F	㊸	T字文→ミガキ(縦位斜位)→赤彩	ハケ→ナデ	胴中央部下の輪状赤彩(口縁部)と赤彩(口縁部)より同一製法とした ㊸ S D 3004下層
12	壺		7.4		底部	C	㊸	ハケ→ミガキ(縦位)→赤彩	ナデツケ→ハケ	底部黒斑 ㊸ S D 3004
13	壺		11.0		底部	D E	㊸	ミガキ(斜位)→赤彩	ナデツケ→ハケ(斜位)摩滅	㊸ S D 3004下層
14	広口壺	13.9			口縁部	A	㊸	ミガキ(縦位)→ナデ(口縁部)→赤彩	ミガキ→赤彩(口縁部)摩滅	黒斑 ㊸ S D 3004下層
15	広口壺				頸部	A	㊸	ミガキ(縦位)→磨製鉄文(12本)→赤彩	ミガキ(縦位斜位)赤彩	㊸ S D 3004下層
16	鉢		6.1		底部	A	㊸	ナデツケ→赤彩	ナデツケ→赤彩	底部に椀状痕 ㊸ S D 3004下層
17	壺	8.6			口縁部	E	㊸	ミガキ→ナデ(口縁部)磨製鉄文(4本)	ミガキ	北陸系 ㊸ S D 3004中層
18	甕	16.6			頸部	A D	㊸	ナデツケ→流状文(4本)→ナデ(口縁部) 磨文(口縁部)	ナデツケ→ハケ	内面口縁部と外面炭化物付着 内面輪痕 ㊸ S D 3004下層
19	甕		7.8		胴部下半	D E	㊸	ミガキ 摩滅	ハケ→ミガキ	外周炭化物付着 ㊸ S D 3004下層
20	甕	17.7	6.9	22.9	ほぼ完存	D	㊸	流状文→磨製鉄文(8本3段止)→ミガキ(縦位)→ナデ(口縁部)	ミガキ(縦位斜位)	炭化物付着 口縁部 ㊸ 面取り強いナデ S D 3004
21	甕	20.0			底部欠損	D	㊸	ハケ→磨製鉄文(12本5段止)→流状文→ミガキ(縦位、胴部下半)→ナデ(口縁部)	ナデ→ハケ→ミガキ(縦位、口縁部)	㊸ S D 3004下層
22	甕	15.2			口縁部	D	㊸	ナデ→磨製鉄文(8本)→流状文	ハケ→ミガキ(縦位)→ナデ	㊸ S D 3004下層
23	甕	16.6			口縁部	E	㊸	流状文→磨製鉄文→ナデ(口縁部)	ナデ	㊸ S D 3004
24	甕		7.8		口縁部欠損	D	㊸	ミガキ(縦位斜位)→流状文→磨製鉄文	ミガキ(縦位)	スス付着 ㊸ S D 3004下層
25	壺				胴部	D	㊸	流状文→磨製鉄文(13本3段止)	ナデツケ→ミガキ(縦位)	㊸ S D 3004下層
26	甕		5.0	12.3	1/2	A	㊸	磨製鉄文(2層?)→流状文→ミガキ(縦位斜位)→ナデ(口縁部)	ナデツケ→ミガキ(縦位)→ナデ(口縁部)	内面ベンガラ炭化物付着 ㊸ S D 3004下層
27	甕		7.4		底部	D	㊸	ミガキ(縦位) ミガキ(底面)	ナデツケ	炭化物付着 ㊸ S D 3004下層
28	甕		5.0		底部完存	D E	㊸	ハケ→ミガキ	ミガキ(強いナデ)	㊸ S D 3004下層

第29図 東部低地出土弥生・古墳土器類表II

遺物No	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
29	甕		6.4		底部	E	㊸	ハケ(斜位)→ミガキ(縦位)	ミガキ(斜位) ミガキ(底面)	㊸ SD3004I下層
30	甕		7.4		底部	D E	㊸	ミガキ(横位縦位)	ミガキ(斜位)	㊸ SD3004I下層
31	台付甕	12.6			脚部欠損 ほぼ 完存	D E	㊸	ハケ→横位文(1層止) め)→ミガキ(縦位縦位)→ナデ	ミガキ(横位)→ナ デツケ	外面上段内面全面 に炭化粉付着 ㊸ SD3004下層
32	台付甕	13.5			脚部 欠損	E	㊸	ハケ→横位文(9本)→横位文 (2層止)→ミガキ(斜位)→ ナデ(口縁端)	ミガキ→ナデ(口縁端)	口縁部取り 炭化粉 付着 ㊸ SD3004下層
33	台付甕	12.0			脚部 ほぼ 完存	D	㊸	横位文→横位文→ミガキ(縦位 縦位)→ナデ(口縁端)	ミガキ(縦位斜位)→ナデ (口縁端)	㊸ SD3004下層
34	高杯	28.3			杯部 完存	A	㊸	ミガキ→(縦位縦位)→ナ デ(口縁端)→赤彩 摩滅	ナデツケ→ミガキ(縦位斜 位)→ナデ(口縁端)→赤彩	㊸ SD3004下層
35	高杯	28.5			脚端部 欠損	A	㊸	ハケ→ミガキ(縦位斜位)→赤彩 脚部)→ナデ(口縁端)→赤彩	ミガキ(縦位斜位杯部)→ 赤彩 ハケ(脚部)	口縁端面取り ㊸ SD3004下層
36	高杯	16.2			杯部 ほぼ 完存	A	㊸	ミガキ(縦位斜位)→ナ デ(口縁端)→赤彩	ミガキ(縦位斜位)→ ナデ(口縁端)→赤彩	口縁部円孔2ヶ 所 内面穿孔 炭化 SD3004I下層
37	高杯	12.4			杯部 3/4	A	㊸	ミガキ(縦位斜位)→ナ デ(口縁端)→赤彩	ミガキ(縦位斜位)→ナ デ(口縁端)→赤彩(杯部)	外面口縁部炭化 ㊸ SD3004I下層
38	鉢	11.6			口縁部	A	㊸	ミガキ(縦位縦位)→ナ デ(口縁端)→赤彩	ミガキ(横位)→ナデ(口 縁端)→赤彩	㊸ SD3004下層
39	高杯	15.7	13.4	10.5	3/4	A	㊸	ミガキ(斜位縦位縦位)→ ナデ(口縁端)→赤彩	ミガキ(斜位縦位)→ナデ(口縁端) →ナデツケ(脚部)→赤彩(杯部)	結合部への割欠 脚 部円孔3ヶ所・2段 底 ㊸ S D3004
40	高杯	13.8	10.3	9.4	4/5	A	㊸	ミガキ(横位縦位)→ナ デ	ミガキ(横位)→ナデ→ナ デツケ(横底が多数残る)	円孔3単位4ヶ所 内面 未確認の穿孔あり ㊸ S D3004
41	広口壺 高杯	15.4			口縁部 1/4	E F	㊸	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	㊸ SD3004I下層
42	高杯				杯部	D	㊸	ミガキ(横位斜位)→ 赤彩	赤彩 摩滅	㊸ S D3004
43	高杯	17.8			杯部 ほぼ 完存	A	㊸	ミガキ(縦位斜位)→ナ デ(口縁端)→赤彩	ミガキ(縦位斜位)→ナ デ(口縁端)→赤彩	口縁部黒斑 ㊸ S D3004
44	鉢	16.7			口縁部	A	㊸	ミガキ(横位)→ナデ(口縁 端)→赤彩 摩滅	ミガキ(横位)→ナデ(口縁 端)→赤彩	㊸ S D3004 下層砂層
45	鉢	16.4			1/4	A F	㊸	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	㊸ SD3004I下層
46	高杯		14.2		脚部	C	㊸	ミガキ(横位)→ナデ(口縁 端)→赤彩	ナデツケ 赤彩部分的 に残る	三角孔4ヶ所 ㊸ SD3004I下層
47	高杯		11.8		脚部	A	㊸	ミガキ(縦位縦位)→ 赤彩	ミガキ(横位)→赤彩	㊸ SD3004I下層
48	鉢	20.6	5.6	9.8	2/3	A	㊸	ミガキ(縦位斜位)→ナデ(口縁 端)→赤彩(口縁底面)	ミガキ(縦位斜位)→ナ デ(口縁端)→赤彩	黒斑1ヶ所 ㊸ SD3004I下層
49	鉢	18.0	4.8	7.2	ほぼ 完存	A	㊸	ミガキ(脚部)→ナデ(口縁 端)ミガキ(底面)	ミガキ	㊸ S D3004 下層
50	鉢	16.0	4.2	6.5	ほぼ 完存	D	㊸	ミガキ(斜位縦位)→ナデ(口 縁端)→赤彩	ミガキ(縦位斜位)→ナデ(口 縁端)→赤彩	至あり ㊸ SD3004I下層
51	鉢	13.9	4.1	6.8	ほぼ 完存	A	㊸	ナデツケ→ハケ→ナデ(口縁 端)→赤彩	ミガキ(斜位縦位)→ナデ(口 縁端)→赤彩	㊸ S D3004 下層
52	鉢	14.0			1/5	F A	㊸	ミガキ(斜位)→赤彩	ミガキ(横位)→赤彩	㊸ SD3004I下層
53	鉢	11.8			口縁部 1/4	A	㊸	ミガキ(横位)→ナデ(口縁 端)→赤彩	ミガキ(横位)→ナデ (口縁端)→赤彩	㊸ SD3004下層砂
54	鉢	11.0			口縁部	D E	㊸	ミガキ(横位)→ナデ(口縁 端)→赤彩	ミガキ(横位)→ナデ(口縁 端)→赤彩(口縁端)	㊸ SD3004I下層
55	鉢	9.8	3.0	4.7	1/2	A	㊸	ナデツケ(脚部)→ナデ (口縁端)	ナデツケ→ナデ(口縁 端)	黒斑1ヶ所 ㊸ SD3004I中層
56	鉢		4.4		1/5	A B	㊸	ミガキ(斜位)→赤彩 摩滅	赤彩 摩滅	㊸ SD3004I下層

第20表 東側低地出土土器・古墳土器類概観Ⅱ

遺物No	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
57	鉢		5.0		底部	A	⑧	ミガキ(斜位)→赤彩	ミガキ(横位)→赤彩	⑩SD3004 大溝底砂層
58	壺	19.6	6.0	31.3	ほぼ 完存	A	⑩	ミガキ(縦位)→ナデ	ナデツケ→ハケ→ナデ	黒斑1ヶ所 ⑩SD3004 II上層
59	壺		7.6	31.2	2/3	C	⑩	ミガキ(摩滅)→ナデ(口縁端)	ナデ(口縁端)摩滅	黒斑1ヶ所 ⑩SD3004 中層
60	甕	12.3	6.0	20.0	ほぼ 完存	A	⑩	ナデツケ→ハケ(底部) →ナデ	ナデツケ→ナデ 指頸 圧痕	黒斑1ヶ所 ⑩SD3004 上層SD3012
61	壺	11.0			口縁部 胴部	A	⑩	ミガキ(横位縦位)→ナ デ(口縁端)	ナデツケ→ミガキ(横位口縁 部)→ナデ(口縁端) 指頸圧痕	⑩SD3004II SA3104
62	壺	16.0			口縁部	A	⑩	ハケ→ミガキ(縦位)粗雑 →ナデ	ハケ→ナデ	⑩ SD3004中層
63	壺	11.3			口縁部 胴部 上半	BD	⑩	ミガキ(縦位)→ナデ(口 縁端)	ナデツケ→ミガキ(横位) →ナデ	口縁端面取り ⑩SD3004 上層
64	壺				胴部 1/4	AD	⑩	ハケ→粗雑なミガキ	ナデ	⑩SD3012 上層
65	壺		6.0		胴部下 半	A	⑩	ミガキ(斜位) 一部摩滅	ナデツケ→ハケ(底部)	黒斑1ヶ所 ⑩ SD3004II上層
66	壺		6.1		底部	A	⑩	ハケ→ミガキ 摩滅 底部ド ーナツ状上げ底	ハケ 摩滅	黒斑1ヶ所 内面輪痕 ⑩SD3004I上層
67	甕				胴部下 半1/3	DA	⑩	ミガキ	ミガキ 摩滅	⑩SD3004 上層
68	甕		6.8		底部	DB	⑩	ミガキ	ナデツケ	スス付着 底面磨 斥痕 ⑩SD3004 上層
69	壺		3.6		口縁部 欠損	A	⑩	ミガキ 底部ドーナツ状上 げ底	ナデツケ→ミガキ(胴部)	炭化物付着 内面輪痕 ⑩SD3004
70	壺		3.0		1/4	D	⑩	ハケ	ナデツケ→ミガキ(横位斜 位)	炭化物付着 ⑩SD3004
71	壺		3.0		底部	B	⑩	ミガキ(斜位)	ナデツケ	⑩ SD3004下層
72	甕	17.4	6.4	29.2	1/3	ED	⑩	ハケ(縦位横位)→ナデ 口縁 強いナデ	ハケ→ナデ 口縁強い ナデ	内面炭化物付着 外 面下半黒く紫色 ⑩SD3004下層
73	甕	11.5	5.4	25.2	2/3	AD	⑩	ナデツケ(ハケナデツ ケ)	ナデツケ	外表面スス付着 内面輪痕 ⑩SD3004II上層
74	甕	16.6		22.0	2/3	D	⑩	ハケ→ナデ	ナデツケ→ミガキ(横位斜位) →ナデ(口縁端)	⑩ SD3004II土
75	甕	15.3			1/3	B	⑩	ハケ→部分的なナデ (口縁部)	ナデ	外面黒斑 ⑩SD3004II土
76	甕	12.2		19.2	ほぼ 完存	BD	⑩	ナデツケ→線状痕 ミガキ ? 摩滅	ナデツケ→ナデ	器形の歪み大きい 輪痕 ⑩SD3004II土
77	甕	16.5		1/6	DA	⑩	ナデツケ→ハケ→ナデ (口縁部)	ナデツケ→ハケ→ナデ(口縁 部) 指頸圧痕	ナデツケ炭化物 付着 ⑩SD3004上層	
78	甕	14.9		1/3	BD	⑩	ハケ→ナデ	ナデツケ→ハケ→ナデ	炭化物付着 ⑩SD3004	
79	甕	17.0		1/2	A	⑩	ナデツケ→ハケ→ナデ(口縁 端) 摩滅	ナデ(口縁端) 摩滅	頸部強い縦ハケ 黒底3ヶ所 ⑩SD3004 上層	
80	甕	16.2			口縁部 1/4	D	⑩	ナデ	ナデ(口縁端) ケズリ (胴部)	⑩SD3004
81	甕				胴部 1/2	D	⑩	ハツ工具によるナデツケ ハケの 単位が不明	ハケ工具によるナデ ケズリ	スス炭化物付着 著しい ⑩SD3004 交点下層
82	甕	12.6		15.5	ほぼ 完存	BD	⑩	ナデツケ→ハケ→ナデ	ナデツケ→ハケ	外面炭化スス付着 外 面黒熱による剥落あり ⑩SD3004I上層
83	甕	11.7		2/3	B	⑩	ハケ→ナデ	ナデツケ→ケズリ(胴部下 半)→ナデ	⑩SD3004 中層	
84	甕	14.4		1/6	D	⑩	ナデツケ→ナデ(口縁 端)	ハケ→ナデツケ→ミガキ(口 縁部)→ナデ(口縁端)	炭化物付着 ⑩SD3004	

第20表 東側低地出土弥生・古墳土器類概表 II

遺物No	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	粘土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
85	甕	11.2			底部欠損	D	㊸	ナデツケ(胴部)→ハケ(胴部)→ナデ(底部口縁端)	ナデツケ→ミガキ(胴部)→ナデ	炭化スス全面付着 ⑬SD3004 中層
86-1	古付き 甕	14.0			口縁部	C	㊸	ハケ(斜位横位)	ナデ	S字状口縁 ⑬SD3004 I 中層
86-2	古付き 甕	7.3			脚部	C	㊸	ナデツケ→ハケ	ナデツケ 絞り痕 折り返し(底部)	84と同一個体か ⑬SD3004 II 下層
87	甕	5.0			底部	D	㊸	ハケ(縦位)	ナデツケ→ミガキ(横位斜位)	内面炭化物付着 ⑬SD3004 上層
88	甕	5.4			底部	D	㊸	ナデツケ→ケズリ	強いナデツケ	⑬SD3004 下層
89	甕	5.4			底部	C	㊸	ハケ ハケ(底面)	ナデツケ	⑬SD3004
90	甕	4.4			底部	D	㊸	強いハケナデツケ ハケ(底面)	ナデツケ	炭化物付着 ⑬SD3004 中層
91	甕	8.7	3.6	10.6	光存	D	㊸	ナデツケ→ミガキ(胴部)→ナデ(口縁部)	ミガキ(横位斜位)→ナデ(胴部)	内外面全面炭化物付着 ⑬SD3004 下層
92	小型壺	(残部) 4.5			口縁部欠損ほぼ光存	B	㊸	ナデツケ→ミガキ(横位斜位縦位)ミガキ(底面)	ナデツケ→ハケ	外面黒斑 2ヶ所 内面輪積痕 ⑬SD3004 中層
93	高杯	17.5			杯部	B	㊸	ミガキ?(斜位) 摩滅	ミガキ?(横位) 摩滅	⑬SD3004
94	高杯	16.2			杯部2/3	D	㊸	ミガキ(斜位)→ナデ(口縁端)	ミガキ(斜位)→ナデ(口縁端)	⑬SD3004 上層
95	小型 高杯				破片	BD	㊸	ハケ	ミガキ	⑬SD3004
96	高杯				脚部	A	㊸	ミガキ 摩滅	絞り痕	内面輪積痕 ⑬SD3005 土手内
97	鉢	14.9			杯部1/4	DE	㊸	ミガキ(横位斜位)→ナデ(口縁端)	ミガキ(横位縦位)→ナデ(口縁端)	外面黒斑 ⑬SD3004 上層
98	小型 丸底	10.0	9.2		光存	A	㊸	ナデ 底部弱いケズリ	ナデ ミガキ(底部)	⑬SD3004 II 上層
99	小型 丸底	8.8	8.5	1/3		A	㊸	ナデツケ 部分的にハケを残す	ナデツケ→ミガキ 横位	黒斑 内面輪積痕 ⑬SD3004 II 上層
100	鉢	12.8	8.2		ほぼ 光存	D	㊸	ミガキ(横位)→ナデ(口縁部 胴部) 摩滅	ナデ 摩滅	重み ⑬10層水田
101	鉢	12.4	8.8		ほぼ 光存	D	㊸	ハケ→ミガキ(横位)→ナデ(口縁部 胴部)	ナデ	内面輪積痕 ⑬10層水田
102	鉢	12.0	9.6		ほぼ 光存	D	㊸	ハケ→ミガキ→ナデ(口縁部)	ナデツケ	炭化物付着 内面輪積痕 ⑬10層
103	高杯	18.0			胴部 先端欠損 ほぼ光存	C	㊸	ミガキ(横位斜位縦位)→ナデ(口縁端)→赤彩	ミガキ(横位斜位縦部)→ナデ(口縁端)→赤彩 ハケ(脚部)→ナデ	三角孔4ヶ所 口縁端三角突起2ヶ所 ⑬SD3003
104	甕	18.4	6.6	25.6	ほぼ 光存	D	㊸	ミガキ→墨文(口本2重止め、1重止め)→底紋文→ナデ(口縁端)	ナデツケ→ハケ→ミガキ	胴部底部に炭化物付着 ⑬SD3003
105	広口壺	4.8			底部	E	㊸	ミガキ→赤彩 ミガキ(底面)	ミガキ→赤彩	⑬SD3004 SD3003交点
106	壺	12.6			3/4	A	㊸	ミガキ(斜位横位)→ナデ(口縁端)	ナデツケ→ミガキ(横位)→ナデ(口縁端)	黒斑3ヶ所 ⑬SD3004 SD3003
107	壺	16.7			口縁部1/2	A E	㊸	ハケ→ミガキ(縦位)→ナデ(口縁端)	ミガキ(横位)→ナデ(口縁端)	⑬SD3003 砂
108	壺		6.4		口縁部欠損	BD	㊸	ハケ→ミガキ(斜位)	ナデツケ ハケノを残す	黒斑 11-1 SD3003, SD3003交点
109	壺				胴部 下半	A E	㊸	ミガキ(細い斜位横位)	ミガキ(斜位横位)	№105と同一個体か ⑬SD3003
110	鉢	9.3	3.4	8.6	ほぼ 光存	A	㊸	ハケ→ナデ(ケズリ)の様な強いナデ	ハケ→ナデ	黒斑 ⑬SD3003 交点
111	鉢	21.0			1/5	C	㊸	ミガキ(横位)→ナデ(口縁端)	ミガキ(横位)→ナデ(口縁端)	⑬SD3003

第29表 東側低地出土弥生・古墳遺構Ⅱ

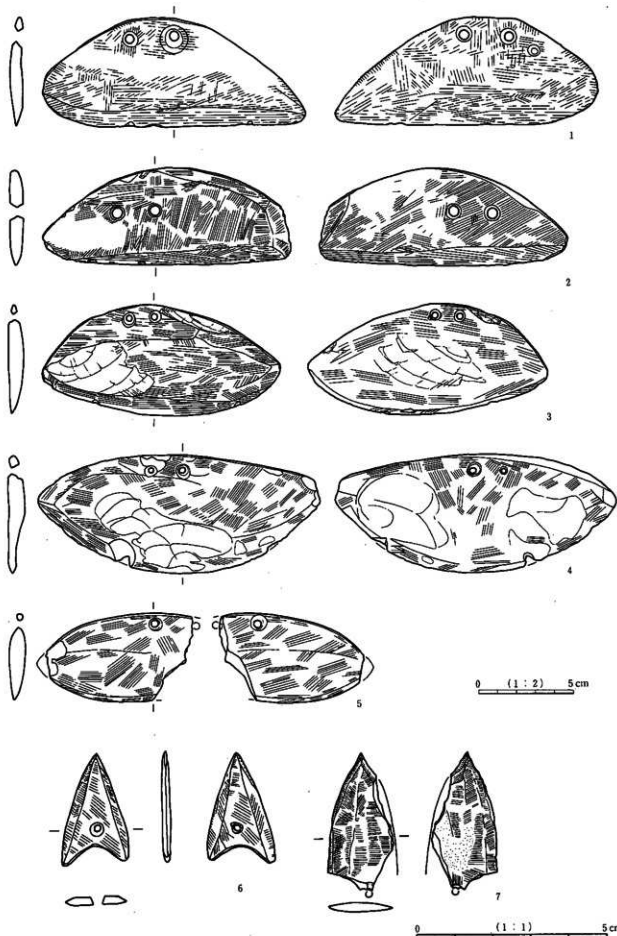
遺物№	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
112	鉢		4.0		底部	ED	①	ナデ 指頭圧痕 ツマリ上げ 變形あり	ナデ	手取の可能性もあり ①SD3003 SD3004 東峰塚土
113	甕		8.0		1/5	D	①	ミガキ(斜位)→波状文 (7本)→列点文	ミガキ 摩滅	スス付着 外面輪稜痕 ①SD3002 下層
114	甕				頸部 1/8	A	③	ナデ(横位) 摩滅	ナデ(横位) 摩滅	①SD3002 前半
115	高杯				接合部	A	③	ハケ	紋り痕 摩滅	①SD3002
116	高杯				杯部	D	③	ミガキ? 摩滅	摩滅	①SD3002
117	高杯				杯部	A	③	摩滅	ミガキ(横位)	①SD3002
118	高杯				脚部	B	③	ミガキ(縦位) 摩滅	紋り痕 摩滅	①SD3002
119	高杯				接合部	A	③	摩滅	ミガキ 指頭圧痕(脚部) 黒色	① SD3002
120	高杯				接合部	A	③	摩滅	摩滅	① SD3002
121	台付き 甕				接合部	E	③	ハケ 摩滅	摩滅	① SD3002
122	鉢	15.0	6.4		口縁部 1/9	C	/	摩滅	ヘラミガキ→黒色処理	① 後半SD3002
123	埴輪か		11.0		破片	A	③	ナデ	ハケ→ナデ	①SD3002
124	須恵器 坏蓋	12.0			口縁部 1/12	C	/	回転ナデ	回転ナデ	①2SD3002 前半
125	甕	13.6	7.6	23.4	ほぼ 完存	C	③	ハケ(斜位・縦位)→ミガキ(縦位) 脚部口縁部(脚部下半)→ナデ(口 縁部)	ナデツケ→ナデ(口縁 部)	①SD4006
126	甕				1/5	E	③	赤彩 摩滅	ナデツケ 摩滅	内面輪稜痕 ①SD4006
127	甕		4.8		胴部	DE	③	波状文(6~7本)→ミガキ (縦位)	ミガキ(横位斜位)	炭化物付着 ①SD4006
128	甕				1/6	DE	③	波状文→層状文(8本3重止 め)→ミガキ(斜位)	ミガキ(横位)	炭化スス付着 ①SD4006
129	甕	12.6			底部 欠損	D	③	ハケ→ミガキ(縦位斜位) →ナデ(口縁部)	ナデツケ→ミガキ(口縁部) →ナデ(口縁部)	外面炭化付着による ものが黒色 ①SA4002
130	小型 甕	11.2			口縁部 胴下半	D	③	ミガキ(斜位)→ナデ(口 縁部)	ミガキ(横位)→ナデ(口 縁部)	外面スス付着 ①SA4002
131	甕				1/3	D	③	波状文(8本)→ミガキ (斜位)	ミガキ(斜位横位)	外面全面内面一部 に炭化物付着 ①SA4002
132	鉢	16.0			口縁部	FA	③	ミガキ→ナデ→赤彩 摩滅	ミガキ→ナデ→赤彩 摩滅	①SA4002
133	鉢	10.4	3.6	4.8	1/4	C	③	ミガキ(斜位)→ナデ(口縁 部)→赤彩 ミガキ(底面)	ミガキ(斜位横位)→ナデ →赤彩	底部付近黒斑 ①SA4002
134	片口鉢	10.2	5.2	11.8	3/4	DE	③	ハケ→ナデ→ミガキ (縦位)	ナデツケ→ナデ(口縁 部)	黒斑1ヶ所 ①SA4011
135	高杯		5.1		脚部	C	③	ハケ ハケ(脚部底面)	ハケ	黒斑 ①SA4011
136	甕		6.4		底部	DA	③	ミガキ(縦位)	ナデ 摩滅	内外とも黒色に紫色 ①SA3530
137	甕	16.2			1/2	D	③	ハケ→部分的なナデ(口 縁部)	ナデツケ→ハケ→部分的な ナデ(口縁部)	炭化スス付着 ①SD3012
138	甕	4.0			底部1/2	DA	③	ナデ	摩滅	外面炭化スス付着 ①SD3012
139	高杯				脚部	A	③	摩滅	摩滅	穿孔2ヶ所(4孔か) ① SD3012

第20表 東側低地出土弥生・古墳土器類表II

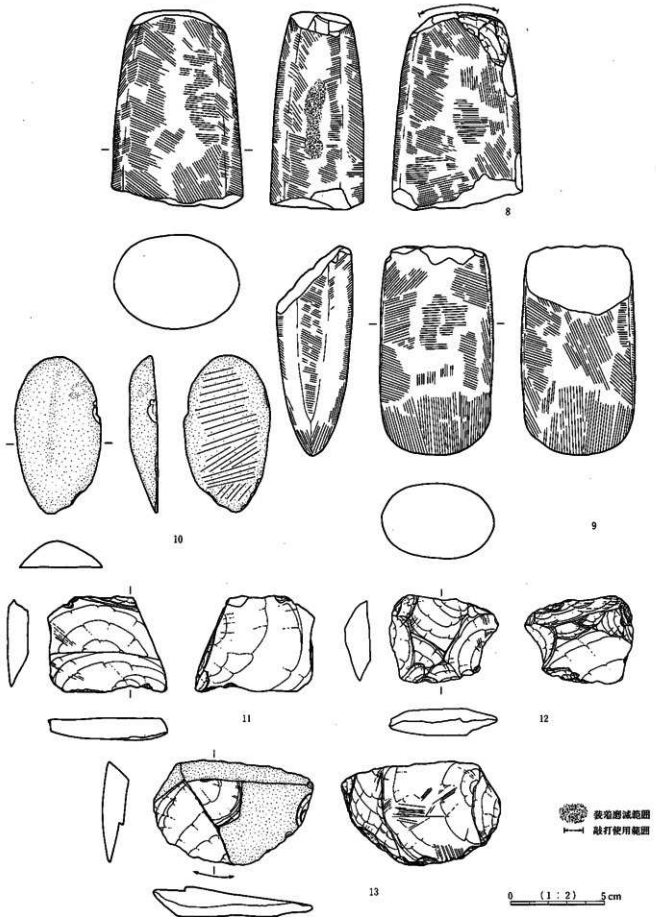
遺物No	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
140	鉢	8.3	4.1	6.5	ほぼ 完存	B	⑧	ナデツケ 器面の凹凸 あり	ヘラ糸織→ハケ→ミガキ 摩滅	穿孔1ヶ所 ⑩SD3012
141	甕	13.2	6.1	15.6	ほぼ 完存	DF	②	ナデツケ→ハケ→ナデ→炭 黒(2本)	ナデツケ→ズリ→ナデ(口 縁部)→ナデ(口縁端)	内外面炭化物付着 ⑩SD4005
142	直立口 線壺	12.4			2/3	A	⑧	ハケ→ミガキ(縦位斜位)→ ナデ(口縁端)	ナデツケ→ミガキ(横位口縁 部)→ナデ(口縁端)	黒斑 内面輪積痕 ⑩SD4005
143	小型 丸底	8.6			口縁部	B	⑧	摩滅	摩滅	内外面黒斑 ⑩SA3514
144	甕	10.8			口縁部	B	⑧	ナデ(口縁部) 摩滅	摩滅	口縁部炭化物 付着、内面輪積痕 ⑩SA3514
145	高杯		11.0		胴部	B	⑧	ミガキ(縦位) 摩滅	摩滅	⑩SA3514
146	甕	17.4			口縁部 1/5	DE	⑧	ハケ→ナデ(口縁端)	ハケ→ナデ(口縁端、胴 部)	⑩SA4001
147	小型 丸底	9.6			ほぼ 完存	AB	⑩	ナデ	ナデ	底面面取り ⑩SD3005
148	小型 丸底	9.4	1.6		ほぼ 完存	A	⑧	ナデツケ→ズリ(下部) 強 いナデ	ナデツケ→ハケ(口縁部)→ ミガキ(口縁部)→ナデ(口縁端)	⑩SD3012
149	有孔鉢		6.8		底部	D	⑧	ナデツケ 摩滅	ハケ 摩滅	炭化スズ付着 穿孔 径1.0cm ⑩SA3105
150	壺			胴部 1/5		AD	⑧	縞帯横線文→丁字文→1/4 円風文→ミガキ 摩滅	摩滅	⑩SD3004
151	壺		8.2		底部	A	⑧	ハケ→ミガキ(横位)→赤形 →ミガキ(縦位) ミガキ(底面)	ハケ(斜位横位)	底部内面に赤色顔 料付着 黒斑 ⑩26層面
152	壺		7.0		底部	D	⑧	ハケ→ミガキ(縦位横 位)	ハケ(縦位斜位)	内外面炭化物付着 ⑩26層面
153	高杯	14.8			杯縁 ほぼ 完存	DC	⑧	縞帯横線文(3本・5本)→ミ ガキ(横位斜位)→ナデ→赤形 摩滅	ミガキ(横位)→赤形 摩滅	⑩-1 17層
154	甕	14.6			1/4	D	⑧	波状文(4本)→ナデ→横文 (口縁端)	ミガキ	内外とも黒色スズ 付着 ⑩11b層 上部
155	甕	14.8			3/5	A	⑧	ハケ→波状文(5本)→波状 文→ナデ(口縁端)	ミガキ(横位)→ナデ(口 縁端)	器形の歪み ⑩-1 16層
156	甕		6.4		1/2	AD	⑧	ハケ→波状文→ミガキ ミガキ(底面)	ミガキ 摩滅	内面黒色に白色 ⑩-1 16層
157	甕		9.0		底部	AE	⑧	ミガキ(縦位) 摩滅	ミガキ(横位) 摩滅	⑩11b層
158	壺		5.6		底部	CD	⑩	ナデ 底部よりケズリ状 のナデ	ナデ 摩滅	⑩-1 10層上部
159	甕	16.1			1/4	E	⑧	ハケ(ナデツケに近い)→ ナデ	ナデツケ→ミガキ(横位)→ ナデ(口縁部)	⑩-1 16層 (SD3005土 手部分)
160	高杯				杯部	E	⑧	ハケ 摩滅	ミガキ?	⑩11層
161	甕	17.0	7.0	33.0	ほぼ 完存	DE	⑧	ナデツケ→ミガキ(縦位・口縁 部風車斜位・胴部)→ナデ(口縁 端)	ヘラナデツケ→指頭 圧痕	外面胴部全面炭化 黒斑1ヶ所 ⑩-1 14・15層
162	甕	17.9	5.0	25.5	完存	B	⑧	ハケ→ミガキ?→ナデ(口縁 部、口縁端) 摩滅	ナデツケ→ナデ(口縁 部)	⑩ 9層
163	甕	17.7	4.3	22.8	2/3	D	⑧	ナデツケ→ハケ→ナデ(口縁 端) ケズリ(底部)	ナデツケ→ハケ(口縁部)→ ナデ(口縁端)	内外面炭化物付着 ⑩-3 11層面
164	甕	15.9	4.5	24.8	ほぼ 完存	AD	⑧	ナデツケ→ナデ	ナデツケ→ナデ 指頭圧 痕(胴部)	内外面炭化物付着 ⑩-3 11層面
165	甕	17.0			口縁部 1/5	AE	⑧	ハケ→ナデ	ナデ	⑩ 9層中
166	甕	17.0			1/2	AD	⑧	ナデ(横位・口縁部) 摩滅	接合痕 摩滅	⑩ 9層面
167	甕	12.8			胴部上 半1/2	D	⑧	ナデ 口縁端強いナデ面 取り 摩滅	ナデ 指頭圧痕 摩滅	⑩ 9層面

第20表 東側低地出土弥生・古墳土器類續表Ⅱ

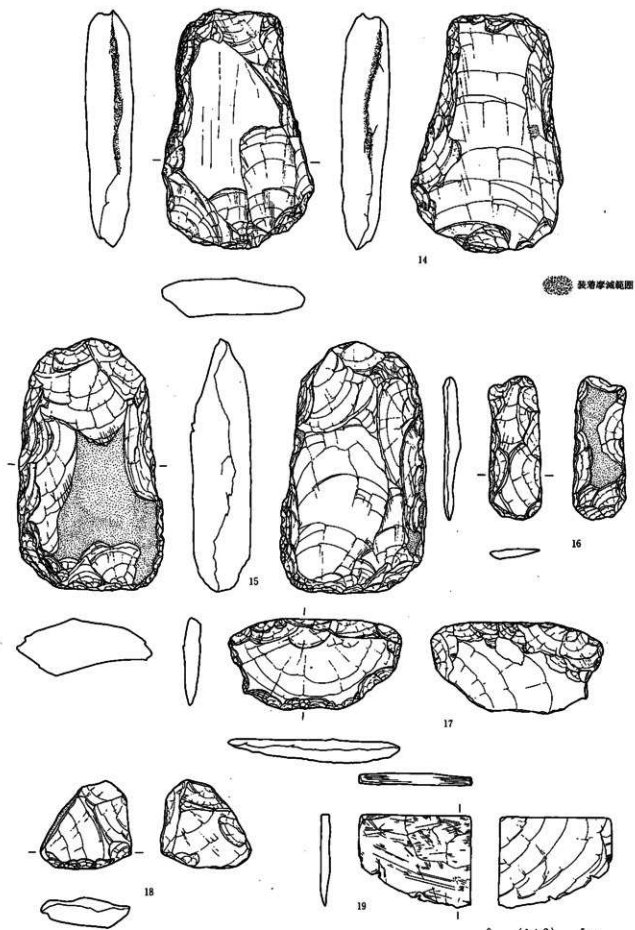
遺物No	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
168	甕	13.0			1/4	E	㊸	ナデ 摩滅	ナデ 指頭圧痕	㊸9層面
169	甕	9.2			1/4	D	㊸	ナデ(口縁部)・肥厚 ハケ(胴部)	ナデ	㊸-3 11層
170	甕		2.4		底部 1/2	DE	㊸	ハケ ナデ(底面)	ナデ	㊸-3 11層
171	壺		5.0		底部 2/3	DE	㊸	ハケ(横位)→ミガキ(縦位斜位)	ナデツケ→ハケ(底部)	外面炭化スス付着 ㊸-3 11層
172	鉢	22.8			1/6	B	㊸	ミガキ(横位)→ナデ(口縁端)	ミガキ(横位)	黒斑 ㊸9層(平安砂層)
173	鉢	18.0		7.7	1/4	EA	㊸	ケズリ→ナデ(横位)	ミガキ→ナデ(口縁端)	黒斑 ㊸6~10層(平安面)
174	小型丸底	10.4		8.3	2/3	A	㊸	ナデツケ→ミガキ 摩滅	ナデツケ 摩滅	㊸-3 11層
175	器台	9.8	11.4	8.6	ほぼ 完存	A	㊸	ナデ(杯部)→ミガキ(縦位・胴部)→ナデ(胴端部)	ミガキ(横位・杯部)→ハケ(胴部)→ナデ	㊸-3 11層
176	高杯				胴部	B	㊸	摩滅	摩滅	内面輪積痕 ㊸9層中
177	高杯				胴部	B	㊸	摩滅	摩滅	穿孔片断に2ヶ所 内面輪積痕 ㊸9層上部
178	高杯				接合部	B	㊸	ハケ 摩滅	摩滅	㊸-2 9-14層
179	高杯		13.2		胴部 1/4	E	㊸	ミガキ(縦位横位)→赤彩	ナデ	㊸9 a層



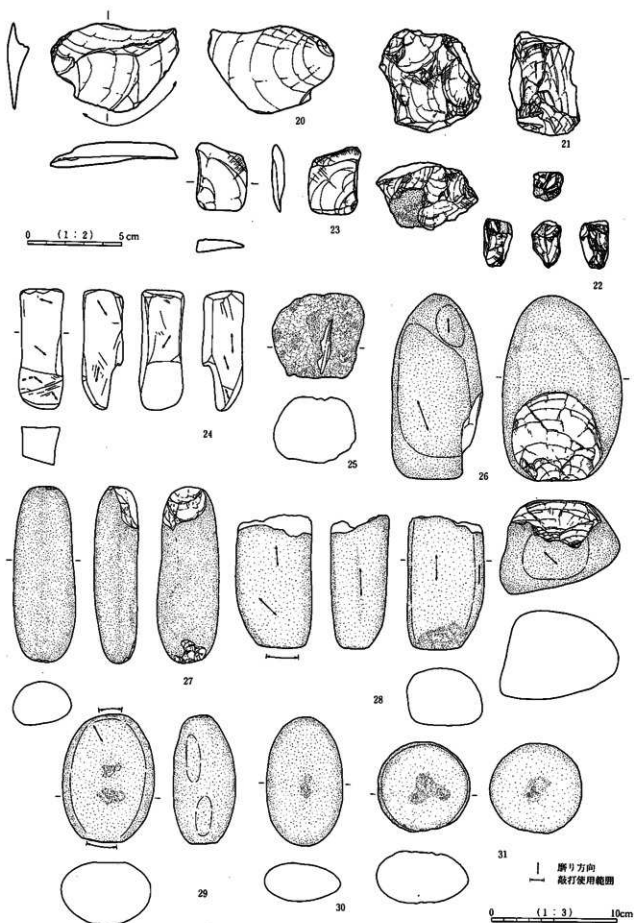
第201図 弥生時代の石器 1 磨製石泡丁・磨製石鎌



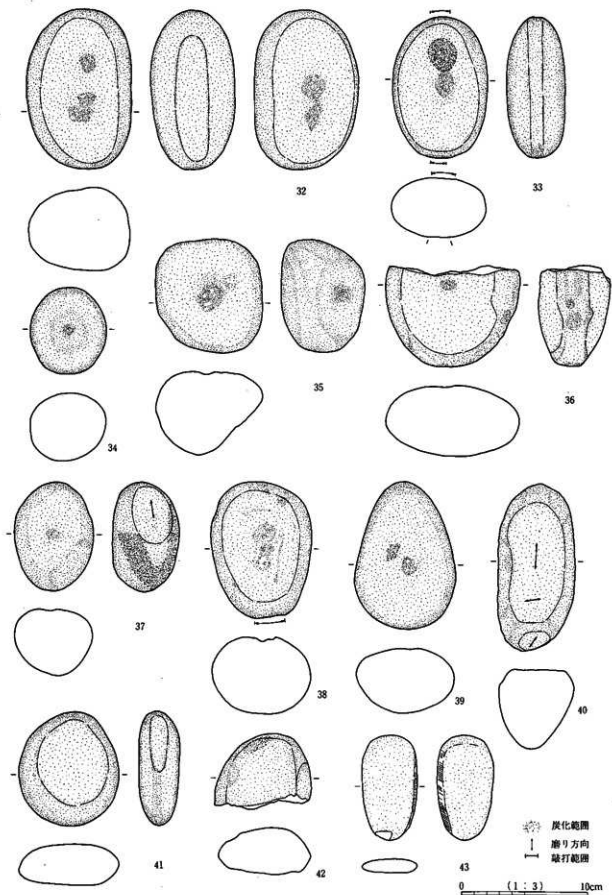
第202図 弥生時代の石器 2 太形給刃石斧・刃器



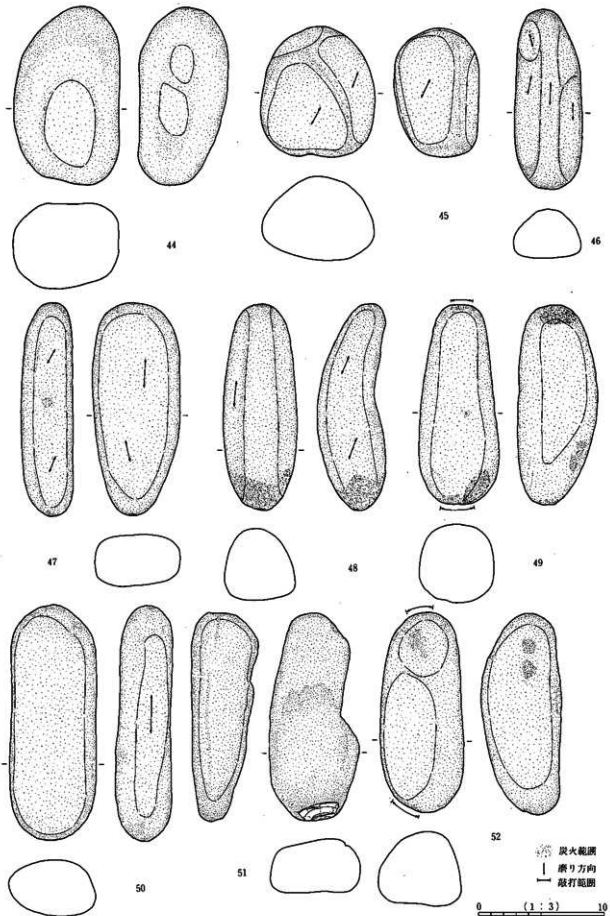
第203図 弥生時代の石器3 打製石斧・刃器



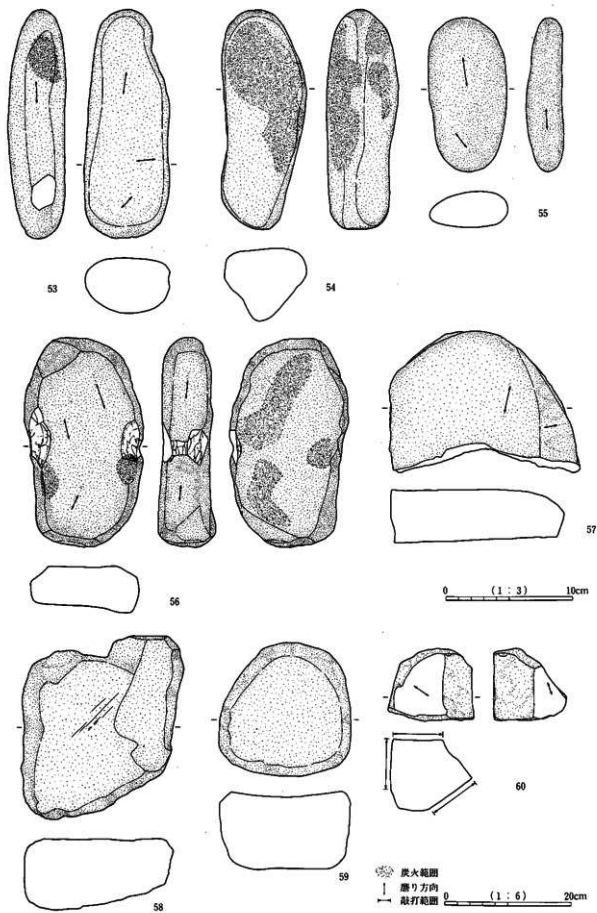
第204図 弥生時代の石器4 刃器・石核、砥石・磨石・敲石、軽石



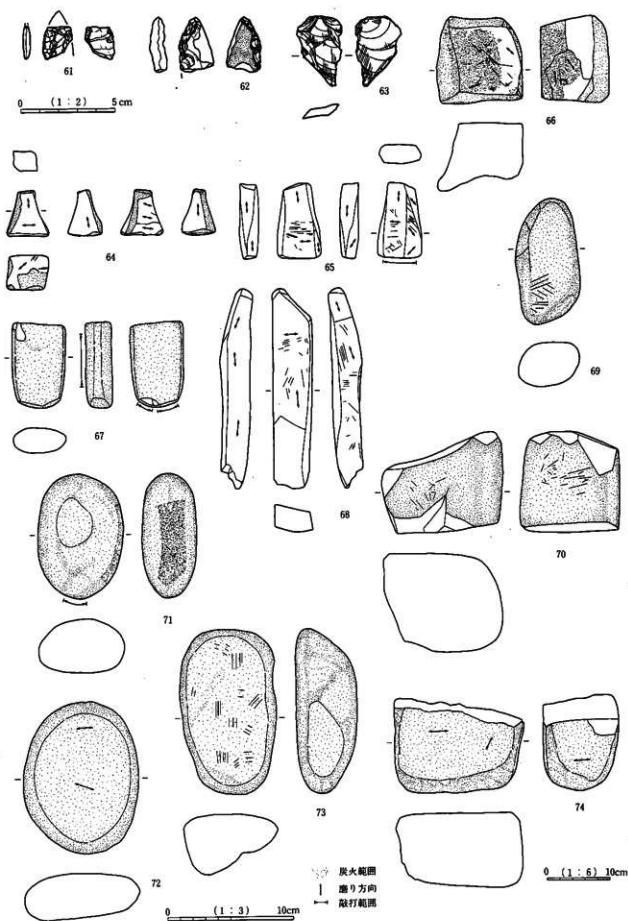
第205図 弥生時代の石器 5 磨石・凹石・敲石



第206図 弥生・古墳時代の石器 磨石・敲石、礪石



第207図 弥生・古墳時代の石器 磨石・敲石、編石



第208図 低地城平安—中世水田層内出土石器

第21表 弥生・古墳石器調査表

図版 番号	器 種	出土地点	法 量				石 質
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
1	磨製石庖丁	⑬区11層(弥生中期)	13.9	5.6	0.7	104.5	粘板岩
2	磨製石庖丁	⑬区11層(弥生中期)	13.1	5.1	0.7	103.6	粘板岩
3	磨製石庖丁	⑬区 S A 3530	12.6	5.8	0.8	103.4	頁岩
4	磨製石庖丁	⑬区 S C 3523下	14.9	6.1	0.9	105.9	頁岩
5	磨製石庖丁	⑮-2区検出面・遺構外	7.7+	4.6	0.8	45.0	安山岩
6	有孔磨製石鏃	⑮-1区検出面・遺構外	2.9	1.7	0.2	1.2	頁岩
7	有孔磨製石鏃	④区検出面・遺構外	3.6+	1.7	0.25	0.1	チャート
8	太形蛤刃石斧	⑦区検出面・遺構外	10.1	6.8	4.9	617.0	閃緑岩
9	太形蛤刃石斧	⑨区検出面・遺構外	10.8	6.0	4.0	413.3	凝灰岩
10	刃器	⑮-2区検出面・遺構外	8.1	4.4	1.5	58.7	閃緑岩
11	刃器	⑮-1区検出面・遺構外	5.0	5.9	1.1	39.9	頁岩
12	刃器	⑮-1区検出面・遺構外	4.5	5.6	1.3	37.62	頁岩
13	刃器	⑮-2区検出面・遺構外	5.2	8.1	1.2	66.8	頁岩
14	打製石斧	⑮E10層	12.5	8.0	2.5	309.5	頁岩
15	打製石斧	⑬区 S C 3523内	13.1	7.6	3.2	390.6	頁岩
16	打製石斧	⑨区14層	7.5	2.8	0.8	17.8	頁岩
17	刃器	①-2区23層	9.0	4.7	0.9	55.1	頁岩
18	打製石斧	①-1区13層	4.8	4.5	1.2	30.2	泥岩
19	刃器	⑮区南西微高地検出面	6.0	4.8	0.6	24.8	頁岩
20	刃器	①-2区23層	6.7	4.5	0.9	24.1	頁岩
21	石核	⑬区 S D 3004底	5.2	4.9	3.5	124.3	チャート
22	石核	⑮-1区検出面	2.5	1.5	1.5	6.8	珪質岩
23	剥片	⑬区 S C 3523内	3.5	2.6	0.5	5.7	頁岩
24	礫石	⑮区 S K 1030	9.4	3.5	3.2	124.0	凝灰岩
25	線状痕のある礫石	⑮区 8層	7.2	6.6	5.0	76.1	礫石
26	磨石・敲石	⑬区 S D 3004 I	14.5	9.5	7.2	1407.4	安山岩
27	敲石	④区検出面	13.9	4.9	3.5	335.0	安山岩
28	磨石・敲石	⑬区 S D 3004 I	10.5+	6.0	4.6	504.4	安山岩
29	磨石・敲石・凹石	⑬区 S C 3523下	10.2	7.3	4.8	552.5	安山岩
30	磨石・敲石・凹石	⑬区 S C 3523下	10.3	6.1	3.0	263.1	安山岩
31	磨石・敲石・凹石	⑬区 S C 3523下	7.3	7.1	4.1	290.3	安山岩
32	磨石・凹石	⑬区 S C 3523下	12.5	8.3	6.7	1021.1	安山岩
33	磨石・敲石・凹石	⑬区 S D 3004 I	11.1	7.5	4.5	581.1	安山岩
34	磨石・凹石	⑮区 S D 1017下	6.8	6.0	5.3	268.4	安山岩
35	磨石・凹石	⑬区 S C 3523下	9.0	8.5	6.6	488.7	安山岩
36	磨石・凹石	⑬区 S A 4003	7.5+	10.5	5.6	618.2	安山岩
37	磨石・凹石	⑬区 S D 3012	8.5	6.2	5.2	375.6	安山岩

第21表 弥生・古墳石器観察表

図版 番号	器 種	出土地点	法 量				石 質
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
38	磨石・敲石・凹石	⑨区11層	10.7	8.0	6.0	706.6	安山岩
39	磨石・凹石	⑨区S D 3004 I	11.5	8.0	5.1	579.2	安山岩
40	磨石・敲石	⑨区S C 3523下	12.9	6.0	6.3	749.3	石英閃綠岩
41	磨石	⑨区S D 3004 I	8.9	7.9	3.2	314.3	安山岩
42	磨石	⑨区S D 3004底	5.4+	7.6	3.7	227.5	安山岩
43	磨石	④区検出面	8.2	4.4	1.0	56.5	粘板岩
44	磨石	⑨区S C 3523下	14.0	8.3	6.7	1268.2	安山岩
45	磨石	⑨区S C 3523下	10.2	9.0	6.5	870.8	安山岩
46	磨石	⑨区 8層	14.0	5.3	3.8	410.5	安山岩
47	編石・磨石	⑨区S H 4001	16.8	6.9	4.0	821.0	安山岩
48	編石・磨石	⑨区S H 4001	16.2	5.9	5.2	700.9	安山岩
49	編石・敲石	⑨区S H 4001	15.6	6.3	6.2	957.4	安山岩
50	編石・磨石	⑨区S H 4001	18.5	6.8	4.5	955.4	安山岩
51	編石・敲石	⑨区S H 4001	16.4	7.1	5.0	825.7	閃綠岩
52	編石・敲石	⑨区S H 4001	15.8	6.6	6.4	1016.3	安山岩
53	磨石・敲石	⑨区S D 3004下層	17.8	6.8	4.5	876.3	砂岩
54	磨石・敲石	⑨区S D 3004下層	17.0	6.6	5.6	767.5	安山岩
55	磨石	④区検出面	8.2	4.4	1.1	330.0	安山岩
56	編石・磨石	⑨区S D 3004 II	16.3	9.3	4.6	843.8	安山岩
57	磨石(台石)	⑨区S A 4005	9.9+	14.5	4.1	1118.0	安山岩
58	磨石(台石)	⑨区S D 3004 I	26.4	24.4	11.0	11800.0	安山岩
59	磨石(台石)	⑨区S D 3004 I	21.1	20.8	11.8	8900.0	安山岩
60	磨石(台石)	⑨区S D 3004 I	13.4	11.3	11.3	2168.5	安山岩
61	打製石鏃	①-1区10層	1.7	1.4	0.4	0.8	凝灰岩
62	打製石鏃	②-2区 5層	2.8	1.8	0.8	3.9	黒曜石
63	剥片石器	④区 検出面	3.5	2.3	0.6	4.3	黒曜石
64	砥石	④区 検出面	3.5	3.1	2.7	26.6	凝灰岩
65	砥石	⑤区 検出面	5.9	3.5	1.5	42.2	凝灰岩
66	砥石	⑨区 3~6層	6.8	6.7	5.3	335.6	凝灰岩
67	磨石・敲石	②-2区 5層	6.6	4.2	2.0	106.7	安山岩
68	砥石	①-1区 3~10層	15.4	3.1	2.4	188.4	頁岩
69	磨石	⑨区S C 3005	9.7	5.0	3.4	282.9	頁岩
70	磨石	⑨区S C 3005	7.4	9.4	7.7	890.2	石英閃綠岩
71	磨石・敲石	⑥区南西微高地検出面	9.8	6.7	4.3	391.3	安山岩
72	磨石	⑨区S C 3005	12.0	9.1	3.6	559.6	安山岩
73	磨石	⑨区S C 3005	13.0	7.5	4.8	654.5	安山岩
74	磨石	⑨区 6層	14.5+	20.0	11.9	6300.0	安山岩

4 遺物

本遺跡の東西低地（水田域）と南西微高地からは弥生後期と古墳前期の土器が多数出土し、東側低地からは膨大な量の木製品が出土した。弥生後期から古墳前期・中期の土器分類及び編年に関する考察は本書第2分冊に、木製品に関しては第3分冊に掲載した。本項では微高地と低地から出土した弥生時代までの石器と中央微高地（古墳祭祀域）を除く古墳時代の石器について所見を述べる。

(1) 石器（第201～208図 P L80～82）

東側低地の弥生中期水田層及び各遺構から各種石器が出土し、微高地からは遺構は未確認であるが石庖丁、太形蛤刃石斧など弥生中期の特長的な石器が出土している。生産域から生産にかかわる石器が出土したことは、石器を用いた生業場所を考える上で貴重な資料であり、弥生中期の畦畔から出土した石器類は遺棄の可能性がある。弥生後期から古墳時代前期の石器は、溝内とその周辺から磨り石など調整具を主体として出土した。

ア 石庖丁 1～5（第201図 P L80）

磨製石庖丁は5点で弥生中期に帰属する。1～4は東側低地水田域の弥生中期の水田土層から、5は中央微高地からの出土である。水田から石庖丁が出土した例は県内では初めての報告例である。3・4は水田を区画する主要畦畔内からの出土であり収穫具を遺棄したものと考えられる。5点はいずれも2孔の紐孔をもつものであるが、刃部が直刃となるもの（1・2）と曲刃となるもの（3～5）に分類される。前者の孔間は2.4cmで側縁部から離れた位置に穿孔されているのに対し、後者の孔間は1.8cmで側縁部寄りに穿孔されている。この形態、製作上の2者の違いは用途差であるのか製作集団の違いによるものか今後検討すべき課題である。刃部の研ぎだしは1・3が片刃であり2・4・5が両刃であった。

イ 刃器 10・13・17・19・20（第202～204図 P L81）

弥生中期もしくはそれ以前に帰属する刃器は2点（17・20）で、他5点は時期不明であるが周辺出土遺物から弥生中期に帰属する可能性が高い。17は横刃型刃器とされるが他は不定型の刃器である。10・13・19には磨り面が確認された。

ウ 石斧 8・9・14～16・18（第202～203図 P L81）

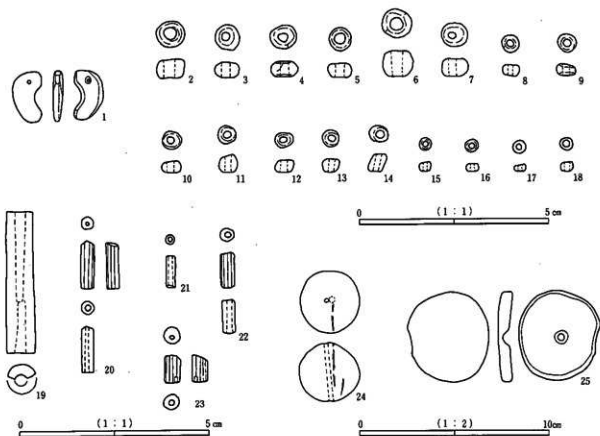
太形蛤刃石斧2点（8・9）と打製石斧4点（14～16・18）がある。前者は中央微高地からの出土で前項の磨製石庖丁や刃器などと共に出土し、後者は弥生後期水田層及び畦畔からの出土である。太形蛤刃石斧2点は弥生中期に帰属するものと思われ、それぞれ基部先端と刃部先端部が残存し折損による廃棄とみなされる。水田域出土の14～16の内15はS C3523内に遺棄された可能性がある。弥生後期の打製石斧は比較的大形になるもの出土例が知られているが本遺跡出土の14・15は厚みのある短い形態で、16は小形で刃器の可能性もある。14側縁には装着による磨れが明瞭に観察された。

エ 石鏃 6・7・61・62（第201・208図 P L80）

磨製石鏃と打製石鏃がある。いずれも帰属時期は不明であるが前者は弥生中期に帰属するものと思われる。6は完形で小形の部類に属する石鏃である。7は先端部が入念に削りだされ尖る。61・62は西側丘陵部に近い調査区からの出土で縄文時代中期の遺物が混入したものと思われる。

オ 砥石 24・64～66・68（第204・208図 P L82）

5点出土しているが帰属時期が明確なものは弥生後期の土坑SK1130内からの24のみで、64・65は微高地の古墳前期から中世までの検出面、66・68は平安以降の水田層内からの出土である。いずれも小形の手持ちの砥石で、24・64・65は研ぎ面が湾曲形状となる。



第209図 弥生～古墳水田、微高地出土勾玉、ガラス小玉、管玉、土製品

カ 磨り石、敲き石、凹み石 26-46・53-55・57-60・67・69-74 (第204-208図 P L81・82)

磨り面が確認された石は多数出土したが、東側低地の遺構内出土石器と西側低地の埴輪時期の確認できた石器のみを掲載した。また磨り石としたものには磨り面のほかに敲打による打痕と凹みを残すものがある。表面に凹みが残された石は29-39の12点である。この内29-32・35・38の7点は弥生中期に、33・34・36・39の4点は弥生後期に、37は古墳前期に帰属する。平面形は楕円形状で扁平なものが多く、長楕円の凹み石の両端部には敲打打痕が残る。先端部に敲打打痕を残すものは40が弥生中期に、26-28・53・54が弥生後期に帰属する。大形の磨り石57-60は弥生後期の水田遺構から出土した。

キ 編み石 47-52・56 (第206・207図 P L82)

東側低地㊸区古墳前期水田面SH4001からまとも出土した磨り石、㊸区SD3004内出土の磨り石を編み石とした。同形状の磨り石はいくつか確認されたが、ここでは出土状況からSH4001出土の磨り石と側縁部中央に抉りを有する56に限り器種を限定した。SH4001からは14点がまとも出土し、平面形状は縦長の楕円形となるものが大半を占め、断面形状は隅丸の三角形もしくは楕円形となる。長軸長の平均は17cmで、扁平幅の平均は6.4cm、重量の平均は780gであった。県内で「編物石」として報告された事例は管見に触れた限りでは14遺跡からで集石として30例がある。善光寺平では更地市五輪堂遺跡5・9・15号住、長野市塩崎遺跡群塩崎小学校地点47・48・59号住、長野市水内坐一元神社遺跡5号住からの出土がある。中南信地域では飯田市山岸遺跡、天伯B遺跡、伊那市伊那福高遺跡、塩尻市吉田向井遺跡、大町市

第22表 勾玉、ガラス小玉、管玉、土製品観覧表

図版番号	製品名	出土遺構	全長 (mm)	最大径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	材質	色調
1	勾玉	㊦SD3004	13.2	最大厚 3.2	2.0	0.57	硝水	緑色
2	ガラス小玉	㊦SD3004	5.2	7.3	3.5	0.34	ガラス	コバルト・ブルー
3	ガラス小玉	㊦SK1124	4.0	6.5	2.0	0.23	ガラス	コバルト・ブルー
4	ガラス小玉	㊦SK1125 No.1	4.0	6.5	2.2	0.18	ガラス	コバルト・ブルー
5	ガラス小玉	㊦SK1125 No.2	4.0	6.0	2.9	0.16	ガラス	スカイ・ブルー
6	ガラス小玉	㊦SK1130 No.1	6.2	7.5	2.9	0.40	ガラス	スカイ・ブルー
7	ガラス小玉	㊦SK1130 No.2	4.6	6.5	1.8	0.25	ガラス	ダーク・グリーン
8	ガラス小玉	㊦SK1130 No.3	3.0	4.5	1.5	0.08	ガラス	スカイ・ブルー
9	ガラス小玉	㊦SK1130 No.4	3.0	5.0	2.0	0.07	ガラス	スカイ・ブルー
10	ガラス小玉	㊦SK1130 No.5	3.0	5.0	1.5	0.09	ガラス	スカイ・ブルー
11	ガラス小玉	㊦SK1130 No.6	3.5	4.5	1.5	0.08	ガラス	スカイ・ブルー
12	ガラス小玉	㊦SK1130 No.7	3.0	4.5	1.7	0.07	ガラス	スカイ・ブルー
13	ガラス小玉	㊦SK1130 No.8	3.2	4.2	1.5	0.08	ガラス	スカイ・ブルー
14	ガラス小玉	㊦SK1130 No.9	4.5	4.0	1.0	0.10	ガラス	スカイ・ブルー
15	ガラス小玉	㊦SK1130 No.10	2.2	3.2	1.2	0.03	ガラス	スカイ・ブルー
16	ガラス小玉	㊦SK1130 No.11	1.5	3.2	1.2	0.02	ガラス	スカイ・ブルー
17	ガラス小玉	㊦SK1130 No.12	1.8	3.0	1.0	0.02	ガラス	スカイ・ブルー
18	ガラス小玉	㊦SK1130 No.13	2.2	3.5	1.5	0.03	ガラス	スカイ・ブルー
19	管玉	㊦SB01	36.8	残存径 7.8	残存径 3.0	1.46	緑色凝灰岩	ライト グリーニッシュ・ グレー
20	管玉	㊦SK1124 No.2	12.0	3.5	1.3	0.19	鉄石英	ダークレッド
21	管玉	㊦SK1124 No.3	7.8	2.5	1.0	0.07	緑色凝灰岩	ダーク グリーニッシュ・ グレー
22	管玉	㊦SK1130 No.6-1	8.8	3.8	2.0	0.17	鉄石英	ダークレッド
23	管玉	㊦SK1130 No.6-2	7.0	4.0	1.2	0.20	鉄石英	ダークレッド
24	土玉	㊦8層水田	30.2	32.0	3.5	30.57	土製	
25	土製円盤	㊦SC3523	6.5	47.0	6.5	14.25	土製	

借馬遺跡などがあり、いずれも住居内の隅やカマド付近に集石して複数個出土している。本遺跡のごとく生産域から横樋と共に出土した事例はなく、石器そのものも磨り石、敲き石としての用途があることから今後詳細な検討が必要である。

ク その他 (第204図)

石核として21・22がある。21はS D3004底からの出土であり弥生後期に帰属する。自然面を一部に残すが方柱形となり多面に剝離面を残している。22は中央微高地検出面からの出土で帰属時期不明であるが赤褐色の柔らかい素材である。玉類制作時の残核の可能性がある。

23・63は剥片である。23は⑭区S C3523内から土製円盤とともに出土し弥生後期に帰属する。63は④区微高地の検出面からの出土で一部に使用痕跡の摩滅が認められる。

25は⑥区古墳水田層(8層)出土の軽石であるが、金属器による刃物状鋭利な深い線状痕が残る。軽石は弥生後期から平安砂層まで3箱に上る量の出土があったが、水田域出土のものでは唯一の石器である。中央微高地(古墳祭祀域)からはいくつかの軽石製品があり、⑥区水田域が古墳祭祀と関わりがあることを示す遺物でもある。

5 小 結

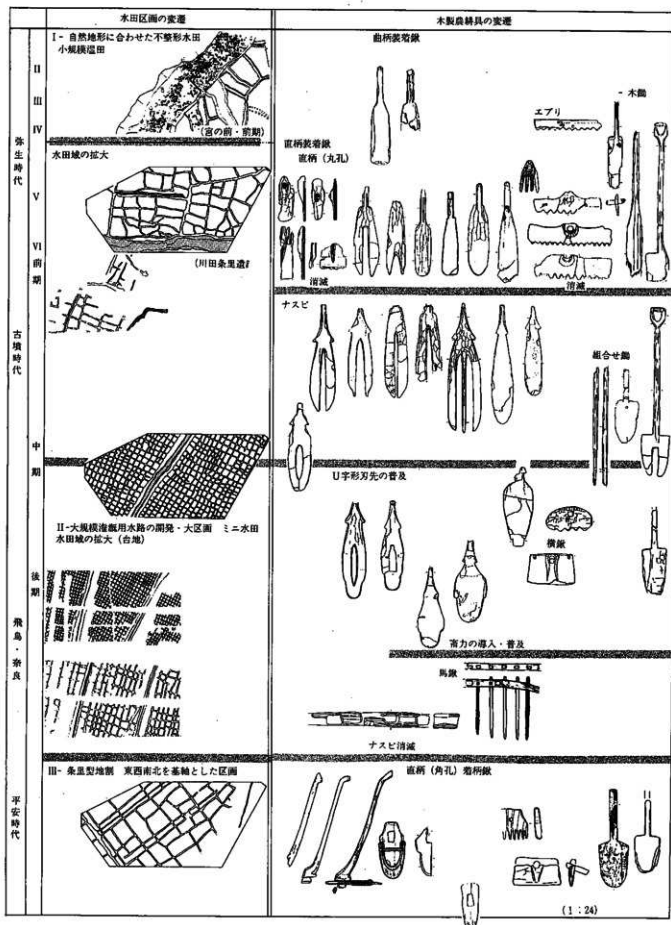
(1) 弥生・古墳水田の変遷

本遺跡では弥生中期・後期、古墳前期前半・後半(中期前半)の水田の存在が水田区画(畦畔)と溝などの遺構と出土遺物から明らかとなった。ただし検出された遺構の調査成果からは、各時代・時期の良好な水田区画の状況が明らかにされたわけではない。そこで本項では同地域内の水田遺跡である長野市若穂川田条里遺跡(長野県埋文センター：1990・91)の成果と合わせて水田環境及び区画についての所見を述べることとする。

本遺跡の東西低地の利用がはじまったと考えられる時期は出土遺物から縄文晩期が初現となる。自然堤防と後背湿地が形成されたとされる時期であり、縄文晩期から弥生中期前半に帰属する土器片が同一土層内の限られた地点(④・⑯・⑰区)から収集された。遺構は溝だけで水田耕作の有無は不明であるが、ブランド・オパール分析(第3章第1節3)や周辺遺跡の状況(第2章第2節2)からは低湿地の一部に水田が存在した可能性は高い。ただ継続的に水田として経営された状況は見られず、周辺遺跡からも収穫具以外の耕作具が未出土であることから水田耕作技術が未成熟であったことを裏づけている。当該期中部高地では、山梨県韭崎市に宮ノ前遺跡¹¹⁾(韭崎市教委：1992)が水田遺構の初現としてあるが、同遺跡では弥生前期後半以後の水田の断絶を見る。つまりこの時期の水田は低湿地に小規模に作られ、短時間に消滅する形態のものであったと考えられ、水田施設としては排水を主とした溝が掘削されていたことが予想される。本遺跡の溝跡もこの性格をもつものであろう。この段階(縄文晩期から弥生中期前半)の水田を低湿地に立地した小規模短期消滅型水田として0段階とする。

本遺跡で水田跡として確認できる時期は弥生中期後半で、杭列、畦畔が弥生後期の水田遺構に継続する状況で検出された。水田遺構として検出された調査域は東側低地の比較的低い地点で、畦畔、水田層からは土器の他に石庵丁も出土している。西側低地には土器片がまばらに出土した程度である。弥生中期から後期前半までの水田区画の状況は明確に検出されなかったが、主要畦畔の位置が弥生後期と同様であったことから区画もさほど変わらなかったことが予想される。主要畦畔であった杭列畦畔(SA3530II)、中期の土器を出土した畦畔(SA4003・SC3525など)は、芯材に横木材を多数用いる傾向が見られた。弥生後期前半までの溝は検出されなかったがS D3004内埋土中からは該期(吉田式期)の壺が出土した。弥生後期前半段階でこの溝が水路として機能していたか疑問な点もあるが、弥生後期後半の水田域拡大の基盤

第210図 水田区画と木製農具の変遷



が作られていたとみられる。弥生後期後半は東西の両低地から水田遺構が検出され、杭列によって補強された畦畔が多数検出された。古墳中期前半まで継続するSD3004内からは多数の木製農具や土器が出土し大規模に水田が営まれていたことがわかる。この時期の水田区画は⑬区に見る大区画の畦畔とその中を分割する小畦畔とからなる。ただし大区画の方向が不統一であり、水田形状も方形を基本としながらも不整形となることが特長である。この段階は、低湿地に立地し、自然地形を利用した傾斜に合わせた水田区画を設けた不定形水田となる。弥生中期後半から後期前半までの小規模水田形態をⅠ-1段階、弥生後期から古墳前期前半までの水田域が拡大した段階をⅠ-2段階とする。木製農具は弥生後期に組成が揃ったと見られる。

本遺跡で古墳水田として確認できた最後の時期は古墳前期後半ないしは中期前半（古墳時代の土器編年及び時期区分は第2分冊を参照されたい）で、水田区画は南西から北東へ走行する溝SD3004と平行する方向の畦畔が4条、これらと直行する北西から南東方向の畦畔が10条検出された。SD3004はほぼ弥生後期の溝を踏襲した位置にあるが、弥生後期に比べ幅を減じ、溝の要所には杭・横木材によって補強がなされた土手を構築している。またSD3003は中央に溝をもつ畦畔であり、同様の畦畔は川田条里遺跡に見うけることができる⁽¹⁸⁾。本遺跡の調査では大区画のみの検出であったが、この恒常的な区画（畦畔）の内部には小区画を作った畦畔があったものと思われる。この時期の水田大区画は企画性を帯びており、水田域としては丘陵・微高地縁辺にまで及んでいる。大規模灌漑施設を敷設したこの形態をⅡ段階とする。この段階には農業技術上の革新が背景にある。

本遺跡では古墳中期後半以後平安時代までの水田遺構は未検出であり、Ⅱ段階以降の水田は次節に述べる水田区画に関して若干触れる事とする。本遺跡を含めた千曲川流域では平安前半期の洪水砂層で埋没した水田が広域に検出され手いる。水田区画は、東西南北の大畦によって区画された条里型地割で、Ⅱ段階までの水田形態とは大きく異なる。奈良時代に限定する資料に乏しいが、平安埋没水田直前の水田区画の方向はⅡ段階水田と同一であった（第5節2参照）。川田条里遺跡の状況も本遺跡と同様で、平安前半期までの水田区画は水田1枚の規模の大小はあるとしても大きく変化することがなかったといえる。条里型地割施行段階をもって第Ⅲ段階とする。

本遺跡の遺跡の水田は以上の変遷をたどっている。

(2) 弥生・古墳水田の埋没要因について

本遺跡で水田が断絶した時期は大きく2時期ある。前項で述べた弥生後期なしは古墳前期初頭（Ⅰ段階）直後と古墳前期後半ないしは中期前半（Ⅱ段階）直後である。両者ともに砂質の泥炭層によって水田層が被覆されているが、泥炭層の堆積厚は調査区によって異なる。Ⅰ段階の堆積は東側低地で最も低い⑪・⑬区に約30～40cmほどの堆積が最大となり他の調査区では泥炭質の粘土層となる。⑪・⑬区では泥炭層下部に砂層の堆積があり、部分的ではあるが砂層下から耕作時の凹凸が顕著に検出された。このことからⅠ段階の水田埋没の要因は洪水によるものと考えられ、洪水による埋没によって水田を一時期放棄した結果泥炭層の発達する低湿地に変化したものと予想される。Ⅱ段階の泥炭層もⅠ段階同様に東側低地の低い調査区に厚く堆積していた。Ⅰ段階堆積と異なる点は微高地縁辺から低地にかけて徐々に厚みを増し地形の起伏に沿って堆積がみられた。泥炭層中には薄い砂層が互層となる地点があり数度の洪水による影響が伺われるが、水田層が砂によって覆われた状況は見られなかった。またシルト質粘土が薄く堆積した地点があり、古墳後期前半の土器も僅かに出土したことから部分的に水田化された可能性もあるが、平安時代直前まで遺構は検出されなかった。この均一な泥炭層の被覆は水田断絶後の湿地化を示しているが、その主たる要因は不明⁽¹⁹⁾で、再開発が平安前期直前まで行われなかった要因も不明確である。水田埋没の要因は

自然条件によるところが大きいが、開発には政治・社会的条件が加味されているはずである。後者については周辺遺跡の状況とあわせて今後の課題としたい⁽¹⁴⁾。

註、引用・参考文献

- 註1 宮ノ前遺跡2号水田面の上下層からは浮線土器群と条痕文系土器群が出土し「弥生前期水田」としている。
- 註2 川田桑里遺跡では等高線に直交する大畦が検出され、水路を伴うものがいくつかあった。大畦内は等高線に直交する長い小畦とその小畦を阿弥陀状に結ぶ小畦とで区画されていた。
- 註3 古墳中期以降各地で小区画水田が検出され、小区画水田に関してはその理由として保水性、灌漑効率などの面で有効であると考えられているが、保温性という面からも有効である。該期には気候変動によって寒冷化が進んだとする説も（坂口豊：1989）あり、本遺跡の埋没要因も寒冷化による凍土の堆積と見ることもできる。
- 註4 善光寺平では5世紀中頃以降前方後円墳なくなり大形円墳となる。また現在までのところ後期集落は塩崎遺跡群に住居敷軒が検出されたのみで周辺からは大規模集落が検出されていない。
- 1 長野県埋蔵文化財センター：1990「長野県埋蔵文化財センター年報6」
 - 2 長野県埋蔵文化財センター：1991「長野県埋蔵文化財センター年報7」
 - 3 高崎市教育委員会高崎市遺跡調査会1992「宮ノ前遺跡本文編」
 - 4 高崎市教育委員会1980「御風呂遺跡」

第4節 微高地域の古代遺構

1 古代の概略

(1) 調査の概要

古代の微高地範囲は洪水砂層の分布と地形からみると、調査地区④区の一部・⑤-1・⑤-2・⑦-1・⑦-2・⑧-1・⑧-2・⑩区の範囲が該当する。この微高地範囲の認定は整理段階で行ったが、低地との境を示す遺構がなく、水田遺構も微高地付近は不明瞭となるため、範囲認定は曖昧さを残している。特に⑦-2区の南西低地は洪水砂層自体が残存しないものの、地形的には明らかに低地に属するとみられるが、その範囲は非常に不明瞭である。この微高地範囲では低地境を除くと低地域に対応する古代の基本土層は確認できていない。そのため古代遺構も古墳時代・中世遺構と同一の調査面で検出されることになった。しかし、古墳時代遺構の様相からは古墳時代以後に若干の堆積土があった可能性は想定される。また、低地境周辺では古代基本土層と対応する土層が残存するものの、調査時には低地との土層対比が不十分で、必ずしも遺構と土層の関係が把握しきれないところがある。特に、初年度調査では基本土層の把握が不十分で、遺構調査面を見誤ったり、異なる検出面の遺構を同一面で調査した部分がある。このような調査ミスについては整理段階で調整したが、解決できなかった矛盾点はそのまま個別遺構のところで記述することにした。また、微高地中央部にある古墳時代大溝S D1016埋土には低地と対応する古代の土層が存在することが後に判明したが、この古代土層面での遺構調査は実施していない。そのため、古代には凹地として残存しているものの、水田として利用されていたかは明らかにできなかった。

以上のように微高地縁辺を除く中央部では古代の基本土層が残存していないため、古代遺構、特に土坑の時期判断は出土遺物で行なわざるをえなかった。したがって、本報告で扱う古代遺構の範囲は基本土層との関連に主眼がおかれる低地域と、出土遺物に主眼がおかれる微高地では扱う遺構の年代幅や所属時期認定に精粗を生じている点は注意されたい。すなわち、低地域では基本土層との関係で扱う遺構の範囲が決定されたが、微高地では7世紀後半～11世紀という時間枠をもうけ、そのなかに該当すると思われる遺物を出土した遺構、あるいはその可能性がある遺構を扱っている。そのため、土坑を中心として出土遺物の多寡によって古代遺構の認定が左右される結果となっており、出土遺物が少ない場合は判断に苦慮したものや、古代と断定できないがその可能性がある遺構として扱わざるをえなかったものがある。また、低地では洪水砂で埋められた遺構を中心に調査したため、この時期前後の遺構を中心にするが、微高地では古墳時代～近世遺構が同一面で検出されているように水田域より幅広い時期の遺構が含まれる。このような遺構時期認定の違いがあるため、報告書では微高地と低地域の遺構を分離して記述することにした。もちろん、溝跡などは低地域と関連するものもあり、このような掲載方法では微高地と水田域の関連がやや不鮮明になってしまう問題がある。この点については水田域と合わせて読んでいただくことで補っていたきたい。なお、低地境の平安時代洪水砂層が残存する部分では砂層上、砂層下、水田耕作土相当層下の3枚の検出面があり、耕作土相当層が残存する部分では耕作土相当層の上・下の2枚の検出面がある。それ以外の微高地上では古代に関わる基本土層が残存していないので、古墳時代の遺構も合わせて検出された調査面を第1面と呼称した。さらに、微高地中央部では第1面の1枚下の土層で上層見逃し遺構を検出するダメ押しを行なっており、これを第2面としている。

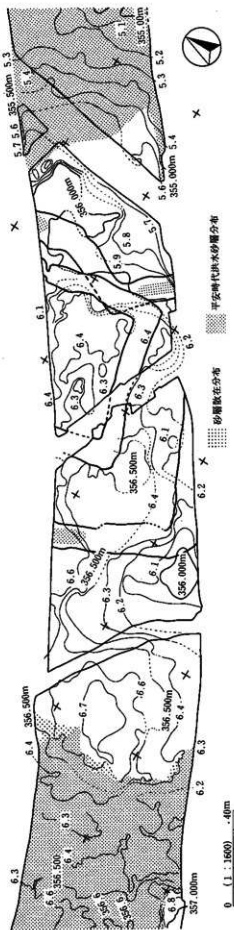
(2) 基本土層と地形

微高地は弥生時代以前に形成され、以後大きな変化が見られないまま周囲の低地の埋没が進むとみられる。平安時代では古墳時代前期より微高地との比高差がより減少し、微高地西側部や東境部で水田がわずかながら拡大してくる様相が捉えられる。上記の堆積環境のなかで古代に関わる基本土層は低地域を中心に水田耕作土を含む土層、それを覆う洪水砂層がある。上述したようにこの2枚の土層は微高地境で部分的に残存しており、微高地境の遺構検出面は耕土下面、洪水砂下面、洪水砂上面の3面となる。これに対し、微高地中央部では低地に対応する土層はSD1016埋土以外では確認されないため、近世や古墳時代の遺構と同一面で遺構が検出されている。ただし、微高地では焼土跡がいくつか検出されており、これらの焼土跡のなかには直接古墳時代土坑との関連が把握されたものもある。したがって、古墳時代遺構の検出面は古墳時代の生活面に近い存在であった可能性が指摘でき、そうした場合、古墳時代前期末～古代においては上層に若干の堆積土が加わっていた可能性もある。なお、参考に洪水砂が残存する部分で基本土層7層の上面標高、それ以外は検出面の標高で作成した微高地周辺の砂層分布と地形図を掲載しておく(第211図)。

(3) 微高地古代の遺構・遺物の概略

微高地で検出された古代の遺構には溝と土坑跡若干があり、他には中世との判断に迷った柱穴群が微高地東端にある。柱穴跡は調査の検出状況を尊重して、古代の可能性があることからここで扱うことにした。この柱穴群を除くと、竪穴住居址は全く検出されておらず、基本的には居住域としての利用はみられない。古代においては耕作地としての利用が一般的であったと推測されよう。

これらの古代遺構で注目されるのは溝跡である。溝跡には低地域の条里環境に一致するものと、後出すると思われる地形に合わせるものの2者が確認できた。いずれも洪水砂を埋土とせず、洪水以前の所産と思われることから、微高地上も条里的



第211図 平安時代の微高地周辺の地形

な区画が施行されたが、洪水以前には微高地上の条里区画が崩れているところがあると知られる。ただし、この様相は微高地西側でみられたが、他地点では確認できていない。

また、出土遺物は遺構数の少なさのわりには一定量採取された。そのほとんどが中世・近世遺構に混入して出土したもののだが、古墳後期～7世紀代の遺物が見られず、8世紀代以後が多い。さらに、水田域と比べると出土遺物の出現時期・増加時期は類似するが、微高地では8世紀代の遺物が量的に多く、しかも古代を通して貯蔵具の出土比率が高い特徴が見られる。この様相からは8世紀初頭（7世紀後半?）に微高地を含む石川条里遺跡広域にわたる開発が開始されるが、微高地は低地とは異なった土地利用状況があったことが推測される。

2 微高地の遺構

(1) 土坑

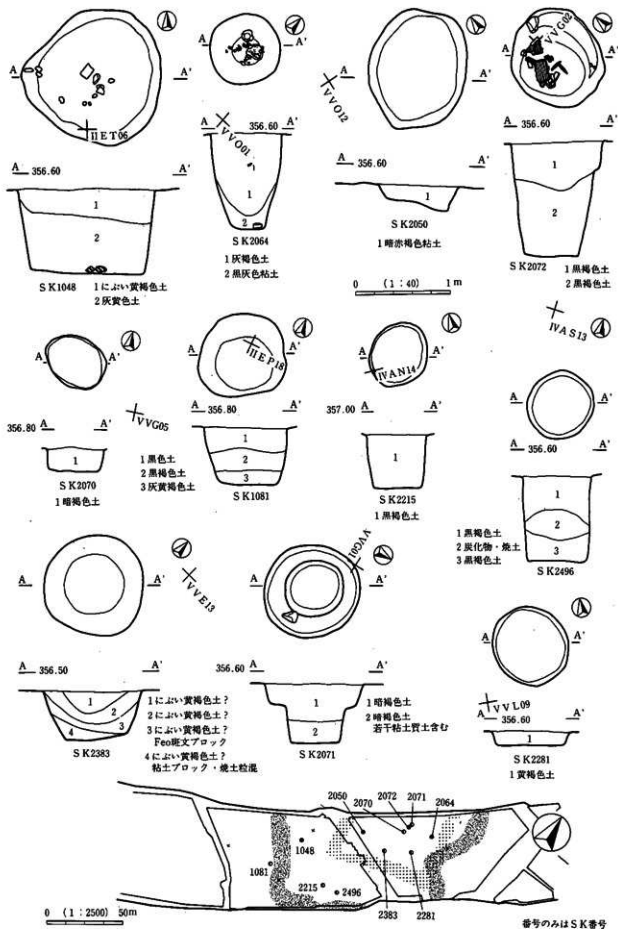
遺跡調査中に古代の所産と判断できた土坑もあるが、整理段階の検討でいくつか追加したのものがある。整理では出土遺物を中心に、条里区画との関連、埋土、古代と断定できる遺構との形状比較から古代の遺構を抽出したが、断定できる土坑は少ない。これは調査段階での掘り間違いや遺物の混入に起因する矛盾点が生じていることによるが、集落以外での古代土坑のあり方を十分検討できなかったことや、本遺跡からは一定の性格や傾向を見出せなかったこともある。そのため、遺構確定根拠が弱いところもあると思われるが、ここでは古代の所産と判断した経過について煩雑ながら付記しておく。

微高地域で古代の遺物を僅かでも出土したSKは全部で90基ある。ただし、遺物や形態から中世と思われるSKは37基、明らかに古墳時代の廃棄土坑・井戸と思われる土坑が14基ある。残り37基が古代の可能性のある土坑と捉えた。37基の土坑では出土古代土器が40g以下のものがほとんどで、100gを超えるものは僅かに6基のみである。さらに6基のなかで出土土器が古代に限定され、しかも比較的遺存度も高いSK1048・2050・2064・2072の4基はほぼ古代の所産と断定できると思われる。さらに、SK2072に近接して形態的にも類似するSK2071も古代の所産の可能性が高いと考えた。残り32基が古代の可能性を持ちつつも断定に躊躇される土坑である。残り32基の土坑については他時代の土坑の特長が見られるものを消去し、残った土坑を古代の可能性のあるものとして取り上げることにした。その方法は、はじめに掘り込み自体が浅く遺構認定自体に問題がある土坑を除外し、次に個別土坑での他時代土器と古代土器の出土重量の関係を検討して、古墳時代の土師器が圧倒的な量みられる土坑も除外した。そして、残ったのが古墳・中世の土器と共に一定量の古代土器が出土した土坑、さらに古代の土器が主体的ながら出土量が少ない土坑と考えた。さらに残った土坑のなかで軸方向が古墳時代、あるいは中世の溝と一致するものをそれぞれの時期の所産と考えて除外した。このなかで、平面形が方形で条里区画に近い方位を指向しながらも、古代の土器をはるかに上回る古墳時代土器を出土した⑧-1区の土坑数基は古墳時代の廃棄土坑の可能性があると判断し、古墳時代で扱うことにした。また、古墳時代の遺構と考えられる土坑に切られながらも古代の土器を出土した土坑も基本的に除外した。ただし、これには切りあいの見誤りの可能性がないわけでもない。

以上の消去法により、他時代の遺構の特長を具備せず、古代の土器を出土したSK1081・2070・2215・2281・2383・2496の6基を、先に古代と断定した5基のSK（1048・2050・2064・2071・2072）に加えて報告する。

これらの土坑は一般的な集落遺跡以外で構築された土坑であるが、その性格は形状から井戸に類するものと推測できた以外は詳細不明である。このような集落以外での土坑の様相があまり明らかになっていないこともあり、詳細は今後の検討に委ねるところも多い。

ア 古代と断定された土坑



第212図 古代の土坑

SK1048 ⑤-1区 HES05・ET05 (第212図、P L31)

平面形は直径148～138cmの円形で、壁はほぼ垂直、底面は平坦な円筒状を呈す。深さは検出面から約92cmを測る。切りあいはない。埋土は上部のふい黄褐色砂質土と下部の灰色粘土に分層された。遺物は古墳、平安時代の土器と木製品があり、平安時代土器は比較的多く認められた。本跡は平安時代の所産で性格は井戸に類する施設と思われる。

SK2050 ⑤-2区 VUP13 (第212図)

調査時に埋土上面をSK2050、下面をSK2051したが、整理段階で重合したところ両者の平面形が重複することが判明したので同一土坑とした。平面形は長軸180cm、短軸134cmの楕円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦である。検出面からの深さは68cmを測る。切りあいはない。埋土は褐灰色砂質土で、北西部に暗赤褐色粘土が載る。遺物は古代の土師器甕破片が出土した。性格は不明である。

SK2064 ⑤-2区 VQN20 (第212図、P L30)

平面形は直径約80～75cmを測る円形を呈し、壁はやや斜めで、底面は上部より一回り小さく平坦である。検出面からの深さは約100cmを測る。切りあいはない。埋土は中位以上の灰褐色土と下部の黒灰色粘質土に分層された。上層の中位からは杯が比較的多く出土し、下層からは曲物が出土している。遺物は古墳時代土器片と古代の須恵器杯A、黒色土器A杯A、灰釉陶器碗が出土している。平安時代の所産で、井戸か、井戸に類する施設と思われる。

SK2071 ⑤-2区 VVG01 (第212図、P L31)

平面形は直径約104～100cmの円形を呈し、上面から深さ24cmのところではテラスを形成し、直径約66～60cmの円形部分がさらに落ち込む。底面は平坦で検出面からの深さは62cmを測る。埋土は暗褐色土を基本とし、砂質の強い上層と粘質土を含む下層に分層された。遺物は古墳時代土器片と古代の黒色土器A碗、須恵器杯A・壺が出土している。時期は平安時代と推定され、性格はSK2070・2072と同様と思われる。

SK2072 ⑤-2区 VVF02 (第212図、P L30)

平面形は96～100cmの円形を呈す。壁はほぼ垂直だが、東側に三日月状のテラスがあり、底面は平坦で検出面からの深さは118cmを測る。切りあいはない。埋土は上部の黒褐色砂質土と下部の黒褐色シルトに分層され、下層の上部で板状材と土器がまとめて検出されている。遺物は古墳時代土器片と古代の黒色土器A碗、須恵器杯、土師器杯・甕が出土した。平安時代の所産で形状から素掘りの井戸と推定される。

イ 古代の可能性がある土坑

SK1081 ⑦-2区 HEO18・EP18 (第212図)

平面形は直径94cmの円形を呈し、壁はやや斜めで底面が平坦な円筒状の土坑である。検出面からの深さは約60cmを測る。他の遺構との切りあいはない。埋土は3層に分けられ、上部に黒色土、中位に黒褐色土、下部に灰黄褐色土が堆積する。中位以上と下部では色調が大きく異なるが、その理由は明らかにできなかった。遺物は古墳時代と平安時代の土器片が出土している。遺物から平安時代の可能性があり、その性格は井戸に類する施設であろうか。

SK2070 ⑤-2区 VVF04 (第212図)

平面形は長軸68cm、短軸50cmの楕円形を呈する。壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは24cmを測る。切りあいはない。埋土は暗褐色粘質土の単層である。遺物は古墳時代の土器小片と古代の須恵器1片が出土した。平面形はSK2072に類似するが、浅すぎる点で問題がある。遺物も少なく断定はできないが、古代の可能性がある遺構としてここで扱った。

SK2215 ⑧-1区 IVAN13 (第212図)

平面形は直径約60cm、深さは約60cmを測る円筒形の土坑である。壁はほぼ垂直で底面は平坦である。埋

土は黒褐色の粘性の弱い粘土質である。遺物は小片ながら須恵器の蓋・杯A・壺破片がある。古代の可能性はあるが、遺物の少なさから断定まで至らなかった。性格は井戸に類する施設と思われる。

S K 2281 ③-2区 VVL08 (第212図)

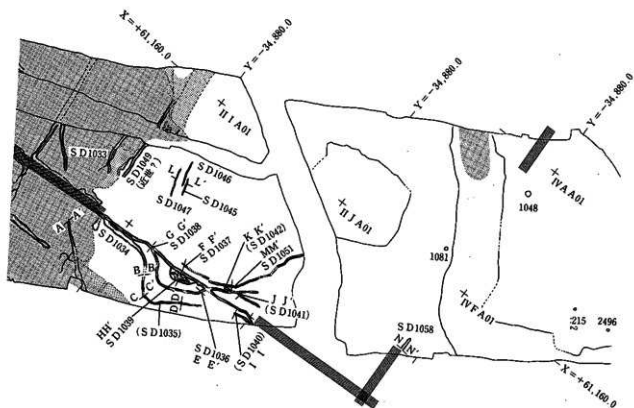
直径約80cmの円形の平面形を呈し、壁はほぼ垂直、底面は平坦となる円筒形の土坑で、検出面から深さ約20cmと浅い。埋土は黄褐色土の単層で須恵器の壺破片と漆破片が出土している。遺物は少量で古代の可能性があるとと思われるが、断定は躊躇される。中世の可能性もある。非常に浅く、性格は不明である。

S K 2383 ③-2区 VVD13 (第212図)

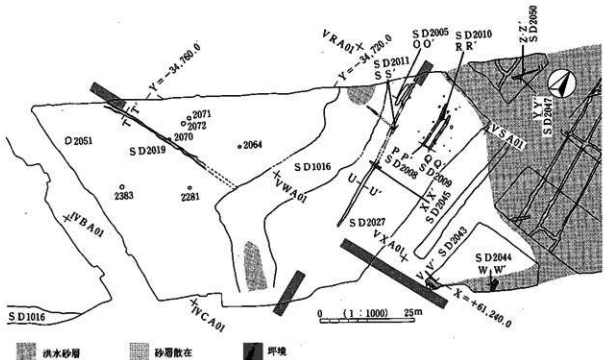
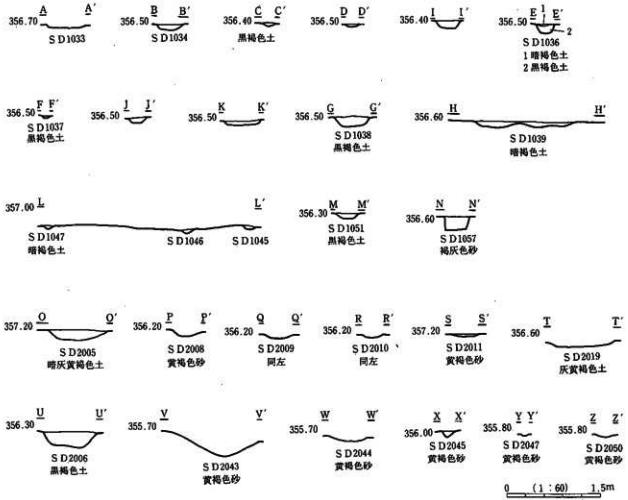
平面形は直径約1mの円形を呈し、検出面からの深さは約50cmを測る円筒形の土坑で、壁はやや斜めに掘り込まれ、底面は平坦である。埋土は黄褐色土で焼土粒などの入り方で分層される。遺物は須恵器杯A破片が少量出土したのみである。古代の可能性もあるが、遺物が少なすぎて断定するには躊躇される。

S K 2496 ⑧-1区 IVAS13 (第212図)

第2面で検出したが、第1面の見落としと思われる。平面形は直径70cmの円形を呈し、壁は垂直で底面は平坦である。検出面からの深さは約89cmを測るが、グメ押し面での検出なので本来はより深いと思われる。埋土は上部の炭化物をまばらに含む黒褐色土、中位の下部に焼土塊をふくむ炭層、下部に粘性の強い黒褐色土に分層され、一定の土の堆積があった後に炭・焼土を投棄したと推定される。出土遺物はわずかな古墳時代の土器片と古代の灰釉陶器片がある。年代は出土遺物から古代の所産の可能性があると推定した。性格は井戸に類する施設であろうか。



第213図 微高地西側古代遺構



第214図 微高地東側古代遺構

(2) 溝跡

溝跡からは少量の遺物しか得られず、埋土と走行方向、切りあいを重視して古代の所産と判断したものが多く、そのなかで、SD2011・2045・2039は古代の所産か判断にまよったが、SD2039は位置的は中世以後の可能性が高いと判断し、SD2011・2045は古代の可能性も想定してここで扱うことにした。また、近世の項であつたSD1049は古代の可能性も残される。これらの溝跡は形状から耕作関連溝、区画溝、用水と思われる3種がある。

埋土は水田域の平安時代耕作土に該当する土層、平安時代洪水砂層、平安時代洪水砂を切る砂層類似埋土の3種類があり、基本土層の堆積順序からすると耕土起源埋土の溝跡→砂層起源埋土の溝跡→砂層を切る砂層起源埋土の溝跡の順が推定される。まず、耕土起源の埋土をもつ溝跡には条里区画に一致する方向と条里区画と異なる走行方向をとる2種の区画溝跡、耕作に関連するとみられる溝跡がある。区画溝は微高地全体に分布するが、ほとんどが条里坪境に該当する場所にあり、微高地西側のみ条里と一致しない方向の溝も多数検出されている。この微高地西側部分での条里と一致する溝、異なる走行方向の溝の関係については配置関係から条里坪境に一致する溝が古く、条里区画から外れて地形に一致する溝跡が後出すると捉えられた。このことから、微高地では当初条里区画がおよんでいたが、洪水前段階までには条里区画とは異なる区画が出現していたことが知られる。ただし、このような複数の溝が確認されたのは微高地西側のみであり、他の地点では一切確認されていない点は注意される。また、低地境付近に位置する洪水砂層を埋土にもつ溝跡は条里区画に一致しており、水田域のあり方に近い。このような条里坪境に一致する溝は他遺跡でも知られているが、本遺跡の場合では区画に関連した施設とみられる以外、具体的な性格は明らかにできなかった。また、調査ではこの坪境に位置する溝跡が水田域にまで延長されていたのかは明らかにできていない。なお、微高地上の条里区画に一致する溝はいずれも坪境となる場所にあたるが、坪境相当位置すべてで溝跡が確認されているわけではない。特に⑤-1区から⑦-2区にかけて推定される南北方向の坪境のラインは低地境でSD1057が検出されたのみで、微高地上では溝跡の検出がない。これはこの坪境ラインが古墳時代SD1016跡の凹地を斜めに横断するようになる地形的な制約から溝が設定されなかったとも考えられる。

次の洪水砂層を埋土にもつ溝は微高地境周辺で検出されている。区画・用水と思われる溝と耕作に関連すると思われる溝がある。前者には低地から微高地に至る境部分で立ち消えるものがあり、これらの溝跡は用水とするには問題も残される。最後に洪水砂層を切る溝跡であるが、明確に把握されたものはSD1033の1本のみである。この溝跡は平安時代の洪水砂層とほぼ類似した埋土を持ち、洪水で埋没した田面の畦を切ることや酸化鉄の集積の有無の観察から洪水砂層上面に構築面があると識別できたことから、洪水直後の所産と推定した。走行方向は条里区画には全く一致しておらず、埋土中には粘土層が一切含まれていないことから、中世の水田耕作土が形成されるまでには廃絶していたとみられる。以下に遺構番号順に溝跡を述べる。

SD1033 ⑦-1・⑥区 IIHE15~NA11 (第213・214図)

微高地西端の低地内に位置し、走行方向からすると⑥区の東西方向の坪境大畦を横断して④区まで及んでいた可能性がある。⑥区では洪水で埋没した水田面の畦を切る溝跡の落ち込みとして検出されたが、⑦-1区の調査区西壁の土層観察から洪水砂の上面まで立ち上がりか確認できたことにより、本溝跡が洪水直後の所産と推定された。走行方向はN-43°-Wでほぼ直線に走り、条里方向とも現水田区画とも一致していない。しかも、洪水以前に先行する溝もなく、中世後も継承されていないので、使用期間は洪水直後のごく限られた時期と思われる。確認できた長さは約46mで、幅は0.5~1.5mを測り、断面形はU字状を呈して検出面から約20cmを測る。底面の凹凸は著しい。埋土は平安時代洪水砂とほぼ同じであるが、酸化鉄

の浸透の違いからろうじて識別できた。出土遺物はない。その性格は用水と思われるが、前後に継続性がないことから洪水以後の復旧に際して臨時に構築された溝と考えられる。

SD1034 ⑦-1区 IIMR02~OA01 (第213・214図、P.L31)

調査時には途中とぎれるように検出され、それぞれSD1035・1040と遺構番号をつけたが、整理段階で同一の溝としてSD1034に統一した。本溝は⑦-1区の微高地西端に位置し、検出層位は平安時代耕作土下面であるが、かなり重機で上面を削平してしまい、一部は底面しか残存しない部分もある。SD1038とは溝底面の高さが異なることから切りあいになると思われるが、埋土が類似しているために前後関係はつかめなかった。しかし、先端がSD1038から始まることからSD1038に後出する可能性がある。本溝跡は⑥区を貫く東西坪境延長上が微高地に入った付近でSD1038から分岐するように始まり、SD1038に少し平行した後に地形に沿うように大きく南東から東北東へカーブし、再びSD1038に沿うように位置する。このラインはほぼ地形変換点をトレースするものと思われる。調査域内で確認した長さは約53mで、幅はもっとも残りのよいところで約1.4mを測る。断面形は立ち上がりの緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは約10cm弱である。埋土は平安耕作土に対応する黒褐色土の単層である。遺物はないが、西端の始点が坪境に一致するSD1038であることや、埋土に洪水砂が含まれない点から条里施行以後～洪水以前の所産と推定され、SD1038に後出する可能性からは条里区画が微高地上まで施行された後地形環境による土地利用状況の違いにより地形変換点付近を区画する溝として構築されたと思われる。性格は道か区画溝ではないかと推定される。

SD1036 ⑦-1区 IINE01~IT17 (第213・214図、P.L31)

⑦-1区の微高地西側南部に位置し、検出はSD1034と同じである。SK1138、SD1029・1030・1031に切られ、SD1038とは埋土が類似したため前後関係は不明である。しかし、配置位置からはSD1038に後出する可能性が高い。また、調査時にSD1042とされた溝跡南端の折れる部分以外は本溝の延長上に位置するため、SD1042の一部を本溝跡に含めた。溝跡の西端はSD1038から分岐するように始まり、SD1034に平行するように走る。その長さは調査区になくて約37mを測り、東先端はSD1031に切られて不明となる。幅はもっとも残りが良い部分で55cm、断面形はU字状で深さは検出面から24cmを測る。埋土は平安時代の耕作土相当層を基本とし、上部の暗褐色土、下部の黒褐色土に分層された。遺物は古代の黒色土器A杯Aの破片1片が出土した。出土遺物・埋土、およびその位置関係からみてSD1034同様に条里施工後に構築されたと推測され、SD1034とは平行することから関連も想定される。その性格は道か耕作地の区画と推定される。

SD1037 ⑦-1区 IINF01~JA03 (第213・214図、P.L31)

⑦-1区の微高地西側南部に位置し、平安時代耕作土下面で検出。調査では当初SD1029に切られるまでをSD1037としたが、後に第2面で検出されたSD1042の折れ曲がる南端部分とSD1041が本溝の延長上に位置することからこの両者を整理段階で本溝跡に含めた。SD1029に切られるが、SD1036との関係は不明である。西端はSD1038からSD1036が分岐する付近北側から始まり、SD1038に平行しながらも若干ずれた方向で直線的に走る。上面は重機削平ミスで底面しか残存しない部分もあり、断片的に残存する部分をつなぐと調査区内では全長約30.5mが推定される。幅は残りのよい部分で約60cm、断面形は緩やかな逆台形を呈して検出面からの深さは約10cmを測る。埋土はやや砂質の黒褐色土が入る。出土遺物はないものの、埋土から古代の所産と推定され、SD1038とはやや軸方向を異にしながらも平行に走ることから関連があると思われる。しかし、地形に合わせて大きくずれるSD1034・SD1036・SD1039とは異なり、本溝跡の位置は坪境に位置するSD1038に近いので、SD1038に近接した時期の所産であると考えられる。なお、SD1038は東西坪境大畦の南辺延長上に位置し、本溝跡は反対の大畦の北辺延長上に位置するとともに

みられるが、東部の方向のずれから時期差があると考えられる。

SD1038 ⑦-1区 IIMN02~OA01 (第213・214図、P L31)

⑦-1区の微高地西側南部に位置する。本溝跡は条里坪境に一致し、その延長先は④区水田大畦南辺にあたるが、本溝跡が水田の大畦下に延長されるかは明らかにできなかった。検出面は平安時代耕作土の下面で検出した。SK1134・1137、SD1029に切られ、SD1034・1036・1039との関係は把握できなかったが、配置関係からはSD1034・1036・1039に先行すると思われる。

溝西端は微高地境付近から始まり、ほぼ坪境位置を東西方向に貫いて長さは調査区内で約54mを確認した。幅は遺存状況の良好な部分で約90cm、断面形は立ち上がりの緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは16cmを測る。埋土は平安時代耕作土を起源とする黒褐色土の単層である。遺物は古墳時代土器小片のほかに古代の須恵器杯、甕などが出土した。出土遺物や位置から古代の条里施工時の所産と考えられるが、その年代の詳細は明らかにできなかった。性格は条里坪境を示す溝と思われ、条里区画がこの微高地にも施行されていたことを示すと思われる。

SD1039 ⑦-1区 IINH02~NL01 (第213・214図、P L31)

⑦-1区の微高地西側南部に位置し、平安時代の耕作土下面で検出。SD1038と切りあいになる可能性があるが、埋土が類似するため、その前後関係は明らかにできなかった。配置位置からはSD1038に後出する可能性がある。SD1038から南側へ分岐するように始まり、半円形のカーブを描いて再びSD1038へ接続する短い溝である。その延長上にはSD1051が存在するが、SD1051が同一の溝跡とは断定はできなかったために別に扱った。幅は最大で約2.6m、断面の形は浅い窪み状で検出面からの深さは約10cmを測る。底面は凹凸が著しく、浅い溝状の落ち込みがあり、周辺にある古代の溝跡とはやや異なった様相を呈している。埋土は暗褐色土の単層である。遺物は無い。埋土から古代の所産と思われ、洪水砂が含まれないことから洪水以前の所産でと思われる。また、位置関係からは条里施工後の所産の可能性があり、SD1034・1036と関連すると思われる。

SD1045・1046・1047 ⑦-1区 IIA11~ID13 (第213・214図)

⑦-1区の微高地上に位置する。各溝は南北方向に走る浅く細い溝であり、3本並列して検出されたことより畝状の耕作痕と思われる。検出面は平安時代の耕作土下であり、SD1045は近世のSD1024に切られる。溝の長さはSD1045が約5m、SD1046が約6.9m、SD1047が約7.8mを測り、途中とぎれたり若干のずれを生じている。おそらく、溝の底面近くのみを検出したと考えられる。幅はいずれも狭く、約10~20cmで断面形はU字状、検出面からの深さは約4cm前後と浅い。埋土はいずれも暗褐色土の単層である。遺物はないが、埋土から古代の所産と推定した。なお、隣接した④区では洪水砂層で覆われた面で畝状遺構が検出されているが、本溝跡との関連はつかめなかった。

SD1051 ⑦-1区 IIN20~JA10 (第213・214図)

⑦-1区の微高地西側に位置する。見逃し遺構を検出するグメ押し面とした微高地基盤の砂層上で検出したが、埋土から上面遺構を見逃したものと思われる。位置的に周囲のSD1037・1039との関連が想定されるが、いずれの溝に連続するのかわからなかったため別に扱うことにした。SD1022・1029・1030・1031に切られる。本溝跡は緩やかなカーブを描きながら、N-30°-Eの方向に走り、SD1036とは平行する。東端は調査域外へ抜けるが、隣接する⑦-2区では対応する溝跡が確認されていない。長さは確認できた範囲で全長27.5m、幅は約40cmで、断面形は緩やかなU字状を呈して、検出面からの深さは8cmを測る。埋土は炭粒の混じる黒褐色土の単層である。遺物は弥生土器小片、古墳時代土器小片がある。本溝跡は埋土および、SD1036と類似した方向に走ることから古代の所産と考えられるが、条里区画とは異なった走行方向であり、SD1034・1036・1039と関連すると思われる。

SD1057 ⑦-2区 IIJS10・JS11 (第213・214図)

⑦-2区の南西低地で古墳時代包含層調査中に検出した。埋土は砂層で、古墳時代に対比される砂層が見られないことや、坪境に一致する位置に該当することから平安時代洪水時の遺構と推定した。SK1145に切られる以外に切り合いはない。北端は微高地境付近で検出され、ほぼ南北に走って南端は調査域外へ延びる。調査域内ではほぼ3.5mを確認したのみである。幅はほぼ一定して約60cmを測り、断面形は緩やかな逆台形で検出面からの深さは約10cmを測る。底面はやや凹凸があるが、南へ緩やかに傾斜する。遺物は弥生土器や古墳時代土師器がある。本溝跡は平安時代の洪水前の坪境に一致した場所に構築された溝跡と捉えられる。ただし、他の微高地で検出された坪境の溝と異なり、微高地上までは延長されておらず、しかも洪水時には開口していたようである。そのあり方は水田域に関連した溝として捉えられる可能性があるが、先端が微高地部分でとぎれることから低地から微高地境まで設定された用水か、区画の溝と考えられる。

SD2005 ⑤-2区 VRI01・04 (第214図)

微高地東側の低地境よりに位置する。古墳時代のSQ2016上面に残る平安時代耕作土が切れるあたりで検出した。埋土は平安耕作土と類似することから本来は耕作土下面にあった溝と思われる。SD2006とはほぼ平行して南北方向に走り、幅約1mで長さ約6.8mを測る。断面は緩やかなU字状を呈し、検出面から18cmを測る。埋土は平安時代耕作土に類似する暗灰黄褐色土の単層である。遺物はSQ2016を切るため古墳時代土師器を多く混入し、古代の土器では須恵器甕が出土している。埋土と出土遺物から古代の所産と推定され、条里坪境に一致するSD2006と平行することから関連するものと思われる。ただし、本溝跡は非常に短く、SD2006と異なる様相もあるが、性格の違いは明らかにできなかった。

SD2008 ⑤-2・⑩-1区 VMI20~WK02 (第214図、P L30)

微高地東側の低地よりに位置し、条里南北坪境に一致する。⑤-2と⑩-1区に分割調査され、⑩-1区ではSD2027と別番号が付けられたが、整理段階で同一の溝であることが判明したのでSD2006に統一した。本来の検出面は埋土から平安時代耕作土下面と見られるが、⑤-2区では中世SD2007の壁で断面がかかって検出されたことから検出面を誤認し、断面から拡張して調査してしまった。SQ2016を切り、中世SD2007・2011・2013に切られる。SD2045、SK2542・2543・2549との前後関係は不明である。溝跡は幅約50~80cmでほぼ南北方向に直線的に走り、北端はSD2013に切られる部分以北は不明となるが、南端は⑩-1区内の水田域から想定される東西坪境交差付近で消える。調査域のなかでは約44mの長さを測り、断面形はU字状で検出面から約24cmを測る。埋土は黒褐色の粘性の強い土でSQ2016を切るために焼土や大量の古墳時代土師器が含まれる。古代の須恵器杯と古墳時代土師器が出土している。本溝はSD2019・1038同様に微高地における坪境を区画する溝で、平行するSD2005も本溝と関連すると思われる。

SD2008・2009・2010 ⑤-2区 VMN20~RP08 (第214図、P L30)

SD2008~2010は⑤-2区の微高地東端に位置し、南北方向の構接平行する3本の短い溝跡である。相互に関連した溝と見られるので一括して扱う。検出はSQ2016上面の平安耕作土層上面である。この面では切り合う遺構は検出されていないが、下面の古墳時代SQ2016調査後にSD2008と重複する位置でSK2541、SD2009下ではSK2546・2537・2547・2554が検出された。これらの土坑は形状から柱穴跡と思われる。分布の範囲や配列の仕方から条里施行後の所産と推測されたことから本溝跡との関係が問題になった。SD2008~2010検出時にはこれらの柱穴跡の存在は確認されていないが、本溝跡が非常に浅く埋土の残存状態が悪いため、上面で柱穴跡を見逃した可能性もある。しかし、整理段階では判断がつかなくなったので、溝跡検出時の所見を尊重し、柱穴跡は本溝跡に切られるものと考えた。溝跡はいずれも幅約30~60cmと一定しており、長さはSD2008が約12.4m、SD2009は約10.5m、SD2010は約2.4mである。深さは検出面

から4cm前後と非常に浅く、底面は細かな凹凸がある。埋土は平安時代の洪水砂と思われる黄褐色細砂の単層で、遺物は古墳時代土師器がわずかに得られたのみである。埋土から平安時代の洪水直前の所産で、形状からは畝跡、もしくは道の側溝ではないかと思われる。

SD2011 ⑤-2区 VRF06~RK07 (第214図)

⑤-2区北東部に位置する。底面近くが断片的に検出されたのみだが、残存部をつなぐと最低10mの長さが確認される。SD1016・2006を切るが、SK2543との関係は不明である。埋土は黄褐色細砂の単層で、出土遺物はない。埋土が平安時代洪水砂層に類似するため、古代の所産と考えたが、近世の用水である可能性も残される。幅は最大40cmで検出面から最深部まで約4cmである。

SD2019 ⑤-2・⑧-2・⑩-1区 VRF06~RK07 (第214図、P.L30)

微高地中央部の東西坪位置にある。調査は⑤-2・⑧-2・⑩-1区の3地区にわたり、初年度調査の⑤-2区から⑩-2区までは連続して調査されたが、次年度の⑩-1区ではその延長上にある石集中として検出されている。⑩区での検出状態が異なるものの、位置的に一致することからほぼ同一の溝跡と捉えた。長さは確認できたところで約44m測り、西端は調査区外へ延長され、東端は⑩-1区内のSD2001に切られた先が不明となる。なお、東側延長先には水田域⑩-2区のSD2043が位置する。SK2493・2494・2879を本溝跡が切り、SD2022・2001、SK2462・2463・2158に切られる。幅は中央部が約30cmと狭く、両端で1m強と広い。断面形は立ち上がりの緩やかなU字状を呈し、底面はやや凹凸がある。深さは検出面から6cm前後である。埋土は灰黄褐色の粘性の強いシルトで、遺物は古墳時代土師器小片、古代の須恵器杯片がある。本溝跡は微高地域での坪境位置に構築された区画溝である。

SD2043 ⑩-2区 VXF02~XH01 (第214図)

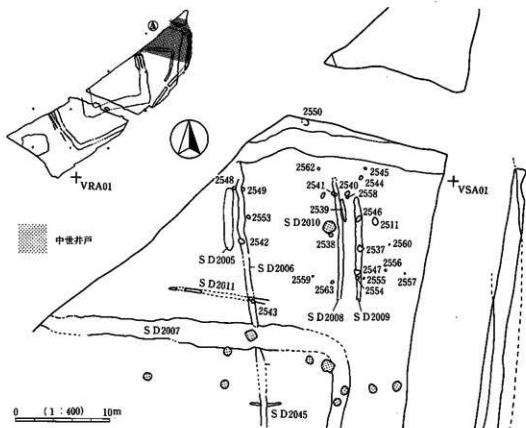
微高地東端先の低地にあたる⑩-2区地区の平安洪水砂層下で検出したが、調査地区南端で極一部が調査されたに過ぎない。切り合いはなく、埋土は平安時代洪水層で埋められている。溝跡の位置は東西坪境に一致し、西側延長先の同一ライン上にはSD2019がある。幅は約1.8mで断面形は非常に緩やかなU字状を呈し、壁や底面は凹凸が著しい。調査区壁の断面でみると水田面からの深さは38cmを測る。遺物はない。平安時代洪水直前の遺構と捉えられるが、SD2019が延長先にあることからその構築は条里施行時に遡る可能性がある。ただし、SD2019との中間には空白地帯があり、SD2019も洪水時には埋没していた可能性があることから同一の溝とは捉えられない。性格は用水とも思われ、調査が及んでいない市道下に連続する溝跡があった可能性もあるが、SD1057のように微高地に入る部分で立ち消える可能性も残されており、そうした場合は用水以外の性格を想定すべきなのかもしれない。

SD2045 ⑩-1区 VRJ12~RK12 (第214図)

⑩-1区の第1面で検出。SD2006 (調査時SD2027) 調査後に検出され、位置的にSD2006と直交するものの、切り合いは不明である。幅約20~40cm、長さ約3.4mで東西に走る。埋土は暗褐色の弱粘性土の単層で、遺物は古墳時代土師器片しかない。調査時には古墳時代の遺構とされたが、走行方向と埋土から古代以後の所産と考えた。SD2006との切り合いが判然としないため、年代の詳細は不明である。

(3) 柱穴群 (第215図)

微高地東端に位置し、平安時代の耕作土該当層下にある古墳時代SQ2016調査後に検出された。その分布範囲はSD2006を西限とし、SD2008~2010周辺までの間に分布する。調査時には検出面から古墳時代の遺構と捉えたが、整理時に分布と配列を検討した結果、ほぼ条里方位に近い方向に配列するとみられたことから古代以後の所産であろうと推測した。しかし、SD2006と重複するSK2542・2543・2549は前後関係が判然としないものの、SD2008と重複する位置にあるSK2541、同様にSD2009と重複する位置の



第215図 微高地東端部柱穴群

SK 2546・2537・2547・2554は上層のSD 2008～2010検出面では検出されていなかった。SD 2008～2010自体が非常に浅い溝なので、柱穴跡を見逃した可能性もあるが、ここでは調査所見に従って古代の可能性のあるものとして扱うことにした。なお、上記の所見からは、SQ 2016を切り、SD 2008～2010に切られ、SD 2006との関係は不明である。また、SK 2538は中世のSK 2038に切られる。

柱穴跡とみられるのはSK 2511・2537～2560・2562・2563の27基である。この内、SK 2551・2552はSD 2013岸に並列し、内部から木材片が出土しているのでSD 2013に関連した杭跡の可能性もある。柱穴跡の配列はSD 2006とほぼ同じ方向で重複・近接してSK 2548・2549・2553・2540・2543があり、その東側には柱穴がややまばらとなってSD 2008～2010周辺に同方向でSK 2562・2539・2541・2538・2563・2545・2544・2540・2558・2546・2537・2547・2554・2555・2511が分布する。その東側にはSK 2560・2556・2557といった小規模な柱穴が散在する。この配置から具体的な構築物を明かにできなかったが、掘立柱建物跡になる可能性がある。柱穴跡の直径は約30cm以上の比較的大きめのものが多く、一部に直径20cm内外の小型のものがある。埋土はSQ 2016と重複する場所にあたるため、SQ 2016埋土の焼土粒・炭化物を多量に含む。色調は褐色・暗褐色が多く、SK 2547・2555・2560が赤褐色、SK 2554・2556・2557・2559・2560が赤灰色土を呈する。出土遺物は古墳時代の土師器以外はない。本遺構群は古代の可能性があると捉えたが、微高地の他地点では同様の古代遺構は検出されておらず、立地場所も微高地境に近いなどやや問題もある。

3 微高地出土古代の焼物

ここでは7世紀後半～11世紀の微高地出土焼物を扱うが、概要については水田域を含めて記述することにした。古代焼物は出土量が少なく、概略の分類や名称に関しては勤労県野理蔵文化財センターの松本平での報告¹⁰⁾の範疇に入るとみられるため、記述はこれに準じている。該当する年代の遺物は低地域・微高地から総数約2213点が得られたが、集落遺跡に比べてはるかに出土量が少なく、しかも破片出土が多いため、良好な一括資料と認められる資料は一部しかない。さらに、当地域の古代土器様相が現時点では部分的にしか知りえない状況なので、整理では遺跡出土焼物の型式や器種の詳細を明らかにすることは難しいと考えた。そこで、器種・型式の詳細は個別の土器の実測図などを参照していただくこととして、全体的な出土状況や出土層位・地点ごとの違いを数量的に把握することに重点をおくことにした。そのため、統計処理上の便宜を優先し、松本平の分類に換りつつも、やや大雑把な分類方法を採用している。以下に古代の水田・微高地出土の古代焼物の概要と微高地出土焼物について記述するが、上記のような理由から詳細な分類とはいえないところがあるので注意されたい。なお、計測方法については、第5節5を参照されたい。

(1) 出土焼物の概要

ア 焼物種

今回の調査で得られた古代焼物の焼物種には土師器・黒色土器・須恵器・灰陶器・緑釉陶器がある。

A 土師器

酸化炎焼成の明褐色を呈する土器で、基本的にロクロ調整される。器種は碗・杯・甕・羽釜がある。出土量自体は非常に少なく、しかも小破片が多いため内黒の摩滅したものと識別困難なものも多い。遺跡内の出土状況では相対的に水田域では少なく、微高地のほうがやや多い。これは使用状況によるものではなく、遺物採取された土層や調査された遺構年代などの調査方法に起因するものである。

B 黒色土器

器面を磨いて炭素を吸着させた酸化炎焼成の焼物で、県内では内面のみ黒色処理される黒色土器Aと内外面黒色処理される黒色土器Bの2種が知られる。今回の調査では内面黒色処理したもののみ出土している。器種は杯・碗・皿・鉢などの食膳具のみが知られる。なかでも杯Aがもっとも多く、碗は少量、皿・鉢は非常にわずかである。ただし、口縁部・体部破片は杯・碗の区別がつかないため数量計測では杯碗として1項目挙げている。基本的にロクロ調整で、非ロクロ調整黒色土器は水田域SD3002で1片あるが、これは形態から古墳時代後期の所産と考えられる。この黒色土器は出土土器のなかで須恵器に繼いで出土量が多いが、これはもっとも盛行する時期である9世紀前後の水田が調査されていることによる。

C 須恵器

還元炎焼成の焼物で、本遺跡内ではもっとも出土量が多い。一般的に青灰色・灰色を呈するものが多いが、焼成不良で部分的に明褐色を呈するものや、灰色軟質の軟質須恵器と識別が難しいものも一定量含まれる。前者の明褐色を呈する須恵器は底部へら切りの杯Aや甕があり、8世紀代の個体に比較的多い。その焼成はきわめて不安定で意図的な焼成とは考え難いが、複数器種に渡って一定量存在するので同一の須恵器窯からの一括搬入されたもので、その供給元の窯の焼成技術上の条件によって発生したものとも思われる。後者は9世紀後半のいわゆる軟質須恵器に類似した焼成で杯Aと杯Bがあり、貯蔵具は見られない。この軟質須恵器に近い須恵器は杯A・Bともに底部は回転糸切り痕を残し、形態的にも後出すると見られ、年代的にも軟質須恵器に近い所産と思われる。しかし、焼成は軟質須恵器ほど安定的ではなく、その識別

は難しい。このような多様な焼成状況の須恵器があるが、感覚的ながら時期ごとに一定の傾向があるようだ。すなわち、8世紀初頭では少量の比較的硬質の須恵器、8世紀前半ではやや焼成不良の部分的に明褐色を呈する須恵器群、それ以後は硬質で安定的な焼成の須恵器群を主体とし、9世紀では軟質化する食膳具を中心とした須恵器と硬質な貯蔵具類に分離しているようである。これらの須恵器の産地については胎土分析を行っていないため詳細は不明であるが、上記の様相からは複数産地からの搬入で、しかも時期ごとにその産地が変化している可能性もある。なお、全般的に類似した胎土ながら、遺跡内でもかなり異質な胎土の須恵器も僅かにある。それは微高地で出土した内外面を格子タタキされる甕で、全く異なった産地からの搬入品の可能性がある。また、美濃須恵産の須恵器は出土していない。

須恵器の器種には杯A・杯B・蓋・高坏・甕・壺などの多岐にわたる器種を含む。食膳具・壺類は基本的にロクロ調整で作られ、甕類は胴部タタキ調整である。

D 軟質須恵器

灰白色や灰色を呈し、黒斑も観察される軟質の須恵器で、松本平では軟質須恵器と呼称された焼物である。広義には須恵器の範疇に入ると思われるが、器種は杯Aしかなく、黒斑をもつことや内面体部が明瞭な屈曲をもたずに滑らかに立ち上がる器形となる点で一般的な須恵器と違いがある。本報告では焼物種としての位置付けはできなかったが、上記の須恵器との違いに加え、本遺跡の洪水時期に前後する9世紀後半に限定的に出現するとされることから、あえて1種の焼物として呼称することにした。なお、類似した焼成のやや軟質の灰色焼成の須恵器があるが、これは焼成がやや不安定なもので他の須恵器との識別が難しいこともあり、須恵器に含めている。器種は杯Aのみであるが、水田域では一定量みられる。

E 灰釉陶器

出土量はわずかで、出土した器種も碗・皿・長頸瓶類と限定的である。この様相を中・南信濃の集落遺跡と比べると、本遺跡では量も種類も圧倒的に少ない。産地は瓶類に狼投産と思われるものが含まれるが、碗はほぼ東濃産で占められ、光ヶ丘1号窯式、大原2号窯式、虎渓山1号窯式などがある。このなかでは光ヶ丘1号窯式が水田域を中心にもっとも多くみられ、大原2号窯式は水田・微高地、虎渓山1号窯式は微高地を中心に少量ある。また、黒笹14・丸石2号窯式と思われるものはなく、大原10号窯式か西坂1号窯式とも思われるものは中世に含めた。上記の様相から時期ごとに搬入される量や種類に偏りが見られるが、もっとも出土量の多い光ヶ丘1号窯式も、生産時期に前後する洪水で埋没した水田で比較的丹念に遺物採取を行なった結果によるとも思われるので、単純に北信地域の一般的な搬入傾向としてはみられない。

F 緑釉陶器

わずかに4点の緑釉陶器の碗が出土している。摩滅するものが多いが、濃緑色とやや黄緑色の発色のものがある。このうち、濃緑色の発色のものは青灰色のやや硬質のもので、表面は磨滅しているため調整方法は不明である。

(2) 器種

A 食膳具

食物を盛る器類と捉えたもので杯A、杯B、碗、皿、鉢、高坏、蓋を一括した。遺跡内ではもっとも出土量が多いが、なかでも杯Aは水田域において突出した量を誇る。その一方で皿・鉢・高坏は非常に少ない。

A 杯A

平底で口縁部が開く器形で須恵器・軟質須恵器・土師器・黒色土器Aがある。遺跡内ではもっとも出土量が多い器種で、食膳具の大部分を占めている。ただし、口縁部・体部破片では須恵器杯B、黒色土器A・

土師器の柄との識別が困難なものがあり、数量計測の上では識別不能な破片はそれぞれ杯と杯柄と呼称して別に扱った。しかし、その底部破片数をもとと杯Aのほうが多く、識別ができなかった破片も大部分は杯Aとみられる。この杯Aは古代において通時的に見られる器種ながら、非クロコ土師・黒色土器A・須恵器→須恵器→須恵器・黒色土器A→黒色土器A・土師器→土師器へと主体になる焼物種が時期的に変化していくことが知られる。今回の調査では水田域において杯Aが圧倒的な量を占め、しかも洪水時には完形で水田面に置かれるケースも確認できた。このように杯Aが特定の目的で主体的に使用される様相が推測されるなかで、洪水前後の時期に軟質須恵器では杯Aのみ生産されることは興味深い。つまり、杯Aが大量に使用された洪水前後では杯Aの使用法や使用量が変化しているために、大量生産を指向した軟質須恵器のような杯Aを専門的に生産する焼物が生れたとも見られる。詳細は今後の検討によりたい。

なお、須恵器杯Aは底部調整にへら切り、回転糸切りの2種あり、さらにへら切り後にナデ調整、手持ちへら削りが施されるものが少量ある。微高地ではへら切りが回転糸切りよりも多く出土し、水田域では逆に回転糸切りが多い傾向がある。また、土師器・黒色土器A・軟質須恵器はすべて回転糸切りである。これらの杯Aは先学の検討によって、時期ごとの底部調整を始めとした調整方法・形態変化が明らかにされており、個別の焼物でもある程度の年代の推定は可能であるが、本遺跡ではほとんどが小片で個別の年代を決めかねるものも多い。

B 杯B

すべて須恵器である。体部下半で屈曲して比較的急傾斜で口縁部が立ち上がり、底部には高台が付けられる器形となる。一般的には蓋が付くと考えられるが、必ずしも蓋の出土量と一致していない。遺跡全体のなかでは一定量見られるが、出土数は杯Aに比べると少ない。この杯Bでは複数法量が知られるが、今回の調査のなかでは詳細な法量種を明らかにできなかった。底部調整は回転へら削りされるものが多いが、底部中央に回転糸切りを残して周囲を回転へら削りされるもの、回転糸切りのみのもの、あるいはナデ調整されるものがある。時期ごとに法量種、あるいは高台の形態、底部調整などが異なるとされるが、本遺跡の場合破片出土が多く、個別土器では年代を決めかねるものが多い。そのため、大雑把にしか年代推定ができなかった。

C 蓋

須恵器のみがあり、端部が折返されて頂部には宝珠のつまみがつく形態のものと、端部内面に受けが作られる2種の形態がある。後者は1点のみで前者のほうが主体である。遺存状態はあまり良好でなく、しかも蓋の多くは杯Bに伴うものと考えられているものの、杯Bの出土量より少ない。なお、相対的に古い形態と思われる端部が単純にL字状に折れるものは少なく、後出する器高が高く端部の屈曲が「く」の字となるものが多い。

D 皿

長野県内では皿は灰釉陶器・緑釉陶器の他に、9世紀後半代に高台をもつ灰釉陶器模倣の黒色土器A・B、須恵器、平安後期に土師器無高台皿が知られている。北信ではこれらの皿に加えて端部が内湾する土師器の無高台皿などのやや異質な形態の皿が存在する。今回の調査では灰釉・黒色土器Aの皿のみが確認されたが、水田域では出土量が僅かであり、微高地でも若干の灰釉陶器皿が見られるのみで、本遺跡内ではあまり使用量が多くないと思われる。しかし、長野市教育委員会調査地点⁽¹¹⁾の水田域では完形の灰釉陶器皿が認められているので、地点によっては若干出土傾向を異にすると思われる。

E 柄

柄には灰釉陶器と緑釉陶器、黒色土器A、土師器がある。焼物種では黒色土器Aが主体を占め、少量の灰釉、わずかな土師器と緑釉陶器がある。ただし、この焼物種組成は黒色土器A柄の盛行する時期にあた

る洪水砂層前後の遺構を集中的に調査している結果に起因するものである。出土状況を見ると洪水砂層で覆われた水田面では杯Aが完形で出土した例はあっても、椀の完形・略完形出土はない。この理由は判然としないが、杯Aとは使用方法、あるいは時期的な使い分けがあったことによるものだろうか。なお、在地産椀の形態は基本的に灰釉陶器の模倣と考えられ、直線的に体部が立ち上がる形態と腰の張る2者が知られるが、今回の調査のなかでは前者が圧倒的に多く認められる。また、平安時代後半の小椀は③区の水田域内の中世溝周辺で1点出土しているのみである。

F 鉢

平底の深い形態であるが、該当する遺物は黒色土器Aの底部破片が僅かに採取されたのみである。本遺跡内では出土量が非常に少ない。

G 高坏(盤)

須恵器がある。脚部破片が多く、口縁部の形態まで知りえたものは僅かしかない。脚部の部分的な破片では盤・高坏の識別が出来なかったものも多く、ここでは須恵器高坏として須恵器盤も含めて扱う。水田域、微高地で出土しているが、数量は非常に少なく、水田域の場合は摩滅するものが多い。

H 盤

高台をつけた土師器の鉢状の大型器である。破片数計測のなかでは出土量が非常に僅かなのでその他の項へ入れている。全体の形態が知りえたものはなく、部分的な破片しか得られていない。須恵器では高坏とみられるものもあるが、ここでは土師器を指すことにする。口縁部の形態が判明したものでは端部に面取りを行なうものが1点出土した。

I 貯蔵具

壺と甕がある。水田域では非常に出土が僅かであるが、微高地では一定量の出土がある。しかし、微高地出土のものは接合しない体部破片が多いものの、類似した破片も多く見られるため、実際の個体数とすれば破片数よりかなり少なくなる可能性もある。

A 壺

須恵器・灰釉の長頸瓶、須恵器の短頸壺、灰釉陶器の広口瓶がある。さらに須恵器長頸壺では卵型胴部のもので胴部肩が明瞭に屈曲する形態の2種がある。この他にロクロ調整で底部脇がへう削りされる須恵器小型壺類底部破片、肩の屈曲する小型の須恵器壺破片がある。出土状況は水田域では長頸瓶・壺、短頸壺、微高地では体部肩の屈曲する長頸壺・灰釉広口瓶がある。いずれもロクロ調整であるが、全体の形が窺えるものはない。

B 甕

須恵器のみである。用途上では灰釉広口瓶もこの器種に含めるべきところであるが、破片では長頸瓶との識別が難しい個体が含まれるため、数量計測では広口瓶は上記壺類に含めた。なお、微高地では出土破片数が比較的多いが、類似した破片もあり、しかも甕自体が大型なので実質的な個体数は少ない可能性がある。甕には四耳壺・大甕・横瓶・鉢型があるが、いずれも小破片である。全体の形がある程度推測できるのは水田域③区の大畦周辺で出土した四耳壺のみである。これは周囲から略完形の杯Aの出土もあることから意図的に設置されたものと考えられる。また、8世紀代かそれ以前と思われる横瓶、あるいは鉢型の甕は微高地域での出土が多い。

この甕類は口縁部がロクロ調整で、胴部は基本的にタタキで調整される。底部はほぼ平底である。タタキの種類は格子・平行タタキがあり、内面の当て具は石・青海波・格子がある。また、内面にはナエ調整を行なったと思われるものやカキ目痕が観察できるものもある。なお、内外面格子タタキで胎土もやや異質な須恵器甕破片が微高地から出土している。古代の所産か迷ったが、中世の所産とは考えにくく、古墳

時代遺構では出土していないことから古代の所産と考えた。産地は不明ながら、一般的に見られる須恵器器とは異なった産地から搬入されたものと思われる。

ウ 煮沸具

土師器の甕・小型甕・羽釜がある。その出土量自体は非常に少なく、居住遺構が検出されていないことを考えれば当然とも思われる。

A 甕

甕は全体の形を知りえたものはないが、口縁部は「く」の字に屈曲し、胴部が長い形態になると思われる。調整は口縁部～内面がロクロ調整され胴部下半にタタキが認められるものと、非ロクロのものがある。前者は微高地で少量確認され、後者は水田域S D 3002出土で1点のみの出土であるが、後者に関しては古墳時代後期の所産の可能性もある。

B 小型甕

これも出土数が少なく、しかも全体の形が窺えるものはない。磨滅したのも多く、識別できたものは結果的に底部破片が中心となった。ロクロ調整され、外底面に回転糸切り痕が見られる。

C 羽釜

微高地の中世遺構に混入して出土している。完形になるものはない。識別は胴部分・口縁部によったため、胴部破片は識別できていない。ロクロ調整されるものが知られる。

エ その他

表面に格子タタキを施す瓦と思われる小破片1点が出土している。出土遺構は中世の館堀内で古代の所産か問題も残る。ここでは、出土数量の少なさは積極的に中世とは判断できないため、古代で扱うことにした。

(3) 微高地域の出土遺物

調査地区内では中央の④・⑤・⑦・⑧・⑩区におよぶ微高地と⑥区の一部にかかる微高地の2か所がある。この両微高地ともに後背低地内の小微高地と考えられるが、中央部の微高地で若干の遺物が検出されたものの、いずれも古代と断定できる居住遺構は検出されていない。これらの微高地では比較的多くの古代遺物が採取されており、ここでは大きく⑥区の微高地と中央部の微高地に分離して記述する。

ア 南西微高地 (第320図)

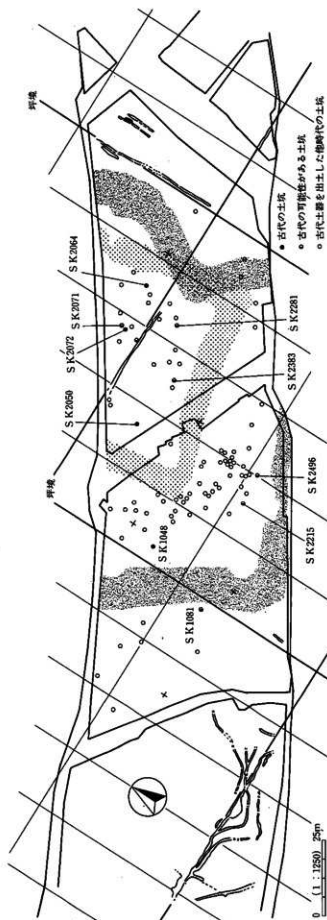
この微高地は⑥区の南西端で低地に面した先端部が検出された。ここでは60点の古代土器が得られ、⑥区微高地4層から出土したものと弥生時代遺構に混入したものがある。焼物組成は須恵器61.8%、黒色土器A21.7%、軟質須恵器3.3%、土師器10%、灰輪陶器3.3%で、用途別では食膳具78.4%、貯蔵具16.7%、煮沸具5.0%である。この組成のあり方は中央の微高地よりもむしろ水田域のあり方に近い。食膳具内で約61.7%を杯Aが占め、内訳は須恵器55.4%、黒色土器A20.7%、軟質須恵器6.9%、土師器6.9%となる。軟質須恵器がやや低率であるが、全体的にはこの組成も水田域と類似する。遺物の年代幅は底部がへら切りされる8世紀の須恵器杯Aから10世紀後～11世紀前半の虎渓山1号窯式灰輪陶器までがあるが、須恵器杯Aの底部調整は回転糸切り6点、へら切りが1点となることなどからも8世紀後半～9世紀の所産が主体になると思われる。図示した遺物は1が黒色土器A、2・3が須恵器杯A、4・5・7が須恵器杯B、6が黒色土器椀、8・9が灰輪椀である。8は大原2号窯式、9は虎渓山1号窯式に比定される。

イ 中央微高地

この微高地は調査域中央部に位置して中世館・古墳時代特殊遺構が検出されている。その範囲は④・⑤・⑦・⑧・⑩区におよび、比較的広い面積を調査したが、古代の遺構は土坑敷基と溝跡数条、古代の可

能性がある柱穴若干があるのみで遺構密度はそれほど高くない。また、この微高地では低地境を除く部分では低地に対応する土層が認められなかったため、古代土器の多くは古代の遺構と古墳時代・中世以後の遺構に混入、あるいは検出面で採取された。ちなみに出土地点別の内訳は古代遺構出土48点で微高地域全体の約4.9%、他時代の遺構混入が681点で約70.5%、検出面・出土地点不明が237点で約24.5%である。この数値からは古代遺構出土物が非常に少なく、そのほとんどが他時代の遺構混入土器であることが知られる。そのために遺構の時期認定には非常に苦慮したが、古代遺構に帰属しない土器が多数みられることは水田域同様に掘り込みを伴わない遺構外での土器使用が多いことによるのかもしれない。また、混入や帰属する遺構が不明なものも多く、年代幅がかなりある点から全体的な数量比を示しても意味を成さないと考えられる。ここでは低地域との比較のため全体的傾向を述べるに留める。

微高地全体から得られた古代土器は約966点ある。この数値は調査面積比でみると水田域よりもはるかに多い。焼物種組成は須恵器68.3%、黒色土器A14.2%、軟質須恵器0.2%、土師器9.4%、灰釉陶器7.5%、緑釉陶器0.3%である。水田域と比較すると須恵器が高率ながら、土師器、灰釉陶器が若干多く、黒色土器A、軟質須恵器が相対的に少ない組成となる。水田域のように時期幅の限定される土層出土と違い、微高地では水田域よりも時代幅のある土器が含まれるが、上記の全体的な焼物種組成



第216図 微高地域古代土器出土土坑分布

を大きく違えるまでにはいたっていない。特に、洪水砂以後にあたる平安後期の土師器・灰釉陶器が微高地では水田域より多く採取されたが、それほど顕著な存在ではない。従って、水田域同様に洪水で埋没した時期以前での土器使用が多かったことが反映されていると見られる。ただし、後述するように微高地域では8世紀の遺物が比較的多い点は注意され、須恵器の比率が水田よりも高率になる理由もそこにあると思われる。

用途別の組成では食膳具586点で60.5%、貯蔵具339点で35.1%、煮沸具が32点で3.3%である。この組成を水田域と比べた場合、食膳具が優位であることは共通するが、貯蔵具の占める割合が比較的高く、煮沸具も低いとはいえ一定量認められる点異なる。なお、食膳具の組成は杯Aが約22.2%、杯Bが9.0%、碗は17.4%、皿は2.4%で、その他にはわずかな高坏や、杯A・B、碗・杯の区別がつかなかったものがある。やはり杯Aが水田域同様に高率を占めるが、焼物種別の内訳は須恵器が52.3%、黒色土器A29.9%、軟質須恵器0.2%、土師器16.9%となり、土師器がやや高い点で水田域よりも後代の土器が含まれる傾向が表われている。また、須恵器杯Aの底部破片で調整をみるとへら切り31点、回転糸切り25点、へら削り調整3点で、8世紀の所産のものも多いことが知られる。以下に古代遺構出土・他時代の混入出土・検出面その他に区分して述べる。

A 古代遺構出土焼物

古代の遺構出土は48点しかない。この内、遺物を出土した溝跡はいずれも洪水砂層が含まれず、水田耕作土相当層が埋土となり、洪水以前の所産と考えられるものである。土坑については基本土層との関係は明確に把握されていないが、出土土器からすると洪水前後の所産が多いと思われる。なかでもSK1048・2064は大型の破片が含まれ、出土量も多い。ここではSK1048・2064・2070・2072、SD2006・2019出土遺物を図示した。これ以外に古代遺構で出土した焼物があるが、非常に小破片なので図化していない。

a 土坑跡 (第321図)

SK1048 比較的まとまった古代土器を出土し、須恵器蓋1点、黒土器A杯碗3点、碗4点、土師器碗1点、甕1点、土師器盤1点がある。この内、蓋・甕・土師器盤は小片である。食膳具が多く、しかも圧倒的に黒色土器が多い。須恵器がほとんど含まれない点や、杯Aでなく碗が多い点も注意される。図示したのは9点あり、1が土師杯、2・3は黒色土器の碗か杯、4～8は同碗、9が土師器の盤である。これらの焼物は洪水前後の9世紀後半ごろの所産と思われる。

SK1081 黒色土器碗1点がある。

SK2050 図示した土師器甕しかない。ロクロナデされ、口縁部の屈曲は弱い。

SK2064 比較的出土した焼物が多い。黒色土器杯A1点、同壺1点、甕1点、軟質須恵器杯A1点、灰釉陶器皿1点、須恵器長頸壺1点がある。1は黒色土器A杯A、2は軟質須恵器杯A、3が灰釉陶器碗、4が須恵器長頸壺である。完形土器はないが、遺存度は比較的高い。碗はあまり顕著でないが、9世紀後半の様相を示していると思われる。

SK2070 図示したもののみ出土した。1は底部を回転へら削りする須恵器杯Bである。

SK2071 須恵器杯1点、須恵器壺1点、黒色土器A碗1点がある。小破片で図示していない。

SK2072 1は土師器杯で口径12cm前後を測り、2は腰の張る黒色土器A碗、3はロクロナデされる甕類の底部と思われる。遺物量は少ないが、全体的に10世紀に入る様相と思われる。図示した土器のほかは須恵器杯1点がある。

SK2215 須恵器杯A1点、杯B1点、壺1点、甕1点がある。この組成から比較的古い様相を示すと考えられ、8世紀の可能性もある。図示したのは須恵器杯Aである。

SK2281 図示していないが須恵器の壺1点がある。

SK2383 図示していないが土師器甕1点がある。

SK2496 図示した灰釉陶器碗が1点ある。

b 溝跡 (第321図)

SD1036 図示していないが黒色土器A碗杯の破片が1片出土している。この溝跡は洪水以前の所産と推定されるが、条里区画に一致せず、地形に合わせて構築されている。出土遺物は小片で非常に心元ないが、この溝跡は黒色土器A土器出現以後の8世紀末～9世紀の洪水以前の所産であると考えられる。

SD1038 条里坪境に一致する溝跡で洪水以前の所産と推定される。出土遺物は須恵器杯A1点、須恵器甕2点あるが、いずれも小破片で溝構築時に混入した遺物と思われる。従って、これのみでは年代推定することは難しく、溝跡は須恵器杯の盛行する8世紀から洪水直前の9世紀後半までの所産としかわからない。

SD2006 微高地東側の条里坪境に一致する溝跡で、洪水砂は埋土に含まれない。須恵器の甕片が6点と杯A1点が出土したが、いずれも小破片である。杯Aを図示した。底部はへら切りである。

SD2019 坪境に一致する溝跡である。出土焼物は図示した須恵器の杯A1点のみである。体部は直線的に開き、底部は回転糸切りである。9世紀初頭ころの所産であろうか。

B 他時代の遺構混入古代焼物 (第322・323図)

ここで扱う土器は681点で、微高地で出土した古代焼物の約70.5%が該当する。したがって、微高地全体の土器組成では、この他時代遺構出土土器が組成傾向を代表してしていることになる。そのほとんどが中・近世遺構に混入したものであるが、一部に明らかに古墳時代の遺構に混入したものもある。古代焼物の古墳時代の遺構への確実な混入例ではSK2874、SD1007・1016、SQ1004があり、古墳時代の可能性が高いが、古代の土器も比較的まとまって出土した例ではSK2119・2185・2197・2325がある。また、SK2213・2215・2328・2329・2370・2401・2404などは古代以前の土器で占められるが、埋土や形態、主軸方向などで古代以外の所産の遺構と推定して古代から除外したものである。

先に述べたように、この他時代混入土器が量的に微高地全体の組成を代表し、その組成上の特徴は全体の傾向で述べた通りである。ちなみに他時代混入土器の焼物種組成は須恵器65%、黒色土器15.5%、軟質須恵器0.1%、土師器10.5%、灰釉陶器8.3%、緑釉陶器0.4%である。用途別組成は食膳具59.9%、貯蔵具35.7%、煮沸具3.8%で残りが不明その他である。また、食膳具のなかで杯Aは23.8%(須恵器48.5%、黒色土器32.0%、軟質須恵器1.0%、土師器18.6%)、杯B7.4%(須恵器のみ)、碗18.5%(黒色土器41.3%、土師器17.3%、灰釉陶器37.3%、緑釉陶器3.8%)、皿2.7%(灰釉陶器のみ)である。貯蔵具内訳は甕78.6%(須恵器のみ)、壺21.4%(須恵器65.4%、灰釉陶器34.6%)、煮沸具は羽釜23.1%、口縁「く」の字甕76.9%である。なお、遺物は遺構別に掲載したが、説明は便宜的に一括して行なう。

須恵器杯Aはごく一部を図示した。SK2065・2100・2113・2187・2197の1、SK2213の1・2、SK2316・2328・2329・2401・2404・2415・2431・SD1001の2、SD1007、SD1011の2～4、SD1016の2・3、SD1038・1018、SD2007の1・2、SD2001の8、SD2013、SD2018の1が該当する。底部調整の識別ができたものではSK2065・2404、SD1011の4、SD1038、SD2018の1、SD2001の8がへら切りで、SD1011の4、SD2018の1、SD2001の8はへら切り後にナデ調整される。残りSK2100・2113・2187、SD1001の2、SD1011の3、SD2007の1・2が回転糸切り痕を残す。また、SK2431は底部を手持ちへら削りされる。杯BはSK2197の2・3、SK2325、SD1008の6・7、SD1009、SD1016の5、SD1022の1～3、SD2001の9がある。底部調整は回転へら削りがSK2197の3、SK2325、SD1008の6、SD1022の1・3で、回転糸切りはSD1008の7、SD1022の2である。須恵器蓋はSK2119の1・2、SK2483、SD1016の4、SD2001の10、SQ1004の2が該当する。須恵器壺は図示した

ものは少ない。SK2119の3が長頸壺の胴部と思われるもので、肩が屈曲する。SK2319も長頸壺で頸径がやや大きい。SD1016の6は長頸壺底部と思われる。甕は胴部破片が多いため図示した遺物は少ない。SK2073は須恵器甕の口縁部でクシ目文が施される。SD1003は大甕の口縁、SD1005は小型の甕と思われる。SD1008の9は内面に研磨痕を残す須恵器甕である。SD1022の4は甕底部、SD2001の12は甕口縁部である。また、SD2001の13は内外面格子タタキの甕で図示した以外に数点ある。図は外面が非常に遺存状態が悪いので内面の写も拓本掲載した。胎土が青灰色を呈し、やや軟質の感があるもので、内外面格子タタキであることや胎土の点から本遺跡内ではやや異質な存在である。他の須恵器と全く異なった産地の搬入品と思われる。SD2018の2は横瓶の口縁部である。

黒色土器は図示したものが少ない。杯AはSK2188の1、SD1001の1、SD1011・1012、SD1016の1、SD1032、SD2001の2・3、碗はSD1008の4・5、SD2017の15、SQ1004の1で、SK2185、SK2188の2、SD1011の1は碗・杯が判断できなかった。土師器も図示したものは少ない。杯AはSD2001の3、SD2038、碗はSD1008の3、SD2001の4・6・7である。SD1008の1・2は杯碗の区別ができなかった。SD2001の5は鉢と思われる。甕はSD2001の19、羽蓋は2001の20の各1点を図示した。2001の19は外面に平行タタキを残す。

灰釉陶器ではSK2022・2496、SD1002、SD1008の8、SD1030、SD2001の11・16~18が碗、SX2001出土の皿である。SK2022、SD1002、SD1008の8は東濃の虎溪山1号窯式、SX2001は光ヶ丘1号窯式に比定されるか。緑釉陶器は1点SD1011出土の5を図示した。濃緑色を呈し、焼成はやや甘い。

この他にSD2001の14は瓦の可能性のある破片である。表面に深い格子タタキを残し、やや軟質の焼物で裏面が剥落する。

C検出面・出土地点不明土器（第323図）

帰属する遺構・土層が不明な遺物である。総数237点で微高地内出土土器の約24.5%が該当する。組成自体のあり方はほぼ他時代混入土器と同じであり、微高地全体の組成をそのまま反映した傾向を示す。図示した遺物はその極一部である。1は土師器杯、2~4が黒色土器の碗か杯、5が同碗。6~8が須恵器杯、9~16が須恵器杯Aである。9~13までが底部へう切り、13~16が回転糸切りである。17~23が須恵器杯Bで底部は回転へう削りされる。24~32が須恵器蓋、25・26が灰釉陶器碗で大原2号窯式と思われる。27が須恵器の高杯か盤の脚と思われる。28と31が須恵器の甕、29が須恵器のすり鉢、30が灰釉の瓶である。

(4) 微高地域出土の古代遺物の小結

A 組成の特長

ここでは全体の傾向についてまとめておく。出土した焼物種組成は須恵器が圧倒的に多く、少量の黒色土器、土師器、灰釉陶器、わずかな緑釉陶器・軟質須恵器がある。この組成は特定の時期の土層・遺構出土品から導き出された数値ではないため、組成比率自体に時代的な特徴を見出すことはできない。特に微高地では8世紀の須恵器が多い点と平安時代後半までの遺物が含まれる点は相対的に須恵器と土師器・灰釉陶の比率を押し上げる結果となっている。器種組成の特長としては貯蔵具の比率が高く、煮沸具も一定量認められる。また、食膳具が多数を占めるものの、水田ほど杯Aの優位性は顕著でなく、碗・皿の比率も比較的高い。これらの特長は水田域出土遺物と比較すると、水田域と類似した傾向を持ちながら、出土した土器年代のずれや、出土器種の傾向が異なる点によると認められ、この特長から水田域出土土器が単純に微高地からの混入と捉えられないと考えた。

イ 時期的変化

水田域同様に破片が多く、あまり良好な出土状況に恵まれないため個別土器の厳密な年代比定に基づい

て時期的変化を明らかにできなかったが、感覚的ながら概略の年代的傾向を記す。微高地では古墳後期から7世紀後半の遺物は検出されていない。そして、8世紀前半から増加してくるが、出土量自体は水田域よりも多く、器種では杯A・Bの他に甕類の多さが目につく。ただし、ここでも煮沸具は含まれない。次の8世紀末以後から洪水前後の9世紀までは杯A・Bに加えて黒色土器杯A・碗類が加わり、それ以外に須恵器貯蔵具と煮沸具も見られる。そして洪水以後では碗・杯A・皿といった食膳具と煮沸具、灰釉・須恵器貯蔵具が認められる。

この様子を水田域と比べると古墳後期の遺物がほとんど見られない点は類似するが、水田域では若干7世紀後半の遺物が含まれるのに対して、微高地では全くみられない差異がある。そして、8世紀前半からの遺物出土が見られる点は水田域と類似するが、微高地では8世紀代の遺物量は多く、しかも貯蔵具が見られる点は水田域とは異なった土地利用状況を反映するとみられる。また、8世紀末以後一特に9世紀後半以後では煮沸具が一定量見られるようになる違いもある。以上からは水田域と類似した傾向が窺える一方で、貯蔵具や煮沸具が多いという微高地特有の特徴も窺え、それは時期によって変化しながらも微高地特有の土地利用状況が反映されているとみられる。しかし、竪穴住居址や掘立柱建物跡が全く検出されていないことから恒常的な居住は想定しにくく、煮沸具を使用した行為があるとしても臨時的な活動とも思われる。また、煮沸具がみられる9世紀前後から土坑が散見されてくることは相互に関連して理解されるものかもしれない。なお、平安時代後期の遺物は水田域よりも多いとはいえ、圧倒的な量ではない。水田域では洪水砂層以上の土層において遺物採取を実施していないため単純な比較はできないが、中世・近世水田面でも平安時代後期の遺物があまり顕著に含まれない点からは8世紀末から9世紀のような水田域での土器の大量使用はみられなくなっている可能性もある。従って、多少の差はあるにしても水田域同様に微高地でも大量の土器使用はみられなくなる傾向があるとみたほうが良いと思われる。しかし、一方で当期には集落遺跡によっては多量の土師器を中心とする食膳具の完形品集中出土も知られている。つまり、平安時代後半では本遺跡のような非居住遺跡でもみられた食膳具を中心とした大量使用がみられなくなり、大量の土器消費が特定集落遺跡に限定されてくる違いとしてみられる可能性もある。

第23表 飯高地域出土古代遺物一覧

1遺構・地点	須恵器										黒色土器A					輪貫須恵		土師器				灰輪物器			鉄物		計
	杯	杯A	杯B	蓋	高杯	蓋	強	その他	杯筒	杯A	杯	皿	鉢	杯A	杯筒	杯A	杯	蓋	小笠型	その他	杯	皿	瓶	鉢			
S K1046				1																						12	
S K1061																										1	
S K1064																										1	
S K2070	1																									1	
S K2072			1																							1	
S K2215	1																									1	
S K2281			2																							1	
S K2383																										1	
S K2496																										1	
S R出土合計	3	1	3	1			4	2		3	1	7		1		1	2	4		1	1	1				36	
S D1036																										1	
S D1038		1																								4	
S D2006																										4	
S D2019		1																								9	
S D出土合計		2						9																		12	
他時代S K産	39	17	8	12	1	8	35		1	15	5	6		4	3	3	7	0	0	4	3	4	4	0	0	175	
他時代S D	30	25	20	21	1	25	128		4	23	24	21		9	14	9	12	2	2	18	3	13	2	0	0	446	
他時代S Q	21	5	2	11	0	0	28		0	5	2	4		0	1	1	1	0	0	6	1	1	1	0	0	59	
他時代遺構合計	90	47	30	44	2	34	191		5	43	31	31		13	18	13	20	93	6	2	28	11	18	3	0	681	
検出箇・不明	53	18	18	25	1	14	62		5	43	38	45		0	3	3	0	93	2	7	7	2	5	0	0	237	
中央部地域合計	146	69	51	70	3	52	264		7	53	38	45		2	15	22	18	24	8	3	35	14	23	3	0	966	
①②区 飯高域		19	4	4			4		6	3	6	3	1	2		1(1)	3			1	2					69	

第5節 古墳時代後期～奈良、平安時代の水田

1 調査の概要

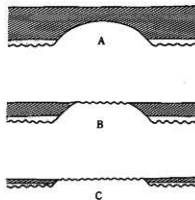
(1) 古墳時代後期～奈良時代の水田 (第217図)

古墳時代後期から奈良時代の水田面は確認されていないが、該期の土層は、平安水田耕作土下層の炭化粒子を多量に含む黒褐色粘土層から更に下層の黒色泥炭をブロック状に含む灰色シルト質粘土層にあたる。遺構は微高地東側の調査区から溝1条、水田を区画していた畦畔状の痕跡 (以下「擬似畦畔」とする) が3条検出された。畦畔及び水田面が検出されなかった理由としては、平安時代の水田耕作の影響を受け区画及び田面が耕土層となったことと調査地区には該期の水田層が極めて薄かったためと考えられる。

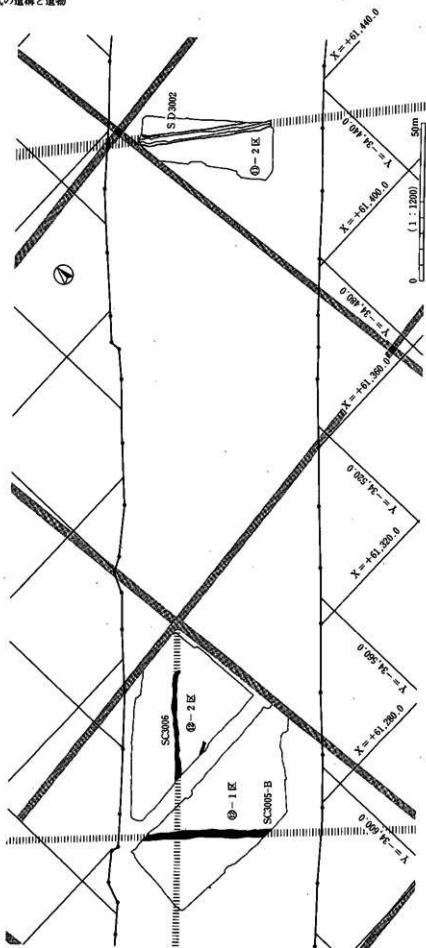
(2) 平安時代の水田 (平安埋没水田)

基本土層のIII層である洪水性の黄褐色砂層 (以下「平安砂層」とする) によって被覆された水田区画及び水田面が微高地を除く調査区全域で検出された (以下「平安埋没水田」とする)。平安砂層は石川条里遺跡ばかりでなく篠ノ井遺跡群や塩崎遺跡群など千曲川左岸の遺跡や右岸の更地条里遺跡などからも広く検出され、広域にわたる共通な堆積層として河川の氾濫による同時堆積が確認されている。本遺跡における平安砂層の堆積状況は、調査区、水田面によって厚さに違いがあることは第3章第1節に述べた通りであるが、砂の粒形、色調においても地点によって異なる。このことは砂の供給源、砂層堆積後の水田復旧に違いがあったこと示している。砂層内からは弥生時代から古墳時代前期の土器、平安時代前半の土師器・須恵器などが出土している。古墳時代以前の土器は鶴前遺跡寄りの調査区西と古墳祭祀域の微高地周辺からの出土が多く摩滅が著しい。これらは、該期の遺構・包含層から流出した破片が混在したものである。平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器は摩滅したものもあるが、坏類を主体として比較的まとまって出土している。これらが平安砂層の堆積時期に該当する遺物とみなされる。平安砂層が希薄となる地点及び砂層上層は、埋没水田後の耕作土である灰色シルト層と混在する状況となり平安砂層に帰属する遺物が判断できないものがある。

平安埋没水田耕作土は、炭化物粒子が多く混じった黒灰色から暗灰色粘土で、粘性が強い土質である。検出された遺構は、溝6条、大・小畦畔合わせて南北59条、東西58条、斜め方向16条、土坑4基であった。水田面には人・動物の足跡状の凹凸や耕作具を直線状に曳いたと思われる窪みなどが顕著に検出され、歩行列が確認された地点もある。以下に大畦畔と溝は各遺構別に、水田面及び小畦畔の状況は各調査区毎に所見を述べる。畦畔の検出状況については砂層の被覆によってAタイプ…畦畔上面まで砂に覆われて検出されたもの Bタイプ…畦畔中位まで砂で覆われ上面が上層耕作等の影響を受けて検出されたもの Cタイプ…砂層堆積が薄く畦畔部のみ砂が途切れて検出されたもの A'タイプ…畦畔上面まで砂で覆われているが、水田面と畦畔の比高差が10cm以下で上面に凹凸が検出されたもの4種類に区分した (第217図)。また調査段階では畦畔として検出できなかったが、水田平面コンタ図から連続する高まりが確認されたものも数条ある。



第217図 畦畔検出模式図



第218図 古墳時代後期～奈良時代遺構全体図

2 遺構

(1) 古墳時代後期～奈良時代の遺構

SD3002①-2区 (第219図 P L43)

位置：調査区東側の低地にある①-2区に位置し、平安時代砂層埋没水田の溝SD3001の下層と重複して北西から南東に縦断する形で検出された。また護岸の一部が平安埋没水田の坪境にあたるSC3002の畦畔と重複する。本址はN-50°Wの方向で南西に向かって緩やかに傾斜し、SD3001と同一方向、勾配である。規模・形状：検出面が古墳前期後半なしは古墳中期水田面であったため調査面での深さは約50cmであったが、調査区法面の土層観察からは同時代の土層とする7・8層から70～80cmの深さがある。幅は270～310cmとなりほぼ均一幅で、断面は底面が比較的広い播り鉢形である。施設：北西側の護岸には部分的に杭列が検出され、幅約80cm程度の土手が築かれていたことが推定される。溝底から杭列が検出され、調査時点では溝にかかわる施設と思われたが、杭の連続性、先端加工の状況から下層水田の杭列とした(SA3011)。埋土：砂、小礫が主体となり、色調、混入粘土によって3層に分層された。下層は植物遺体を多く含む泥炭質の砂層であり、下層の古墳水田層上面の土質に近い。中層は石英粒など凝灰岩の風化礫を多量に含む粗砂である。上層は地下水位の影響により砂の色調が緑灰色となる。小礫は安山岩、軽石が見られるが凝灰岩を主体とするもので、本址の給源が西山の山麓を經由していたことがわかり、埋土の状況から一時的な砂・礫によって短期間のうちに埋まったものと判断される。遺物出土状況：小破片が多いが、土器片はきほど摩滅していない。古墳時代後期前半の土師器、同後半の須恵器破片などが少量小礫に混じて出土した。

SC3005-B、SC3006 ⑩-1・2区 (第220図)

位置：調査区中央微高地から東側の低地にかかる傾斜部の⑩-1・2区に位置している。検出状況：SC3005-Bは、平安埋没水田の大畦畔SC3005-A調査時の断面観察によって灰褐色粘土を基調とする約2.5m幅の高まりが確認された。SC3005-Aの擬似畦畔となるが、中心が僅かに北東にずれ一部平安砂層の下に検出された。方向は平安埋没水田畦畔と同一のN-44.5°Wとなる。SC3006は平安埋没水田検出の際に水田面に連続する高まりがあり下層水田の畦畔と判断した。幅約1.6mでE-43°Nの方向に直線的に検出され、⑩-1区では未検出であったが水田面コンタ図から延長した位置に高まりが確認され、SC3005-Bと直交する畦畔であることがわかった。平安埋没水田の耕作土は⑩-1・2区とも7層であるが、本址はその下層の⑩-1区の7-1層、同2区の9層に該当するの畦畔である可能性が高い。両畦畔は恒常的な区画であったがためにその痕跡が明確に残ったものであり、平安埋没水田の区画である条里型地割施行直前の状況と見ることができ。本畦畔を水田とした耕作土層下限の時期は限定できないが、平安埋没水田層との間には部分的に薄く堆積した炭化泥炭質層、砂層があり、一時的に耕作が断絶したものと見られる。

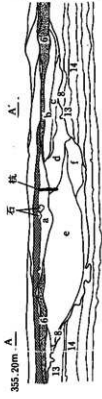
(2) 平安時代の遺構

ア 各調査区の状況

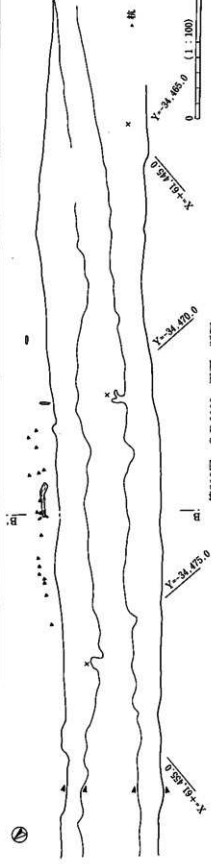
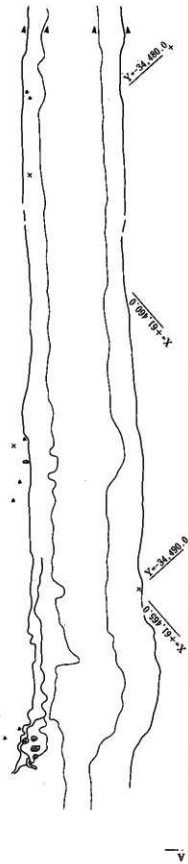
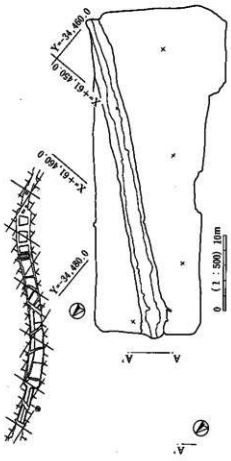
①-1・②-1区水田 (第221・222図 P L32・33)

位置：調査範囲西端の篠山山麓の丘陵斜面に接する調査区である。高速道路線上にかかる鶴前遺跡とは用水を挟んで隣接している。砂層の堆積状況：西寄りの山麓側斜面ほど砂の堆積が厚く、西端の法面では約50cmの堆積が認められ、東端の市道付近では約10cm程度の堆積となる。砂層は一部に灰色の粘土ブロックを含んだ凝灰岩の風化礫を主体とする粒形の均一な砂からなる。砂層内からは灰釉陶器破片の他に鶴前遺跡出土の弥生後期末土器群と類似する土器片が複数摩滅して出土した。畦畔の検出状況：砂に覆われて幅50cmから80cm、水田面からの高さ15～20cmの小畦畔を南北4条、東西6条検出した。市道寄りのSC-NS

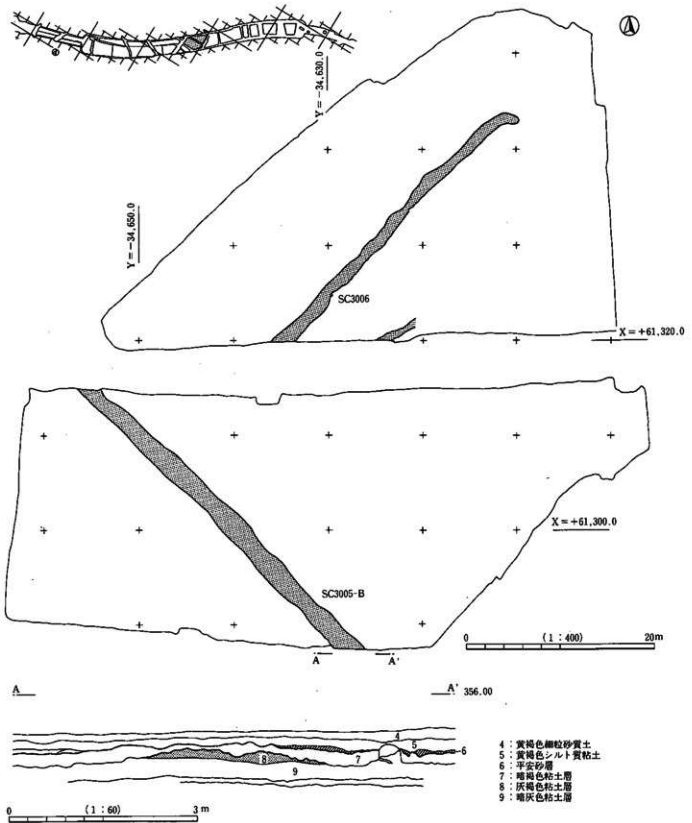
- 5: 平な砂層
- 6: 暗褐色粘土層 (平な砂土)
- 8: 黑色泥炭層
- 11: 暗褐色粘土層
- 12: 粗砂、小礫混入砂層
- a: 粗砂、小礫混入砂層
- b: 腐植質シルト層
- c: 泥炭質シルト層
- d: シルト層、細粒砂層
- e: 礫、粗粒混入砂層
- f: 粗粒混入砂層



355.20 B'-B



第219図 S D 3002 平面・断面



第220図 SC3005-B・3006擬似畦畔平面・断面

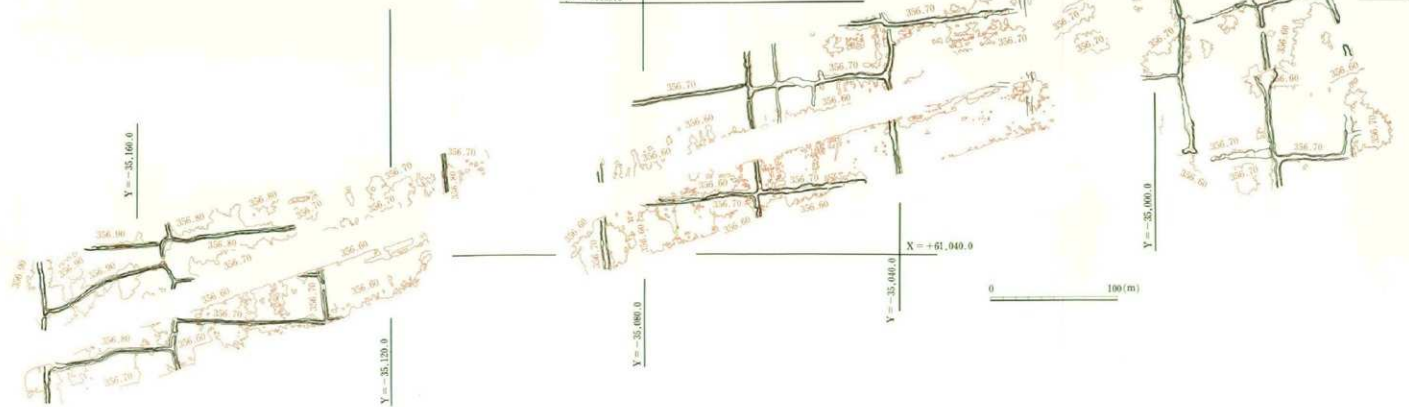
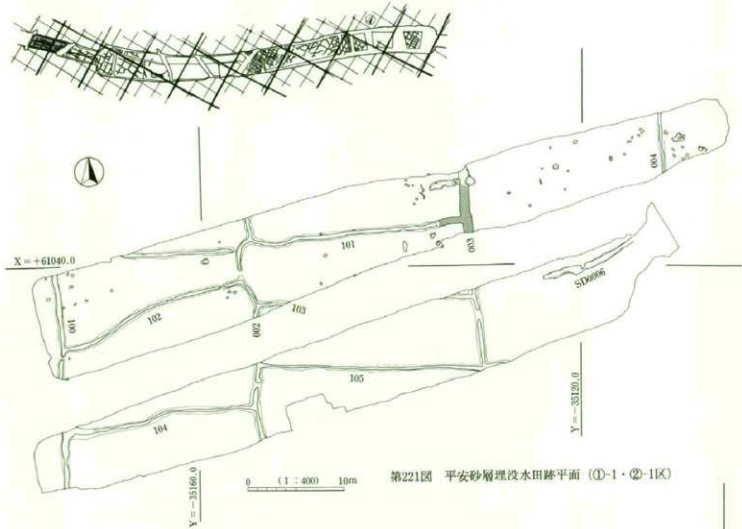
004がBタイプの検出であった他は砂が畦畔を覆いつくしたAタイプとして検出された。①-1区の溝として検出したSD0006は深さ15cmと浅いことから小畦畔脇に掘り込まれた耕作痕と認識され、SD0006北側に東西方向の小畦畔が想定される。畦畔の高まりが途切れる水口は、南北畦畔SC-NS001とSC-NS003に各1カ所、SC-NS002に2カ所、東西畦畔のSC-WE101とSC-WE102に各1カ所の6カ所に検出された。地割の方向と傾斜：各畦畔の方向はSC-NS001がN-1.5°W、SC-NS002がN-2.7°W、SC-NS003がN-6.5°W、SC-NS004がN-7.5°Wとなる。本遺跡の畦畔方向の平均値であるN-4°W以上に西側に傾くSC-NS003とSC-NS004は南北の坪境が想定される位置にあるが、畦畔は小規模である。東西畦畔はSC-WE101とSC-WE105が直線形状でそれぞれW-4.5°S、W-0°Sになるが、SC-WE102は緩やかに蛇行しほぼW-24°Sに傾き、SC-WE104は中間部で蛇行しW-9°S方向に傾く。この調査区の地割は、南北軸を基軸として東西畦畔を阿弥陀状につないだ中区画水田を作っている。勾配は北西から南東に緩やかなに傾斜している。水田耕作土および田面の状況：耕作土は、①-1区11・12層、②-1区7～9層に該当する。両調査区とも炭化物粒子を多量に混入した灰色から黒色の粘土で、粘性・しまりともに強い土質である。水田面からは不正楕円形で浅い楕円形の断面となる凹凸がまばらに検出された。⑨区以東の調査区で検出された凹凸面ほど明瞭でなく、形状から凹凸の要因を判断することはできない。

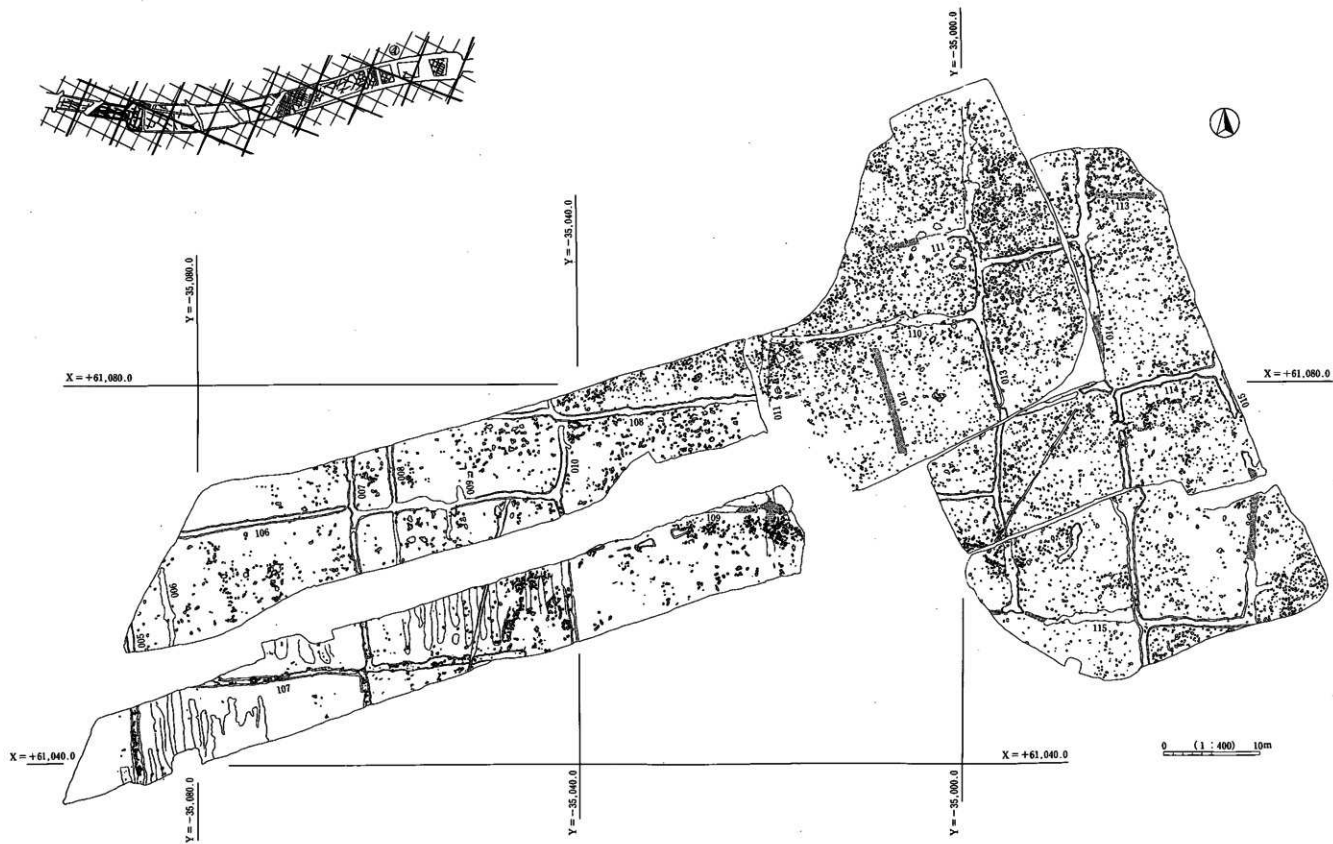
①-2・②-2・③区水田 (第222・223図 P L33・35)

位置：調査区中央部微高地西側から山麓寄りの中間に位置する。前項の①・②-1区と①・②-2区の間は市道見山長谷・大門線が通過するため未調査であったが、道路下には数条の小畦畔の存在が想定される。砂層の堆積状況：市道寄りの西側地点が約20cmの最も厚い堆積であり、東方向に向かうにしたがって堆積が減じ、坪境の畦畔の位置にあたるSC-NS012及びSC-NS013付近が約10cm前後の薄い堆積となる。③区SC-NS013から東側は再び22cmの厚い堆積が認められ、東側に位置する⑥区寄りには薄い堆積となる。砂層内からは、SC-WE108とSC-WE109を畦畔とする区画から、完存する土師器の坏が6個体出土した。畦畔の検出状況：幅40cmから80cm、水田面からの高さ15～20cmの小畦畔を南北11条、東西10条検出した。SC-NS006とSC-NS008の一部がAタイプの高まりで、SC-NS012はコンタ図から南北の畦畔が想定された。他の畦畔は全てBタイプで検出された。SC-NS006とSC-NS008、SC-WE106に突起状に突出するSC-NS009は畦畔上面に耕作を受けた凹凸面が観察されることから水田埋没時には、畦畔として機能していなかった可能性がある。畦畔が切れる水口は、南北畦畔SC-NS007、SC-NS010、SC-NS013、SC-NS015に各1カ所、SC-NS014に2カ所あり、東西畦畔SC-WE106、SC-WE114に各1カ所の計8カ所で検出した。SC-NS011もしくはSC-NS013の位置に坪境が予想されるが、両者とも規模は小畦畔である。地割の方向と傾斜：南北畦畔の方向はN-2°WがSC-NS010、N-3°WがSC-NS007・SC-NS008・SC-NS011、N-5°WがSC-NS006・SC-NS013、N-5.5°WがSC-NS005、N-6.5°WがSC-NS014、N-7°WがSC-NS015となり、東西畦畔の方向はSC-WE106がW-5.5°S、SC-WE107がW-5°S、SC-WE108がW-6°S、SC-WE110がW-7°S、SC-WE112がW-14°S、SC-WE114がW-13°S、SC-WE115がWである。勾配は北西から南東に緩やかに傾斜している。耕作土及び水田面の状況：耕作土は①-2区9・10層、②-2区6～9層、③区10層が該当する。凝灰岩の風化礫を混入した褐灰色から黒色の粘土で、粘性・しまりともに強い土質である。①-2区と②-2区の水田面の一部には幅40～50cm、深さ5～10cmの浅い溝が南北畦畔と平行して10数条検出され、畝を掘りあげた痕跡にも見える。この面を含め表面には不正楕円形で断面浅い楕円形の凹凸が全面に検出された。凹凸は、①-1・②-1区同様に⑨区以東の調査区ほど顕著でなく、形状から要因を断定できない。

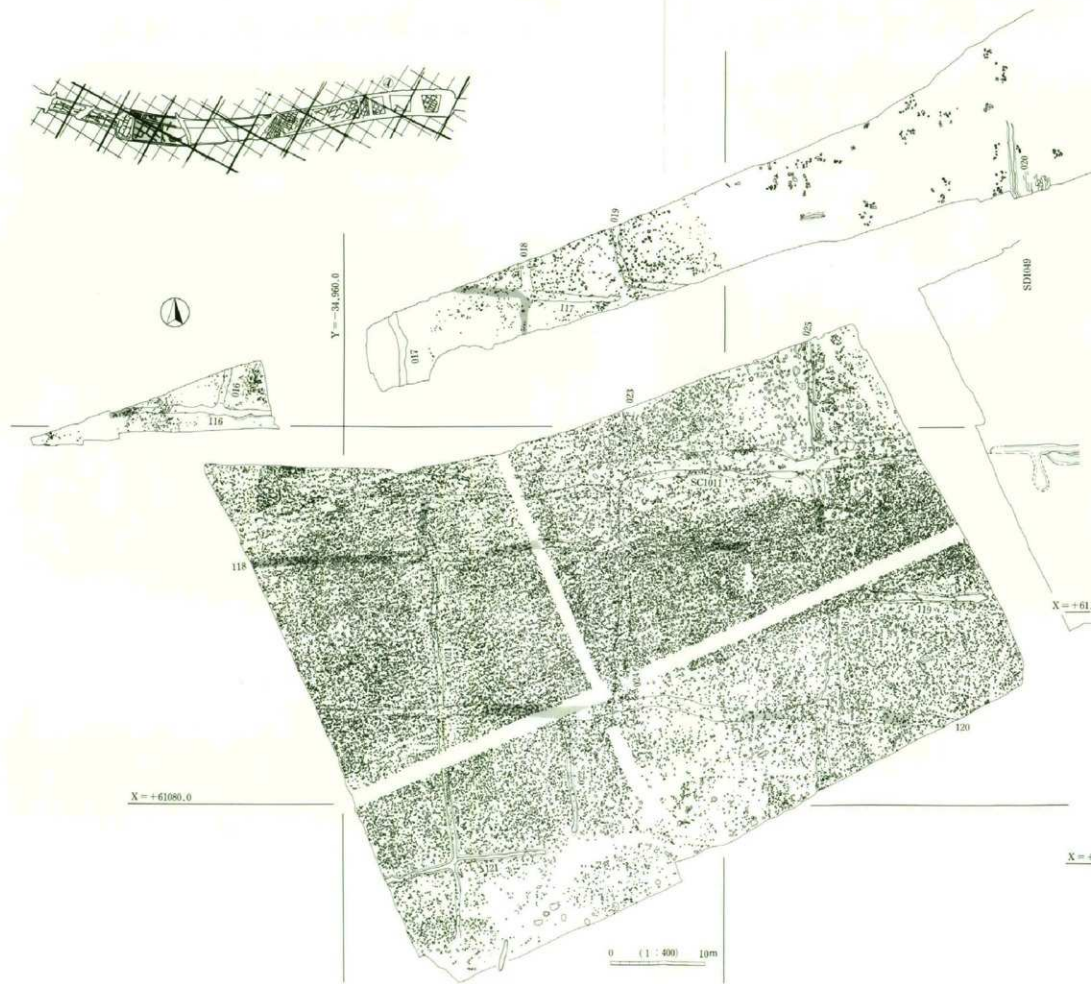
④・⑥区水田 (第224・225図 P L36)

位置：調査区中央微高地の北西脇に位置し、④区は東側の一部が微高地となり砂層の堆積がない。⑥区は、東側の微高地と弥生時代の土坑が複数検出され南端の微高地に挟まれた谷状の低地となる。砂層の堆





第223图 平安砂层埋设水田迹平面 (①-2·②-2·③区)



第224図 平安砂層埋没水田跡平面 (④・⑥・⑦区)



第225図 平安砂層埋没水田跡コンタ (④・⑥・⑦区)

積状況：④区北西端の堆積が約30cmで最も厚く、東側に向かうにしたがって砂がなくなる。⑤区は東側の微高地縁辺が約20cmの厚さがあるほかは、全面5～10cm程度の薄い堆積である。砂の色調は上層水田による酸化鉄の影響を受け明褐色となるが、石英・長石など無色鉱物を主体とする粒形の揃った砂が大半であり、直径5cm以上の軽石が含まれていた。ただし微高地寄りには凝灰岩の風化礫が集中する箇所も見受けられた。砂層上層は褐灰色砂質シルト層であったが、砂からシルトへ漸移して堆積しているため、砂層が希薄となる地点では砂層内遺物の層属時期が曖昧となった。砂層内からは、9世紀後半の灰釉陶器、須恵器、土師器、緑釉陶器が散在して出土し、他に微高地から検出された遺構と同時期に属す弥生後期から古墳前期の土器が摩滅して多数出土した。畦畔の検出状況：砂層は水田面全面に検出されたが所々希薄となる箇所があったためSC-NS021・SC-NS022・SC-NS016、SC-WE116・SC-WE121・SC-WE120の一部がBタイプの検出であったほかはA'タイプで、上面に著しく凹凸が残る状態で検出された。この畦畔上面に残された砂を含んだ凹凸は、埋没水田後の耕作による鋤床面であったと見ることができ、南北畦畔は西側ライン際に砂の堆積が厚く、高まりとして容易に検出されが、東西畦畔のSE118・SC-WE120の検出にあたっては畦畔相互の交点から数センチの高まりを連続させて畦畔とした。SC1001は幅2.5mの規模をもち東西方向の坪境とされた以外は、幅80cmから120cmの小畦畔であった。水田面との比高差は最大25cmであったが、幅の大きい畦畔ほど水田面との比高差がなく凹凸も顕著であった。畦畔の途切れる水口はSC-NS091とSC-WE111の交点に1カ所検出されたが、検出面が浅いことから他の畦畔にも複数あったことが予想される。SC-NS022とSC-WE121が途切れる南側には弥生時代の土坑群がある微高地が検出された。この微高地と水田面との比高差は60～80cmで、微高地周囲は中世から近世にわたる溝SD0017が廻り、埋没水田の状況が明らかでないが、SD0017下層は平安砂層と同一となることから溝が存在していた可能性がある。地割の方向と傾斜：南北畦畔の方向はSC-NS017がN-5°W、SC-NS019がN-13°W、SC-NS020がN-6.5°W、SC-NS021がN-5°W、SC-NS022がN-5.5°W、SC-NS023・024がN-5°Wであり、N-6.5°Wの方向をとるSC-NS020の延長上には微高地⑦区のSD1049がある。東西畦畔の方向はSC-WE117がW-1.5°S、SC-WE118がW-3.4°S、SC-WE119がW-3°S、SC-WE120がW-5.5°S、SC-WE121がW-12°Sであった。本調査区ではSC-NS022と、SC-WE119以外は東西南北方向の畦畔ともに連続する区画をつくっている。SC-NS025とSC1001を隔てたSC-NS026はともにN2.5°W方向で、坪境が想定される位置にあるが、SC-NS025は幅80cmと小畦畔の分類に属し、SC-NS026は幅1.5mであるが畦畔の検出面が低いため大畦畔とするには疑問が残る。耕作土及び水田面の状況：耕作土は④区8～9層、⑤区7-1層が該当し、砂の混入が比較的多い褐灰色から黒色の粘土であった。水田面には浅い不整形の凹凸が全面に広がるが、形状・配列に規則性はない。

⑤-3・⑩-2・⑪-1・⑫-2区 (第226・227図P L 37・38・39)

位置：調査区中央微高地東側に隣接する緩やかな傾斜面に位置する。本調査区から東側は低地となり下層からは弥生時代から古墳時代の水田跡が検出されている。砂層の堆積状況：調査区北西側⑤-3及び大畦畔SC3005-Aの周辺は20～25cmの砂層が均一に堆積し、東側と南側に向かって徐々に砂がなくなっていく。砂層の堆積がない地点では、上層の耕作土である灰色シルトに平安砂層を多量に混入した黄灰色砂質シルト層が耕作土上に堆積していた。砂層には10～30cm大の大小軽石が比較的多く混入し、砂は中粒以上の粗砂が主体であった。⑫-1区では砂層内から須恵器の環・四耳壺がまとまりをもって出土したほか、鉄製「U字型」鋤・鍬先の一部があった。⑩-2区では耕作土層直上から八稜鏡が出土したが、砂層の希薄となる地点からであり層属時期は微妙である。畦畔の検出状況：幅3.8mの大畦畔SC3005-Aのほかは、幅50cm前後の小畦畔が南北方向23条、東西方向26条、北東西南方の斜め方向2条の計51条が検出された。また東西の坪境の位置には溝SD2043が検出された。砂層の堆積は厚い地点でも20cm程度とさほど厚くないが、畦畔の周辺は粒の大きい粗砂が多く検出は容易で、畦畔も比較的残りのいいBタイプの検出であった。水田面との比

高差は10~20cmであった。⑩-2区で検出されたSD2044はSC-NS029の延長上に位置することから畦畔脇に掘られた耕作による窪みに砂が堆積したものと判断した。地割の方向と傾斜：本調査区では、大畦畔SC3005-Aを中心に北東、南西に小区画の地割が展開し、畦畔間の最小間隔は1.5mであった。南北畦畔の方向はN-2°WがSC-NS027、N-2.2°~2.5°WがSC-NS031・032・035、N-2.8°WがSC-NS030、N-3°WがSC-NS028・029・033・036・038、N-3.5°WがSC-NS039、N-5°WがSC-NS037で、東西畦畔の方向はW-2.2°SがSC-WE132、W-3°SがSC-WE131、W-3.5°SがSC-WE127・128・130・133・134、W-5.8°SがSC-WE139、W-6.2°SがSC-WE137、W-6.5°SがSC-WE124、W-12.5°SがSC-WE125・135であった。勾配は、北東域の水田が西北西から南南東へ、南西域の水田が西から東へ緩く傾斜している。大畦畔付近の畦畔は湾曲形状となるものが多く、大畦畔を中心に地形にあわせて小区画を作り、さらに畦畔の形状も微妙に曲げられていることが分かる。本調査区においても基軸は南北方向であり東西畦畔によって阿弥陀状に区画された状況である。区画の形状では、大畦畔SC3005-Aより北東域は東西に横長区画の水田で、南西域は南北に横長区画の水田となる。畦畔が途切れた水口は、南北SC-NS037に1カ所、東西SC-WE130、SC-WE131に各2カ所、SC-WE137、SC-WE138に各1カ所の計7カ所に検出された。耕作土及び水田面の状況：耕作土は⑤-3区9~11層⑨区10~11層、⑩-1区7層、⑩-2区7層に該当する。炭化物粒子を多量に混入する黒褐色粘土で粘性が強い土質である。水田面には深さ5~10cm程度の比較的深い凹凸が顕著に検出された。凹みが列状となる地点もあるが、形状は不整形形でその要因は特定できない。⑤-3・⑩-1区からは断面「U」ないし「V」字形で幅15cm、深さ10cm程の2条の溝が90cmの間隔を置いて平行して走行する跡が検出された。両調査区とも北東から南西方向に直線走行するもので、畦畔の方向とは異なる。また大畦畔SC3005-A、SC-NS028、SC-WE123などを切り、水田面の凹凸を押し分けた状況が見られたことから埋没水田の耕作とは直接関係しない痕跡と見なされる。ただし平安砂層堆積直前に重量のあるものを引き摺った痕であることは確かである。

⑫-3・⑬・⑭区 (第228・229図 P L37・39・40・41・42)

位置：調査区東側の低地部で微高地と聖川の中間に位置する。下層には泥炭層が堆積し弥生時代から古墳時代の水田跡が検出された。南北方向の坪境の位置に大畦畔SC3002とSD3010、東西方向の坪境の位置に溝SD3009がある。砂層の堆積状況：砂層は調査区全域から検出されたが⑬区SD3009北側の砂は上層耕作土の酸化鉄の集積により褐色となり極めて希薄であった。またSD3009周辺は中世の溝によって広範囲に砂層が削られ、褐色砂質シルトが堆積していた。これに対しSC3002の西側砂層は約20cmの厚みがあり、耕作土と分層面は大粒の砂が目立つものの、粒径の揃った細粒砂で波紋状の堆積が観察された(P L41)。畦畔の検出状況：砂層が希薄であった⑬区北側では幅が均一とならない歪んだ形状の畦畔SC-NS045、SC-WE151・146・147がCタイプとして検出されたのをはじめ、SC-NS048付近までは畦畔上面に褐色の粗砂が混入したシルトの堆積が顕著で水田面との比高差が10cm以下の低い状況であった。SD3010からSC-NS046とSD3009の範囲は畦畔の検出に曖昧さを残す。SD3009から南側及びSC-NS049東是水田面との比高差が20~25cmあるBタイプの検出であった。SC-NS048とSC-NS049は畦畔上面には灰色の砂質シルトを含んだ凹凸が顕著で、砂層堆積直後にシルトが踏み込まれた痕跡と見ることもできる。畦畔の幅は、上層水田の影響を受けた⑬区北側のSC-WE151・146・147で2m近くある場所もあるが、大畦畔SC3002を除いた畦畔は60~80cmの小畦畔であった。地割の方向と傾斜：南北方向9条、東西方向13条、北西南東方向3条、北東南西方向7条、の合計30条の畦畔が検出された。斜め方向の畦畔は蛇行するものが多く、水田区画が台形となり、南北のSC-NS049は東西、斜め方向の畦畔との交点で屈曲しSC3002側は亀甲形状の水田区画となる。主な畦畔の方向は、南北方向のSC-NS041がN-5.5°W、SC-NS043・044がN-0°、SC-NS046がN-2.7°W、SC-NS047がN-3.5°W、SC-NS048・049がN-2°Wで、東西方向のSC-WE142がW-2°S、SC-WE143がW



第226図 平安砂層埋没水田跡平面 (5・3・03・2・01・02[X])

第227図 平安砂層埋没水田跡コンタ (5・3・03・2・01・02[X])



第228図 平安砂層埋没水田跡平面 (⑬・⑭区)

第229図 平安砂層埋没水田跡コンテ (⑬・⑭区)

-2.2°S、SC-WE148がW-5°Sであった。畦畔が途切れる水口は、SC-WE148に2カ所、SC-WE165・164・166に各1カ所の5カ所で検出された。本調査区においても南北方向に連続する畦畔が多く、基軸が南北にあったと判断されるが、SC-WE148は坪割の中間に位置する畦畔で「半折り」区画があった可能性もある。勾配は西から東へ緩やかな傾斜であった。耕作土及び水田面の状況：耕作土は⑩区-37層、⑬-⑭区7層に該当し、炭化物粒を多量に含んだ柔らかな黒褐色粘土層で下部は薄い泥炭層が堆積している部分もあった。SC-NS046からSC3002にかけての水田面には深さ5cm程の凹凸が顕著で、人の足跡が歩行列として明確に検出された。歩行方向は南北列に検出されたものが多いがほぼ畦畔と同一方向で、畦畔によって遮られると方向が変わる状況であった。歩幅は最小で10cm程度、最大で50cm程度で、20～40cmの幅でややがに股に歩いている。畦畔の区画と歩行列が同一であることから平安水田が埋没する直前と判断され、鋤、鍬の耕作痕がなく足跡だけで埋め尽くされた水田の状況からは田植え・除草の作業が想定される。田面にはこの人の足跡の他に⑩-1区等で検出された断面「U」字形の溝が数条検出された。本調査区では幅20cmで1条の溝として連続走行するもので、部分的に90cmの間隔をもって2条が平行していた。走行方向は北東から南西に直線状となり、畦畔を乗り越え総延長110mにわたっている。溝が歩行列を寸断し、溝には砂が埋土となっていることから水田が埋没する過程に重量のあるものを引き摺った痕跡とされる。

⑩-1・⑩-2・⑩区 (第230・231図 P L42・43・44・45)

位置：調査区のなかでは最も低い標高の低地部に位置する。下層には泥炭層が厚く堆積し弥生時代から古墳時代の水田跡が検出された。東西方向の坪境の位置に大畦畔SC3001と南北方向の坪境の位置に大畦畔SC3002及び溝SD4001がある。砂層の堆積状況：砂層はSD3001の南西地点とSC3001の南側の一部に20cm前後の堆積が検出されたほかは広範囲に砂が希薄となり、暗灰色砂質シルトもしくは暗灰色粘土が耕作土の上層に堆積していた。⑩区では大畦畔SC3001を境に北側で砂がなくなり砂質シルトを含んだ浅い凹凸が僅かに検出されただけであり、⑩区では法面の断面観察によって北側の砂層堆積が10cm以下のまばらな状況であったため未調査となった。またSD3001の北西では溝内に平安砂層と異なる砂層の堆積が認められ更に溝両側では上層の灰色砂質粘土と平安水田耕作土とが混じりあった状況があり、高まり(護岸の土手もしくは畦畔)であるのか水田面であるのか識別がつかなかった。本調査区では砂層と耕作土層の分層部に炭酸鉄のブロックが散在し、SC3001の西方向延長部とSC-WE175には板状の塊として検出された。畦畔の検出状況：SC3001西側のSC-NS054・055、SC-WE174とSD3001北西側のSC-NS050・051・052・170、SC-WE169・171は幅80cm、水田面との比高差20～30cmとなるBタイプの検出であった。SC-NS056、SC-WE176はAタイプの検出であり水田面との比高差は10cm以下である。SC-WE175は炭酸鉄が東西列状に検出され畦畔とし、SC-NS053は平面コンク図の高まりから畦畔と認定した。地割の方向と傾斜：南北方向7条、東西方向7条、斜め方向1条の合計16条が検出された。主な畦畔方向は南北方向SC-NS050がN-3.8°W、SC-NS051がN-6.5°W、SC-NS054・055・056がN-0°で、東西方向SC-WE171・172はともにW-0°であった。畦畔が途切れる水口はSC-NS052・170の2カ所で検出された。SC-NS052はSD3001からの配水口となる。本調査区では畦畔の検出が部分的であったため基軸方向は不明である。耕作土及び水田面の状況：耕作土は⑩区6・7層⑬区11層が該当し、凝灰岩の風化礫と炭化物粒子を多量に含んだ灰色粘土である。耕作土層直下には泥炭層があり耕作によって泥炭が耕作土に取り込まれたものであり耕作土下面は凹凸が顕著であった。水田面には大小の凹凸が顕著に検出されたが形状・配列に規則性はない。⑩区SC-WE174とSC-NS054・055に区画された水田に幅80cm、深さ5cm程の溝が北東南方向に10m検出された。埋土は細粒砂であり凹凸も見られることから耕作時の痕跡とみなした。

⑩区 (第231図 P L45・46)

位置：調査区の東側端部の低地に位置し、約150m東には現在天井川となる聖川がある。本調査区を境に



第230図 平安砂層埋没水田跡平面・コンタ (①-1・①-2区)



第231図 平安砂層埋没水田跡平面・コンタ (19・20)

0 1:600 20m

水田面の標高は東に向かって次第に高くなっていく。砂層の堆積状況：砂層は調査区の約2/3から検出されたが10cm以下の薄い堆積で、砂層のない部分は上層にあたる5層に砂が混入した砂質灰色シルトあるいは砂質粘土であり埋没水田後の耕作によって砂が攪拌された状況である。砂は粗粒で凝灰岩の風化礫が目立つものであった。畦畔の検出状況：砂層が薄い堆積であったため畦畔は水田面との比高差が15cm以下のCタイプの検出で、畦畔上面は5層によって削られている状況であった。砂層堆積の希薄な部分は砂の途切れる連続を畦畔としたため幅約80cmの規模となるが、本来の高まりであれば小規模の畦畔となり、畦畔は全て残りの比較的良好な畦畔幅である60cm以下の小畦畔となる。また本調査区では畦畔両脇に粗砂が比較的厚く堆積しており浅い窪みとして検出されたものもある(SK002・SK003・SK004)。調査の時点では畦畔と認識できなかった箇所が平面コンタ図から高まりと認識できる畦畔もあった。地割の方向と傾斜：南北方向5条、東西方向5条の合計10条の小畦畔が整然と検出され、斜め方向の畦畔はない。南北畦畔の方向はSC-NS057がN-3°W、SC-NS058がN-5.5°W、SC-NS059-060がN-2°W、SC-NS061がN-4°Wで、東西畦畔の方向はSC-WE177がW-4°Sのほか残る5条はW-3.5°Sであった。水田区画は南北SC-NS059ないしはSC-NS060を境に東側は東西に長い小区画となり、西側は南北に長い中区画となる。本調査区においても南北軸が基軸となる。勾配は西から東へ緩やかに傾斜している。耕作土および水田面の状況：耕作土は⑥区7層で暗灰色粘土で下部には下層の泥炭質が混在する。畦畔が途切れる水口は、畦畔検出面が低かったことにより検出されなかったが、畦畔コーナー部に検出されたSK003とSK004は、水流によってできた窪みとみることも可能で両土坑と接する畦畔に水口が想定される。水田面には浅い不整形の凹凸が全面に広がるが、形状・配列に規則性はない。

イ 大畦畔・溝

SC1011 (第224図 P L36)

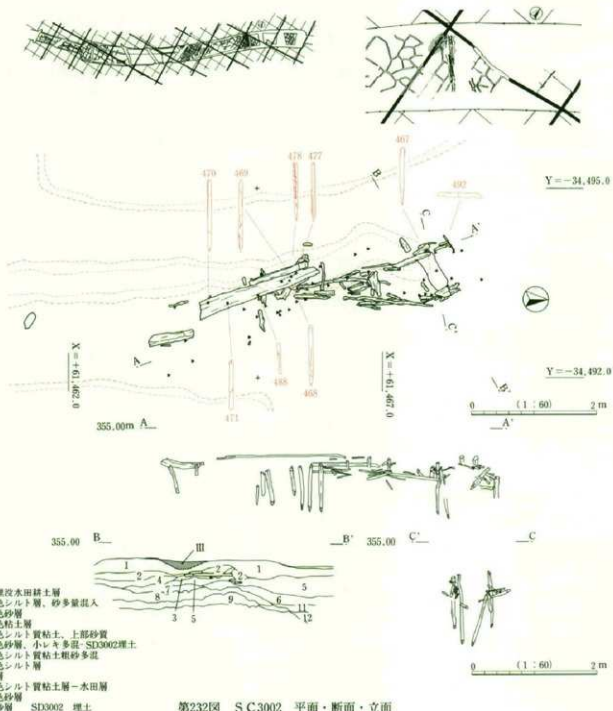
位置：調査区中央微高地に隣接する西側の低地⑥区に位置する。東西方向の坪境にあたり、この畦畔を東に延長した微高地⑦区には同一ライン上にSD1038がある。また畦畔直上には用水路及び農道が同一方向に走る。検出状況：砂は南北畦畔との交点付近と畦畔沿いの窪みに集中して検出された。畦畔南側は溝とも判断される砂層の連続する浅い窪みが本址に沿った東西方向に途切れ途切れにあり畦畔の立ち上がりが確認された。本址北側は凹凸が少ない部分と砂の途切れる部分を畦畔とした。畦畔は砂と褐色シルトが堆積したA'タイプの検出であり、畦畔上面は水田面と同様の凹凸を著しく残す部分もあった。方向・規模・形状：方向はW-0°からW-5°Sでやや蛇行する。幅は北側の立ち上がりが不明瞭であるが2.5～3mとなり、水田面との比高差は最大でも20cm程度の低いものであった。遺物出土状況：畦畔内からの出土遺物はない。

SC3005-A (第226図 P L39)

位置：調査区中央微高地東側、低地にかかる傾斜部の⑬-1区に位置する。坪境の畦畔の位置にはないが東西南北坪境の推定ラインの北西と南東の頂点を結ぶ方向にある。同一坪内の地割は、本址を中心に北東側と南西側で異なる小区画形態をとる。検出状況：砂層堆積は15～25cmで、畦畔付近の砂には灰色粘土ブロックが多量に含まれていた。Bタイプの検出で上面は平安砂層堆積後の耕作の痕跡を残した褐色シルトが踏み込まれた状況であった。方向・規模・形状：方向は直線にN-44°Wで、幅はほぼ均一に2.5mである。北西部には水田面から連続する断面「V」型の溝が検出された。深さ20cmに及ぶ所もあり、畦畔を寸断していた。前項のDでも述べたが、この痕跡は水田区画とは無関係の方向に走行し畦畔をも壊していることから耕作とは直接かかわりないものであるが、砂が埋土としてあることから埋没過程の痕跡とみなされる。遺物出土状況：畦畔内からの出土遺物はない。

SC3002 (第232・233図 P L40・43)

位置：調査区東側低地のほぼ中央に位置し、⑪-2・⑬区に跨がっている南北方向の坪境にあたる。⑪-2区でSC3001・SD3001と交差する地点が予想されたが、排水溝と法面の確保のため交点の状況は明らかにできなかった。⑪-2区の一部がSD3002と重複する。検出状況：畦畔周辺の砂層は連続するものであったが、堆積が薄い部分が所々あり水田面との比高差が5cm以下となるCタイプもしくはBタイプの検出であった。SD3001と接する付近はSD3001の土手とを結ぶ畦畔が検出されたが、砂層の堆積が極めて薄く、畦畔上の凹凸にも砂が残る状況であったことから埋没水田直後に耕作を受けた痕跡とみなされSC-WE169北側にある幅2mの高まりは水田面であった可能性が高い。畦畔中央部には均一な粒形の砂層が連続し、浅い溝が同一方向に検出された。方向・規模・構造：方向はN5°Wで幅は、2.5~2.8m、水田面との比高



第232図 SC3002 平面・断面・立面

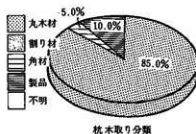
差は0～20cmで、畦畔上面は耕作土上層にある黄灰色シルト層が、ブロック状に入り込み凹凸が認められた。畦畔の中央の溝SD3100は幅60cm、深さ20cm前後で、溝底と水田面の標高は同一であった。断面形状は上面が埋没水田後の耕作痕があるため不明である。①-2区のSD3001よりの畦畔内から杭列と横木が出土した。杭列は畦畔と同一方向の中央部に約6mにわたって検出され、杭は1m前後の長さのものが多く下層の古墳水田層まで達している。杭は85%が丸木材でコナラ節、クヌギ節が用材の大半を占めた。横材は多くが平安耕作土層内にあが一部砂質シルト内にあり畦畔構築にかかわる遺構であることが確認された。畦畔中央を走行するSD3100はこの杭列横材の上に位置し、小規模で浅いことから構築時に溝はなく、溝としての機能も常時流水があったものではなかったと考えられる。遺物出土状況：①-2区の畦畔構築杭列内から畜産31点(破損品を含む)・馬形2点が出土した。畜産の多くは構築材上部に横材として用いた長さ200cmで幅25cmの板材上から出土し、ほかの畜産、馬形もほぼ杭列と同じ範囲から出土した。これらは畦畔構築時の祭祀行為として遺棄されたものと考えられる。SD3001と隣接する地点に畜産・馬形が集中したことはこの祭祀行為が水と関係するものであったと判断される。同一地点から土器が数点出土しその中に9世紀代の須恵器のほか奈良時代を下る土師器が出土した。本址の構築にかかわる問題であるが、畦畔の一部は下層のSD3002と重複している状況からするとこれらの遺物が直接畦畔構築に関わるものかどうかは微妙なところである。

SC3001 (第230・234図 P L44)

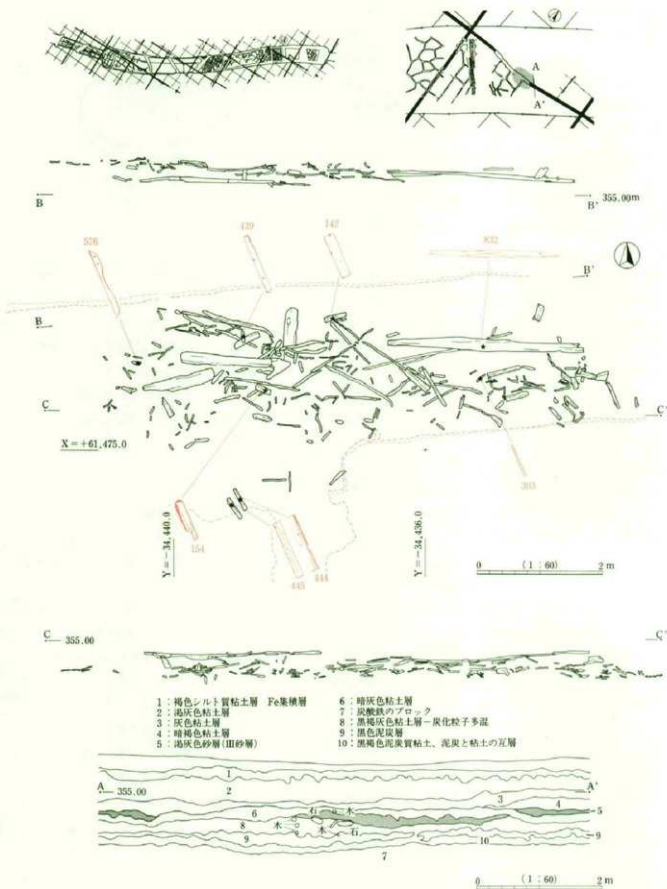
位置：調査区東側低地のほぼ中央の①-1区に位置し、東西方向の坪境にあたる。本址の15m北側には用水路、農道が同一方向に走る。検出状況：砂層は本址の南東側には10～15cmの堆積があったが、畦畔を境に寸断され北側水田面からは砂がほとんど検出されなかった。北側は畦畔の縁辺に薄く残った砂、砂を埋土とする凹凸の途切れから畦畔を確認した。このため畦畔北側の形状は明確でない。本址の周辺では砂層の下部と畦畔内のシルトに炭酸鉄のブロックが多量に認められ、板状に検出された箇所もあった。畦畔の上部は6層暗灰色～褐色粘土層となるが上層水田の3層と4層の分層が難しく水田面との比高差が0～15cmであった。方向・規模・構造：方向はW-4.5°SからW-1.5°Nとなり蛇行形状で、幅は検出面で2.6m～3mである。畦畔東側には炭酸鉄の集積が部分的にあり横材が多量に出土した。横材はほぼ2m幅で約10mの範囲に集中していたが調査区東側法面の壁断面にも横木が出土し、一部プラント・オパール試験坑で削られているので15～20mは畦畔内に横材があったものと予想される。横材材は大型板材、割り材、丸木材があり、比較的大型で長いものが中央部に畦畔と同一方向に置かれ、中規模の雑木が東西方向を意図した形で置かれていた状況であった。横木材検出面は水田面と同一で下部は下に位置することから畦畔構築時の補強材と考えられる。遺物出土状況：横材集中区から「北?」(1)、「中」(1)、「木」(2)の墨書のある坏が4点出土したほか、横材に混じって木製品が数点出土した。木製品は田下駄の破損品があったほかは用途不明で、祭祀具は出土しなかった。

SD3008 (第228図 P L39)

位置：微高地東側の低地③区に位置し、東西方向の坪境にあたる。本址から約1m隔てた南側には同一方向へ走行する中世の溝SD3006がある。検出状況・埋土：本址周辺は平安砂層堆積が薄く、畦畔と埋没水田面が十分に検出できなかった地点であり、溝の埋土とSD3006との間のみ平安砂層が検出された。本址



第233図 SC3002 (①-2区)



第234図 SC3001 平面・断面・立面

と北側の南北畦畔SC-NS040の範囲は平安砂層に代わる暗灰色シルト（6'層）と上層の褐色シルト質砂（5-1層）が埋没水田耕作土上に堆積している。この堆積状況は溝埋土も同様に見られ、埋土の上部は6'層と5-1層の混入が認められた。砂層堆積が希薄なため溝北側に沿った畦畔の高まりを検出することはできなかったが、耕作土が南側水田面に比べ10cm弱低いことから大畦畔が存在した可能性は強い。南側には砂層下に高まりがないことが確認された。方向・規模・形状：全長40mにわたって東西に検出され、方向はW-1°SからW-3.5°Sで中間付近でやや屈曲する形状である。幅は1~1.5m、水田面からの深さは36~50cmあり埋没水田にともなう溝の中では最も深いものである。断面形は浅い掘り鉢形になる部分と底面が比較的平坦となる逆台形状になる部分とがある。西から東へ緩やかに傾斜している。

SD3010-A・B (第228・235図 P L39)

位置：微高地東側の低地⑬区北西端に位置し、南北方向の坪境にあたる。本址直上には用水路が同一方向にあり、調査区法面の断面観察からは中世、近世の溝が数条あったことが確認された。また下層の一部は古墳時代の溝と重複する。検出状況・埋土：SD3010-A・Bともに基本土層第4・5層水田に帰属する溝によって上部が削られ、本来の平面プランは不明である。またSD3010-Aに関しては上層溝埋土(a層)によって本址の痕跡を留めないが断面観察から重複して溝があったと判断した。SD3010-Bは連続する浅い窪みとして検出された。埋土は暗褐色砂質シルトで埋没水田耕作土と砂層が混入した土質であった。溝にともなう畦畔は本地点が砂層堆積が希薄であったため検出でなかったが、SD3010-AとSD3010-Bの間に上層の溝によって壊された畦畔が想定される。方向・規模・形状：SD3010-AはN-6.5°W方向で水田面から30cmの深さがあり、SD3010-BはN-5.5°Wで幅70cm、水田面から5~10cmの深さであった。⑬区南西端の同一ライン上には用水路の保全のため未調査となった地点を挟んで埋没水田畦畔SC-WE141を切る溝が検出されたが、SD3010-AとSD3010-Bとも検出されていない。本址は未調査地点となったSD3009との交点でなくなった可能性がある。



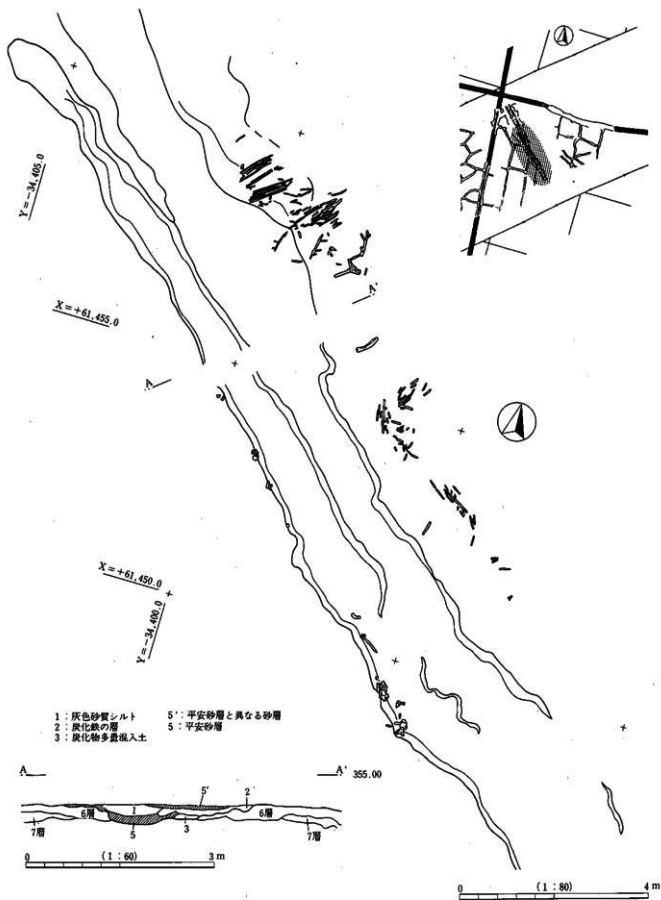
第235図 SD3010断面

SD4001 (第231・237図 P L45)

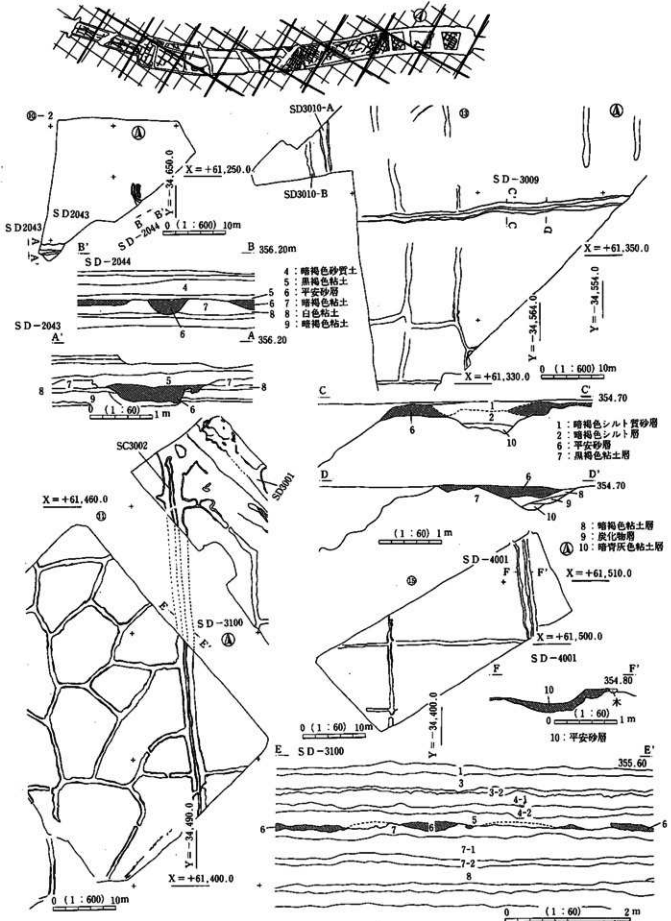
位置：微高地東側の低地⑬区に位置し、南北方向の坪境にあたる。本址の直上には現用水路が同一方向にある。検出状況・埋土：本址周辺は砂層堆積が希薄であったが平安砂層を埋土とする溝が検出された。砂層は西側水田面から連続するもので、上層は炭化物を混入した灰色シルトであった。溝の東側には溝沿いに幅80~100cmの高まりが確認され、中央部の耕作土直上に横材が数点出土した。この高まりは、溝西側水田面との比高差が20~25cmあることから、畦畔の痕跡とされる。方向・規模・形状：方向はN-6.5°Wで、幅は1.0~1.5m、水田面からの深さは30から40cmであった。断面は浅い掘り鉢形となりほぼ直線形状で緩やかに北から南に傾斜している。

SD3001 (第236図 P L43)

位置：微高地東側の低地⑬区に位置し、本址を北西方向に延長すると坪境の大畦畔SC3001、SC3002との



第236図 SD3001 平面・断面



第237図 平安水田溝跡平面・断面 (SD2043・2044・3009・3100・4001)

交差する地点にあたる。また下層には古墳後期～奈良時代の遺物を出土したSD3002がある。検出状況・埋土：埋土は平安砂層が主体となる堆積であったが、地点によって異なる堆積状況が見られた。北西端から中央付近にかけての埋土は、最下層が平安砂層その上部に灰色シルト層で更にその上部に平安砂層と異なる砂層の堆積が確認された。平安砂層堆積後の砂層は粗砂で数地点で厚い堆積が確認されているが、本址上面には上層水田の溝があった可能性がある。平安埋設水田にともなうSD3001は、平安砂層の堆積をもって検出した。本址にともなう土手（畦畔）は、東西護岸に幅広く検出されたが、砂層の堆積が希薄な北西周辺では暗灰色粘土である平安耕作土（6層）とやや色調が明るく砂質となる上層粘土（4層）との識別ができず、上層水田の耕作によって砂層が失われた地点も土手（畦畔）と誤認した可能性があり、北西部周辺では本来あった土手の規模は不明である。方向・規模・形状：調査区北西法面の断面観察では、幅約2.8mで深さ約35cmの規模として確認されたが、本址南西側のSC-WE170北西近辺では幅90cmの溝が出現し、2条の溝が幅250cmの溝として合流する状況で検出された。この細い溝が区画水田からのものか、本流が部分的に深くなったものかは北西地点の砂層が希薄であったため不明である。方向はN-47°Wでほぼ直線形状で北西から南東に傾斜している。北西側は土手からの深さが25～35cmであるが、水田面との比高差は10cm程度で、SC-NS051付近では水田面と同一標高となる。溝にともなう土手は規模が曖昧となる地点もあるが北東側は約150cm幅で、南西側は80～120cmである。北東側土手においては土手の芯材として小枝、ヨシの茎を敷き詰めた状況が見られ、南西護岸には立木の根が5カ所で見出された。樹種同定の結果立木はヤマクワであった。本址は平安埋設水田の地割において異なる方向に位置するものであるが、下層の溝址から継続する遺構として機能したものである。

ウ 土坑

平安埋設水田面には砂層を埋土とする大小の凹凸が検出されているが、土坑としたものは4基である。この内16区から検出されたSK002～004は水田面からの深さが10～18cmと浅く、前項アで述べたごとく配水にともなう窪みと判断され、規模は小さいがいくつかの調査地点で同様な状況は見られた。この3基を除くと㊸-2区検出のSK001のみが性格の異なる土坑であった。

SK001 ㊸-2区 (第231・238図 P L46)

SC-NS037-038とSC-WE133に区画された水田のほぼ中央に位置する。平面形は直径100～110cmの不正円形。深さは43cmで、壁を垂直に掘り込んだ円筒形状に近い断面形であった。埋土は4層に分層され上層は平安砂層、2・3層は平安砂とは異なる砂を混入した灰色粘土、下層は炭化物粒子を多量に混入した粘土であった。2～4層は下層の堆積粘土層を攪拌した状況であった。性格は不明であるが耕作にかかわる土坑とされる。

SK002 ㊸区 (第231・238図 P L46)

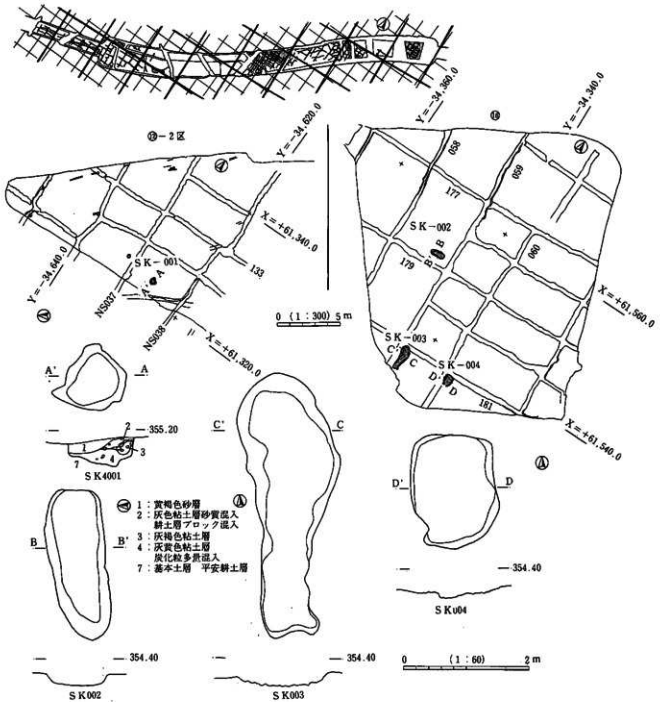
SC-NS058-059とSC-WE177・179に区画された水田の南西に位置する。規模は240×90cmで東西に細長い楕円形である。深さは15cmで埋土は平安砂層であった。一枚水田の中では最も低い位置であることから配水を目的に大きく窪められた痕跡と判断した。

SK003 ㊸区 (第231・238図 P L46)

SC-NS059-060とSC-WE181に区画された水田の北西コーナーに位置する。規模は720×150cmで南北畦畔に沿って細長い。深さは18cmで埋土は平安砂層であった。水田面は西から東に傾斜していることから隣接水田からの配水の痕跡とした。規模がやや大きいことから土坑の中に施肥し、配水とともに水田に散布するための施設の可能性もある。

SK004 ㊸区 (第231・238図 P L46)

SC-NS060とSC-WE181に区画された水田の北西コーナーに位置する。規模は180×135cmで南北に長い



第238図 平安水田土坑 平面・断面 (SK001-004)

長方形状である。深さは12cmと浅く底面には凹凸が顕著に検出された。隣接水田からの配水の痕跡とした。

3 小 結

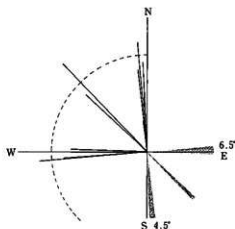
(1) 条里型地割の復元

水路を伴う畦畔及び水路と幅2m前後の畦畔は、南北方向5条、東西方向4条、北西-南東方向2条が検出された。このうち⑪・⑫調査区で検出した北西-南東方向2条を除く9条は条里型地割の一町を区画する坪境である。各坪境の間隔は約110mとなり、方向は国家座標に対して南北畦畔で最大6.5°西に、東

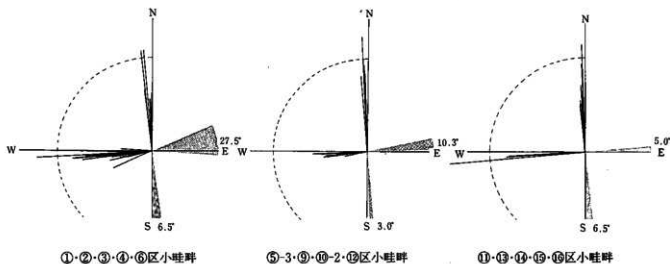
西方向で最大5°北に偏りがある。平成3年度長野市教育委員会のよって調査された北野区画・みこと川区では「条里的地割の基準線は、座標北から4度30分ほど西に偏り」⁽¹¹⁾があることが確認されているが、本遺跡の状況も平均するとほぼ同一となる（第239図）。

現在までに条里型地割として検出された場所は5地区の58地点に及んでいる。この調査地点において検出された大小畦畔の位置に、本遺跡の調査によって確認された坪境の南北方向N-4.5°-Wの傾きと110mの間隔とを延長すると第240図となる。この図から川柳地区・平久保地区の調査において坪境の大畦畔とした14条のうち10条の畦畔は同一区画線上にのる。みこと川区・北野区画区では坪境の畦畔のうち東西地割は全て区画線上にあるが、南北地割に全てずれがあることがわかる。また篠ノ井遺跡群大規模自転車道地点及び塩崎遺跡群段屋敷遺跡地点で検出された同時期の溝のうち2条の溝が方向、区画を同一にしている。石川条里遺跡全域に同一企画の地割が均一に施工されたかどうかは判然としない点が多いが、広域にわたり坪境の座標軸の偏りは一致し、本遺跡と川柳地区、平久保地区には共通地割が認められる。

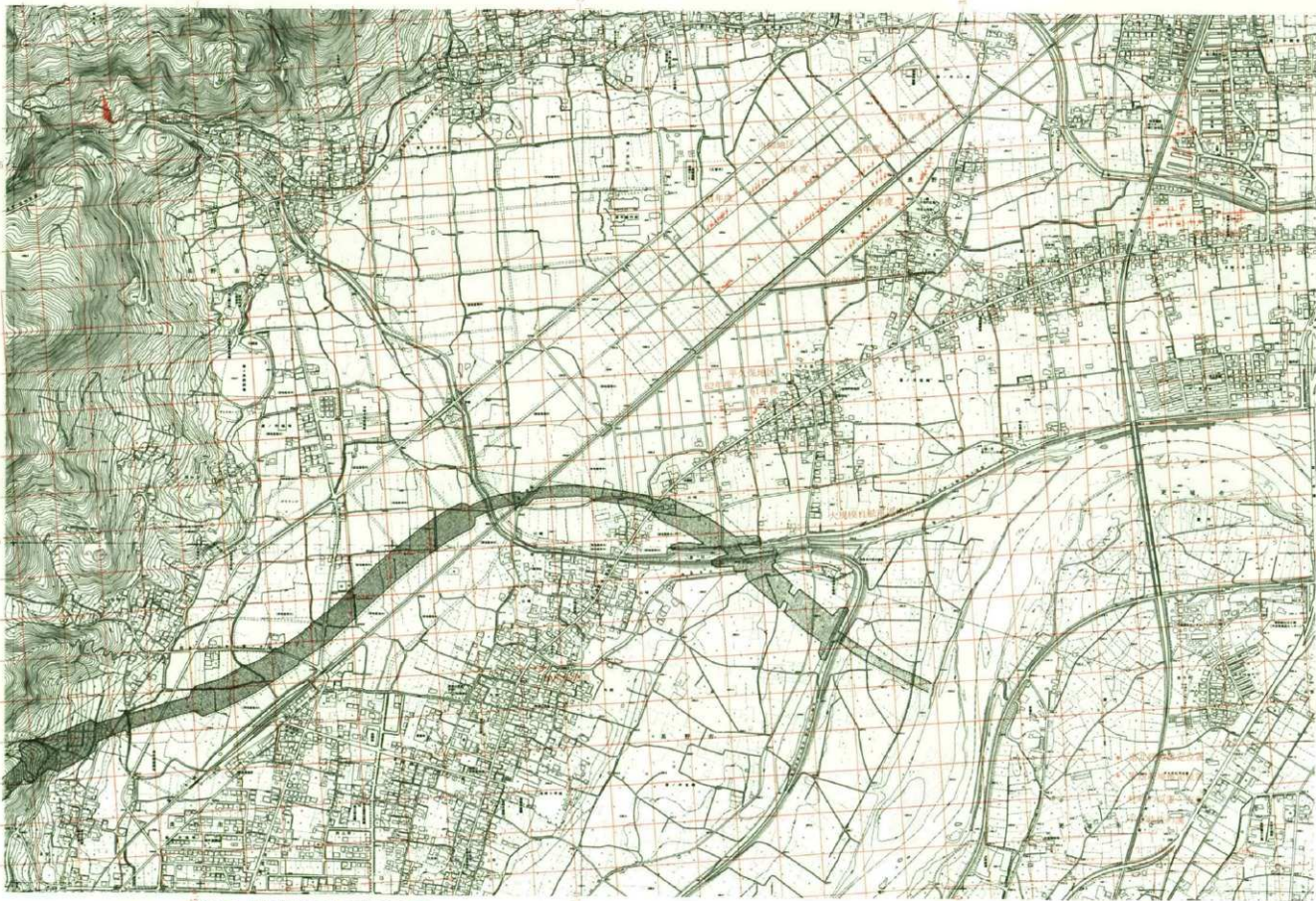
一町四方の坪内の水田区画については、従来の「長地型」・「半折型」といった区分には該当しない不定型な地割であった。中央微高地西側の調査区では南北方向の畦畔が連続する基軸を南北にとった地割で、東西方向の畦畔で中・小区画を作っている。調査区域の西端にあたる①・②区では東西方向に長い長方形の区画である。③・④・⑥区の同一坪内では、東西方向に長い区画と南北方向に長い区画の2者がある。また微高地東縁辺域の⑫区SC3005-A付近は南北方向の畦畔を基軸とした小区画で構成されるが、大畦畔を境に南北方向に長い区画と東西方向に長い区画の2者がある。微高地東側の低地にあたる⑭・⑮区では不定型の水田区画となり、東西方向の畦畔が大きく乱れ、この坪内である⑬区SC3002の西側には多角形の亀甲型をした水田が連続する。聖川付



大畦畔 (坪境)



第239図 畦畔の方位



第240図 周辺調査地点と条里型地割の復元

近の⑬・⑭区は整然とした中小区画である。坪内区画は各坪によって異なる地割であるが、南北方向の畦畔は連続するものが大半で坪内の地割の基軸が南北にあることがわかる。このことから本道跡における坪内地割は南北「長地型地割」の細分化を意識した「不定型細分化地割」として認識される⁽¹⁶⁾。

(2) 水田の水回しに関して

条里型地割における坪単位の規模で配水、排水の機能があったとした溝は、SD2043・3010-A・3009・3010・3100・4001の6条である。いずれも調査区東側の低地にありSD3001を除くと全て坪境の方向と一致する。また低地の調査区において調査工程上未調査となった地点を除いて坪境のラインに溝がないものは⑭区SC3001だけである。低地においては溝と坪境は相関関係にあり、坪単位で配水が行われていたことが確認された。ただし坪境畦畔と溝、溝と水田面の配水・排水構造、溝相互の繋りなどに関しては、坪境にあたる地点が現在の用水路・主要な道路に重複したため十分な面積を確保できなかったことと調査地点が後世の耕作などによる影響があったことなどにより詳細な所見を得ることができなかったが、東西の溝は西から東へ、南北の溝はSD3001を含め北から南へ緩やかに傾斜し、水田面も北西から南東に傾斜しているのが基本的には坪単位で配水、排水が行われていたものと解釈できる。

東西に走行するSD2043とSD3009は幅1.5mで、深さ40cm以上の規模がある比較的大きな溝である。この溝は微高地東側の低地にかかる傾斜面に位置し、南北に走行するSD3010がSD3009に合流することからもこれらが山麓からの主要用水路として機能していたと解釈できる。南北に走行するSD4001は東側に土手が検出されていることまた隣接区である16区から水田面が自然堤防方向へ高くなり始めていることなどから集水、配水の機能がかったものと思われ、SD3010は規模が小さいことから恒常的な水路というよりは必要に応じて機能した簡易的な水路と解釈できる。SD3001は下層の溝更に下層の弥生、古墳前期水田の区画を踏襲する位置にあり、条里型地割の方向とは45°ずれがある。下層のSD3002の埋土が小礫を多量に含む砂層であり自然流路に近い状況であることから本区が自然地形を改変できない主要用水路として機能していたものと思われる。

(3) 条里型地割の施行時期

平安砂層に被覆された平安埋没水田は広範囲にわたり検出されたが、この地割の施行時期については今回の調査においても確定する資料に乏しい。⑭区SC3005-A下に形成された疑似畦畔SC3005-B及び平安水田耕作土層下の疑似畦畔SC3006は土層から古墳時代後期から埋没水田以前の年代が該当する。⑬区SD3001下に重複するSD3002は古墳時代中期後半から奈良時代にわたる遺物が出土した。いずれも地割とは方位が45°のずれがあり、埋没水田の地割に踏襲されている。SC3005-Bは微高地縁辺、SD3002は低地部にかかる軟弱地盤の流路といった水回しの地形制約を受けた場所にあたる。両者は北西から南東に傾斜する地形に対して平行に設けられた地割で、弥生時代後期から古墳時代中期までの区画方向と一致する。この区画は古墳時代後期まで各地域で検出されている大区画と小区画から構成される水田形態で、同地域内の川田条里遺跡においても見受けられる⁽¹⁷⁾。平安埋没水田の地割は下層水田の区画を東西南北方向に45°ずらしている。疑似畦畔SC3006を改変している状況からは少なくとも古墳後期ないしは奈良時代までの土層には東西南北方向の畦畔は存在していない。

SC3001・3002は複数の杭と板材、木製品などを芯材とした坪境の畦畔であり、SC3001からは芯材と共に「木」・「中」などの墨書がある須恵器の坏、高台坏が出土し、SC3002からは馬形、畜車が出土した。SC3001出土須恵器は平安時代前半の9世紀前半から後半の時期のもので、SC3002出土の馬形の形態と畜車のセットも9世紀前半から中頃の祭祀組成を示している。恒常的に敷設された坪境の畦畔として両者の築造



第241図 表面条里と検出畦畔の比較

時期も同時期とされるが、低地部に設けられた畦畔であり祭祀行為が確認された唯一の場所となることから埋没水田施行期の遺物が施行後に補強されたものであるかは今後慎重に検討すべき必要があり、坪境の畦畔出土遺物イコール施行時期と即断できない。また施行範囲も遺跡全面が一時期に条里型地割に改変されたかどうか判断しかねる。本調査区においてはSC3002が下層のSD3002上に構築されているので7世紀後半ないし8世紀前半まで下ることはないと判断され、出土遺物から条里型地割は、9世紀中頃以前に成立したものであると認識される。

(4) 表層条里と平安埋没水田の整合 (第241図)

石川条里遺跡を含めた籾ノ井地区には、耕地、地割、用水堰に関する字名が多く残されていることは多くの研究者が指摘するところであり、本調査地点においては松葉田(⑩区)北小坪、南小坪(⑨・⑪・⑬・⑭区)柳岸田(⑨区)一丁田(④・⑥区)に該当している。このうち南北AラインとCライン、東西ニラインが字境の用水路と一致する。表層条里と平安埋没水田が一致をみないことは長野市教育委員会の調査によってすでに指摘されて、本遺跡でも3条の坪境が部分的に一致をみたにすぎない。ただし表層条里の坪境地割の方向は「西へ4度くらい傾いている」⁽³³⁾ことが知られ、本遺跡及び長野市教育委員会の調査所

見の埋没水田の条里型地割と同一方向となる。平安埋没水田とその後の幾度かの復旧水田の地割の基本軸が同一に設けられていたことが推測される。

(5) 平安砂層に関して

ア 堆積状況

各調査地点における砂層堆積は均一ではない。砂層が比較的厚く堆積していた場所は西側山麓寄りの①・②区と中央微高地東側の低地にかかる傾斜面の⑬区であった。一方砂層堆積のない地点は微高地上はもとより低地であるにもかかわらず⑭・⑮・⑯区の北側であった。この状況は長野市教育委員会による平久保地区の調査所見と同一で、同調査地点でも砂層が検出されない低地があった⁽²⁴⁾。また本址では同一坪内の砂層堆積においても厚みの増減が見られ、畦畔の検出に違いがでた。西側山麓付近に特に厚い堆積が認められる要因としては、山麓低地部であった部分が平安砂層堆積後に隆起した可能性が考えられるが、低地部に砂層堆積がない要因については平安砂層堆積後の再開発を含め今後の課題である。

イ 砂層の定量分析 (第24表)

堆積した土層の成分に関する定量分析を数地点で行ったが、ここでは砂の給源という観点から2地点5資料の分析結果を報告する。ただし広域な遺跡のなかの1調査区の結果であり遺跡全体の評価は今後の分析資料の蓄積に委ねるものである。資料は調査区微高地の西側⑥区4層(中世水田)と6層(平安砂層)東側⑬区2層(近世砂層)と4層(中世水田)、6層(平安砂層)である。また比較検討するため本址より上流に位置する現千曲川の栗佐(A地点)、と西山麓から千曲川に流れ込む佐野川の河口(B地点)、現聖川の砂の3資料を比較検討するため分析した。分析方法は資料中の砂だけを取り出すためフルイにかけた後、クエン酸ナトリウムを用いて鉄分の付着を除くた。分析は越川長治が行い結果は以下の表のごとくである。

第24表 平安砂の成分

資料 1	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	細レキ	分析所見
千曲川A	3+	3+	+	+	+	2+	細レキが混入しているが、均一で揃っている。石英・長石の無色鉱物が多い。
千曲川B	2+	3+	+	+	+	3+	不揃い。
聖川	2+	3+	+		3+	3+	不揃いで大小の安山岩・凝灰岩の細レキが入り輝石の割合が多い。石英・長石の粗粒が目立つ。
資料 2	岩 砕	石英	長石	角閃石	黒雲母	輝石	分析所見
⑥-4層	7割凝灰岩風化レキ	2+	2+	+	+	+	同一の粒状で固結している。岩砕は8割で無色鉱物は判然としない。
⑥-6層	3割凝灰岩風化レキ	3+	3+	+	+	+	粒径の揃った砂、無色鉱物が多い。
⑬-2層	1割判然としない	3+	3+	+	+	+	大半が灰色粘土、シルトで鉱物は僅少。9割が無色鉱物。
⑬-4層	7割凝灰岩風化レキ	2+	2+	+	+	+	同一の粒状で固結している。岩砕は6~9割で無色鉱物は石英・長石
⑬-6層	4割凝灰岩風化レキ	3+	3+	+	+	+	粒径の揃った砂。

⑥・⑬区4層の中世水田の砂は、該期の用水の給源とかかわり洪水とは直接結びつかないが、凝灰岩風化レキと輝石を多く含む特長がある。4層の砂は西山を給源とする堆積が主体となり、聖川と共通する。これに対し6層平安砂層は石英・長石を主体とし粒径は大きくなるか粒の揃ったものであり、千曲川A地点の砂と共通する。⑬区2層は近世水田を覆いつくした洪水砂であり、岩砕をほとんど含まない砂質シル

トである。2層は資料1との比較から給源を限定できないが、凝灰岩風化レキを多量に含まない点は聖川と異なる。以上の結果から水田耕作に必要な用水の給源は山麓からの河川を主体としていたことと、洪水砂として堆積しているものはその給源の主体が千曲川であることがわかる。

ウ 千曲川流域の平安砂層について

更級郡誌には慶長十九(1614)年～明治四十四(1911)年まで約300年間の千曲川及び犀川の洪水による善光寺平南部域の災害記録がまとめられている。これによると17世紀前半6件、同後半11件、18世紀前半16件、同後半12件、19世紀前半12件、同後半26件の計83件(1911年まで含めると合計91件)の洪水による被害があったことが窺われる。この記録を単純に考えると、実に3年に1度は洪水に見舞われていたことになる。各時代の地割、用水など諸条件が異なるが、水田耕地化後は頻繁に洪水による被害があったことは容易に想像される。洪水によってもたらされた土砂は、水田の連続耕作をするなかで攪拌され、災害の痕跡を留めていない場合が多いが、その中に加って本遺跡及び善光寺平南部域に検出されている平安砂層は堆積範囲、厚みから地域の災害史上最大規模の大洪水であったことがわかる。この千曲川の氾濫による砂層が検出された遺跡は、現在までのところ千曲川中流域にあたる右岸の坂城町青木下遺跡^(M10)と左岸上山田町力石条里遺跡^(M11)が南限となる。両遺跡とも水田跡が検出され水田面の凹凸の状況は本遺跡と同一である。下流域では右岸長野市川田条里遺跡に洪水砂が検出されているが、同遺跡では東側山麓からの河川による砂層の堆積が主要因と考えられているので、当該期の千曲川氾濫を如実に示す範囲は右岸更埴条里遺跡と屋代遺跡群、左岸石川条里遺跡と篠ノ井遺跡群が北限となる。なぜ千曲川流域の中で善光寺平南部域にのみ広大な埋没状況を残しているのか、地形形成、耕地の開発状況などと、前後する時期の集落遺跡の動向を合わせて検討する必要がある^(M12)。平安砂層堆積の時期について本遺跡の調査からは、更埴条里遺跡、石川条里遺跡(長野市教育委員会)の報告のなかで触れられている『類聚三代格』『日本紀略』の記載にある『仁和4(888)年』を否定する資料はない。

註

- 1 長野市教育委員会 1983『石川条里的遺構ほか』
- 2 長野市教育委員会 1984『石川条里的遺構(2)』
- 3 長野市教育委員会 1985『石川条里的遺構(3)ほか』
- 4 長野市教育委員会 1989『石川条里遺跡(4)』
- 5 長野市教育委員会 1993『石川条里遺跡(7)』
- 6 小穴喜一 1982『条里遺構調査の観点』 『条里制の諸問題Ⅰ』
- 7 白居直之 1993『善光寺平の水田遺跡』 考古学ジャーナル 183ほか
- 9 長野県更級郡役所 1914『更級郡誌』
- 10 坂城町教育委員会 1995『青木下遺跡・塚田遺跡』
- 11 上山田町教育委員会1990『力石条里遺構(第1・2次調査)』
- 12 自然災害の要因としては、現在では否定的な見解が多いが「八ヶ岳の大崩落」、「仁和3(888)年の大地震」についても考古学的な検討の余地はある。

4 低地域（水田）出土焼物

(1) 焼物の概要と整理方法

低地域で採取された古代土器は小破片を中心として総数約1187点得られたが、調査面積を考えれば水田域の出土数量は集落遺跡に比べて極端に少ないといえる。しかし、水田面での完形土器の集中出土も認められたように、水田域で土器が使用される場面は確実にあったとみられる。しかも、出土土器は時間幅をもちながらも食器を中心とする組成は共通してみられ、水田域に特徴的な土器使用方法があったと推測される。もちろん、同じ水田域内でも場所ごとに土器出土量や時代別の数量も異なっており、水田での土器使用が古代を通じて一律的に同じという訳ではなかったと思われる。このように、水田域出土土器には水田と結びついた土器使用が想定されたため、整理では地点や層位ごとに焼物・器種別の傾向を示すことを重視し、出土焼物の数量的な把握を行うことにした。ただし、この数量化にあたっては調査時の採取方法、包含層の残存状況や数量化に当たった計測方法やその条件が異なると、得られる数量データの質が異なることになる。そこで、次にこれらの計測の前提条件について述べる。なお、焼物種や器種の概況については微高地域の古代遺物のところで触れている。

調査方法から述べる。水田域で古代に関わる土層は洪水砂層とそれに覆われた耕作土層の2枚ある。層別に得られた遺物を見ると約68.5%が砂層～水田面出土、畦内～耕作土中では約6.4%、その他の中世以後の土層および出土地点不明・地表面採取遺物は約25%となる。このなかで砂層～水田面出土が量的に突出するのは、洪水砂層に覆われた水田面の調査に主眼が置かれて洪水砂層中～水田面上の遺物が比較的丁寧に採取が行なわれたためであり、耕作土中や畦内が少ないのは耕作土では遺物採取を目的として広範囲に調査されておらず、畦内も大畦内以外は断面観察以外は調査されていないためによる。また、比較的丁寧に遺物採取された洪水砂層でも、⑬区以南の調査地区や微高地よりの⑦-1・⑨・⑩-2・⑮-3区では砂層自体の残存状態が非常に悪いこともあり、採取された遺物量は少ない。こうした調査条件からすると、調査方法が大きく異なる層別の量的比較はあまり有効でないと考えられるが、個別層内ごとの組成比較や、比較的均一に調査されている砂層～水田面遺物の地区ごとの出土量の比較には一定の有効性が期待できると思われる。

次に、数量の計測方法であるが、その方法によっては同一地点、あるいは層毎の異なる焼物種・器種・用途別組成の数値に違いを生じることが予想される。例えば、大型の甕と小型の杯類の1個体から派生する破片数の違いや、焼物種や用途の違いによる破損しやすさの傾向の違いは器種別の比率としてみる場合にかかなりの誤差を生じることが考えられる。これらの問題を克服すべき有効な計測方法を探る試みがいくつか行なわれているが、ここでは各調査地区内で得られた遺物の接合作業後に、ほぼ同一個体と思われるものをまとめて1点として計測することにした。この方法では同一個体認定に主観的な観点が入るため、計測者によっては得られる数値に違いが生じることも予想される。しかし、出土点数が集落より少なく、しかも小破片を材料とする場合には特定部位の計測では抜け落ちる器種が出てしまうことや、逆に遺跡での破損や使用方法に規定されたあり方の一部が全体の現象となってしまう可能性があると考えたことにより、このような方法を採ることにした。本来ならば多様な計測方法を用いての数値比較によって、計測方法を検証すべきところではあるが、時間的な制約の関係から上記の方法に限定したことは断っておきたい。

(2) 水田域出土遺物

上記のような調査、計測の条件によって得られた数値データを基に、洪水砂層中・砂層～水田面、水田面、畦内、耕作土中、遺構出土に分けて出土焼物について説明を加える。なお、砂層～水田面遺物として

のC類¹⁾、14が須恵器壺、30が須恵器長頸瓶の頸部、28が灰釉陶器の瓶である。20が土師器の小型甕でクロ調整される。緑釉陶器は混入の可能性がある。

註

- 1 原 明芳1989「第7章 第2節 (2)緑釉陶器」『中央自動車道長野線緑釉文化調査報告書3吉田川西遺跡』長野県教育委員会・鶴長野県緑釉文化財センター

イ 水田面出土の焼物(第318・319図)

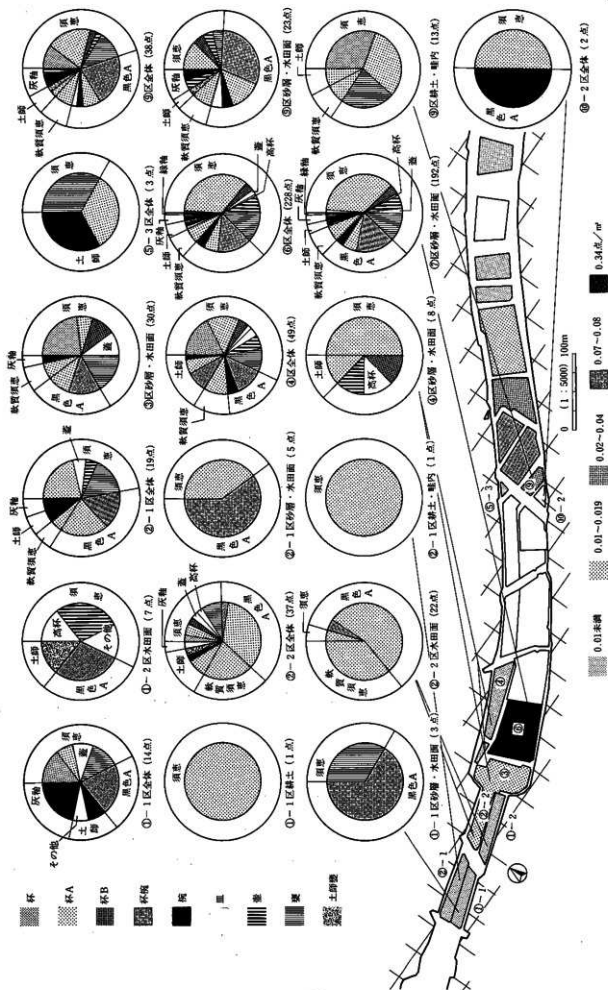
平安時代の洪水砂で覆われた水田面直上出土の土器である。ただし、上記の砂層・砂層～水田面出土遺物として取り上げられたものと明確な区分はなく、認定は調査担当者の判断によっているところがある。したがって、水田面出土遺物と洪水砂層出土品は厳密に区分されたものではないため、区分する意味はあまりないが、完形土器が含まれる点や畦内出土土器と接合するものがあるなどの特徴も見られる。

この水田面出土とした遺物は総破片数349点あり、低地出土土器の約29.3%を占め、上記砂層・砂層～水田面出土土器と合わせると約64.3%となる。焼物種組成は須恵器が50.9%、黒色土器が30.1%、軟質須恵器が8.6%、土師器が8.3%、灰釉陶器が2.1%である。用途別組成は食膳具が84.3%、貯蔵具が12.6%、煮沸具が1.1%となる。また、食膳具の内訳は杯Aが54.4%、杯Bが7.8%、碗が3.4%、皿が1.4%となっており、ここでも杯Aの優位性がうかがえる。なお、杯Aの焼物種の内訳は須恵器54.7%、黒色土器・軟質須恵器・土師器各7.7%であり、碗は黒色土器60%、土師器10%、灰釉陶器30%で、皿が黒色土器75%、灰釉25%である。上記の組成をみる限り、砂層・砂層～水田面出土土器と組成比率はほぼ同じである。

なお、比較的均一に遺物採取された洪水砂層・砂層～水田面とこの水田面出土遺物を合わせて地区ごとの面積で割った、破片数/面積比(=出土遺物密度)では一定の傾向がうかがえた。すなわち、微高地西側低地では西端の①-1・②-1・①-2区では0.002、0.003、0.002個/㎡、②-2・③区では0.015、0.013個/㎡、⑥区では0.34個/㎡となり、明らかに中央微高地寄り出土破片密度が高くなる傾向がある。ただし、微高地に隣接した④区では0.004個/㎡と低率であるが、これは調査区内に微高地が含まれるため洪水砂層～水田面で遺物採取された実面積は小さいものの、計算上では④区全体の面積で割っていることによる。この微高地西側低地の出土破片密度の傾向は微高地東側低地でもほぼ同様に確認できる。微高地近くの⑨区では0.026個/㎡、それに隣接した⑫区では0.074個/㎡、それ以东では⑬区-0.035個/㎡、⑭区-0.019個/㎡、①区-0.003個/㎡、⑯区-0.0002個/㎡、⑰区-0.0006個/㎡となる。つまり、微高地東側低地でも中央の微高地周辺が多く、その東の聖川に近くなるほど出土遺物密度を減じていく傾向がみられる。そして、一番東端の⑱・⑲区といった聖川近くでは極端に少なくなる。この様相を単純にみると、微高地寄りでは遺物密度が高い理由は微高地からの混入が含まれるとも考えられるが、微高地と低地では主体となる遺物の年代にずれが認められ、用途別組成でも主体となる器種比率が異なる。また、調査域西端の①-1・②-1区では砂層をもたらし洪水と前後した時期の集落である鶴前遺跡と隣接しているながらも、出土遺物密度がそれほど高くない。したがって、微高地からの混入も全くないとはいえないが、むしろ微高地周辺の水田での焼物使用頻度が高いと考えたほうが良いと思われる。

この水田面出土で図示した土器は56点ある。このうち1～10は②-2区水田面で集中的に検出されたもので、32は⑦-1区の微高地近くの水田面で出土した略完形、47と40は⑭区大畦跡で大型破片・略完形で出土したものである。なお、45に関しては畦内で出土したものと接合している。

14・17・18・24～26・36・38・43～45・56が須恵器杯Aである。底部調整は概略が回転糸切りであるが、43のみは手持ちへら削りの後にナデ調整される。また、ほとんどが口縁部1/8以下の破片であるが、24・56は比較的破片が大きい。なお、38は軟質須恵器の可能性があり、20・27・28・37・48・55は須恵器杯Bで、



第243図 水田城西部の調査地区別出土古代焼物組成グラフ

何れも小破片である。底部調整は概略が回転ヘラ削りだが、20は回転糸切り未調整、28は外底中央に回転糸切り痕を残して周囲が回転ヘラ削りされる。21・33は須恵器の壺と思われるもので、31は高杯である。何れも摩滅している。19・30は須恵器の壺底部で、47が四耳壺である。47は全体の1/8程度の残存であるが、多数の破片が接合したものである。8~10・13・15が軟質須恵器杯Aである。1~7・11・12・22・23・32・34・35・40・41・50~54は黒色土器の杯Aである。口縁部が内湾ぎみに立ち上がるものと外反ぎみになるものがある。底部はいずれも回転糸切り未調整である。この内、7と54は外面に墨書がある。なお、柄は何れも小破片で42のみ図示した。土師器は16が杯A、49が小型甕である。灰釉陶器は29が皿、39が碗、46が瓶である。29・39は灰釉刷毛塗りで光ヶ丘1号窯式の所産と思われる。29は混入の可能性もある。

ウ 耕作土・畦内出土の焼物 (第319・320図)

調査で大畦を中心とする畦解体、および水田面のトレンチで出土した遺物と水田面調査時に耕作土中に入ると認定された遺物である。破片数は畦内46点、耕作土中30点で低地出土古代土器の約6.4%に該当する。繰り返し述べるようにこの耕作土・畦内遺物は部分的な調査によって得られた遺物であり、全地区で均一的に遺物採取された結果の所産ではない点は注意されたい。例えば、単純にみると畦内のほうが耕作土中出土より多いが、これは大畦を中心に比較的多くの地区で畦解体が実施されたため、一方の耕作土の遺物は積極的に採取されていない採取条件による。また、この耕作土・畦内出土土器は洪水直前までの耕作で混入する土器が含まれるので、上層と共通する型式の土器が含まれる。

このように限定的で、しかも不均一な調査方法で採取された遺物であるが、水田面～砂層出土土器とは異なった組成傾向が知られる。焼物種組成でみると畦内が須恵器約71.6%、黒色土器約19.6%、軟質須恵器約2.2%、土師器約4.4%、灰釉陶器約2.1%である。耕作土中は須恵器76.7%、黒色土器13.3%、土師器7.2%で灰釉陶器2.8%で軟質須恵器は含まれていない。なお、土師器食膳具は摩滅した小片のため、土師器と断定するにはやや躊躇されるものがある。この組成では須恵器の比率が高率で灰釉・土師器・軟質須恵器が含まれないか、少量となっており、全体的に水田面以上の土層よりも古相とされる組成傾向がみられる。

次に用途別の組成をみると畦内では食膳具約85.1%、貯蔵具12.3%、煮沸具1.1%となり、耕作土中では食膳具約83.3%、貯蔵具16.7%、煮沸具0%で砂層・砂層～水田面遺物と比較して大きな違いはない。つまり、時代によって土器の焼物種は変化しても、水田域で使用される器種はほぼ共通すると考えられる。なお、食膳具の内訳では畦内が杯A33.3% (須恵器76.9%、黒色土器7.7%、軟質須恵7.7%、土師器7.7%)、杯B28.2% (須恵器)、碗2.6% (黒色土器) で、耕作土中は杯A48% (須恵器83.3%、黒色土器8.3%、土師器8.3%)、杯B16.7% (須恵器)、碗33.4% (黒色土器75%、土師器25%) である。ここでも圧倒的に杯Aの多さが目につくが、杯Bも比較的高率を占めるものの、一方で碗は少なく、灰釉陶器は認められない特徴がある。

図示した土器は耕作土中10点、畦内16点である。耕作土中出土土器は1~10が該当する。1・2・5・6・8・10が須恵器杯Aで、底部調整はほとんどが回転糸切り痕を残すが、10のみヘラ切り後にナデ調整されると思われ、焼成が不良で部分的に明褐色を呈する。6は焼成不良であるが灰色を呈し、むしろ軟質須恵器に近い焼成である。7は杯Bで、残りが良く底部は完存する。底部の調整は回転糸切り痕をそのまま残し、焼成は6と同様に軟質須恵器に近いものである。3・4が黒色土器杯Aで、10が土師器碗?と思われるが、表面が磨滅しており、本来は黒色土器碗の可能性もある。

畦内出土は11~26を図示した。ここで図示した土器はすべて大畦内出土で、なかでも㊸区の本の大畦では完形、略完形土器が出土している。11~16がS C3001から、17~20がS C3002から畜串と近接して出土したとされる。土器年代は15・17が8世紀の前半、12・13の小型化して底径が小さくなる9世紀の所産

と思われるもので年代幅があるため、一括して埋められたものではないと推測される。12・13・14・19・21・22が須恵器杯Aで、底部が回転糸切り痕を残すものが多いが21はナデ調整と思われる。なお、12・13は完形で法量も全体の作りも、体部に墨書をもつ点も全く同じで同一産地から同一時期に搬入されたと思われる。15・17・18は須恵器杯Bで底部は回転へら削りされる。このなかで15・17は高台が外へ張り出し、体部も外反が強い類似した形態であるが、18は全体に薄手のつくりで高台はあまり外へでない。23は須恵器の蓋の宝珠つまみである。11・16・26が黒色土器杯Aで11・16には墨書がある。25が土師器の小型甕で底部には回転糸切り痕を残す。24は台付甕の底部であるが、古墳時代のものとは形態が異なり、古代の所産と考えた。

エ 古代の溝跡出土土器 (第320図)

平安時代水田面で検出された溝跡のSD1017・3001・3002・3003・3009、㉔区畦上の溝が該当する。ただし、SD1017は埋土が砂層と類似することから古代と推定されたが、出土遺物のほとんどが近世末期以後の所産で単純に古代といえない問題を残す。溝跡出土破片数は36点で低地全体のなかでは約3%ほどにあたる。また、出土遺物は必ずしも平安洪水砂層～水田面遺物と年代的に一致しないものもあるが、これは洪水以前に構築されながらも、洪水直前まで継続的に維持されたものもあると思われる。以下に各溝ごとに出土遺物を述べる。

SD0017 ㉔区微高地縁辺をめぐる溝跡である。古代～近代までの遺物が含まれ、古代の所産とするには問題もある。出土した古代土器は図示したもののみで、1は須恵器の甕口縁、2は四耳壺胴部、3は底部脇にへら削りが施される甕類の底部破片である。他の中世～近代の遺物は各項で掲載している。

SD3001 ㉑区に所在する溝跡で、図示した須恵器壺しか出土遺物がない。肩が張り、体部が比較的直線に立ち上がる壺と思われる。

SD3002 比較的古い様相の土器がみられるが、平安時代の洪水時の所産の土器はない。古代と思われる遺物は須恵器杯3片、甕5片、壺1片、土師器甕1片である。この他に古墳時代後期の須恵器蓋杯、土師器杯が出土しているが、古墳時代のところで扱っている。図示したのは1の須恵器杯、2の須恵器甕である。いずれも小片であり、1は体部が直線的に立ち上がる杯Aの可能性もある。2は蓋の可能性もあるが摩滅して詳細は不明である。これらの土器は7世紀後半に遡る可能性もある。

SD3003 須恵器杯Aが1片あるのみである。

SD3009 ㉓区の溝である。軟質須恵器杯A 3片、黒色土器杯碗口縁～体部破片 3片、須恵器甕1片、須恵器杯5片(杯A 2片、杯B 2片)、灰釉瓶1片、土師器小型甕1片がある。この他に土師の杯碗破片と思われるものが2片あるが、小片で子細不明である。ほとんどが1/8以下の破片で、もっとも遺存の良好な須恵器杯Bでも口縁部2/8破片である。図示したのは小型甕のみである。

SD3100 ㉒区の大畦上で検出された溝跡である。図示した黒色土器杯Aのみ出土した。

オ その他の遺物 (第320図)

中世以後の遺構や土層からの出土品、地表面での採取品、あるいは出土地点不明となった焼物である。総数297点あり、全体の25%が該当する。これらの遺物は古代の基本土層に帰属せず、採取方法も統一的でないので一括して扱う。しかし、全体の焼物種組成・用途別組成、あるいは出土焼物の年代は上記の古代水田出土土器の様相と変わらない。したがって、水田域での土器使用は洪水以前までの時期が非常に多く、それ以後はあまり顕著でないことを示していると思われる。以下には掲載した図を中心に説明を加える。中世以後の溝跡出土土器 SD1022・3006・3007・3015出土遺物を取り上げた。SD1022は㉔～㉑-1区に所在する溝跡で、1が黒色土器杯A、2が須恵器杯Bである。SD3006・3007は㉓区の中世溝跡である。SD3006の2・4は須恵器杯であり、2は底部回転糸切り、4が底部へら切り後にナデが施される。3・

5・6が須恵器杯Bで、3は外底部中央に回転糸切り痕を残して周囲が回転へう削りされる。8は須恵器の壺である。また、1はS D3006周辺で取り上げられた土師器小碗である。S D3015は中世の溝跡で、4点図示した。1が須恵器杯A、2・3が杯B、4が壺である。

中世以後の土層出土・出土地点不明土器 中世・近世水田層で出土した遺物と出土地点不明の遺物である。1は土師器碗で①-1区中世水田層から出土、2は②-1区中世II面水田層出土の灰釉陶器碗、3は②-2区の同面出土の須恵器高杯脚部である。これ以外は出土地点不明の土器である。4が灰釉陶器碗、5が須恵器蓋、7が須恵器杯A、6が灰釉碗である。なお2・4は大原2号窯式、6は光ヶ丘窯式に比定されるか。

(3) 水田域出土古代焼物の小結

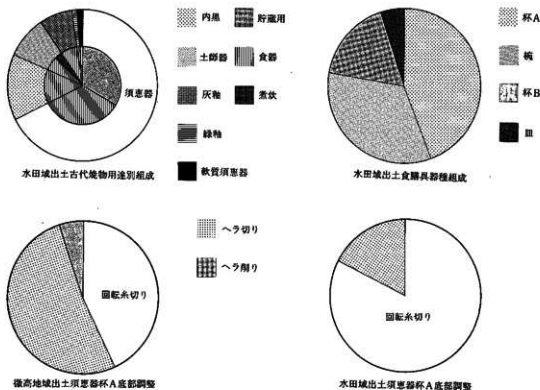
ア 組成

焼物種組成を層別にみると耕作土・畦内出土では須恵器の占める率が高く、相対的に他の焼物種が少ない傾向がある。特に軟質須恵器・灰釉陶器は僅かである。これに対して砂層・砂層～水田面出土品では黒色土器・軟質須恵器・灰釉陶器がやや高く、相対的に須恵器は耕作土・畦内出土より比率を減じている。この違いは従来指摘されているように焼物種組成の時期的変化を表現したものとみられる。しかし、洪水砂層～水田面出土では洪水以前の焼物が混在し、耕作土中にも洪水直前までの焼物が含まれるため、竪穴住居跡出土焼物から示されるような短期的組成とはみられない。また、本遺跡で出土した器種に偏りがあるため、本遺跡で特徴的にみられる器種の焼物種の組成比率は集落よりも若干高くなっている。次に用途別にみると杯Aを主体とする食膳具が圧倒的な数量を占め、他は少量の壺・甕類と僅かな煮沸具となる。この組成は洪水砂層～水田面や耕作土・畦内でも共通した傾向が窺え、石川条里遺跡の水田域ではこの組成が洪水以前の時期を通して認められそうである。ただし、次に述べる出土状況からも食膳具と貯蔵具はセットとして使用されるのではなく、別の使用方法が想定できる。また、煮沸具の場合は貯蔵具に準ずるものとして使用された可能性がある。

イ 出土状況

水田域ではいくつか大型破片や完形土器の出土が見られたが、これらの出土例にみられる器種は上記の用途別組成と類似した傾向が窺えた。したがって、これらの完形・大型破片出土例が先の用途別組成に表現される具体的水田域での土器使用状況を示していると思われる。このような大型破片・完形の出土状況を示す例には水田面上と畦内で出土した2者がある。前者ではさらに大畦周囲と個別水田の畦脇・田面でも出土した例があり、前者の例として②区大畦で出土した須恵器杯Aと四耳壺、後者の例として⑦-1区水田面の黒色土器杯A、②-2区水田面の黒色土器・軟質須恵器杯A出土例がある。また、畦内で出土した例は④区S C3002の黒色土器・須恵器杯A・須恵器杯B、S C3002の須恵器杯A・杯B・黒色土器A出土例がある。この大畦内出土例に関しては、畦内に埋納されたものか、あるいは畦脇に置かれたものが畦の修復過程で粉れ込んだかは判然としない。このような完形土器の出土例は周囲の水田遺跡でも確認されており、現時点では祭祀的な性格とする説が提起されている。これについては後ほど検討を加えたい。

次に遺跡全体の平面分布であるが、先にみたように砂層から水田面遺物の出土量を遺物分布密度(個/m²)とみると中央微高地周辺がもっとも高く、水田域両端—特に聖川添いでは低い傾向が窺えた。この分布状況は微高地からの混入によるものとも考えられるが、水田域での土器使用があったことを重視すれば、こうした行為が頻繁に行われた所産の可能性が高い。なお、水田面上で確認された完形・略完形出土地点は遺物分布密度と必ずしも比例して認められてはいない。これは完形土器を配置する行為の契機の違いによるものとも考えられ、畦内の出土の場合も含めて多様な契機に行なわれた可能性が考えられる。



第245図 水田域出土古代焼物各種組成グラフ

ウ 時期的な変化

厳密な年代比定に基づくものではないが、感覚的に窺えた傾向は以下の通りである。

6世紀代～7世紀後半の焼物は少なく、小破片のみである。古墳後期の遺物は①区S D3002で見られる以外、他地区では見られない。7世紀後半の遺物は破片のため詳細不明ながらS D3002と微高地東側低地で点的に出土し、微高地西側低地には見られない。この①区以外では古墳後期の遺物が全く見られない点も注意される。ただし、耕作土を調査していない調査条件に起因する可能性もある。

次の8世紀の遺物は僅かながら全域で散見されるようになる。なかでも①区畦内で比較的大型破片が得られているが、これは同じ畦内では9世紀の焼物も出土しているので大畦の構築年代を直接示すかは疑問も残る。また、この地区では条里とは走行を異にする畦が存在することや、付近からは斎車の出土がある点は注意される。この段階の器種には須恵器杯A・杯Bと高杯・甕・盤などがある。繰り返し述べるようにこの時期の遺物が少ないことは調査条件に起因する可能性もあるため、使用頻度の実態を直接反映しているとは断言できないが、その可能性はある。

次の8世紀末～9世紀の遺物は遺跡全域で比較的出土量が多く認められる。また、条里型水田の走行方向をとる①区を除く大畦内、あるいは微高地の環境に位置する溝から出土した土器もこの時期の所産が多い。器種は杯Aを中心とした食膳具が最も多く、甕・壺類は少量、煮炊具は僅かである。焼物種では須恵器に加え黒色土器が次第に増加し、洪水直前では軟質須恵器・灰釉陶器・土師器が加わるとと思われる。

以上の時期別推移の概況は感覚的にみている限界があるが、いくつか特徴的に知られる事項がある。まず、古墳後期の土器が極端に少なく、ほとんど出土が確認できない地区が大半を占める点である。これは水田耕作土7層の遺物を丹念に採取していないことによる可能性もあるが、古墳時代前期の土器の混入があることを思えば、土器使用があまり顕著でないか、古墳時代後期の水田利用度が低いのかもかもしれない。そして7世紀後半から次第に焼物がみられるようになり、8世紀代の遺物は少量とはいえ遺跡内各地区で

出土している。この様相からは条里型の水田かどうかは別としても8世紀より広域の水田耕作が行なわれていたか、水田域での焼物使用が増加すると見られる。また、条里型と認められる区画の水田に関わる畦内です出土した土器には8世紀初頭のものが含まれる場合もあるが、9世紀代(8世紀末~?)の須恵器や黒色土器が一定量認められている。この段階で何らかの変化の画期が表現される可能性もある。この点は条里型水田の出現年代に関連するのかもしれない。

次に水田域での使用された器種では古代前半を通じて食膳具の比率の高さは共通して認められるが、出土土器量としてみれば、8世紀代はやや少なく、8世紀末~9世紀代に増加するように思われ、時代ごとに土器の使用法、あるいは使用量が異なっていることも予想される。この点は集落遺跡での動向と合わせてみる必要があると思われる。

エ 各土層の年代

基本土層の年代については低地の古代の洪水砂・耕作土層のみでなく、その上下の土層との比較によって検討すべきところであるが、調査では上記以外の土層での遺物採取は行なっていない。そこで、ここでは片手落ちながら6・7層出土土器を中心に各土層の年代の整理を試みる。7層は洪水で埋没した水田耕作土とした土層であるが、地区によっては洪水直前の耕作土、その下部の古い耕作土、もしくは堆積土に細分されたところがある。ただし、細分された地区でも各土層ごとに遺物採取は実施していないので、ここでは7層に関連した土層は一括して扱わざろうえなかった。7層の上限は7層関係のなかでも最も古い古墳後期~7世紀後半の所産と思われる遺物を出土した①区SD3002に求められ、7層の下限は洪水砂層で埋没するまでである。年代は(7世紀後半?)8世紀から9世紀末と思われる。この点では他地点の耕作土、および畦内から出土した焼物と矛盾しない。次に洪水砂層にあたる6層の年代は砂層および水田面直上出土土器からみると、組成上の特徴では軟質須恵器・土師器・灰釉陶器が含まれる特徴があることから松本平の編年ではほぼ8期の様相を示すと捉えられる。しかも、灰釉陶器は量的に少ないが、ほぼ光ヶ丘1号窯式と思われる点で矛盾はない。ただし、①-1区ではこの砂層上面の薄いシルト層から大原2号窯式と思われるものが出土しており、砂層の年代に問題が残る。この灰釉陶器が洪水に伴うとすれば、当然洪水砂層の年代が下ることになるが、出土層位からもその扱いは微妙である。ここでは洪水砂層の形成が単一契機か、砂層を水田耕作土とする耕作の有無、混入の可能性などについて何も検証できていないので断定はできないが、①-1区以外では大原2号窯式と認められる灰釉陶器碗があまり見られないこともあり、洪水に伴う遺物からは除外して考えたほうが良いと考えた。したがって、ここでは洪水の年代を9世紀後半(末期)とみておく。なお、条里の施行時期の問題については遺構のところ述べている。

オ 墨書土器

水田域で出土した墨書土器は4地点から計9点の出土がある。②-2区水田面で完形・略完形の杯Aが集地的に検出されたが、これらの杯のなかに3点の墨書が含まれ、文字は杯体部に正位に書かれる「中」、体部に逆位で書かれる「今?」がある。①区の大畦SC3001内では4点の墨書土器が出土し、須恵器杯A体部に「木」と書かれるものが2点、「北?」・「中」各1点である。④区大畦SC3002内で正位で「中」と書かれた黒色土器Aの杯Aが出土している。同じく④区水田面で「大」と書かれた黒色土器Aの杯A破片が出土している。これらの墨書土器の年代は①区「木」の墨書土器が9世紀中頃、②-2区は9世紀後半の洪水直前であり、それ以外は破片で詳細不明であるが、ほぼ9世紀の所産である。

以上の墨書土器はいずれも9世紀の所産で、杯Aに書かれる共通点がある。また、複数の墨書の出土例もあり、その場合では出土地点が限定的な同一文字の墨書複数と広域にみられる「中」が組み合わせとなるものが見られる。ただし、SC3001は詳細な出土記録がなく、出土地点は不明なので、一括のなかで同一遺構内の別地点出土かは判然としない。また、墨書土器の出土量自体は少ないが、完形・略完形土器が出

土する例のなかに墨書土器が含まれており、ここでも水田面上と畦内出土の2者が認められた。ただし、一方で墨書土器を含まない完形・略完形土器出土もあることは注意され、墨書土器は完形・略完形土器出土例に墨書が含まれる場合が多いが、そうでない場合もあり、完形・略完形土器使用例のなかで墨書が含まれる場合があるとみられる。しかも、この墨書土器が見られるのが9世紀代とほぼ集落遺跡で盛行する時期と一致する点は興味深い。以上の様相をふまえて、後ほど周囲の遺跡例をあつめてその性格について検討を加えたい。

5 水田域出土古代焼物の成果と課題

(1) 水田域で使用された焼物

水田域では杯Aを中心とした食膳具が圧倒的な量がみられ、それは8世紀末前後から量を増加させてくる様相がみられた。こうした特徴を考える上で、水田面・畦内での略完形・完形土器の出土は具体的な水田域での土器使用の実態を示していると思われる点で興味深い。この完形・略完形土器出土例は水田面上の大畦付近と小畦あるいは個別水田、大畦内にみられた。また、こうした例に少量ながら墨書が含まれる場合があることも知られた。そこで、完形・略完形土器と墨書土器出土に焦点を当て、石川条里遺跡周囲の遺跡例と比較するなかで若干の検討を加えたい。

ア 完形土器の出土

石川条里遺跡内では長野市教育委員会によって数次にわたる調査が実施され、第2次調査で大畦脇に軟質須恵器杯A10枚重ね、やや離れて則天文字が墨書される黒色土器杯Aが1点出土した例がある。また、第7次調査で小畦脇の洪水砂層中で杯A3枚重ねで出土した例や、小畦で区画された水田の洪水に伴う粘土ブロック集積内で完形の灰釉陶器皿2点と黒色土器杯Aが1点出土した例、洪水砂層中で完形土器が1点検出された例がある。自然堤防脇の篠ノ井遺跡(4)では畦脇に灰釉皿1点、灰釉皿1点と須恵器甕が検出されている。千曲川対岸の更埴条里遺跡では水口付近の畦脇で完形に近い甕が出土した例がある。報告書では居住域に近い地点なので居住域からの流れ込みと解釈しているが、出土状況からは置かれた状態と見れる。また、更埴市馬口遺跡では洪水砂に覆われた畝状遺構上で黒色土器杯A2点・椀1・鉢1点、灰釉陶器皿1点と紡錘車が集中的に検出された例がある。上記に本遺跡例を加えると以下の種類となる。

A 食膳具	- 1 杯Aのみ	単独	砂中
		複数	大畦脇・畦脇
	- 2 杯Aと灰釉陶器皿		畦脇
	- 3 杯B・杯A		大畦内
	- 4 灰釉陶器皿		水田面
	(- 5 杯A・椀・鉢・灰釉陶器皿(紡錘車))		畝状遺構
B 貯蔵具	- 1 甕のみ		水口付近の畦脇
C 貯蔵具と食器	- 1 甕と灰釉陶器皿		畦脇

周辺遺跡でも食膳具を中心して貯蔵具が少量認められ、本遺跡で知られた水田域出土用途組成の傾向と一致し、特に杯Aを中心として椀が顕著でないあり方はほぼ共通する。しかし、重ねられていた例や灰釉の皿が使用される例については今回の調査では認められていない。重ねられている場合に関しては、土器使用か、廃棄、片づけの行為によると思われ、灰釉陶器皿については使用にあたっての器種の選択が働いたか、使用する階層による違いが表現されているのかもしれない。

次に出土場所をみると、水田面上では限定的ながら水田一特に畦付近に完形の食膳具、貯蔵具が出土する例があることが周辺遺跡でも確認できる。このような完形で出土する例について青木和明氏は洪水砂中

であるので本来の位置であるかは判然としないとしながらも、祭祀的な性格をもったものと捉えている¹¹⁾。また、本遺跡でみられたような畦内出土例は周辺では認められないが、これは畦内の調査がどの程度実施されたか不明なことや、本遺跡でも大畦内で普遍的にみられないので調査面積や調査地点に左右された結果とも思われる。

なお、杯Aが重ねて出土した例について若干補足しておく。石川条里遺跡内の長野市教育委員会調査地点では杯Aが重ねられた状態で出土した例が2例ある。その内、10枚重ねの杯A出土例(2点離れた墨書土器を含むと11点)は千曲川対岸の更地市五輪堂遺跡で洪水砂中で「豊□寺?」と記された墨書7点を含む10枚重ねの出土例と数的には類似する。また、今回の調査の②-2区の杯A集中地点もすべて完形ではないが、10点前後と一致する点は偶然だろうか。なお、重ねて出土する例からは杯の中に食物などが入れた状態ではなかったと想定され、食器自体を供するか、あるいは片付けた後の様相と思われる。

以上から、完形土器の出土は周辺遺跡にも認められ、当地域における水田遺跡に共通するあり方とすることができるが、個別水田すべてに認められないので使用契機が限定的・選択的で、同じ場所での継続的な行為の所産ではないようである。また、重ねられていた例からも使用後は水田に埋納されるものではなく、基本的には撤去される性格のものと思われる。上記の様相は9世紀後半の洪水時の様相であるが、この様相はどのくらい遡るであろうか。この点について明らかにしえないが、食膳具を中心とする組成は8世紀代にもみられることから少なくとも条里型水田に先行する水田段階に遡る可能性がある。しかし、それが洪水埋没水田面でみられたものと同一であるかは明らかでなく、むしろ8世紀末以後に出土量が増大してくる様相のほうを重視し、この段階以後に洪水埋没水田でみられた土器使用が始まると考えたほうが妥当であろうか。これも、個別土器の詳細な年代比定に基づく集計作業をおこなっていないため、断定するには不安もある。なお、この8世紀末～9世紀に食膳具の出土が増大することは墨書土器を含めて集落の土器のあり方と一致する点は興味深い。そこで、次には集落遺跡における土器使用のあり方との比較のなから水田域の土器のあり方をみてることにしたい。なお、古代の食器のあり方については田島明人氏の見解¹²⁾が参考となるので、まず、紹介しておきたい。

田島氏は石川県の集落遺跡の食器を中心とした出土土器量の推移を遺跡別にみた結果、9世紀(氏のV～VII期)以後には平城京を頂点とする律令的な食器体系が崩れ始め、9世紀後半では食器量が一般集落でも増加し、祭祀・儀礼にかかわる食器の大量廃棄も認められるようになるとして、ここに土器食器の実用器から儀器、ないしは非日常の食器へ急速に傾斜したと予測し、大きな変革期を見出している。また、土器の粗雑化・器種淘汰・須恵器窯の消滅もこうした背景によるものとし、それが集約されるのが中世とする。この古代土器の使用方法に関して県内ではあまり活発な検討はなされていないが、吉田川西遺跡の平安後期S B32の大量に出土した土師器を非日常的な儀式的な使用方法推定した原明芳氏の検討¹³⁾や、時期ごとの土器出土量の推移では松本平の5期ごろ(8世紀末～9世紀初頭)から土器出土量が増大し、その土器出土量の増加が食器が中心としている様相について述べられている下神遺跡の分析¹⁴⁾がある。下神遺跡の例は9世紀にはきわめて特殊な遺跡となる例なのでどの程度普遍化できるか明らかでないが、土器の出土量が増加してくる時期が本遺跡と類似する点は興味深い現象とみられよう。

これらの検討をみると、食膳具の性格の変容はともかく、本遺跡水田域出土土器と集落遺跡出土土器量が増加してくる時期が類似している傾向が窺える。ただし、田島氏の指摘した年代とは若干のずれがあるが、本遺跡では9世紀代の土器をあまり細分して捉えていないため、単純に年代差があるときけるかは不安もある。また、これも地域性や水田域という特殊な条件の違いによるものかもしれない。一方で集落と異なる点としては、微高地出土の平安時代後期の土師器出土量にみられたように、集落遺跡では平安時代後半でも土器の大量使用傾向が認められる遺跡がありながらも、本遺跡のような非居住遺跡では出土土器

使用量が9世紀代より減少している違いがみられる。これは、水田域での焼物使用が祭祀として理解され得るとすれば、食膳具は9世紀では特定の場の祭祀や何らかの紐帯の確認儀礼にも用いられたが、平安時代後半は紐帯確認のための儀礼中心に用いられる用法に変化した違いとして見られるのかもしれない。

いずれにしても水田域出土の焼物は集落遺跡も含めた食膳具のありかたの時代的な特性のなかで理解されるものであると思われる。さらに、この推測が許されるならば、田島氏の指摘する食膳具の儀器化、非日常の食器への傾斜として理解される線も出てこよう。このなかで、本遺跡では杯Aの使用量の多さは圧倒的であり、日常で使用する食膳具セットをそのまま持ち込むというよりも選択的にみえ、軟質須恵器が杯Aのみ生産している理由もこのような使用方法の増加による杯Aの消費量の多さに裏打ちされたものだろうか。しかし、水田域では灰釉陶器皿の出土もあり、灰釉陶器が非日常の使い捨てに近い器とするには数量からしても無理がある。むしろ、杯Aの使用の多さは一般的な傾向としてみられるが、杯Aが非日常器・儀器として生産されていたのではなく、集落遺跡にも見られる土器使用量の増加傾向のなかで本遺跡では杯Aがその主体を担ったこと捉えておいたほうが良いのかもしれない。

イ 墨書土器

周辺の水田遺跡で墨書土器が出土した例としては石川条里遺跡の長野市教育委員会の第2次調査で出土した10枚重ねに近接して出土した則天文字の墨書がある杯A出土例がある。また、同調査では耕作土中から「日? (月?)」と記された奈良時代の杯が1点出土している。石川条里遺跡では以上の2例のみだが、対岸の更地市馬口遺跡では水田と断定できないが低地にかかる付近にある洪水砂で覆われる土坑内から「義」「寺」「代」の墨書を含む完形の黒色土器A・軟質の須恵器杯Aや黒色土器A柄が出土している。以上のように墨書土器の出土は少数に過ぎないが、今回の調査例を加えると石川条里遺跡で確認できる墨書文字種は以下の種類がある。

「无?」 長野市教育委員会調査地点、黒色土器杯A10枚重ねに近接出土したもので正位。

「今?」 ②-2区で軟質須恵器杯A2点共に逆位。

「北?」 ①区大畦内SC30011点黒色土器杯A、正位。

「中」 ②-2区黒色土器杯A正位。①区大畦SC3001同左、正位。④区大畦SC3002内同左、正位。

「大」 ④区水田面黒色土器A杯A破片、正位。

「木」 ①区大畦内SC3001須恵器杯A2点、正位。

「日? (月?)」 石川条里遺跡長野市調査地点、須恵器杯A

上記からみると、墨書土器はすべて杯Aに書かれ、年代的には詳細不明なものもあるが、9世紀代を中心としていることは間違いなく、8世紀は長野市教育委員会調査地点の1例のみである。また、墨書土器の文字種は多種あることが知られるが、広域にみられる「中」と、出土地点が限定的な「木」「今?」「北」「大」「无?」の2種がある。このなかで「木」「今?」は同一地点から2個づつ出土し、「今?」は②-2区より「中」と合わせて出土している。また、「木」を出土したSC3001では「北?」「中」も出土しているが、出土地点の記録がなく一括出土かどうか詳細は不明である。この広域にみられる「中」と出土地点が限定的な他の文字は文字が表現する内容はともかく、意味するところは異なると考えられる。つまり、広域でみられる文字は出土地点が限定的な文字よりも広域を表現する文字、行為自体や対象に関する意味の文字なのかもしれない。一方で出土地点が限定的な文字は下位の集団か、個別的な意味があるとも思われる。この違いは後に述べる書かれる契機の違いにもよる可能性がある。②-2区と①区の間文字複数出土の墨書土器では器の作りが相互に類似しており、一括入手時に同じ人物によって墨書が記されたと思われる。その一方で、同一地点から出土した異種文字の墨書土器は焼物種が異なる。例えば、より広域で共通してみられた文字「中」は黒色土器Aであるが、出土地点が限定される①区の「木」は須恵器、②-2区の「今?」

が軟質須恵器である。同様に長野市教育委員会の石川条里遺跡第2次調査において検出された10枚重ねの杯と近接出土した例のなかで、墨書は黒色土器杯Aのみで他の軟質須恵器には墨書がない。したがって、同一地点からの異種文字出土の場合は入手経緯と書かれた契機、あるいは書き手が異なる墨書土器が一緒に使用されている可能性も考えられるのではないだろうか。特に広域にみられる「中」と、それ以外の出土地点が限定される同一文字が同一地点で複数出土する例は異なる契機に書かれた可能性があり、後者は水田域での使用を目的として墨書されともみられる。

この水田域で出土した墨書土器は集落遺跡で知られる墨書土器と盛行時期が類似し、しかもかならずしもすべての集落で墨書土器が出土するわけでもない点も類似している。従って、水田域で出土した墨書土器も集落でのあり方に規定された側面があるといえよう。勿論、群馬県前橋市の柳久保遺跡¹⁰¹⁾のように水田での使用を目的とした文字自体が記されたともみられる場合もあるので、単純には断定できないが、多種の文字が見られることは、やはり集落との関係のみたほうが良いとも思われる。そこで、少し集落遺跡での墨書土器のあり方をみてみよう。

過去には墨書土器が書かれた文字の意味によって分類されてきたが、近年では同一文字が複数遺構から多数出土する例や、遺跡をこえて広域で共通する文字があることも知られてくるようになった。また、複数の文字を重ねる場合や記号として扱われる場合があることが指摘されるようになり、所有や場所を示す墨書ばかりでなく祭祀的な様相を帯びる性格が指摘されるようになってきている¹⁰²⁾。しかし、墨書土器の具体的な用法や祭祀に関わる単位については十分検討されているとは言えない面もある。

県内では集落出土の墨書土器についていくつか明らかにされてきている点があるのでみてみると、墨書土器は8世紀末頃から増加して9世紀代に盛行し、各遺跡では特徴的な文字が複数遺構から多数出土する例があることが知られる。ただし、どの集落でも多数の墨書土器を出土するわけではなく、松本平では中核となる大型住居がある遺跡で特徴的に認められ、しかも大型住居の出現と墨書土器の盛行時期が一致し、大型住居の出現時期差をもつ遺跡ごとに微妙に盛行時期のずれをもつことも指摘されている。勿論、例外もあるのでこれを絶対視できないが、松本平での墨書土器のあり方は大型住居などの有力戸が中核になっての秩序編成を反映するとする指摘は重要である¹⁰³⁾。なお、集落遺跡での墨書土器が書かれる契機や、使用が終了した後はどのように扱われたかは明らかでなく、下神遺跡のように一括廃棄されたともみられる例は僅かである。

こうしてみると、水田域出土の墨書土器の集落とのありかたの類似からは、墨書土器が集团的な紐帯に関わった祭祀的な様相を帯びる可能性が高く、松本平での検討結果を敷衍すると水田遺跡で出土した墨書土器も何らかの有力戸との関連で用いられた可能性もでてこよう。こうしたなかで、石川条里遺跡長野市教育委員会調査地点で出土した則天文字は、近接した篠ノ井遺跡群で多く認められている点で非常に示唆的である¹⁰⁴⁾。なお、今回の調査で得られた「今」も篠ノ井遺跡群で見られる「峯」の変形とみればここも同じ篠ノ井遺跡群あたりを核とする集落に関連した線もでてくるが、本遺跡の場合では現時点では「峯」の略字とは読みがたいので断定はできない。

ウ 水田域で使用された器

上記のように、水田域での完形土器出土と墨書土器のありかたは集落遺跡で見られる傾向と一致しながらも非居住遺跡としての特徴的な使用方法があると推測され、やはり日常器としての使用ではない可能性があるとも思われる。この様相は器の使用法、墨書両面から推測されるものであるが、ここで再び完形土器出土と墨書土器のあり方の関係を整理してみたい。

出土器種	墨書
A-1 杯Aのみ	単独 日? (月?) (中)
複数	无?、木・北・(中)、中・今、
2 杯Aと灰釉陶器皿	
3 杯B・杯A	
4 灰釉皿のみ	
5 杯A・椀・鉢・灰釉陶器皿(紡錘車)	
B 甕のみ	単独
C 甕と灰釉陶器皿	
その他(破片出土で詳細不明)杯A	大、中

完形土器出土例は水田面上と大畦内に大別され、水田面上では小畦脇—水田面、大畦脇の2者がある。このなかで大畦に関連したものが多く傾向は指摘できよう。このなかで墨書土器が出土した例にも大畦内と水田面出土、大畦上がみられ、やはり完形土器出土と墨書土器出土が全く異なる用法によるものではないと推測される。ただし、注意しておくことは墨書がみられる器種は杯Aに限定されるため、杯Aのみで構成される場合に墨書が含まれる場合があると限定できる可能性がある。また、墨書のみられない完形食膳具出土、さらに杯A以外の貯蔵具が使用される場合や、食膳具の杯A以外の器種を使用する場合は別の用法、あるいは使用者による可能性を想定すべきと思われる。これらの土器の使用方法はこの地域に共通してみられる状況ではあるが、現時点では個々の水田や大畦すべてにみられるものではなく、出土密度からも使用される契機は普遍的に繰り返行なわれる行為ではないと推測された。

このような特徴を踏まえて、最初の問題に立ち戻り、水田域での土器使用の意味をまとめたい。水田域では完形土器出土例が水田域での使用方法を具体的に示すとみられたが、そのありかたは集落遺跡での墨書土器の祭祀的な使用、あるいは大量土器消費(一過性使用の増加?)と一致した傾向で把握されるとみられながらも、水田域での特有のあり方としてみられる可能性がある。この点について、すでに完形の土器出土、あるいは墨書土器について祭祀的な様相を帯びるとする見解が提示されているが、今回の調査では①区のSC3001は甗串の出土もみられ、甗串と同時使用か不明ながら、場所的に祭祀的性格は支持されよう。また、9世紀代前後に盛行した同一文字1種の墨書土器が多量に出土する例は何らかの集団の紐帯に関わる祭祀的な用法であることが推測されているが、本遺跡も時期的に一致し、文字のあり方も類似するので同様の性格も推測される。これらの様相からすると断定はできないが、やはり祭祀的な色彩は濃厚とみえようがよいとも思われる。

水田域でみられる祭祀に関してはこれまでに土器出土以外にも甗串、馬骨出土、あるいは銅鏡の埋納、モモ核の出土など多岐にわたる遺物から推測されている。このなかで、水田域出土の土器に関しては大きく2種の祭祀のあり方が指摘されている。ひとつは畦内や畦下部を中心にみられる地鎮祭の一環としての土器埋納であり¹³⁾、もう一つは水田面上にみられる柳久保遺跡例で指摘されるような年ごとに行なわれる祭祀である¹⁴⁾。このありかたは本遺跡でみられた完形土器出土・墨書土器の畦内出土と水田面上出土にそれぞれ対応させてみることもできるが、本遺跡の場合では祭祀の行なわれた契機が継続的なものではなく、何らかの特殊な契機によって行なわれていると推測された点ではやや異なった様相を示すとも思われる。したがって、直接的な対比が可能かどうかは現時点では不明といわざるを得ない。また、こうした祭祀形態が地域を越えてどの程度普遍化できるのか、あるいはその系譜がどこに求められるか明らかでない問題もある。そのため、ここでは祭祀的な用法による可能性が高いものの、断定にはもう少し検証が必要であるとしておきたい。ただし、そのあり方は水田域特有のありかたとして各時期を通して認められる一方で、

時期ごとに変化し、しかも集落遺跡での土器・墨書土器のあり方と一体化して理解される可能性は指摘しておきたい。この点では祭祀とすると古代を通じて水田域に固有の祭祀の系譜を持ちながらも、時代ごとの集落を含めた祭祀体系の影響、あるいはその原理が持ち込まれて変容していく様相を想定できることになる。また、祭祀をになったであろう主体者も、時代ごとに変化している可能性はある。それは水田域での土器出土量の変化や大畦内やその周囲と個別水田といった出土地点の違いとして現われているとも考えられるが、詳細は明らかにできなかった。

最後に上記で触れられなかった問題について付言しておきたい。1点目にはすでに述べたように水田の祭祀として使用された焼物と見られるにしても、この様相は時期ごとに変化している可能性がある。例えば、墨書は1例8世紀と思われるものがあるが、主体は9世紀後半でこれ以前はあまりみられない限定時期の所産である。一方で8世紀末前後の食膳具出土増加は上記で確認された様相が遡る可能性を示す。つまり、須恵器食器を使用する祭祀が先行して存在して、より大量に儀式的に使用する傾向をもって主体が杯Aへ移行し、さらに焼物種も黒色土器や軟質須恵器へ移行して墨書土器が加わるようになる段階的变化とも取れなくはない。また、これも集落構造の変化と関連している可能性があることは当然、耕作や土地の占有のあり方の違いと運動していることも想像される。特に条里型水田の出現によって何らかの形で土器出土にみられる祭祀との関係も変容している可能性は考えられる。この点で、集落遺跡との関係の整理は重要な意味をもつであろう。特に、石川条里遺跡内で出土した則天文字は類似文字がこの近辺の篠ノ井遺跡群以外ではあまり知られていない点からも、その使用が非常に限定されているとみられる。

また、他器種の使用例については詳細を明らかにできなかった。貯蔵具は少ないながらも、石川条里遺跡内では広範囲で散在的にみられ、食膳具を使用する場合は別の用法があったとみられる。さらに、碗類・皿類は水田域で使われる可能性があるが、これらと杯Aにみられる使用方法との違いは不明である。

上記のような残された課題も多く、まともな検討ではあるが、今後類例の増加をまって、より体系的に整理されることを願うものである。

註

- 1 青木和明1993「4 遺物 平安時代埋没水田遺構にもなう遺物」【石川条里遺跡(7)】長野市教育委員会
- 2 田島明人1992「雑感—古代の土器と中世の土師器—」【第5回北陸中世土器研究会 中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器】北陸中世土器研究会
- 3 原明芳1989「第5章 3節 3 S B32をめぐって」【吉田川西遺跡】長野県教育委員会・御長野県埋蔵文化財センター
- 4 小平和夫1990「第4章 2節 1 下神遺跡における6・7期の土器様相」【下神遺跡】長野県教育委員会・御長野県埋蔵文化財センター
- 5 平川南1991「墨書土器とその字形—古代村落在る文字の真相—」【国立歴史民俗博物館研究報告】題35集 国立歴史民族学博物館
- 6 註5に同じ
- 7 石神龍蔵1990「第3章 7節 文字関係資料」【松本市内その1 総論編】長野県教育委員会・御長野県埋蔵文化財センター
- 8 青木和明・寺島孝典1992「IV 6 平安時代 S B44」【篠ノ井遺跡群(4)】長野市教育委員会
- 9 江浦洋1996「古代の土地開発と地鎮の遺構」【帝京大学山梨文化財研究所研究報告】第7集 帝京大学山梨文化財研究所
- 10 註5に同じ

完形土器出土例関連文献

長野市教育委員会1984【石川条里の遺構 上野沢遺跡】

長野市教育委員会1989【石川条里遺跡(4)】

長野市教育委員会1993【石川条里遺跡(7)】

長野市教育委員会1992【篠ノ井遺跡群(4)】

更埴市教育委員会1987【馬口遺跡Ⅱ】

更埴市教育委員会1987【五輪堂遺跡Ⅳ】

長野県教育委員会1965【更埴桑屋遺跡の研究】

墨書土器出土例関連文献

長野市教育委員会1984【石川桑屋的遺構 上駒沢遺跡】

長野市教育委員会1993【石川桑屋遺跡（7）】

更埴市教育委員会1987【馬口遺跡Ⅱ】

第6節 中世の遺構と遺物

1 調査の概要

(1) 調査の経過

2年次にわたる調査のなかで石川糸里遺跡ではさまざまな中世遺構が検出されたが、遺跡内の遺構残存状況も多様で、しかも統一的な観点で調査が実施されていない。そのため、調査状況は地区ごとに異なる。まずは堆積環境や地形的に異なる低地と微高地に大別し、低地は中央の館の検出された微高地を境に西側低地と東側低地に区分して概況を記述する。

低地では中世後半以後に微高地西側低地の山手側と微高地東側低地聖川沿いに限定的な堆積が見られるようになり、これらの場所では中世水田遺構が残存していた。

微高地西側低地の水田遺構は整理時に中世Ⅰ・Ⅱ面とした2枚の調査面がある。中世Ⅱ面は調査域西端の鶴前遺跡よりの山手際に残存し、初年度調査から確認されていたため①～④区にわたり比較的広範囲に調査された。この調査面は人間や牛の足跡を残す水田面や溝・畦が検出されたが、部分的な薄い粗砂混じり土で覆われているのみで、遺構の遺存状態は非常に悪い。また、洪水堆積土が薄いため、検出された溝や畦には上層の疑似畦畔が含まれる。中世Ⅰ面は微高地西側低地の最終調査地区となった②-2区のみで調査された面で、同じ水田面がどの範囲で調査可能であったかは詳細不明である。土層の広がりからみると②-2区周辺のみに限定される可能性がある。中世Ⅰ面で検出された水田面は非常に遺存状況が悪く、疑似畦畔の可能性もある並列する2本の溝に挟まれた畦状遺構のみがある。

微高地東側低地では微高地境から①区までは洪水で埋没した水田は残存しておらず、溝や土坑を検出したのみである。①区以東の聖川添いでは聖川の洪水と思われる砂層が数枚あるとみられたが、上面が他地区の排土仮置場となり、その土圧で遺構面が乱れていた。そのため、面的な調査は実施していない。また、微高地東側低地の基本土層に含まれる遺物については②区と③区の溝周囲以外は土層ごとに遺物採取を行っていないので、各土層の年代推定の資料は弱い。

微高地では中世の堆積土層が認められないため、古墳時代遺構と同一面で調査を実施している。ただし、この微高地は明治時代の公園では畑地であった部分も調査前には水田化されており、また、現J R篠ノ井線工事でこの周囲で土取りを行なったとする伝承もあるため明治時代以後に地形改変を受けている可能性がある。この微高地上では従来全くその存在が知られていなかった館跡が検出された。この館跡は工事工程の関連で9地区におよぶ小地区に分割して調査され、しかも全体を通しての調査観点が定まっていなかったために地区によって得られた資料に粗密がある。また、分割調査ゆえに同一遺構に別遺構番号が振られる混乱もあったが、整理段階でできるだけ統一し、連続関係が断定できないものは別遺構番号のまま扱った。なお、⑦区内を流れる現用水は状況証拠から中世用水を踏襲する可能性があるが、中世の用水跡と断定できる遺構がなかったため、現用水下の調査として後述する。これ以外の各種遺構の調査方法に関しては各遺構の項で述べる。

(2) 基本土層と地形

中世にかかわる土層は低地域のみ確認されている。しかし、地点ごとに基本土層の層厚・枚数・土質が異なる。さらに、調査では連続的、非連続的な耕作と土層の関係が整理されなまま地区毎に土層図が作成されたこともあり、必ずしも古代以前のような統一された土層として把握できていない。したがって、

土質の類似や出土遺物・遺構の年代、あるいは隣接地区での土層標高の比較によって概略の土層対比を行なわざるをえず、土層対応関係を第246図のように推測した。この図からは次のようなようすが考えられる。

微高地西側低地の中世の土層は平安時代洪水砂層の上面より暗褐色～黒褐色粘土層、灰褐色粘土層、上面に薄い灰色のシルト質の土層が認められる。そして、その上面以上の近世の土層は全体的にシルト質混じりの粘土となって細かな酸化鉄集積層が複数みられると共に、土層が細かく分層されるようになる。中世の土層と推測された暗褐色～黒褐色粘土層と灰褐色粘土層の間には部分的に水田面の足跡などに入り込む粗い砂混じりの粘土があるが、層を形成するまでには至っていない。(以下は微高地東側低地の暗褐色～黒褐色粘土層を下層粘土層、灰褐色粘土層を上層粘土層と呼称する。)整理段階で下層粘土層上面を中世Ⅱ面、上層粘土層上面を中世Ⅰ面とした。これらの土層は地形の傾斜と一致して東へいくにしたがって薄くなり、より上層の耕作土で削平される傾向がある。各層厚をみると下層粘土層は④・⑥区以外ではほぼ均等な厚さで平安時代洪水砂層の上に位置するものの、上層粘土層は山手の調査域西端周辺では厚く堆積しており、東へいくにしたがって下層粘土層を削平しながら薄くなっている。そして④・⑥区では上層粘土層と下層粘土層の対応関係が不明瞭となり、やがてそれ以後では近世耕作土で削平されてしまうところもある。上層粘土層は山手際に厚く堆積して地表面の上昇を進めたとみられ、下層、上層粘土層の間が堆積環境が変化する変換点にあたりとみられる。したがって、中世Ⅱ面はその変化のポイントである可能性がある。しかし、調査面自体は遺構の遺存状態が不良で上層の疑似畦畔が含まれる。

微高地東側低地でも2枚の粘土層が安定的でより広範囲に認められる。それは平安砂層の上面にある暗褐色を基調として聖川に近くなると青味を帯びる粘土層と、その上部にある灰褐色粘土層である。(以下に微高地東側低地上層粘土層、下層粘土層と呼称する。)下層粘土層は聖川沿いにやや厚く見られるが、ほぼ一定した厚さで平安時代洪水砂層と平行して聖川へ向かって低く傾斜している。しかし、⑨区以东では上層粘土層と下層粘土層の間に別の堆積土が入り込み、上層粘土層は最も低い⑩区前後が厚く認められるが、それ以後では聖川より上がって薄くなる。

上記のように微高地東西の低地でそれぞれ2枚の粘土層が確認されているが、調査では相互の対応関係が直接把握されていない。しかも、微高地西側低地の粘土層が山手に厚く堆積するため、微高地東側低地の上層粘土層とは供給源が異なる可能性も考えられる。そのため、ここでは直接対比させずに、微高地東・西側の上層、下層粘土層として扱うことにした。

微高地では中世の堆積土が見られず、遺構も古墳時代遺構と同一面で調査された。この微高地の範囲は東側については古代とあまり大きく変わっていないと見られるが、西側は中世の土層自体が微高地縁辺部は不明瞭となるため、詳細は明らかにできなかった。時代をおって低地が埋没して微高地縁辺が低地に取り込まれてくる経過からすると、古代の低地境より多少は微高地側へ拡大していると見られる。特に、低地境で検出されている土坑と同様の遺構が⑦-1区で検出されており、これが水田に伴う遺構とすれば、⑦-1区の南部は低地に取り込まれてしまうのかもしれない。

以上のように、中世の地形環境は古代以前からの千曲川洪水などによる低地の埋没進行に加えて、新たに山手に近い微高地西側低地と聖川付近などで局地的な堆積土が増加してくる様相が見られる。その結果、微高地西側山手・聖川添いで地表面上昇を招いたが、その一方で微高地とその周辺の④・⑥～⑩区前後までは堆積土が非常に薄いため、調査域両端が高く中央へ傾斜する地形となってしまう。この局地的な堆積土の増加のおかげで微高地西側低地の山手・聖川添いでは中世水田が残存することになったが、堆積土の薄い中央部は上層水田の耕作による削平を受けて、規模の大きな溝跡などしか検出されない様相が生じたと思われる。

なお、山手側の堆積土増加は中世Ⅱ面からその兆候が見られ、上層になるにしたがってより明瞭となっ

で近世ではかなり顕著となる。その堆積土の形成時期は中世Ⅱ面が14世紀前後と推測されることからその前後に始まるとみられる。成因については詳細を明らかにできなかったが、山手の沢から引水する用水の出現による供給土の増加や山手の開発による流出土増加が推定される。同様に聖川添いの部分でも下層粘土層と上層粘土層の間で堆積環境が変化しているが、その年代は⑨区S D 3006が上層粘土層に覆われる点から推測すると14世紀後半～15世紀初頭と推測される。成因としては聖川の流路管理が進み、堆積土が狭い範囲に集中したために洪水が増加してくると推定される。このようにみると、東・西低地の上層粘土層が人為的な関わりをなかで生成された土層で、しかもその形成時期が近似していることが推測される。しかし、いずれも粘土層で純粋な洪水堆積層とはいえないものであり、水田耕作の影響を受けているとみななければならない。したがって、連続耕作のあり方などによっては若干土層の年代にずれをもつ可能性も含まれる。

(3) 周辺の歴史的環境

中世の歴史的環境の概要はすでに述べたが、ここで若干補足しておく。本遺跡周辺は古代の小谷郷に含まれると推測されているが、その推定範囲周辺では南から小谷荘、南北四ノ宮荘、石川荘が成立し、その隣に布施本荘と布施厨が成立する。これらの荘園のなかで文献上もっとも古く確認できるのが石清水八幡領小谷荘で保元三（1158）年である。石川条里遺跡の発掘域にあたる四ノ宮荘は文治二（1186）年の吾妻鏡に年貢滞納の荘園として石川・布施荘と共に挙げられるものが初見で、当時は京都仁和寺領として知られる。これらの荘園の内、四ノ宮荘以北の複数荘園・厨は後の永仁六（1291）年に四宮勅旨としてまとめ高山寺へ寄進されるが、これらの荘園はすべて天皇領・後院領等であるので本来は勅旨荘として成立したものと考えられている。また、石川条里遺跡範囲内では四ノ宮荘と石川荘の2荘が成立するが、この成立経過は平安時代の洪水で埋没した水田域を四ノ宮・石川荘域を中心とするそれぞれ別の勢力が復興したためであるとする説がある⁽²¹⁾。なお、平家物語では木曾義仲が平家方とこの周辺の横田河原で戦っており、石川・横田・篠野井に火が掛けられたとする記述が知られる。四ノ宮荘域でもいくつか木曾義仲関連の伝承もあり、そのなかに長谷寺が焼失したとするものがあるが真偽のほどはわからない。また、更級郡内で知られる平家方の武士としては麻積厨に平家弘・正弘親子がおり、川中島富部厨の富部氏・篠ノ井布施厨の杵淵氏など厨関係にその配下のものがいたとされる。

次の鎌倉時代の様相は貞和二（1346）年の古文書によって少し様子を窺い知ることができる。この古文書は諏訪円忠が当時地頭をしていた四ノ宮荘北条の地を天龍寺に寄進した際の目録である。この文書のなかでは先の地頭は北条円明であったが、建武二（1335）年の倫旨によって諏訪円忠が地頭となったことが知られる。この建武二年の倫旨については、足利尊氏が後醍醐天皇の倫旨により、当時の惣国大将村上信貞をして四ノ宮荘内の北条の地頭を諏訪円忠に渡付けた記事が信濃史料にも収録されている。なお、この建武二年は北条氏の残党と諏訪氏が起こした中先代の乱の起こった年で、この中先代の乱に関連して四ノ宮荘にほど近い八幡河原・四宮河原でも戦いがあった。このなかで四ノ宮荘出身と推定される四宮左衛門が舟山郷の守護所を襲っている。この四ノ宮氏は鎌倉時代に北条氏と強く結び付いた「神氏」とよばれる諏訪氏の一族で、承久の乱や建治元（1275）年の六条八幡宮造営注文にも現われているとされ、先の四ノ宮荘北条の目録のなかにも「神」を冠する名がいくつかみえる。このように鎌倉時代には四ノ宮荘が北条氏と、それに結び付いた諏訪一族の四ノ宮氏が関わるということが知られるが、北条氏の滅亡とともに諏訪円忠が地頭になることになった。

さて、諏訪円忠の目録の中身であるが、文頭には小笠原氏の貞宗宗氏等跡分別事とあり、続いて元亨の配分定での定田41町9段歩・在家10軒、除田13町4段歩・在家10軒とあり、次に除田の内訳が書かれてい

る。この除田のなかには長谷寺免田、鎮守神田、三林薬師、神三郎盛宗跡、一女尼性円、二女尼号横田女子、宗真妻女神氏跡の名がみえ、最後に旧領家の仁和寺と新領家天龍寺、庄主への銭納配分が記載される。このなかで「神氏」とみえるのが四宮氏の関係ではないかとされ、塩崎村史では天用寺過去帳にみえる神在家、ジンザイケの地名から現中郷神社付近を四宮氏の本拠地とし、中郷神社前の高台となる平坦地付近の社官司が2か所残存する周辺を館推定地としている。この館推定地付近は長野市教育委員会によって道路拡幅に伴う調査が実施されたが、その結果は未報告で詳細不明である。

現地名で「四ノ宮」という地籍は中郷神社を中心とした山手周辺にあたる。そこで「四ノ宮」とは中郷神社を指すとの推測もできるが、中郷神社は貞和二年の目録では「鎮守」、以後は諏訪社、明治十七(1884)年に中郷神社となっており、文献記録の上ではこの中郷神社が「四ノ宮」と呼ばれていた様子は確認できない。しかし、更埴郡誌では諏訪上下社が一ノ宮、塩尻市小野神社が二ノ宮、松本市沙田神社が三ノ宮、続く武水別神社(?)が四ノ宮と呼ばれており、その里宮が中郷神社の地にあつたため四ノ宮と呼ばれるようになったとする説を提示している¹²⁾。詳細は不明である。また、石川条里遺跡内では中世に四ノ宮荘と石川荘が成立するが、いずれの地名も現在は山手側にある。このことから各荘園の中心が山手側にあつたと推測され、このことは塩崎村史の「神」氏の本拠地の推定と一致する。さらに平安後期では自然堤防上ではあまり顕著な集落遺構が検出されていない点とも関連しているであろうか。

次の南北朝期には、戦乱のなかで北条氏滅亡後の北条氏所領をめぐって国人と守護小笠原氏が対抗するようになる。四ノ宮荘では先の諏訪円忠の寄進目録のなかでも小笠原氏とされる「貞宗宗氏等跡」がみえる一方で、北信は国人の勢力が強いところであった。なかでも程近いところにいた村上氏は反守護の中核となっていたため、四ノ宮荘は複雑な経過をたどる。こうしたなかで守護と国人の戦いでもっとも有名な大塔合戦(1400)年が四ノ宮荘・石川荘を主戦場として繰り広げられる。この戦いは守護として後行へ下つた小笠原氏に反抗して国人が集結して開始されたが、このなかで劣勢小笠原氏は同族の赤沢氏を頼って塩崎城に立て籠る。この戦いは守護側の敗北で帰結し、やがて信濃は幕府直轄となって細川滋忠が入国してくることになる。しかし、その時も国人の反抗があり、応永十(1403)年には滋忠に従つた市河氏が国人が立て籠った塩崎新城を攻めている。これからすると四ノ宮荘は大塔合戦後、一時的に村上氏などの国人が押えたが、再び滋忠軍がこれを取り返したようである。しかし、この国人の反抗は15世紀初頭には終結するとされる。

室町期の四ノ宮荘関係の史料では長禄三(1459)年の諏訪頭役に花会御堂 四宮 赤沢対馬代官千田源康信の名がみえる。この赤沢氏は先にみた小笠原氏関係者とされるが、赤沢と記されるのはこの1回のみで、あとは藤原幸光、藤原対馬守幸光、桑原対馬守幸光などと記される。この幸光という人物は四ノ宮と隣接した桑原にも出てくることから両所を領有しながらも、桑原と名のるように本拠は桑原のほうにあるらしい。そして、四ノ宮では代官千田氏と記される。この幸光と名乗る人物は諏訪頭役に文明十一(1479)年まで知られるが、千田氏は応仁三(1469)年にもう一回でてくるのみである。ところが、文明十二(1480)年四ノ宮で桑原六郎次郎源貞光が代初として現われ、この時に桑原六郎次郎が家を新築したので御符(頭役差定書)の受け入れを6月まで延ばし、その御札として銭を1しめ余計に納めたことが記されている。また、文明十六(1484)年に桑原では平政光が現われ、文明十七(1485)年四ノ宮では桑原六郎次郎が塩崎源貞光を名乗っている。この諏訪頭役の記録では15世紀後半の四ノ宮の支配者名が著しく変化しており、その解釈には諸説ある¹³⁾。いずれにしろ、戦国時代に活躍する塩崎氏は少なくとも塩崎源貞光を名乗る人物から続くことは間違いないと思われるが、赤沢氏の名が見えなくなる経過はよくわからない。この15世紀後半は諏訪頭役の記録からみても周辺の各郷の支配者が目まぐるしく変化し、戦いの記録も多くなる時期として知られるので、かなり支配者の交代や領有関係が錯綜した時代であると推測される。そして、15

世紀後半も末頃になると村上氏の影響の強いながらも一定の独立性をもっている塩崎氏などの中小豪族がいたことが知られる。

しかし、16世紀中頃から戦国大名の武田信玄・森長可・上杉景勝の支配が及ぶようになり、この地域の様相も大きく変わる。まず、最初に武田信玄が入ってくるが、塩崎六郎次郎は武田氏が村上氏を攻めるに際して、いち早く出仕している。また、上杉・武田氏の戦闘は川中島の戦いを始めとしてこの周辺でも幾度か行なわれており、川中島戦記次第上杉家之記でも上杉方の中条氏が護衛していた荷駄隊を塩崎の農民が襲っていることが記される。その後、しばらく武田支配時代は安定するが、武田氏も織田氏に敗れ、替わって海津城に織田信長配下の森氏が入る。この森氏によって塩崎の康楽寺は禁制を掲げられ、また在地にいた清水氏が所領を安堵されていることが知られる。しかし、森氏の入った天正十（1582）年には織田信長が本能寺で殺されて森氏はすぐに撤退し、かわりに上杉景勝の支配が及ぶ。この上杉氏時代では塩崎に隣接した稻荷山の地に拠点的な城となる稻荷山城が築かれるが、上杉氏支配時代ではこの周辺で戦闘はなく、より南・西部での北条氏や小笠原貞慶との戦いが主となる。しかし、上杉支配域の境界に近いこともあってか、塩崎氏は徳川方に内通して屋代氏と共に上杉氏に反抗するが、途中で出奔してしまう。そして、この塩崎氏の出奔の後に板屋氏が桑原の替え地として所領をあてがわれる。また、塩崎地区には別の土豪として清水氏がいるが、上杉氏から配下になるようにとの誘いの書状が出され、その後は上杉氏に所属したようで、文禄3年の上杉氏定納員数目録には塩崎衆として525石を知行、同心に28斗を給される配下の中村・中村・藤本・松林・宮坂の5氏と一団をなして31人の軍役を負担したことが記される。この清水氏の出自はよく分かっていないが、建武五（1338）年北隣りの石川内小山田村地頭職にみえる志水子三郎の関係はないかとする説がある²⁴。なお、この清水氏は上杉氏移封に従ったが、塩崎に残った一族もいたようで、江戸時代に庄屋を勤める清水氏はその関係とされる。この塩崎・清水氏以外の土豪は詳細不明である。江戸時代の農林家系図で祖を赤沢氏とするものがあるようだが、赤沢氏は室町時代以後の消息は不明である。また、塩崎村史では移封後も村に残った豪族らしき人物として天用寺過去帳から「塩崎殿御内」（慶長三（1598）年）、「若狭殿御内」（慶長六（1601）年）、「城家母」（元和二（1616）年）、「古川権六父祖」（寛永七（1630）年）、「城家」（寛永八（1631）年）と記される人物を紹介している。また、遺構など確実ではないが角間区西村はずれに文化九（1812）年村絵図で「堀ノ内」と記される「重左衛門屋敷」、山崎区の村西にある「善衛門屋敷」、「団右衛門屋敷」などの地名もこれらの在地土豪の屋敷ではないかとする。

なお、塩崎には康楽寺という北信濃の中核的な真宗寺院がある。この寺は当初は小県郡海野荘の白島にあったが、その後に長谷に移り、やがて現塩崎の地に移ったとする伝承をもつ。永禄十一（1568）年に武田信玄から所領安堵のかわりに越国へ攻めるときには野伏士2人を出すようにとの書状や、天正期には石山本願寺へ兵糧を送っていることが知られている。

以上の文献史料に比して考古学的な検討は非常に少ない。概況はすでに述べたが、それ以外の史跡や道について若干補足しておく。まず、現時点で知られる墓址の分布であるが、手手の塩崎城周辺の手手と千曲川対岸の千曲川河川敷近くの窪河原周辺で比較的まとまって検出されている。五輪塔については石川地区の作見寺周辺でいくつか知られている。墓が河原近くと手手で検出されている点は興味深い。次に寺であるが、中世に遡る可能性がある寺として先にあげた康楽寺の他に長谷寺・隣接地の石川地区の方田の作見寺がある。これ以外に長谷寺背後の山中に寺・堂があったとする伝承や千曲川の渡しの唐猫神社周辺に寺院関連地名があるが詳細不明である。長谷寺や作見寺はその初現について詳細には調べられなかったが、長谷寺はなぜか善光寺と関連が強いことが知られる。作見寺は古代の上石川廃寺にほど近いところにあり、釈迦堂などの寺地名を周辺でも残している。また、この周辺では方田の多層塔という石製の塔が知られる。なお、1500年に起こった大塔合戦の「大塔」はこの作見寺関連の地名であり、文献にみえる「大塔の古要

害」は沖積地内の現大当集落の館跡ではなく、作見寺推定地近くの山手丘陵部にある二ツ柳神社に比定する説がある⁽⁴⁵⁾。道については古代東山道から分岐して越後国府へ続く道がこの塩崎地区内を通過するとされ、そのルートには山際・自然堤防上を通る2説がある。しかし、現時点では確実視できる遺構は検出されていない。中世の道についても同様不明であるが、春日学氏は大塔合戦における小笠原氏の撤退の動きから山際に道があったと推測している⁽⁴⁶⁾。

註

- 1 青木和明1989「3(2)地割の復元」『石川条里遺跡(4)』長野市教育委員会
- 2 更埴郡役所1914『更埴郡誌』
- 3 赤沢氏代官千田氏から桑原貞光への変化は知行人の変化と捉えられている(井原今朝男「第2節 五 文献からみた屋代氏の動向」『屋代城跡範囲確認調査報告書』1995 更埴市教育委員会)が、『塩崎村史』(1971 塩崎村史刊行会)では「代官千田氏」とは村上氏配下の「千田氏」と同一関係した人物とみており、小笠原氏関係の赤沢氏がいながらも村上氏が影響力をもっていたとする。
- 4 米山一政1978「第10章 城館跡と氏人」『更埴地地方誌』第二巻
- 5 春日 学1987「大塔の古要害考」『長野』132号
- 6 註6に同じ

参考文献

- 塩崎村史刊行会1971『塩崎村史』
1978『更埴地地方誌』第二巻
1987『長野県史 通史編』第2・3巻

(4) 遺構の概略

今回の調査では低地で水田遺構、微高地で館跡が検出された。検出された遺構は同時存在したものではないが、相互に関連する様相も窺えている。

低地域では先に述べたような堆積環境に由来して、場所ごとに遺構の遺構残存状態が異なる。また、面的調査を実施した範囲は工事行程の関連や試掘所見によって決定されているので、必ずしも検出された遺構がすべてではない。以上のような条件によって断片的な様相しか知りえなかったが、微高地西側低地で部分的な水田関連遺構・土坑、微高地東側低地で溝跡・土坑が検出され、いくつか注目される所見も得られている。まず、微高地西側低地では中世Ⅱ面において条里区画と異なる方位の土地区画が部分的に確認され、古代には全く見られなかった用水が出現している様相も知られた。さらに、この中世に出現した土地区画の方向はそのまま近世以後まで踏襲されており、特に南北方向の区画遺構にその傾向が顕著に見られる。それに対して微高地東側低地中央では洪水性堆積層が遺存しないため検出された中世遺構は非常に少ない。そうしたなかで③区西端から④区に位置するSD3006は重要な溝跡として注目される。その特徴は平安時代洪水埋没水田の環境の用水を踏襲している点と、呪符木簡や溝底面に銭を埋納した施設があるなど祭祀的な様相を帯びる点である。また、麗絶の時期が微高地の館出現時期に近似するとみられる点で館との関連も注目される。

なお、微高地東側低地水田域では中世Ⅱ面以後の所産と思われる土坑が多数検出されている。その所属時期は明らかにできなかったが、概略中世の所産と推定した。これらの土坑は相互の切り合いもなく、並列して群を構成しているので特定の時期の所産と思われる。性格は不明であるが、水田域内で偏在して分布する点からは井戸に類する施設か、耕作に関わる遺構であると思われる。推測ではあるが、水不足の際に構築されたもので、遺跡内の水確保の状況が窺える遺構でないかと思われる。

微高地では館跡と井戸状土坑など中世後半を中心とする遺構が検出された。館は2重の堀を巡らせたも

ので、出現は14世紀後半前後と思われる。それ以前の中世前半の様相は遺物も少なからず出土しているが、当該期と断定できる遺構は少数で、詳細は不明である。館の消滅は15世紀後半の早い段階と思われる、消滅以後では館堀を切る浅い井戸状遺構がいくつか構築されたようである。

以上をまとめると、古代にはこの微高地を含めて条里区画による均一的な土壌割が認められ、そのなかで微高地では平安洪水以前に条里区画が崩れていく様相が窺っているが、中世前半の様相は微高地・低地ともに詳細不明ながら、少なくとも低地域においては古代の様相を引き継ぐようである。ところが中世後半には堆積環境も含めて大きく変容してくる。例えば同じ低地にあっても場所ごとに区画方向のあり方や用水の配置のされ方も異なるなどの様相が認められるようになり、この傾向はそのまま近世へ引き継がれていくようである。以下に個別遺構と遺物について述べる。

2 低地域の遺構

低地域では中世の水田関連遺構が検出されているが、堆積土の状態からも遺存状態は不良で、断片的な様相しか知り得なかった。微高地西側低地の山手で中世Ⅰ・Ⅱ面とした2枚の水田関連遺構検出面があり、同様に微高地東側低地でも中世Ⅱ面あるが、溝・土坑跡数基が検出されたのみである。以下に大きく微高地西側と東側に大別して記述することにした。

(1) 微高地西側低地の遺構

この部分は小規模な微高地が入り組み、その間に谷状の細長い低地が分布する地形となっている。調査区でいえば①～④区が該当する。この範囲では中世後半以後に堆積土増加が認められ、全体に西側の山手が高い地形に変化している。そして、この堆積環境の変化によって、中世の土層は東へいくに従って層厚を減じて近世水田層に削平されて消える傾向がある。中世水田関連遺構は堆積土の厚い西端を中心に2枚の調査面で検出されている。それは平安砂層上部に位置する黒灰色粘土層上面(中世Ⅱ面)と、②-2区周辺に分布する褐灰色粘土層上面(中世Ⅰ面)である。いずれも遺構の遺存状態は悪く、特に中世Ⅱ面で検出された遺構は洪水で埋没したものではないため、より上層に掘り込みをもつ遺構や上層の疑似畦畔も含まれる。同一面で検出された疑似畦畔にも構築時期差が推定されるものもあるが、詳細は明らかにできなかったので検出面ごとに扱うことにした。さらに、明らかに掘り込み面が異なると見られる溝・土坑については中世Ⅱ面以上の遺構として別に扱った。

A 基本土層と水田関連遺構-疑似畦畔

まず、疑似畦畔の認定と種類について概略述べておく。この疑似畦畔の成因は下層にある畦が均一な厚さの堆積土で埋められて上層が盛り上がるようにみえたり、上層の畦が土中の金属酸化物で転写されたり、畦の下部が耕作されず下面の堆積土層が痕跡として残存するものなど多様なものが知られている。石川条里遺跡内の疑似畦畔と思われる遺構は以下の種類がある。

A 下面土層が盛り上がる畦状の疑似畦畔

中世Ⅱ面SC0017などを代表とする下層の土層が盛り上がる疑似畦畔である。調査域内では④区の畦のみが砂層で覆われるが、②-1区で検出された畦は上部が砂層で覆われていないため、上層水田の畦基部の部分が耕作されずに畦状の高まりとして残存した疑似畦畔と考えた。

B 並列する浅い溝の疑似畦畔

中世Ⅰ面で検出された2本の溝が並列する形態のものである。調査時には中世Ⅰ面を覆う土層が非常に浅く、この溝状遺構は畦を盛り上げるために畦周囲が掘削された痕跡ではないかと考えた。しかし、上層がシルト質土であることから洪水で埋没した水田面そのものの可能性もある。これについては断定する

ことはできなかったが、ここでは疑似畦畔の可能性が高いと考えた。

C 浅い帯状の砂層—溝跡とされた疑似畦畔

中世Ⅱ面で検出された溝跡が該当する。調査時には砂層を埋土とする浅い溝状遺構と捉えられたが、途切れるものがあり、用水とは異なる遺構であろうと推測された。そして、上層水田の畦下部の洪水砂層が耕作されずに残存したものと考えた。また、②-1区では盛り上がる畦（SC0018）の下面のみに足跡状の窪みが遺存することが確認でき、①-2区の中世Ⅱ面で足跡が帯状に残存するものも、上層水田の畦部分下部の下層の水田面が耕作されずに残存した例とみられる。

D そのほか

①-1・②-1区で検出されたSD0003は、Cのような例が累積した結果、溝状遺構のように認められた可能性がある。疑似畦畔の可能性もあるが、ここでは断定できないため溝として扱うことにした。

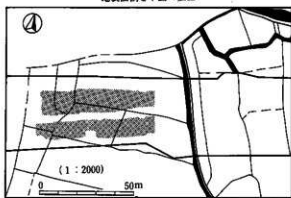
以上のように中世Ⅰ・Ⅱ面で検出された遺構の多くが疑似畦畔の可能性をもち、検出された調査面自体に帰属する遺構ではないと考えられる。また、多様な形態が認められているが、これは構築時期・畦の継続性と堆積土のあり方の関連によると推測される。特に中世Ⅱ面では同一面でAとCという2種が確認できたが、基本土層との関係から中世Ⅱ面の基盤層が盛り上がる疑似畦畔A→（洪水砂層）→Cという構築時期差が推測される。これらが同一面で検出されていることは、Aは継続性が高く、Cが洪水の後に新たに構築された畦であると思われる。このなかで後述するようにSC0017は条里畦方向と異なる水田群の境となっている点は興味深い。また、C（D）はこの水田群の境となっているものもあるが、さらに内部の細分される畦にあたりとみられるものもある。いずれも南北方向に検出されるものが多いため、この南北方向の畦畔が比較的固定化されて維持されていると見られる。さらに、上層の中世Ⅰ面では南北方向の区画に加えて東西方向の短い畦がみられるので、南北に長い水田内部も東西の短い畦で細分されていたとみられる。また、中世Ⅰ面検出遺構が疑似畦畔とするならば、中世Ⅰ面では東西の小畦も疑似畦畔として残存するように固定化されていた可能性も推測できる。上記の様相をまとめると中世Ⅱ面の区画は水田群—南北に長い区画—東西の短い畦の3ランクの区画に分離され、このなかで水田群の境、南北に長い区画が疑似畦畔として残存しやすい区画とみられる。そして、中世Ⅰ面でもっとも細かな区画となる東西の畦自体も疑似畦畔として残存する可能性も考えられる。これらの疑似畦畔のあり方については水田面そのものではないが、さまざまな情報をもたらしてくれる可能性もあり、類例をまわって再検討される必要がある。

イ 中世Ⅰ面水田（第249・250図 PL55）

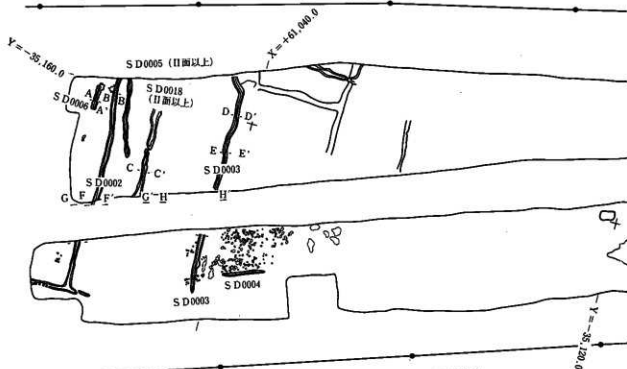
この水田は調査2年目の②-2地区のみ調査された。検出層位は中世Ⅱ面上層にあたる褐灰色粘土上部で、この土層上を覆う薄いシルト質土を除去して調査した。検出された遺構は溝状遺構が数本あるが、そのなかに2本並列して検出されるものがある。これは先に述べたように疑似畦畔の可能性があり、その場合、上層のシルト質土が耕作土にあたることになるが、この土層から比較的多く採取された中世焼物が水田年代を示すものとなろう。なお、水田上部のシルト質土層は②-2区西側では確認できず、③区以東では非常に薄くなって、隣接した④・⑥区では確認できない。したがって、検出できる範囲もほぼこの地区に限定される可能性がある。

疑似畦畔の可能性をもつ溝状遺構はN-30°-Wの南北方向が3本、直交する東西方向が2本検出され、これらの配置から最低6区画が確認できる。全体の形が判明した水田は皆無で水田一枚の面積は不明であるが、南北方向の畦間隔は西側から9m、13m、23mと推定され、東へいくに従って間隔が広がる傾向が窺える。これは西から東へ傾斜が緩やかになる地形によるものと思われる。水路は検出されておらず、地形からみて手山の沢水取水用水から引き込んだ水を西（北）から東（南）へ畦越しに配水されるものと

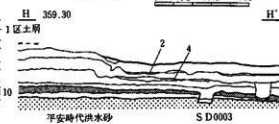
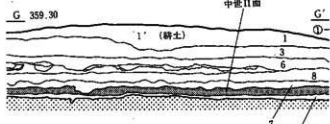
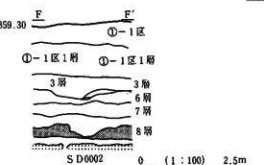
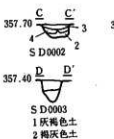
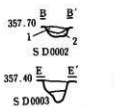
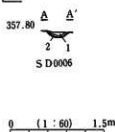
地表面割と下図の位置



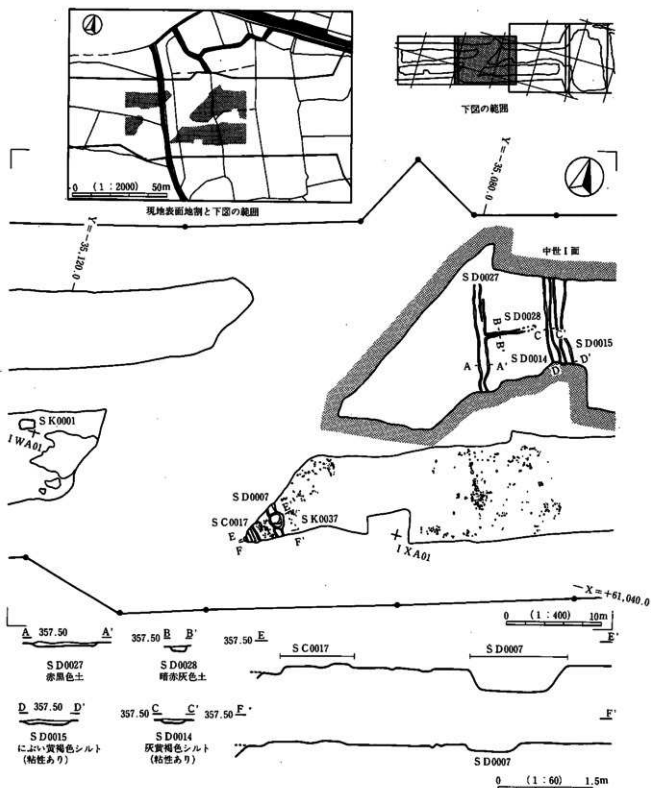
下図の範囲



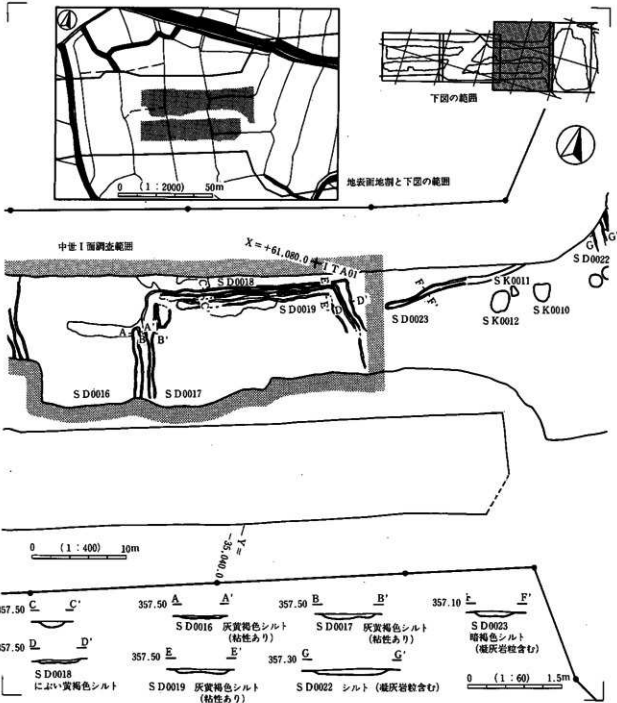
- 1 暗褐色土 (凝灰岩多含)
- 2 黒褐色土
- 1 黒褐色土 (凝灰岩粒多含)
- 2 黒褐色土 (凝灰岩粒や少含)
- 3 灰黄褐色~黒褐色土 (凝灰岩粒含)
- 4 風化凝灰岩粒



第248図 微高地西側低地中世遺構1



第249図 微高地西側低地中世遺構 2

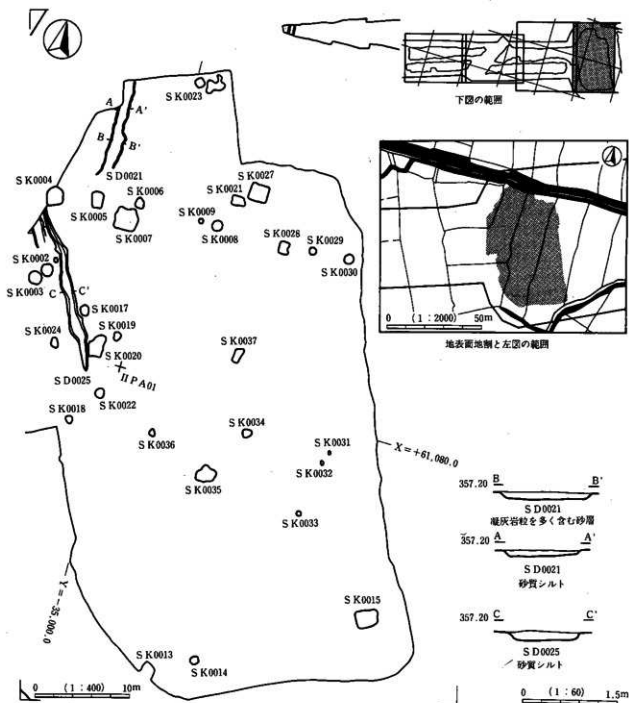


第250図 微高地西側低地中世遺構 3

思われる。

中世I面水田を現水田区画と比較すると、南北方向の区画が優位であることやその畦方向は類似しているが、その位置は厳密には一致していない。さらに現地割では南北に長く広い区画となっているが、この中世I面では南北の区画に加えて東西方向の畦でより細かく分割されている。また、南北畦方向は中世II面からの継続であることが指摘できる。出土遺物は上層のシルト質土層よりカワラケ、内耳鍋片や大竈丸皿、細線蓮弁文青磁碗、雷文青磁碗片が出土し、ほぼ16世紀前半前後の所産と思われる。

以上から中世I面は戦国時代16世紀前半の水田遺構であると考えられる。その水田区画は平安時代の条



第251図 微高地西側低地中世遺構4

里とは異なる方向の区画が出現する中世II面を踏襲したもので、中世I面以後も類似方向の畦が継承されている。しかし、現代の畦は厳密には同一の場所ではなく、しかも現代のほうが1枚の水田面積はより広いが、これも公園では1筆が所有範囲を示しているもので、内部の耕作上の畦は図化されていないとすれば単純な比較はできない。いずれにしろ、条里と異なる方位の畦は中世II面以来～現代まで継続していることが知られる。

ウ 中世II面水田 (第248～256図 PL53・54)

II面水田は山手の①～④区までの範囲で確認された。検出層位は平安洪水砂層上層の黒褐色～褐灰色粘

土層上面である。この調査面では砂質土・砂混じり土が部分的に確認され、調査時にはこれらの洪水性堆積土で埋没したと水田と捉えた。しかし、これらの洪水性の堆積土と思われるものは非常に薄く、しかも部分的にしか残存しておらず、検出された遺構も先にみたように上層の疑似畦畔と思われるものがかなり含まれる。なお、この砂質土・砂混じり土は①-1～②-1西端、①-2・②-2西端、④区にそれぞれ部分的に分布し、山際の用水を媒介とした堆積土か、山からの崩落土の可能性が高い。

中世Ⅱ面で確認された溝や畦の走行方向は、①-1・②-1区でN-2～5°-W前後、①-2・②-2・③区の一部はN-30°-W前後、③～④区でN-2～5°-W前後の方向となり、2種の走行方向の遺構のあり方によって、最低3つの水田群に分割されることが判明した。これは現地割でも認められ、①-2・②-2・③区の一部のN-30°-W前後の方向以外は基本的に平安条里区画と類似した走行方向となっている。この①-2・②-2・③区の一部の方位を異にする区画の出現時期は疑似畦畔AとしたSC0017で見られるので、この中世Ⅱ面上面まではさかのぼることは確実である。また、形成因はこの方向がSC0017以後、同じ場所で用水が構築されているので、四ノ宮集落内を流れる沢水から引水した用水がこの部分付近に構築されたことによると考えられる。以下にはこの小ブロック毎に遺構をまとめて報告する。

A ①-1・②-1区 (N-2～5°-Wの走行方向の水田群) (第248図)

この水田群は鶴前遺跡境となる山際を西限とし、①-2区のSC0017を東限とする。全体の地形は西・北側が高く、東・南へ傾斜するが、中世Ⅱ面の基盤となる黒褐色粘土層自体は西側で厚い顕著な傾斜を形成していない。遺構遺存状態は全体的に悪く、西側から東へ検出遺構数が減少するのは上層の堆積状況と上層耕作のおよび方の違いによるとみられる。検出された遺構は②-1区北側にAの疑似畦畔?と思われる遺構や、疑似畦畔の可能性もある溝跡SD0001・0002・0006・0026がある。これらの遺構は配置関係では近接して検出される点から複数時期にわたる疑似畦畔が含まれると思われる。このなかでは中世Ⅱ面基盤土層が畦畔に盛り上がったSC0017を代表とする畦畔がもっとも古く、それと同時に若干後出するのが砂混土埋土の足跡を残す水田面であろう。さらに足跡状の凹地が帯状に残存する疑似畦畔はそれに後出するであろう。②-1区で検出された畦畔遺構SC0018はこの足跡状凹地となる疑似畦畔の状態をよく示している。なお、水田1枚の面積が窺えたものはないが、水田面に残る足跡状の凹地に先端が二つに割れる牛の足跡と思われるものと、やや大きい人間の足跡と思われるものがある。水田耕作に牛が使われていた傍証となろう。この水田の水まわしは基本的に南北に流れる用水で配水する一方で地形にそって西から東へ畦越しで水を回す方法が取られていたと推定される。

上記のように、この調査面では複数時期にわたる遺構が検出されているが、その区画遺構は南北方向に通るものが多い点は共通する。したがって、水田は南北方向に通る区画で大きく分割され、その内部が東西方向の畦でさらに細分されていたと思われる。現代の土地割をみると東西方向が通る水田となっており、中世Ⅱ面で確認できることはむしろ平安時代の条里区画のほうに近い。したがって、この場所では条里的な区画が踏襲されながらも中世～近世のある段階で東西に通る区画に変化したと見られる。

SD0002 ②-1・①-1区 IPM20～UN11 (第248図)

②-1区西端から①-1区西端を貫いて南北方向に走り、①-1区で東西に走る溝と接続して「T」字状となる。調査では南端に接続する東西方向の溝をSD0001、南北方向に走る部分を②-1区ではSD0007としたが、すべて同一の溝としてSD0002に統一した。なお、SD0001は①-2区の近世SDに付した。掘り込みは中世Ⅱ面上面で、他遺構との切りあいはない。東西に走る部分は西端が調査区外へのび、東は途切れながら浅くなって消える。長さは約6.1m、幅は約50cmで断面形は緩やかなU字状を呈し、検出面からの深さは約3～7cmと非常に浅い。南北方向に走る部分は北端が調査区外へ延び、南端は東西方向の溝と接続してT字型となる。調査区内では長さ約22m、幅は約40～60cmで断面形はU字状を呈し、北側が検出面から